

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書
(2005)

2006.12

大阪市教育局
(財)大阪文化財協会

例 言

1. 本報告書は平成17年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと、財大阪市文化財協会が、各原因者より委託をうけて実施したものである。
3. 本報告書の執筆は財大阪市文化財協会 田中清美の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護課において行った。

目 次

I	北 区	
	安曇寺跡推定地発掘調査(AZ05-1)報告書	3
	国分寺跡発掘調査(KB05-1)報告書	23
	天神橋遺跡試掘調査(TJ05-1)報告書	27
	天満本願寺跡発掘調査(TN05-1)報告書	29
II	中 央 区	
	難波宮跡発掘調査(NW04-5)報告書	39
	難波宮跡発掘調査(NW05-2)報告書	43
	難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW05-4)報告書	49
	難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW05-5)報告書	53
	難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW05-7)報告書	57
	難波宮跡・大坂城跡発掘調査(OS05-3)報告書	61
	大坂城跡発掘調査(NW05-3)報告書	71
	大坂城跡発掘調査(OS05-1)報告書	79
	大坂城跡発掘調査(OS05-4)報告書	101
	大坂城跡発掘調査(OS05-5)報告書	105
	大坂城跡発掘調査(OS05-6)報告書	113
	大坂城跡発掘調査(OS05-7)報告書	119
	大坂城下町跡発掘調査(OJ05-1)報告書	125
	大坂城下町跡発掘調査(OJ05-2)報告書	131
	大坂城下町跡発掘調査(OJ05-5)報告書	139
	大坂城下町跡発掘調査(OJ05-6)報告書	143
	大坂城下町跡発掘調査(OJ05-7)報告書	149
	大坂城下町跡(OJ05-8)発掘調査	161
	大坂城下町跡(OJ05-9)発掘調査	173
	大坂城下町跡発掘調査(OJ05-10)報告書	183
	今橋4丁目所在遺跡発掘調査(IB05-1)報告書	193
	上本町北遺跡B地点発掘調査(UN05-2)報告書	205
III	天 王 寺 区	
	難波京朱雀大路跡発掘調査(NS05-1)報告書	217
	上本町南遺跡発掘調査(US05-1)報告書	223
IV	浪 速 区	
	船出遺跡発掘調査(FD05-1)報告書	231
V	東 住 吉 区	
	桑津遺跡発掘調査(KW05-3)報告書	245
	桑津遺跡発掘調査(KW05-4)報告書	249
VI	住 吉 区	
	帝塚山古墳群発掘調査(TZ05-1)報告書	255
	住吉大社境内発掘調査(SM05-1)報告書	263
	山之内遺跡発掘調査(YM05-2)報告書	281
VII	平 野 区	
	加美遺跡発掘調査(KM05-1)報告書	293
	長原遺跡発掘調査(NG05-1)報告書	301
	長原遺跡発掘調査(NG05-2)報告書	307
	長原遺跡発掘調査(NG05-4)報告書	315
	瓜破遺跡発掘調査(UR05-1)報告書	321
	瓜破遺跡発掘調査(UR05-2)報告書	327
	瓜破遺跡発掘調査(UR05-3)報告書	341

北 区

安曇寺跡推定地発掘調査(AZ05-1)報告書

調査箇所	大阪市北区太融寺町24-1の一部・25
調査面積	100㎡
調査期間	平成17年11月21日～平成17年12月1日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、松尾信裕

1) 調査地の位置と環境

i) 調査地の位置

安曇寺跡推定地は大阪市北部を南西方向に流れる淀川の下流域に位置し(図1)、大阪の繁華街であるキタの南東端に位置する太融寺町にある。ここは平安時代に嵯峨天皇の勅願により弘法大師の創建と伝え、その後には嵯峨天皇の皇子の源融が寺を中興したといわれ、現在も法灯を守っている真言宗高野派住木山太融寺の境内である(図2)。

西側にはお初天神(露天神)までの参道を中心に形成された曾根崎商店街があり、北側にも飲食街が軒を連ねる堂山町があり、大阪を代表する一大歓楽街の外れに当る。近代初頭までは北側の堂山地域と一つの集落を形成していたが、昭和初期の扇町通りの敷設によって、南北に分断された格好になっている。



図1 遺跡位置図

ii) 安曇寺跡推定地の地理的歴史的環境

安曇寺跡推定地がこの位置に比定されたのは、藤沢一夫氏と梶山彦太郎氏による「安曇寺跡と渡辺別所」[藤沢一夫・梶山彦太郎1988]が発表されてからである。

それまで、「安曇寺跡推定地」は現在地の南、大川を越えた中央区高麗橋1丁目付近に比定されていた。それは、高麗橋1丁目にあった旧三越百貨店の建設工事の際、飛鳥時代に属する四天王寺創建瓦と同范の単弁蓮華文軒瓦瓦が出土したことや、京阪電鉄の延伸工事の際、古代寺院に由来すると考えられた礎石が発見されたことによる。そうした古代の遺構・遺物の発見により、高麗橋1丁目一帯を前期難波宮の時代に僧曇が建立した安曇寺跡と推定されたのである。



図2 調査地の位置

先に比定されていた中央区高麗橋や道修町周辺では1986(昭和61)年以降、発掘調査を行っていたが、安曇寺に係わる古代寺院の遺物や遺構は発見できず、古墳時代の土器や時期が下る古代末から中世の土器、さらには近世の大坂城下町に係わる陶磁器や木製品・金属製品などが大量に出土した。中でも、近世初頭の陶磁器と一緒に魚名を記載した木簡が大量に出土したことから、高麗橋一帯に魚市場が存在したことが明らかになったのである。

こうした状況を認識された藤沢・髙山の両氏は、安曇寺跡が高麗橋付近にはないのではないかと考えられ、別の場所に所在地を求められた。

そうした際、過去の記憶の中から、北区太融寺で古代寺院の礎石を発見していたこと、さらには太融寺付近が1885(明治18)年に大阪を襲った大水害の際に、上町台地と船場・島之内地域、さらには太融寺付近を含む天満地域を残して、市内の大半が浸水したという記録などから、天満の西端に当る太融寺付近も比較的高燥な土地であることを再確認されたのである。

また、近代初頭の『大阪実測図』[内務省地理局1888]にある太融寺町一帯に残る字名を検討された結果、太融寺が建つ敷地は「二王門」、東の敷地には「寺山」、北側の敷地には「堂山」、さらに北には「堂ノ後」、「二王門」の西の敷地には「字稲荷山」、「寺山」の北の綱敷天神社のある一帯には「神山」と、「堂」や「山」のつく字名が集中しており、この付近に寺院址が存在していたことを推測されたのである(図3)。さらには、それらの字名の広がる東には「アドエ」とよばれる字名があり、その場所は湿地が広がる低地のようである。

この「アドエ」が安曇寺の「アドンジ」または「アドジ」とも読める地域に隣接してあった入り江であろうと、解釈されたのである。こうした様々な状況証拠から、太融寺一帯に寺院址があり、寺院の名前は字名から安曇寺ではないかと推測されたのであった。



図3 太融寺周辺の字名分布図

同時に、京都山科区安祥寺に伝わる、本来は安曇寺の所有であった梵鐘の銘には、「摂州渡邊安曇寺(以下略)」とあることから、安曇寺が「渡邊(渡辺)」と呼ばれる地域に存在していたと考えられた。先に字名から太融寺町付近に安曇寺が存在していたと推測されたが、さらに、この梵鐘の銘から安曇寺の所在する太融寺町一帯が「渡辺」と呼ばれる地域であったということ説かれたのである。

また、太融寺が「渡辺」と呼ばれる場所にあったことを裏付ける史料も紹介されている。大和郡山市西方寺所蔵の『一切経』に記載されている「高僧伝」巻第二の奥書に弘安4年(1281年)として「渡辺太融寺住侶結縁」とあり、「高僧伝」巻第一二には「渡辺別所」と記載されていることを揚

げられている。

この二つの史料から太融寺が所在するこの地域が「渡辺」であり、「渡辺別所」もあったと結論され、安曇寺も所在していた地域であると、「渡辺」の推定地を新たな展開で想定されたのである〔藤沢 楓山1988〕。

一方、「渡辺」の所在地については、これまでいわれてきていたように、大川の両岸に存在していたとする説もある。近年の大坂城下町跡や天神橋遺跡など大川に面する一帯での発掘調査の成果を見ると、平安時代末から大坂城下町が建設される直前の室町時代末までの遺構や遺物が集中して発見され、大川に面する天満地域や船場北端部地域に、古代以降連続と都市的な景観をもつ集落が存在していることが確認されている。

また、「渡辺」は上皇や天皇、貴族達が京から四天王寺や住吉大社、さらには熊野三山への参詣のため、淀川を船で下って来て上陸する地点として文献史料に類出する。大坂城下町跡や天神橋遺跡などの発掘調査の成果などを勘案すると、上陸地点の候補地としては大川に面する、現在の高麗橋「丁目付」が妥当ではないかと考えるのである〔松尾信裕2004〕。

ただ、古代や中世の地名の範囲は、現在の我々が考えるよりももっと広い範囲を指す場合が多く、船場北端部や天神橋遺跡を中心とする大川両岸から、本調査地のある太融寺町一帯まで含んだ範囲が「渡辺」と呼ばれていた可能性がある。

次に、地形図や地籍図からみた太融寺町一帯の地理的歴史的景観の復元を行う。

現在の地形図を読むと、太融寺町付近は標高がTP+1.5m前後で、東にある天満地域がTP+3～5m前後であるのに比較して低くなっている。また、西側の曾根崎付近や大阪駅前付近ではTP+1m未満とさらに低くなっている。東の天満地域は弥生時代や古墳時代の遺跡も存在しており、早くから陸化し、安定した生活が可能な地域であったことがわかる。大日本帝國陸地測量部による「複製二万分の一地形図」(図4)でも、天満地域は方形の街区が建設された都市となっているが、その北西には水田地帯が拡がり、その中に当時は北野村と呼ばれた太融寺町や堂山町が立地している。

この集落の位置は、大坂の北端から北西の三津屋や加島を通る中国街道への入口に当り、大坂から西日本への街道筋に当る。中国街道は現在の大坂湾の海岸線と並行するような曲線を描いており、それに沿っていくつかの集落が点在している(図4)。こうした景観から、中国街道沿いは比較的安定した微高地であったと推定でき、中世以前に砂丘を形成するような海岸線が存在していたと想定することも可能である。

太融寺を含む太融寺町やその北の堂山町は、現在はその中央を東西に横切る扇町通りと呼ばれる広い道路があり分断されているが、近世には一体となった集落を形成している。その形態は1886(明治19)年測量の「大阪実測図」を読めば歴然としている。

近世大坂は大坂三郷を核として拡大した都市で、大川の北側には天満の町があり、それが大川に沿って西へと拡大している。天満の町の北端には豊臣期に初源をもつ天満寺町が東西に並び、大坂の北限を形成している。太融寺町はその天満西寺町の北に位置している。これらの図を見ても太融寺町や堂山町が近世の大坂に含まれていなかったことが一目瞭然である。太融寺周辺は近世の大坂の範囲から

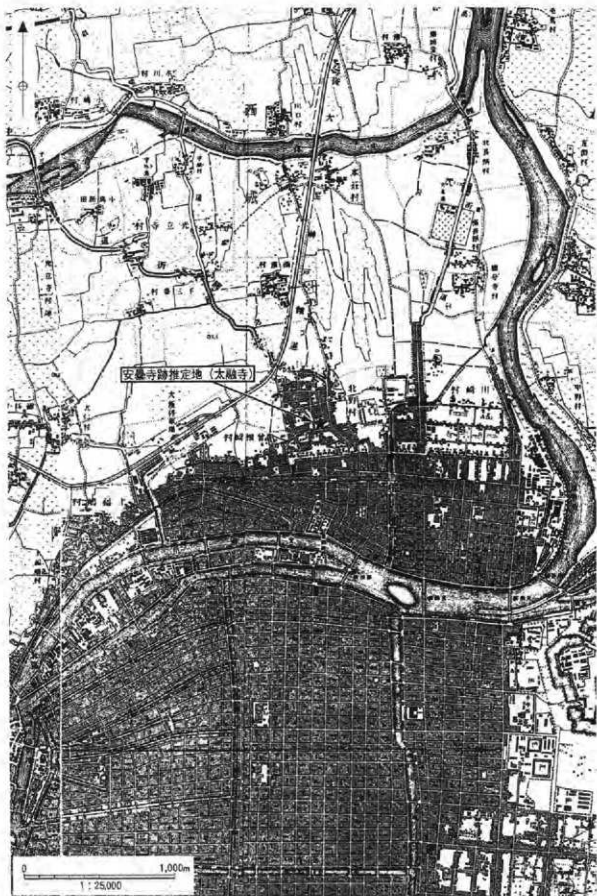


图4 明治初期の大阪と調査地の位置图

外れていることが幸いして、近代までその構造が持続できたのであろう。現在の道路を『大阪実測図』と比較すると、堂山町ではほとんどそのままの位置に道路が継承されている。狭い路地はいくらかは広がってはいるであろうが、明治期の曲りくねった路地は現在もほぼそのまま、狭い敷地に家屋が立ち並んでいる。太融寺町一帯は区画整理が行われているが、大方の道路が拡張されて継承されている。堂山町一帯は人家が密集する地域であったがため、市街地の再整備が行なえなかったのであろうと推測できる。

2) 調査の経緯と経過

「安曇寺跡推定地」として周知されている太融寺境内で、宗教学法人太融寺による本坊建設工事が計画されたため、大阪市教育委員会による試掘調査が行われた。その結果、地表下の1.3~1.5mの間に土師器や須恵器とともに瓦器を含む中世の遺物包含層が確認された。そのため、建設予定地の一角で本調査を行うこととなった(図5)。

発掘調査は境内の南西部で敷地の方位に沿うように、東西10m、南北10mのトレンチを設定し、11月21日より着手した。表土および近世の地層までは重機で掘削し、それ以下を人力で掘下げながら遺物を採集した。包含層からは鎌倉時代の13世紀代に属する瓦器・土師器などのほか、輸入磁器・国産陶器などが出土した。

その後、包含層下位の河成砂層の上面で遺構検出を行なった。ここで南北方向の溝やピット・土壌などが検出された。また、調査地北部ではシジミの貝殻が投棄された小規模な貝塚も検出できた。これらの遺構の中からも鎌倉時代の瓦器を主体とした遺物群が出土した。また、河成砂層の堆積構造を確認するために、上位から掘込まれていた攪乱の壁面を利用し、下位の堆積を確認した。

トレンチの壁面の地層堆積状況や河成砂層上面の遺構の配置図等を作成し、そのつど写真撮影を行いながら、12月1日に調査を終了した。

なお、調査で用いた水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿入中では「TP±〇m」と記した。図に用いた座標値は大阪市道路現況図(1:500)を基にして導いた世界測地系によるものである。

3) 調査の結果

1) 層序(図6~8)

本調査地ではベースとなる河成砂層の上位に中世遺物包含層が堆積し、近世の遺物を含む整地層、近代の整地層が堆積していた。

地層は最上部の現代整地層から河成砂層までを8層に区分した。



図5 調査地点の位置図

第0層：現代の整地層および攪乱である。地表面の高さはTP+1.5mである。

第1層：近代末の整地層と焼土層である。焼土は第二次世界大戦の際の火災によるものと考えられる。

第2層：白色の中粒砂による整地層である。本層は調査地の西部に約50cmの厚さで分布しており、西部が高くなるように段が形成されている。第1層の焼土は本層の上位に堆積しているが、東部では第1層が第3層を覆っている。近代末に境内で改修工事が行われたことが考えられる。

第3層：東部では浅黄～暗灰黄色のシルト質細粒砂層で、薄層が幾重にも重なっており、旧地表を形成しているが、西部では単層である。西部より東部の方が生活空間として活発に利用されていたものと推定できる。西部の第2層の下位では18世紀前半の肥前磁器碗が出土した。

第4層：オリーブ褐色を呈する礫混りシルト質細粒砂層で、東部では2～3層に分かれる。層厚は東部で80cm、西部では20cmであった。上位からの攪乱がない北壁では、本層の上面はほぼ水平で、下面是東が低い。本層の堆積によって調査地が水平になっている。上面の高さはTP+1.0mである。瓦器などの中世遺物を含んでいる(図8-1-34)。

1～12は土師器皿である。1～7は口径7.8～8.6cmの小型の皿で、8は口径9.3cm、9・10が10cm前後、11・12が11.8～12.8cmの中型の皿である。1～5は口縁部が内湾しつつ短く立上がるもので、器高は1.1～1.5cmと低い。6は器高2cm以上になるやや深い皿である。外面に墨書があるが、判読できない。7は口縁部が外反する。8は底部が突出するいわゆるヘソ皿で、時期が下るものであろう。9・10は体部が直線的に開く皿で、11・12は体部が曲線的な皿である。13も土師器皿の底部である。内面に墨書があるが、いくつもの文字が重なっており、判読できない。習書の類であろう。

14～17は瓦器碗で、口径13.4～14.2cm、器高3.0～4.2cmと浅い。内面には螺旋状のヘラミガキがある。底部には低い高台が貼付けられている。

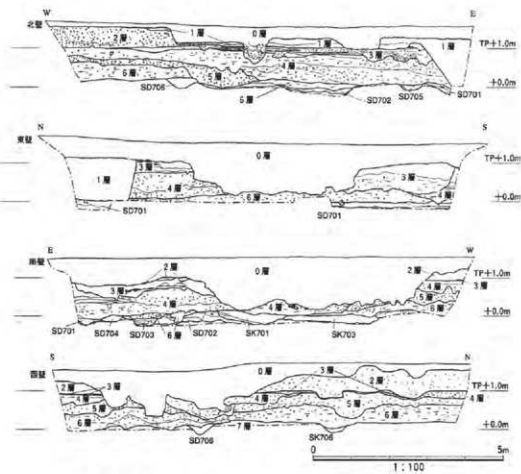
18～22は瓦質土器である。18は鍋で、外面に高さ1.2cm、長さ4.5cmの縦方向の突帯を貼付ける。19・20は羽釜である。21は口径24.4cmの火鉢で、直立する口縁部に木瓜状のスカシ孔がある。22は足釜の足である。

23は東海産の山茶碗の底部で、内面はナデ調整である。底部には糸切り痕があり、その上に墨書があるが、判読できない。

24～32は陶磁器で、24～30が中国製、31・32が国産の古瀬戸である。24～26は白磁碗、27～29は青磁碗で、27は内面に文様を彫る劃花文碗の一種、29は外面に蓮弁を彫る鎔蓮弁文碗である。30が青白磁の壺の破片で、外面には渦巻き文のように見える文様が彫られている。31・32は内面と外面の上半部に施軸するもので、31は底部が平坦な浅碗、32は平碗になろう。33は巴文軒丸瓦の瓦当である。34は石製の硯である。

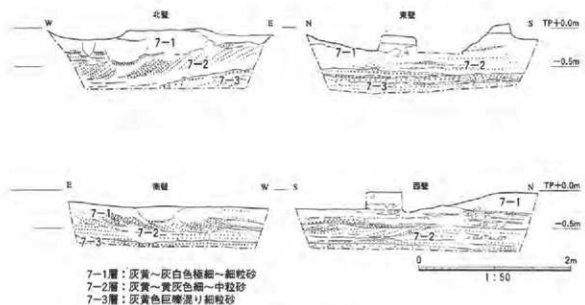
これらの遺物は13世紀代に属するものがほとんどである。同時に出土した陶磁器も12～13世紀代のものである。8と10の土師器皿は15世紀代に下る可能性がある。

第5層：黄褐色を呈する礫混り粗粒砂層で、層厚は20cmである。撻りがないが、整地層である。調査範囲のほぼ中央付近までの西部に分布しており、東部には堆積していない。包含する遺物は少ないが、瓦質土器が出土した(図8-35)。



- 0層：現代整地層
- 1層：近代末の整地層および焼土層
- 2層：白色中粒砂
- 3層：浅黄～暗灰黄色シルト質細粒砂
- 4層：オリブ褐色礫混りシルト質細粒砂
- 5層：黄褐色礫混り粗粒砂
- 6層：暗灰黄色礫混りシルト質細粒砂
- 7層：灰黄～灰白色極細～細粒砂
- 灰黄～黄灰色極～中粒砂
- 灰黄色巨礫混り粗粒砂

図6 地層断面図



- 7-1層：灰黄～灰白色極細～細粒砂
- 7-2層：灰黄～黄灰色極～中粒砂
- 7-3層：灰黄色巨礫混り粗粒砂

図7 トレンチ地層断面図

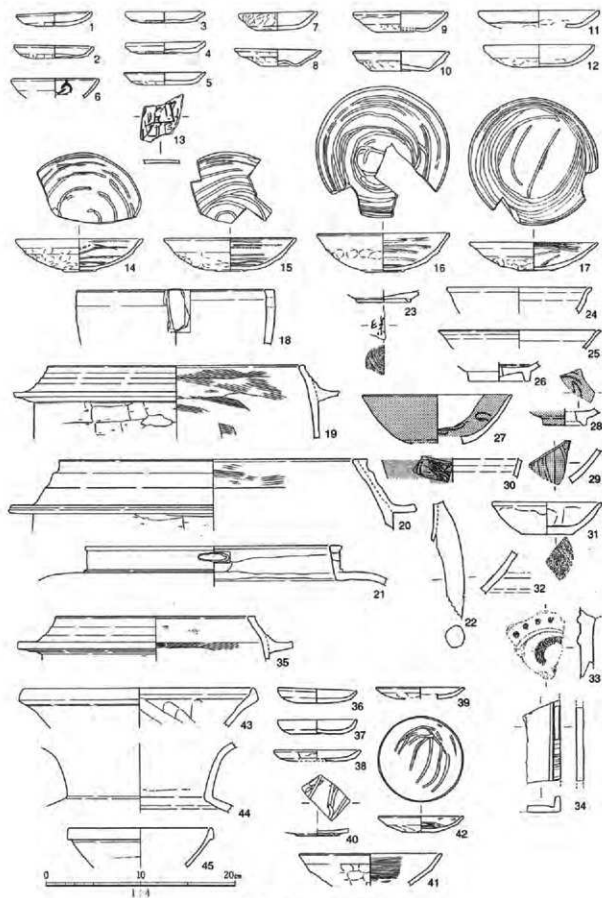


图8 各层出土文物实测图

1~34: 第4层, 35: 第5层, 36~45: 第6层

35は口径19.4cmの羽釜である。先の19・20と同様、口縁部が内傾する。

第6層：暗灰黄色を呈する礫混りシルト質細粒砂層で、層厚は西端部で50cm、東端では20cmである。下位層の上面は西端が高く、東に低くなっていることもあり、本層上面の高さは西端が東端より30cm高くなっている。瓦器を主体とする中世の遺物が出土した(図8-36-45)。

36-39は土師器皿で、口径8.1-9.2cmの小型の皿である。いずれも口縁部の立ち上がりが高く低い。器高は1.1-1.5cmである。40・41は瓦器椀で、42が瓦器皿である。40の高台は断面が方形を呈しており、41は内面のヘラミガキが密に施されており、4層出土の瓦器椀よりやや古くなろう。42の皿の内面には螺旋状のヘラミガキを施す。

43は東播系の須恵器鉢である。口径は24cmである。44は須恵器の壺で、灰釉がかかる。45は中国製の白磁碗である。これらは12-13世紀代に属する遺物である。

第7層：最上部は灰黄-灰白色を呈する極細-細粒砂層で、その下位には灰黄-黄灰色を呈する細-中粒砂を主体とする砂に粗粒砂や礫のラミナが観察できる。さらに下位には巨礫混りの粗粒砂-礫が堆積する。東側が高く、西側が低くなっており、水流によって東側から運ばれてきた河成砂層である(図7)。本層より土器が1点出土した。胎土内には長石が多く含まれており、弥生土器の可能性が高いが、摩耗が著しく時期は不明である。本層最上部上面で多くの遺構を検出した。上面の高さは西端でTP+0.2m、東端でTP±0mである。

最下層の河成砂層は東側が低く西側が高く残っていたが、それと同様に、上位の遺物包含層や整地層も西側が高く、東側が低くなっている。近世段階では東部で幾重にも堆積した旧地表面が見つかったが、第4層より下位の地層においては西側から地層が堆積しているように見え、中世段階には調査地の西側に生活空間の中心部が展開している可能性がある。

ii) 遺構と遺物(図9・10)

第7層の上面に南北方向の溝を6条、土壇を7基と、円形のピットを30基ほど検出した(図9)。また、シジミ貝の貝殻が集中して投棄されていた小規模の貝塚を1箇所検出した。第6層上面でも円形のピットを2基、第5層で埋まる窪みを1箇所検出した。以下では第7層上面の遺構から記述する。

第7層上面は敷地の北西部が高く、南東部が低くなっている。低くなった南東部では土壇や溝が重複しており、廃棄物の処理空間であった可能性もある。

SD701：調査地東端に検出した南北方向の溝で、幅0.7m、深さ0.2mを測る。正南北方向ではなく、敷地の方位と同じである。埋土は2層に分かれ、上部に灰黄色シルト質細粒砂が、下部には黒褐色シルト質細粒砂が堆積する。深さは浅いが、整然と直線が南北方向に延びており、敷地内の区画を目的とした溝の可能性がある。完形に近い多くの土師器皿や瓦器椀が出土した(図10-46-56)。

46-50は土師器皿で、46-49が口径8.0-8.4cm、器高1.3-1.6cmの小型の皿、50が口径12.6cm、器高1.7cmの中型の皿である。いずれも体部が内湾しつつ短く立上がるものである。

51は瓦器皿で体部内面には横方向のヘラミガキを、底部には並行する直線を施す。52-55は瓦器椀で、口径13.8-14.4cm、器高3.7-4.1cmのものである。53は内底面に螺旋状のヘラミガキを施すが、

それ以外は並行する直線のヘラミガキを施す。いずれも高台は低く13世紀代に属する。

56は瓦質土器の鉢で、外面はユビオサエのあとが明瞭に残り、内面は上部はヨコナデであるが、底部付近はヘラ状のものでナデ調整する。口径18.2cm、器高6.5cm以上になる。

SD702：調査地東部で検出した南北方向の溝でやや蛇行しているが、敷地の方位に近い。埋土は南部で2層に分かれ、上部は暗灰黄色シルト質細粒砂、下部は黒色シルト質細粒砂である。北端部では幅が1.8m、深さ0.2mを測るが、南部では浅い落込みとなって拡がっている。敷地南部が周辺部よりも低い場所であった可能性がある。北部には深さ0.3mの土塊状の窪みがある。土師器や瓦器が出土した(図10-63-79)。

63-69は土師器皿で、63-65は口径8.2-9.6cm、器高1.1-1.5cmの小型の皿である。体部は内湾しつっ立上がる。65には内外面に墨書がある。内面は「自」あるいは「目」と読め、その右にもう1文字あるが判読できない。外面には「山」とその上にも文字があり、「山」の右下には「明嚴(カ)」とも読める文字がある。66は口径11.6cm、器高1.8cmの中型に属する皿で、内面に墨書があるが判読できない。67-69は口径14.2-14.8cm、器高2.3-2.9cmの中型の皿で、体部が内湾しつっ立上がるが、口縁端部が外反し丸くなっており、やや古相を呈している。11-12世紀代のものであろう。

70-71は瓦器碗で、口径12.0-12.4cm、器高3.7-4.1cmを測る。70の内面には体部には粗い横方向のヘラミガキを施し、内底面にも粗い螺旋状のヘラミガキを施す。71では体部に密な横方向のヘラミガキを施し、内底面には密な直線文のあと、斜格子のヘラミガキを施す。72は口径8.6cm、器高1.6cmの瓦器皿である。

73は土師質の小型羽釜で、頸部の径が6.6cm、体部最大径が8.4cm、器高が6cm以上になるものである。体部の最大径付近に高さ1.1cmの鐃が巡る。

74-76は陶磁器で、74-75が中国製白磁、76が国産の古瀬戸御し皿である。74-75は口縁部が玉縁になる碗であろう。76の底部は糸切り痕が明瞭に残る。

77は土師器甕で、口縁部の屈曲は緩く、体部は浅くなっている。78は須恵器甕、79は瓦質の鉢である。口径48.6cm、器高11.8cmになる大型のものである。

SD703：調査地南東部に検出した南北方向の溝で、北端部は調査地中央付近で途切れてしまう。この溝も敷地の方位と同じ方向に延びる。幅0.5m、深さ0.3mを測る。埋土は上部が黒褐色シルト質細粒砂、下部が暗灰黄色シルト質細粒砂で、ラミナが確認できる。土師器や瓦器が出土した(図10-57-59)。

57-59は土師器皿で、57の口径9.0cm、器高1.7cmの小型の皿である。58-59は口径14.0-14.2cm、器高2.1-2.3cmの中型の皿である。いずれも13世紀代に属する遺物である。

SD704：調査地南東部のSD701とSD703の間に検出した南北方向の溝である。SD703と同様、調査地南端から中央部付近で途切れている。幅0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は暗オリーブ褐色シルト質細粒砂である。

SD705：調査地北東部に検出した南北方向の溝である。この溝も敷地北部で途切れており、南には延びていない。暗褐色シルト質細粒砂を埋土とする。

SD706：敷地北西部に検出した溝で、北から南南西に延びて、西に折れ曲がる。幅0.9m、深さ0.4mを測り、埋土は黒褐色シルト質細粒砂である。方位はほかの溝とは異なり、北でやや東に振っている。後述するように15世紀の遺物が出土しており(図10-60~62)、方向が異なる理由は時期差によるものと推定できる。

60は口径8.0cm、器高が1.5cmの小型の土師器皿で、形態から13世紀代に属するものである。61・62も土師器皿であるが、体部の立上がりや口縁部の形態から、15世紀代まで時期が下るものと考えられ、この遺構が最も新しい時期になる。

SK701：調査地中央部に検出した南北7.3m以上、東西2.2m以上、深さ0.4mの楕円形の落込みである。埋土はオリーブ褐色ないし黒色のシルト質細粒砂である。

SK702：調査地中央部に検出した落込みで、SK701に切られる。暗褐色シルト質極細粒砂を埋土とする。

SK703：調査地南西部に検出した不定形の落込みで、南北4.1m以上、東西1.6m以上になる。黒褐色シルト質極細粒砂を埋土とする。遺物は少なかった。

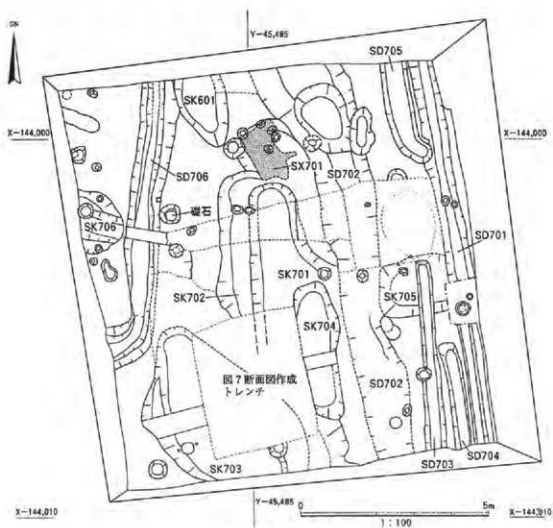


図9 遺構配置図

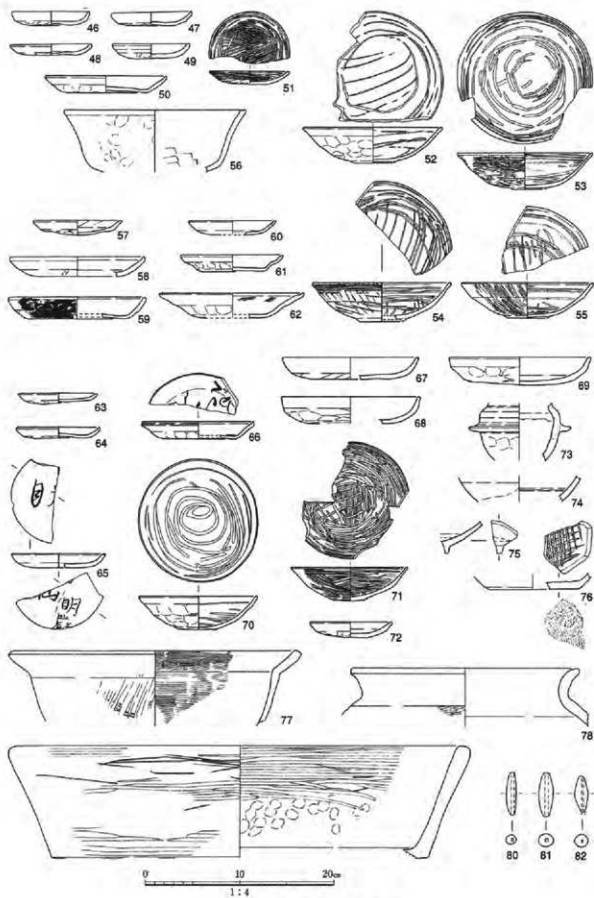


圖10 遺構出土遺物実測図

46~56 : SD701、57~59 : SD703、60~62 : SD706、63~79 : SD702、80~82 : SX701

SK704：調査地南部に検出したSK701を切る南北方向に長い落込みである。南北3.5m、東西1.1mを測る。埋土は2層に分かれ、上部が暗灰黄色シルト質細粒砂、下部が黒褐色シルト質細粒砂の偽礫が混る細～中粒砂である。

SK705：調査地東部に検出した方形の落込みである。SD701やSD703に切られている。東西2.1m以上、南北1.5m以上、深さ0.1mを測る。

SK706：調査地の西端、SD706の西側に検出した円形の土塚で、東西1.1m以上、南北1.6mを測る。埋土は暗オリーブ褐色シルト質細粒砂である。

SX701：調査地中央の北部で検出した小規模の貝塚である。東西1.45m、南北1.65mの範囲に、厚さ0.05m堆積していた。種類はシジミである。穴を掘った形跡はなく、やや窪んだこの位置に貝殻を投棄している。中から瓦器片とともに土鍾が出土した(図10-80～82)。

80～82は刺網の土鍾で、縦方向に紐孔が貫通する。長さが3.9～4.6cm、最大径が1.1～1.5cmのものである。

このほか、不定形の落込みや円形のピット、礎石状の石1基を検出した。ピット群の中には柱痕跡があるものといものがあつた。礎石状の石は1基しかなく、建物を復元できなかった。

第6層上面の遺構

北端部で第5層が埋土になる落込みSK601と、東部で6層上面に円形のピットを2基検出した。第7層上面としたピットの中に、この層準のピットが含まれている可能性がある。

3)まとめ

本調査は北区太融寺町の「安曇寺跡推定地」における初めての発掘調査であつた。今回の調査では飛鳥時代の安曇寺関連の遺構・遺物や、太融寺の寺伝にあるように平安時代の創建を裏付ける材料は確認できなかったが、13世紀代、鎌倉時代前半の溝や土塚・貝塚などの遺構や、当時の食器である土師器や瓦器のほか、中国製の輸入磁器や国産陶器などの遺物が豊富に出土した。また、瓦が一定程度出土し、瓦質の火鉢や灯明皿として使用された土師器皿も出土しており、寺院が存在していたことは疑いない。

以下では、今回の調査で得られた成果から、本調査地と周辺への復元を試みる。

i)遺構の分布と地層の堆積からみた調査地

本調査地は太融寺境内の南西隅に位置しており、現境内の主要伽藍が建つ中心部からは外れた位置に当る。創建当時の太融寺の景観は文書や絵図類が存在していないため判然としない。まして、推定されている古代寺院安曇寺についても、記録も存在していないため不明である。

中世の太融寺の景観は兵乱のため荒廃していたようであるが、1336(建武3)年に摂津吹田荘を太融寺の寺領にするという後醍醐天皇の論旨が与えられたという[宮本又次1977]。荒廃していてもそれなりの規模の寺域を保持していたのであろう。ただ、今回の調査では13世紀代に属する遺物が多く出土しており、数少ない記録が残る14世紀の遺物はほとんど見つからない。ただ、15世紀代の遺物を含む溝が1条存在しており、14世紀以降も人々の活動があつたことがわかる。

また、検出した遺構群のうち多くの溝といくつかの土壌は、現在の敷地の方位と同じ方向のものがあり、13世紀代に現在の敷地方位が形成されていると考えられる。この北で西に振る方位は、図4の「仮製二万分の一地形図」を見ると、太融寺から北西部一帯に広がる水田地帯にも同方向の道路や水路が認められる。図4では北は旧中津川までしか含まれていないが、旧中津川を越えて北の神崎川付近までこの方向の地割が広がっており、大阪北方の条里地割の方向であった可能性がある。

下って、豊臣期の1586(天正14)年には、当時天満に居住していた山科言経が公家仲間の冷泉為満らと、北野太融寺と大坂の侍町を見学した記録が残るが、それには「中嶋西北野在所太融寺旧跡」(『言経卿記』天正14年1月28日条)とある(註1)。この時期には源融の旧跡として公家らの遊山の対象となる堂宇が存在していたのであろう。その後、徳川期になると太融寺が大坂ノ陣の際には豊臣方に与していたため、寺領を削られたとも伝える[大阪市土木技術協会1991]。現在の寺域になったのがこの段階なのであろう。

明治時代初期の「大阪実測図」(図3・11)を頼りに復元すると、「二王門」や「寺山」「堂山」「稲荷山」などの字名が残る土地を中心に寺院が存在していたと推定できる。特に、「二王門」や「寺山」「稲荷山」という字名の土地は、北側を東西方向の道路が直線で延びており、「稲荷山」「二王門」の二つの字は、その南側にも直線の東西道路があり、西側の「稲荷山」の西部と東側の「二王門」の東端にある南北道路によって東西約220m、南北約160mの長方形の敷地が読み取れる(図11)。

この長方形を呈する二つの字に寺院の境内が展開していた可能性が高いと考えられる。字名と近代まで残った道路からの推定であるが、この長方形の土地が中世の太融寺の境内であったとすると、調査地はほぼ中央の南端に位置していることになる。

今回の調査で検出した遺構の配置から考えると、南北方向の溝や土壌状の落込みが集中する場所であり、境内地の中心部とはいえない。また、遺構面の勾配や地層の堆積状況は、西側が高く、整地地業も西側から東側へと行われつつ敷地が拡大しているように見えてくる。発掘調査の成果から考えると、鎌倉時代の遺跡の中心は現在の太融寺境内地ではなく、その西側の字「稲荷山」の方に展開しているように想定できる。

ただ、今回の調査地の東端にあるSD701でも豊富な遺物群が出土していることや、「二王門」の西側の南北道路は近世には「中国街道」と呼ばれる主要道路であり(図4・11)、調査地の東側にも建物が展開している可能性はある。今回の調査が10m×10mというごく小規模の範囲しか行えておらず、今回の結果をもって遺跡全体を語るには、材料が乏しいのが実情である。

今回の調査では、遺構面を形成する砂礫層の形成に係わる知見も得た。本調査地を含む天満地域は、梶山彦太郎氏と市原実氏の説では大阪湾沿岸流によって形成された長柄砂州上に立地していることとなる[梶山彦太郎・市原実1986]。長柄砂州の形成は大阪湾東岸に沿って北流する沿岸流によって、上町台地の西岸に砂州が北へと延びていったと推定された。その解釈では砂礫層は南から北へと堆積していった状況が観察されることになるが、遺構面を掘下げたトレンチでは東から西へと堆積していった砂礫層が確認された。この事実から考えると、砂礫層は梶山・市原両氏のいう南北方向の「長柄砂州」ではなく、東からの沖積作用によって形成されていったこととなる。近年、天満地域の陸化は、

大阪湾沿岸流よりも淀川がもたらした土砂による沖積作用によって形成されたとする。道哲済や松田順一郎氏の説が説得力がある[趙哲済2003]。

ii) 出土遺物からみた調査地

出土した遺物は鎌倉時代の食器である土師器皿や瓦器椀が主体である。各層や検出した遺構から出土した遺物を見ると、土師器皿には体部が内湾しつつ短く立上がる小型の皿と、体部と底部の境で屈曲しつつ体部が内湾する中型の皿があるが、これらは平安京ではVI期に属する一群であり、その実年代は1180年頃～1270年頃とされているものである[小森俊寛・上村憲章1996]。これらの中にSD702から出土した67～69があるが、これらはやや古く遡るもので、平安京ではV期(1080年頃～1180年頃)に属するものである。また、時期が下るものには、4層出土の8・10、SD706出土の61・62があるが、いずれも平安京IX期(1440年頃～1500年頃)に属するものであろう[小森・上村1996]。

瓦器椀は口径が小さく高台もかなり退化したもので、内面のヘラミガキも簡略化されたものである[尾上実1983]。13世紀代中頃に属する[森島康雄1992]。

このことから、この調査地は12世紀代から生活空間として利用され、13世紀代にその中心があり、一時期の中断を経て15世紀代に再開発されている可能性がある。14世紀以降はこの地点が主たる生活空間としては利用されていないのであろう。

このほか、少量の中国製の輸入磁器も出土している。その内容は青白磁壺・白磁碗・青磁蓮弁文碗・青磁碗である。青白磁壺は細片であるため、外面に彫込んだ文様は判明しないが、13世紀代の製品であろう。壺や水注などの大型製品は有力寺院や貴族など、所有する者の権威を象徴する「威信財」である[小野正敏ほか2005]。こうした器物が出土することから考えて、この地にそうした階層の人間が居住していたのであろう。また、それ以外の白磁碗や青磁蓮弁文碗も12～13世紀代に属するものである。これらにしても、一般集落での出土は少なく、瓦や灯明皿・墨書土器の出土と相まって、この地に居住していた人が、そうした器物を所持できる人々であったと考えられる。輸入製品以外にも古瀬戸の碗や皿・師し皿などの陶器類のほか、近畿地方では出土数が少ない東海系の山茶碗も出土しており、一定程度陶磁器を所有できる階層で、広く交易を行う者が居住していたことをうかがわせる。

大川北岸で輸入陶磁器が出土した調査地には、この調査地以外に天神橋遺跡と天満本願寺跡がある。天神橋遺跡は本調査地から南南東に800m離れた大川北岸に立地している遺跡で、古くは古墳時代の6世紀代に属する遺物が出土しているが、量的に多いのは平安時代の10世紀から鎌倉時代の13世紀代に属するものである。ここでも白磁や青磁の碗や皿が出土している[佐藤隆2002]。天満本願寺跡は南東1600m付近にある遺跡で、古墳時代の堅穴建物や掘立柱建物が見つまっているが[小田木富慈美2004]、その上層に平安時代から室町時代に属する中世の集落跡が広がっており、そこにはハマグリを主体とする貝塚が形成されていた。この地層から13世紀代に属する、雲文を象徴する高麗青磁梅瓶の破片が出土している[市川創2004]。高麗青磁も所有者の権威を象徴する「威信財」で、中国製陶磁器などとともに、権門勢力や武士階級に好まれた調度であった。

この地域でこうした「威信財」を所持できる階層を探せば、この地域を支配していた「渡辺党」がその候補にあげられる。「渡辺党」には源氏の系譜を引く一団と、遠藤氏の系譜の一団がある。「渡辺党」は

11世紀末に渡辺に住み着き、摂津大江御厨渡辺惣官職に補任されており[河音能平1988]、その後の源平の争乱や鎌倉時代の政変、さらには当時の大坂において巨大な権門勢力であった四天王寺の覇権争いなどのなかで、この両家は「渡辺党」の統率権を賭けた争いを繰返している[加地安江・中原俊章1984]。ただ、1221(承久3)年の承久の変以降は北条得宗家と強いつながりをもつ遠藤氏が勢力を拡大していったようである[加地・中原1984]。今回の調査で出土した遺物は13世紀代中頃～後半に属するものが多く、遠藤氏が勢力を拡大していた時期の遺構が検出されたことになる。日本各地の「威信財」も御家人や守護の居館で出土していることを考えると、「渡辺党」と係わらせて考えることも妥当と考える。

食器以外では瓦質の土釜が出土している。煮沸用の道具であり、13世紀代に出現する。一般集落では出土例が少ない瓦質の火鉢もあり、この地の性格を推定できる遺物である。

土師器皿には文字を書いた墨書土器が見つかったが、いずれも習書と思われるものや断片であり、安曇寺や渡辺との係わりをうかがわせるものはなかった。ただ、こうした文字資料や硯が出土することから、識字層が居住していることがわかる。

また、鞆網の土錘も少量であるが出土しており、この地域の住民の生業の一端がうかがわれる。この遺物から淀川の水運の要でもある渡辺でもあり、海岸に近いこの地の立地を生かした生業として、漁業に従事していた人々の存在が想定できる。このほか、鋳型や鋳造炉の破片が出土しており、鋳造に係わる職人も存在していたようである。

出土した遺物から本調査地を見ると、寺院に関係する識字層や威信財を所有できる上層階級から、漁業や金属生産に係わる職人層など、様々な性格の住人が居住していたことがわかる。

iii)「太融寺村」の景観

近代初頭の地形を描いた「大阪実測図」(図11)を見ると、太融寺を核とした方形の街区が展開する太融寺村と、その北側に小区画の敷地が密集する堂山村が隣接して一つの集落を形成しているよううかがえる。以下、その地図を見ながら太融寺付近の景観を検討する。

図11は1886(明治19)年当時の太融寺周辺の地形図である。先にも述べたように、太融寺がある「字二王門」とその東側の「字稻荷山」は東西約220m、南北約160mの長方形を呈した敷地となっている。この長方形の街区の東を限る中国街道の東には「字寺山」や「字神山」が、比較的規模の大きい敷地が集まる街区として接している。さらに「字二王門」を含む長方形の敷地の南には、大坂三郷の北端を限る天満西寺町には属さない、大坂三郷の外側の寺院が太融寺に付属するように存在している。この景観は北側に展開する「字堂山」の小規模敷地が密集し、狭い路地がいくつも交差しつつ面的に広がる街区構造の集落構造とは大きな違いがある。

こうした構造から、太融寺を中心核として、その周囲の比較的広い敷地で構成される敷地群は、太融寺に付属する寺院や寺家であった可能性があり、北側の「字堂山」一帯の小規模の敷地が町屋や在家であった可能性が高い。さらに、敷地の広さや街区の構造などから、住人の階層差が存在していたと想定できる。この太融寺町とその北側の堂山町で構成される集落が、中世における集落の姿であった

可能性が非常に高い。以下はこの集落を「太融寺村」と呼ぶ。

寺院を核とした集落は、中世後期には近畿地方に数多く存在しているようで、伊藤毅氏によると、「基本的にはいずれも領主としての寺家を同心円の核としながら、その周縁に従属的な空間を付属させて、全体として有機的なまとまりを形成するという点において、むしろ共通する側面が多いことが看取される。また、こうした空間構成は中世的領主支配のフィジカルな反映であったことにも注意しておきたい。」としている[伊藤毅1989]。

よく似た例としては、福岡県福岡市にある中世都市博多の聖福寺境内がある[宮本雅明1989、高橋



図11 明治時代の太融寺周辺の道路

康夫・吉田伸之編1989]。また、寺院境内集落ではなくとも、近畿地方に多い環濠集落や居館を核とした中世集落でも、同様の構造の集落を見いだすことができる。こうした構造の集落は大阪市内では四天王寺とその門前町がある。

とすれば、この「太融寺村」も中世段階には太融寺が領主として支配していた可能性があり、近世に至っても、その空間構造に変化がなかったとすれば、近世においても太融寺が「太融寺村」の土地領主として命脈を保っていたのではなかろうか。太融寺に係わる伝承に、東は現扇町公園、南は老松町、北は万才町までが太融寺の寺域であったようで[宮本又次1964]、この一帯の領主であった。

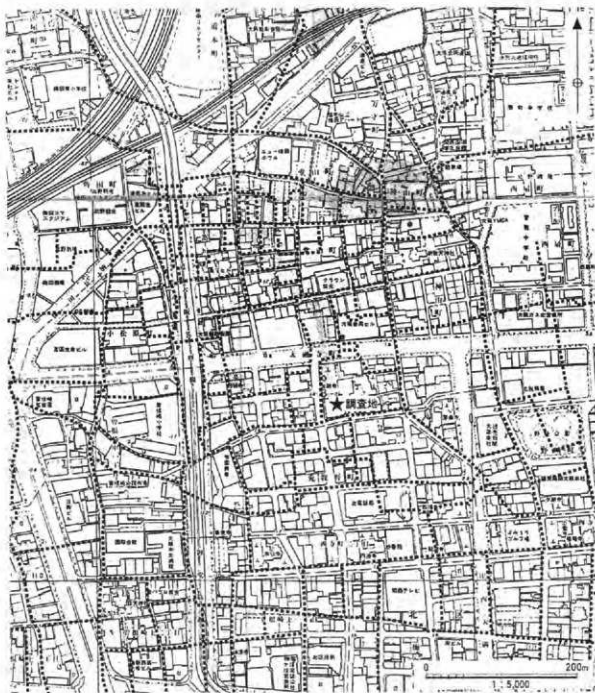


図12 明治時代の道路復元図

ただ、中世後期の大阪を記録した「天文日記」や「信長公記」には、野田や福島などの集落名は出現するが、太融寺についての記録は見当たらない。これは、「太融寺村」に本願寺門徒が存在していなかったことに起因する可能性もあろうが、中国地方と大阪とを繋ぐ主要街道である「中国街道」に接するようにある「太融寺村」が何も記録されていないのは不思議である。

また、明治初期の道路を復元した現代の地形図を見ると、明治初期の道路がほぼ継承されていることがわかる(図12)。南部の太融寺町や免我野町では区画整理が進んで消滅した道路もあるが、北部の堂山町一帯では東西方向の道路だけでなく、それらを繋ぐ南北方向の路地もほとんどそのまま残っている。こうした事実から、北部の堂山町では近代以前の町割がそのまま遺存していることがわかり、その一帯の地下には、近世さらにはそれ以前の中世にまで通る集落が埋もれている可能性が非常に高い。考古学的な調査を行うことでそれも明らかになると考える。

今回は安曇寺跡推定地として太融寺境内で発掘調査を行った。古代寺院安曇寺の規模や形態などは不明であったが、その後の中世においてはこの地に寺院が存在していたことが推定できた。また、周辺の地形などから、中世の遺跡の広がりには太融寺境内にとどまるものではないことも想定できた。今後はこの「太融寺村」を、寺院を核としてその周囲に付属するように展開する寺院群や集落域までを含んだ大きな都市として認識し、古代から中世へと継続して発展していった遺跡として把握する必要がある。このような形態の都市遺跡は、古代から中世への都市構造の変遷を明らかにできる遺跡であり、その構造や規模の変遷の解明に取り組んでいく必要がある。

そうした課題を明らかにすることで、未だ詳細が明らかにはなっていない大阪市の中世の景観や、さらには中世の幹線流通ルートである淀川流域を含んだ摂津地域の中世社会をより豊かに描けるようになるであろう。

註

1、大阪市史編纂所藤田実氏より御教示を得た。

引用・参考文献

- 市川創2004、「天碧く雲たなびき一天満出土の高麗青磁一」；大阪市文化財協会編「葦火」113号、p.8
伊藤紋1989、「中世都市と寺院」、高橋康夫・吉田伸之編「日本都市史入門」I、東京大学出版会、pp.17-42
大阪市土木技術協会1991、「太融寺」；『歴史の散歩道』、p.78
小田本富意美2004、「古墳時代の天溝—砂洲上のムラー」；大阪市文化財協会編「葦火」113号、pp.2-3
小野正敏ほか2005、「舶来物への憧憬」；国立歴史民俗博物館編「東アジア中世海道」、pp.148-167
尾上実1983、「南河内の瓦器碗」；古代を考える会編「藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢」、pp.689-705
加地雲江・中原俊章1984、「中世の大阪」、松籍社
梶山摩太郎・市原実1986、「大阪平野のおいたち」、青木書店
河音能平1988、「難波津から渡辺津へ」；『大阪市史』第二巻、pp.8-18、大阪市
小森俊寛・上村恵章1996、「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」；京都市埋蔵文化財研究所編「研究紀要」

第3号、pp.187-271

佐藤隆2002、「天神橋遺跡の調査」：大阪市文化財協会編「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1999・2000年度—」、pp.181-190

大日本帝国陸地測量部1889、「複製二万一分地形図」

趙哲演2003、「大阪平野のおいたちと人類遺跡」：『大阪100万年の自然と人のくらし』普及講演会資料集、日本第四紀学会、pp.1-16

内務省地理局1888、「大阪実測図」

藤沢一夫・梶山彦太郎1988、「安曇寺跡と波辺別所」：大阪市教育委員会文化振興課編「大阪市文化財年報」昭和61年、pp.22-29

高橋康夫・吉田伸之輔1989、「都市史図集20 境内の町」：『日本都市史入門』I、東京大学出版会、p.194

松尾信裕2004、「大坂城下町跡下層の遺跡」：大阪市文化財協会編「大坂城下町跡」II、pp.351-356

宮本雅明1989、「空間志向の都市史」、高橋康夫・吉田伸之輔『日本都市史入門』I、東京大学出版会、pp.63-83

宮本又次1964、「太融寺」：『キター風土記大阪一』、ミネルヴァ書房、pp.337-340

1977、「太融寺町」：『大阪の町名』、清文堂出版、pp.468-470

森島康雄1992、「畿内産瓦器の併行関係と層年代」：大和古中近研究会編「大和の中世土器」II、pp.113-127

調査地遠景
(東から)



第7層上面検出遺構
(南から)



SX701
(東から)



国分寺跡発掘調査(KB05-1)報告書

調査箇所	大阪市北区国分寺2丁目
調査面積	100㎡
調査期間	平成17年7月1日～7月6日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、小田木富慈美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は北区国分寺2丁目に所在し、淀川とこの分流である大川とに挟まれた地点に立地する。調査地の北には、過去2度にわたって調査され、弥生～古墳時代初頭の遺構・遺物が認められた本庄東遺跡(HH97-1・01-2次調査)や、古墳時代前期の遺物が出土した豊崎遺跡をはじめ、長柄古墳・長柄西遺跡などが位置する。また、南には弥生時代中期以降の遺構・遺物、古代の遺物が確認された同心町遺跡(DC02-3次調査)があるなど、周辺には弥生～古墳時代の遺跡が点在している(図1)。

調査地付近は江戸時代の『摂陽群談』の記述によって、国分寺跡として遺跡指定されるに至ったが、これまで本格的な調査は行われてこなかった。現在の国分寺境内地は、調査地の東約150mの地点に存在している(図2)。そちらの寺伝によると、齊明天皇の時代に長柄豊碓宮の旧跡に一字を建立し長柄寺と称したことに始まり、天平13(741)年長柄寺を改称し「金光明四天王護国寺」となったという。なお、摂津国分寺については、天王寺区の国分寺を奈良時代における国分寺に当て、今回の調査地である北区の国分寺は、平安時代に国府を移した際に当地へ移転したものとみる説や、国府の移転とは関係なく天王寺区の国分寺の衰退によって北区の国分寺が代替の寺となったとみる説などがある[新修大阪市史編纂委員会1988]。今回、建設工事に先



図1 調査地の周辺

立ち平成17年4月に試掘調査を行ったところ、中世～近世の作土層とこれ以前と思われる包含層が確認され、地山上面で中世以前とみられる遺構が検出されたため、本調査を行うことになった(図3)。

調査は平成17年7月1日から開始した。機械掘削は中世以前と考えられる包含層の上面までとし、これ以下を人力で掘削した。調査区の中央部分は現代建物の基礎によって攪乱を受けていたが、それ以外では包含層が残存していた。中世以前の可能性のある遺構は



図2 調査地の位置

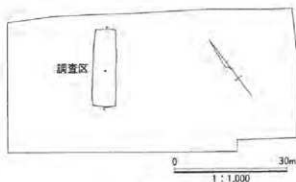


図3 調査区的位置

北端部で検出された耕作溝で、この他の部分では断面で近世の耕作溝が確認された。機械掘削には2日間を要し、7月4・5両日で包含層の掘削作業と写真撮影その他の記録作業を行った。7月6日には埋戻しを行い発掘調査に関する基本的な作業をすべて終了した。本報告で使用した方位は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値: TP+〇mと略記する)である。

2) 調査の結果

i) 層序(図4)

調査区では現在建物の基礎を除去すると近世以前の地層が良好に堆積していた。以下で各層の特徴について述べる。

第0層: 現代盛土で、試掘以前に存在した店舗の基礎を含む。

第1層: 暗褐色含礫中粒砂層で、畠の作土層と思われる。層厚は40cm未満である。江戸時代後半～幕末期の陶磁器、土師器、土人形、瓦のほか、鉛字が多く出土した。

第2層: 暗オリーブ褐色含礫粗粒砂～中粒砂質シルト層で、作土層と思われる。層厚は20cm未満で近世の陶磁器・土師器細片を含む。断面観察では、本層の下面に南北方向と思われる耕作溝が複数認められた。また、本層の基底面で性格不明遺構SX201を検出した。

第3層: 調査区の南部でのみ認められ、上下に分層可能であった。第3a層は黄褐色砂礫層である。第3b層は暗灰黄色含礫粘土質シルト層で、水田作土層と思われる。層厚は20cm未満で、遺物は出土しなかった。

第4層: 黄褐色～にぶい黄褐色含礫粘土質中粒砂層で、鉄分の沈着が著しい。層厚は20cm未満で、土師器細片が出土した。本層も水田作土層と思われる。

第5層: 暗褐色含礫粘土質中粒砂層で、マンガンの沈着が著しい。層厚は10cm未満で、瓦器、瓦質土器、土師器が出土した。第3・4層と同じく本層も水田作土層の可能性があり、下面では東西方向の溝が検出された。

第6層: 黒褐色粘土質粗粒砂～礫層で、作土層と思われる。本層の下面では東西方向の耕作溝が検出された。層厚は10cm未満で出土遺物はない。

第7層: 黒褐色粗粒砂～礫層で、第6層の下部で所々残存していた。古土壌の可能性はあるが、出土遺物はなく形成の時期は不明である。

第8層: 黄褐色～灰黄褐色の中粒砂～巨礫層で、河成層である。上部は北西から南東方向への流れによって形成されたものである。

ii) 遺構と遺物(図5)

江戸時代では、第2層の下面で畠の畝間と考えられる幅0.3m、深さ0.2mの溝が数条確認された。

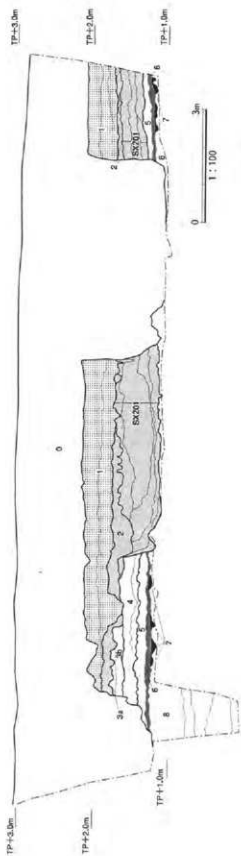


图4 调查区西坡断面图

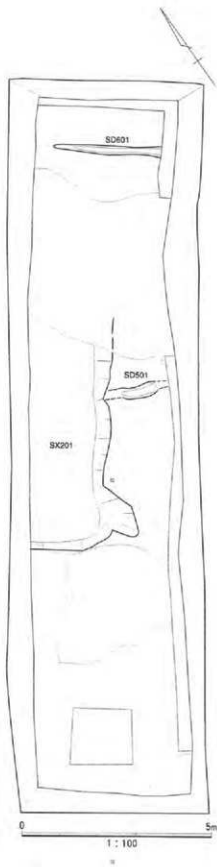


图5 遗構平面图

地層断面の観察から、これらは南北方向に存在したものとみられる。出土遺物はない。また、第2層の基底面では、SX201が検出された。SX201は南北方向と思われる溝状の遺構で、性格は不明である。南北長は10m以上、東西幅は2m以上である。埋土の最下部は粘土の偽礫を含むにぶい黄褐色粗粒砂層で、人為的な埋戻し層である。この直上は灰オリーブ色粘土層で水漬きの堆積層である。これより上位は全て埋戻し層である。

中世に遡るとみられる遺構はわずかであった。第5層の下面では、調査区の北端で東西方向の溝状遺構SD501が1条、第6層の下面では同じく北端で東西方向の耕作溝SD601が検出された。幅は0.2m未満、深さは0.1m未満である。これらからの出土遺物はないため詳細な時期は不明であるが、第5層の出土遺物より、中世以降と考えておきたい。

3)まとめ

当初、調査地では国分寺に関する遺構・遺物の確認が期待されたが、近世の瓦は少量出土したものの、古代寺院に関する瓦などの遺物や遺構は検出しえなかった。その一方で、今回の調査では当地が中世～近世にかけて耕作地だったことが明らかになった。なかでも中世においては水田作土層が認められ、近世以降は畜として利用されたようである。出土遺物の量からみて、周辺の開発が進んだのは18世紀以降と思われる。中世～近世の古文書によると「渡辺国分寺内田地」など、国分寺内という表現が多用されているようである[平凡社1986]。この国分寺が単なる地名か実際の寺を指すのかは不明であるが、国分寺に関する遺構が周辺に存在する可能性は完全に否定しきれないだろう。また、第7層からは遺物が出土していないため、断定はできないが、古墳時代以前に形成された古土壌の可能性もある。周辺では崇禪寺遺跡や本庄東遺跡など弥生～古墳時代の遺跡が点在することからも、河成堆積層上の微高地に集落などが立地していたと思われる。周辺における当該期の集落遺構の発見が待たれる。

なお、調査地の北約2kmに位置する崇禪寺遺跡では下位の砂堆が淀川デルタの形成に伴うものであることが判明している。また、調査地より南1kmに存在する同心町遺跡では淀川デルタと大和川河口の堆積の両者が認められている。本調査地では河成堆積の最上部は北西から南東へ向う流れによって堆積したものであると判明している。この堆積方向は現在の淀川の流れとは異なっており、形成の過程については、周辺の調査成果の増加を待って再度検討する必要がある。

参考文献

- 大阪市史編纂委員会1988、『新修大阪市史』第1巻 pp.932-934
平凡社1986、『大阪府の地名』日本歴史地名大系第28巻 p.574

調査地遠景
(南東から)



調査区西壁断面
(南東から)



調査区北壁断面
(南東から)



地山上面検出状況
(南から)



北端部地山上面
遺構検出状況
(東から)



南端部深掘り
トレンチ
(南西から)



天神橋遺跡試掘調査(TJ05-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市北区東天満2丁目10 堀川小学校
- ・調査面積 約4㎡
- ・調査期間 平成18年3月10日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、小田木富慈美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大阪天満宮の北、天神橋遺跡の北西に位置する。付近ではHX99-1次調査やTJ01-1次調査が行われ、古代～近世の遺構・遺物が検出されている(図1)[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001・2003]。この度、学校施設の建設事に伴い、試掘調査を行った。当初予定されていた校庭南端で試掘を開始したところ、現地表下50cm以下に旧校舎のコンクリート基礎が一面に入っており、この厚さは30cm以上であった。このため、試掘箇所を北東へずらして再度試掘坑の設定を行った(図2)。

〈調査の結果〉

試掘坑1では、前述のように基礎よりも下位の地層堆積状況は確認できなかった(図3左)。

試掘坑2では、現地表下130cmまでが現代盛土であった(図3右)。この下位には土壌の埋土と思われる焼土を含む黄褐色の中粒砂質シルトが検出された。また、これより現地表下170cmまでは浅黄色

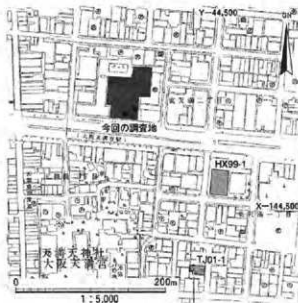


図1 調査地と周辺の調査位置図



図2 試掘坑の位置

の砂礫が盛土されていた。現地地表下170～250cmまでは、食物残渣や幕末期の陶磁器を多量に含む黒褐色シルト層が堆積していた。本層は廃棄土壌の埋土と思われる。これ以下は掘削していないため、詳しい状況は不明であるが、試掘壕2の出土遺物の中には、17世紀にさかのぼる肥前磁器も含まれており、17世紀代の遺構が黒褐色シルト層の下位に存在した可能性は高いといえよう。なお、HX99-1次調査やTJ01-1次調査で報告されている古代の遺構・遺物は、試掘範囲内では検出されなかった。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001、「株式会社大京による建設工事に伴う東天満1丁目所在遺跡発掘調査(HX99-1)報告書」：『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.25-34
- 2003、「天神橋遺跡発掘調査(TJ01-1)報告書」：『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.9-12

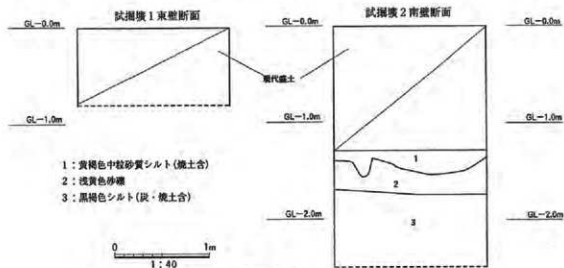


図3 地層断面図

試掘壕 1
(南西から)



試掘壕 2
(南西から)



試掘壕 2
(北から)



天満本願寺跡発掘調査(TN05-1)報告書

調査箇所	大阪市北区天満1丁目
調査面積	30㎡
調査期間	平成17年9月27日～平成17年9月30日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、小倉徹也

1) 調査の経緯と経過

調査地は上野台地の北側、天満砂堆上に立地し、旧淀川(大川)の右岸側に位置する。天満本願寺跡の東部に所在し、独立行政法人造幣局の構内にある(図1)。これまでに調査地付近では、造幣局構内で5箇所(TN93-3次・95-3次・96-1次・97-1次・01-1次)の調査が実施され、大坂冬ノ陣で焼失したと推定される屋敷跡や石垣などの豊臣期の遺構・遺物、江戸期の与力屋敷に係わる遺構・遺物などの資料が得られている。また、調査地南西側に位置するTN04-1次調査では、大川の右岸で初めて古墳時代の建物跡が検出され、飛鳥時代以降も居住域であったことが明らかにされた。

平成17年5月13日に試掘調査を行った結果、現代盛土下に近世の遺物を含む地層が良好に残存していることが確認された。この結果を受け、平成17年9月27日から発掘調査を実施することになった(図2)。

調査はまず、重機によって現代盛土の除去から開始した。開始して間もなく、中央部に調査区の4分の3を占める旧建物の浄化槽が見つかった。そのため造幣局と大阪市教育委員会文化財保護課で協議を行い、擾乱に相当する面積分を東西に拡張することになった。またその途中、地表面下約1.2mで焼土層が認められたため、一旦重機による掘削を止め、その分布範囲と遺物の取上げに努めた後、掘削を再開した。近世に属する作土層の上面で重機掘削を終了し、以下を人力によって掘下げた。平成17年9月30日に埋戻し作業および器材類の撤収を含めた現地におけるすべての作業を完了した。

なお、以下の報告で使用した図面に示す標高はTP値、方位は図1が座標北、それ以外は磁北である。



図1 調査地位置図

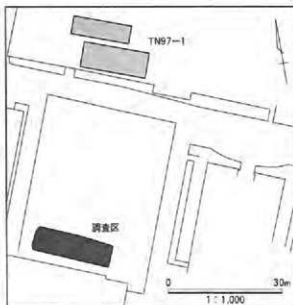


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序と出土遺物(図3~5、表1)

現地表面下約2.2m(TP+1.2m)までの地層を観察した。以下に層序の概略を記し、各層の岩相や特徴を表1に、南壁および西壁断面図を図3・4、出土遺物実測図を図5に示す。

第0層：現代の盛土層である。

第1層：近代に属する盛土層である。

第2層は焼土層および焼土の混る盛土層からなり、第2a層と第2b層に細分した。

第2a層：焼土・炭・シルト偽礫を含む暗灰黄色のシルト・極粗粒砂～細礫混り粗～中粒砂からなる盛土層である。層厚は5～20cmである。

第2b層：赤褐色の焼土・シルト混り極粗～中粒砂からなる焼土層と、焼土・炭・シルト偽礫を含むシルト・極粗粒砂～細礫混り粗～中粒砂からなる盛土層である。層厚は5～25cmである。

表1 層序表

TM5-1 層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	遺物	おもな遺物	時代
第0層	現代盛土	約10			—	現代
第1層	現代盛土 (焼土色シルト質中粒・粗粒砂 赤灰・シルト 灰土色 極粗～中粒砂 赤灰 暗灰黄色 細粒砂質シルト・粘土)	5-100			土管、漆地、陶瓦	近代
第2層	a) 上部：赤灰 焼土色 シルト混り極粗～中粒砂 下部：赤灰 焼土色 シルト混り極粗～中粒砂	5-45	最上部：炭の層層が観察	(赤土層)		近代
	b) 上部：焼土色 シルト混り極粗～中粒砂 下部：暗灰黄色 細粒砂～シルト・細礫混り極粗～中粒砂	5-60			土管、漆地、陶瓦	
	c) 赤土色 焼土色 細粒砂 暗灰黄色 シルト混り粗～中粒砂～灰土色 極粗～粗粒砂	5-55				
第2a層	a) 赤土色 炭・シルト偽礫 暗灰黄色シルト・細粒砂～細礫混り粗～中粒砂 赤土色 炭・シルト偽礫 シルト・極粗粒砂～細礫混り粗～中粒砂	5-20 5-25	炭・シルト 赤土色	赤土層にのみ分布 多量分	肥前磁器、 焼土瓦、漆地、 焼土色瓦片	19C後半
	b) 赤土色 焼土色 シルト・粗粒砂～細礫混り粗～中粒砂 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 灰土色 シルト混り粗粒砂 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 灰土色 シルト混り粗粒砂	5-55 5-70		最上部が灰～赤褐色に黄色 赤土層にのみ分布	大瓦 (漆地) (赤土層) (肥前磁器)	19C後半 19C後半
第2b層	a) 上部：赤灰 焼土色 シルト 極粗粒砂～中粒砂 下部：赤土色シルト・シルト偽礫 暗灰黄色 細粒砂～細礫混り粗～中粒砂	30-60 20-60	30-60 焼土			19C後半 19C後半
	b) 上部：赤灰 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1 5-10				
第3層	a) 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1				19C後半 19C後半
	b) 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1				
	c) 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1				
	d) 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1				
	e) 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1				
第4層	a) 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1				19C後半 19C後半
	b) 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1				
第5層	a) 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1				19C後半 19C後半
	b) 赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層 下部：赤土色 暗灰黄色シルト偽礫 暗土層	5-10 5-1				

凡例 赤土層 暗土層 赤土層にのみ分布 赤土層にのみ分布

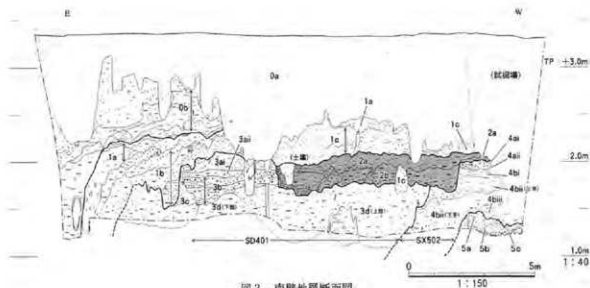


図3 南壁地層断面図

第2層は図3に示すように調査区中央部で第3層に著しく斜交して重なっており、西半部のみ分布し、東半部には分布していない。この分布境界は区画の境を示すものと考えられた。

第2b層からは素描き技法が用いられた肥前磁器碗1、瀬戸美濃磁器碗2、関西系陶器灯明受皿3が出土した。幕末から明治時代の遺物を含まないことから、19世紀前半に属すると考えられる。

第3層は盛土層で、第3a～第3d層に細分される。本層からは18世紀後半～19世紀前半の遺物が出土した。

第3a層：炭を含む褐灰色のシルト・粗粒砂～細礫混り中～細粒砂からなる第3ai層と、炭や黄灰色のシルト偽

礫を含む灰色のシルト混り細粒砂からなる第3aii層に細分される。層厚は第3ai・3aii層を合わせて25cm以下である。北壁断面で本層最上部の5～10cmは、焼けて黒色～赤褐色に変色していた。

第3b層：黄灰色シルト偽礫を含む灰色ないし黄灰色シルト混り細粒砂、炭・黄灰色シルト偽礫を含む灰色ないし褐灰色のシルト・粗粒砂～細礫混り細～中粒砂、炭・黄灰色シルト偽礫を含む褐灰色のシルト・粗粒砂～細礫混り細～中粒砂からなる。層厚は30cm以下である。

第3c層：上部は炭を含む暗灰色のシルト・極粗粒砂～中粒砂、下部はシルト・シルト偽礫を含む褐灰色の極粗粒砂～細礫混り粗～中粒砂からなる。層厚は約40cmである。第3a～3c層は調査区東半部

にのみ分布する。
第3d層：後述するSD401の埋土である。上部は炭・黄灰色シルト偽礫を含む暗青灰色の極粗粒砂～細礫混りシルト質粗～中粒砂、下部は炭を含む青灰色の細～極細粒砂・極粗粒砂～細礫混りシルト質粗～中粒砂からなる。



図4 西壁地層断面図

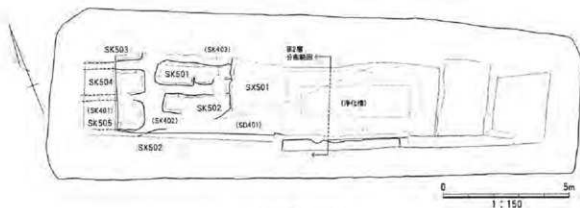


図6 遺構平面図

第2～3d層準からは肥前磁器の端反碗蓋4、端反碗5、碗6、小広東碗7・8、皿9、第3d～4b層準からは素描き技法が用いられた碗11が出土した。このほかに関西系陶器灯明受皿10が出土している。18世紀後半～19世紀前半に属する遺物である。後述する溝SD401から肥前磁器では碗17・18、素描き技法が用いられた碗20、筒形碗19、蓋21～23、鉢24、白磁、紅皿16、陶器では関西系の筒形碗25、皿26、急須27、行平28・29と、備前焼小型鉢30、軟質施釉の31、瀬戸美濃三耳壺32、焙烙33・34が出土した。[積山洋1999]によれば、焙烙33はG類、焙烙34はD₂類に比定される。18世紀後半～19世紀前半に属する遺物である。

第4層は4a層と4b層に細分され、それぞれがさらに3層に区分される盛土層である。上面で溝SD401、土壌SK401～403を確認した。

第4ai層：シルト・黄灰色シルト偽礫・細粒砂偽礫を含む黄灰色ないし灰色の粗～中粒砂からなる。層厚は10cm以下である。

第4aii層：黄灰色の極粗粒砂～粗粒砂からなり、層厚は5cm以下である。

第4aiii層：炭を含む灰色のシルト混り粗～中粒砂からなり、層厚は5cm以下である。

第4bi層：炭・細礫～極粗粒砂を含む黒灰色のシルト混り中～粗粒砂からなり、層厚は10cm以下である。

第4bii層：上半部は炭・灰色シルト偽礫を含む暗褐色灰色のシルト混り中～粗粒砂、下半部は炭・灰色シルト偽礫を含む暗褐色ないし灰色のシルト混り中～粗粒砂からなる。上・下半部を合わせた層厚は20cm以下である。

第4biii層：黄灰色シルト偽礫を多含する黄灰色シルト混り極粗粒砂～中粒砂からなり、層厚は20cm以下である。

第4biii層から肥前磁器の鉢12が、後述する第5a層の上面で検出した遺構のSK504の埋土(第4biii層)から肥前磁器碗15が出土した。

第5層は作土層である第5a層と、盛土層である第5b・c層からなる。

第5a層：炭を含む褐色灰色のシルト混り中粒～粗粒砂からなり、層厚は10～20cmである。酸化第2鉄と酸化マンガンの沈着が観察された。上面で土壌SK501～505、落込みSX501・502を検出した。

第5b層：黄灰色の極粗粒砂～中礫混り粗粒～極粗粒砂からなり、層厚は10cm以下である。

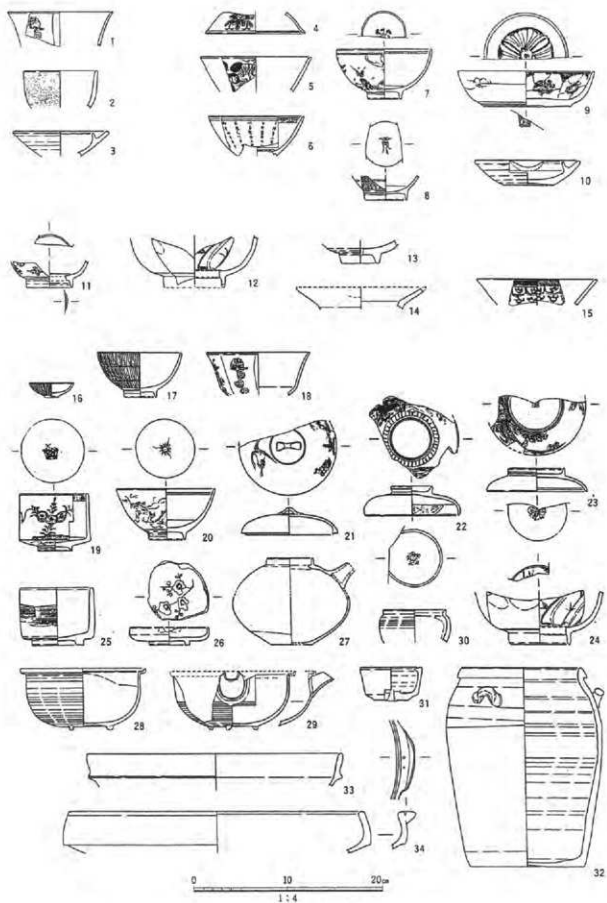


图5 出土物实测图

1~3: 第2b层, 4~10: 第2~3d层, 11: 第3d~4b层, 12: 第4biii层, 13~14: 第5a层, 15: SK504, 16~34: SD401

第5c層：黄灰色ないし暗灰色のシルト偽礫を含む黄灰色細粒砂からなり、層厚は25cm以下である。
第5a層からは肥前陶器碗13、皿14が出土した。17世紀初頭～中頃の遺物である。

ii) 遺構(図6)

平面的な調査は基本的に第5層上面で行った。また、部分的に残存していた第4層の遺構については遺物採取とその記録に努めた。なお、調査区東側は現代盛土層と旧建物の浄化槽によって攪乱されていたため、遺構は確認できなかった。

a) 第2～4層に係わる遺構

南壁断面において第2層上面に土壌が認められた。残存する深さは0.25mであった。

第5a層上面において部分的に残された溝SD401、土壌SK401～403を確認した。第4層上面の遺構と考えられた。

SD401 西南端で確認した溝である。南側は調査範囲外、東側は攪乱を受けていたため大きさは不明であるが、残存する幅は1.1m、断面から深さは0.6m以上はあるものと考えられた。延長は、東側北壁断面において北肩部がわずかに残されていたことから9m以上あったものと推定される。

SK401 西端部で確認した土壌である。南北長は0.93～1.03m、深さは0.07～0.09mであった。西側は側溝によって失われていたため東西長は不明であるが、残存する長さは0.65mであった。埋土は暗黄灰色のシルト混り粗～細粒砂であった。

SK402 平面形がほぼ方形の土壌で、SD401によって南端部は攪乱されていた。東西幅は0.55m、深さは0.07m、残存する南北幅は0.5mであった。埋土は炭を含む黄灰色のシルト混り粗～細粒砂であった。

SK403 楕円形の平面形を呈し、長軸長1.08m、幅0.5～0.55m、深さ0.41mであった。埋土は炭を含む暗黄灰色のシルト混り極粗～中粒砂であった。

b) 第5a層上面検出遺構

調査区西半部で、落込みSX501・502、土壌SK501～505を検出した。

SX501 中央西寄りで確認した落込みである。北側は調査範囲外、南側はSD401、東側は旧建物の浄化槽によって攪乱されていたため、大きさは不明である。残存する南北長および東西長はともに2.3m、確認した深さは0.3mであった。埋土は炭を含み暗灰色ないし暗青灰色の極粗粒砂～細礫混りシルト質粗～中粒砂であった。

SX502 南西端および南壁断面で確認した落込みである。北西端のみ部分的に残されていた。大きさは不明である。確認した深さは0.2mであった。第4bii層によって埋められていた。

SK501～505は平面形が隅丸長方形と見られる遺構で、埋土はいずれも第4biii層であった。およそ規則的に配置されており、長軸の方向は北から西に65°～70°振っていた。

SK501 東側がSX501によって攪乱されていたため、平面形は不明である。南北幅は0.6～1.0m、深さは0.05～0.1m、残存する東西長は3.0mあったものと考えられる。

SK502 SK501と同様に東側がSX501によって攪乱されていたため、平面形は不明である。南北幅は0.75～0.93m、深さは0.04～0.08m、残存する東西長は2.7mあったものと考えられる。

SK503 残存する南北幅は0.25m、深さは0.05～0.06mであった。上記のSK501・502と同様に、東西長は2.1m以上あったものと考えられた。

SK504 南北幅は1.0m、深さは0.09～0.14mであった。上記のSK503と同様に西側は側溝によって失われていたが、西壁に延長部が認められた。東西長は2.4m以上あったものと考えられた。

SK505 南北幅は1.18m、深さは0.09～0.12mであった。西側は側溝によって失われていたが、西壁に延長部が認められた。東西長は2.4m以上あったものと考えられた。

3) まとめ

今回の調査の成果を以下に述べる。

第5a層上面で検出されたSK501～505は下位の第5a層が作土層であることから耕作に関わる遺構と考えられ、長軸を北から西に65°～70°振ってはほぼ規則的に配置されていたことが確認された。本調査地南側のTN01-1次でも17世紀後半から18世紀前半ごろまでに廃絶した畝状遺構が検出されており、畝間と考えられる溝の方向は北から西に約66°振っていたことが確認されている。SK501～505とはほぼ一致する向きであり、この時期における地割を反映しているものと推測された。

また、第3層上面で火災と考えられる焼け跡と上位に焼土層を確認した。調査地周辺で記録に残る大規模な火災は、大坂冬ノ陣(1614年)、妙知焼け(1724年)、大塩平八郎の乱(1837年)が挙げられる。第2b層の出土遺物の年代観からみて「大塩焼け」によるものの可能性が高く、この時の火災で調査地付近に当時あった川崎与力町一帯がほとんど消失したとの記録と一致する。

天満地域の発掘調査例は少なく、まだ不明な点も多い。今後行われる調査の結果を合わせてさらに検討していくことが必要である。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1995、「天満本願寺跡発掘調査報告」I

1997、「天満本願寺跡発掘調査報告」II

1998、「天満本願寺跡発掘調査報告」III

1998、「天満本願寺跡発掘調査報告」IV

2003a、「天満本願寺跡発掘調査報告」V

2003b、「広島藩大坂蔵屋敷跡」I

2004、「広島藩大坂蔵屋敷跡」II

九州近世陶磁学会2000、「九州陶磁の歴史」

積山洋1999、「大坂の土師質土器」：『関西近世考古学研究』Ⅵ、pp.41～53

調査地遠景



西敷地層断面
(東から)



第5層上面検出遺構全景
(西から)



II 中 央 区

難波宮跡発掘調査(NW04-5)報告書

調査箇所	大阪市中央区法円坂1丁目1-12、43
調査面積	700㎡
調査期間	平成17年6月24日～12月9日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、杉本厚典

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は難波宮東方官衙跡として知られるNW30、80-9、82-10・37・44次調査の東に隣接する。これらの調査では、塀や単廊に区画された掘立柱建物6棟や総柱建物2棟などが見つかっている。

今回の発掘調査は、事前のボーリング調査で基準値を超える鉛などの汚染物を含有することが判明している場所を対象にして実施した。調査した区画は調査順に第1～4調査区と呼称する。

調査区は粉塵飛散防止の仮設足場を周囲に組んだ後、掘削を行った。掘り上げた汚染土は全て処分場に搬出し、汚染土を除去していない調査区は遮水シートで養生している。

以下で用いる標高はT.P.値であり、座標は世界測地系である。



図1 調査地位位置図

2) 調査の結果

i) 層序

第1層 上から順に第1a～1c層に細分した。第1a層は焼土を含む褐色細粒砂で構成される整地層である。本層上面で17世紀後半から18世紀の建物跡や土塀を検出した。第1b層は褐色細粒砂で構成された整地層で、上面で建物礎石や土塀、溝、護岸をもつ溝などが認められた。焼けた面が広範囲に広がっており、大坂夏の陣の大火を示す疑層と考えられる。第1c層は層厚10cmの褐色粘土で構成された整地層で、第2・4調査区に分布していた。

第2層 第2a～2c層に細分した。第2a層は灰褐色細粒砂で構成された層厚5～15cmの整地層であり、第2・4調査区では本層上面で櫛列を検出した。第2b層は灰褐色の細粒泥り細粒砂であり、第4調査区で検出した東西方向の大溝を埋め戻した土砂である。第2c層は灰褐色細粒砂層である。この上面から大溝が掘り込まれていた。本層下面に軟間溝が認められたことから作土層と判断される。本層中には瓦質土器や瓦器、土釜などが含まれていた。

第3層 褐色シルトで構成される第3a層と、にぶい黄褐色粘土の第3b層に区分した。第3a層は、層中に後期難波宮期の遺物を含む。難波宮期の遺構の多くは第3b層上面で検出した。

ii) 難波宮期の遺構

a) 第1調査区

調査地の北部に設けた東西20m、南北10mの調査区である。TP+20.4～20.5mまで平面調査を行っ

た。難波宮期の遺構として東西方向に延びる柱列2条と溝1条を検出した(図版上段)。柱痕跡は直径0.25~0.30mであったが、柱間寸法は北側の柱列が2.90m、南側のものが3.10mであり、南側の柱列が若干広い間隔であった。

b) 第2調査区

調査地の西部に設けた東西10m、南北20mの調査区である。TP+20.5~20.8mまで平面調査を行った。難波宮期の主な遺構として総柱建物1棟、柱列3条、溝3条を検出した。総柱建物は東西1間以上、南北3間であり、柱間寸法はそれぞれ2.0~2.2m、1.75~1.85mであった。柱の一つは直径0.35mであった。NW80-9次調査地で見つかったSB706・707と同規模の総柱建物に復元される(図版下段)。建物の北側には東西方向、東側には南北方向に柱列が延びており建物を囲繞していた。これらの柱間寸法は2.8~3.0mであった。また、これらの遺構の上位で検出した東西方向に延びる溝からは後期難波宮期の瓦が出土した。

c) 第3調査区

調査地の南部に設けた東西10m、南北10mの調査区である。TP+20.5~20.7mまで平面調査を行った。難波宮期の主な遺構には柱列2条、溝1条、小石敷遺構などがある。柱列は調査区西側に南北2条を検出した。西側の柱列は柱間間隔が密であり、複数の柱列が重なった可能性がある。小石敷遺構は3~5cm大の礫が1㎡あたり100個程度分布しており、帯状に2条が認められた。また、小石敷遺構の下には、古墳時代中期の高杯を伴う遺構が遺存している。

d) 第4調査区

調査地の北部に設けた東西20m、南北10mの調査区で、東半が第1調査区西半の南に隣接する。TP+20.4~20.5mまで平面調査を行った。調査区の中央には幅5.0m、深さ1.7mの豊臣前期の大溝が東西方向に延びていた。この大溝によって難波宮期の遺構の一部は破壊されたとみられるが、難波宮期の主な遺構として掘立柱建物1棟、柱列1条などを検出した。

掘立柱建物は梁間2間、桁間4間以上で南北に長い。柱痕跡は直径0.33mで、梁間3.20m、桁間3.10mであった。

3) まとめ

今回の調査地では、TP+19.0mを超える深部まで攪乱や破壊が及んだ場所を除いて、難波宮期の遺構が良好に遺存することが明らかになった。各調査区で東西あるいは南北方向の柱列を検出したほか、第2・4調査区では建物跡と考えられる柱穴も見つかった。西に隣接するNW30、80-9、82-10・37・44次調査と同様、本調査地一帯も官衙的な建物群が分布していた可能性が高い。

難波宮廃絶後、中世に一時、農地となっていたようであるが、豊臣期には屋敷地が形成される。第4調査区で豊臣前期の大溝、第2・4調査区で櫓列を検出した他、各調査区で建物礎石、炉、土坑などの生活に係わる遺構が認められた。これらの溝や建物は短期間で廃絶され、第1b層上面の豊臣後期の建物も大坂夏の陣の大火によって焼亡していた。豊臣前期から18世紀にかけて土地の改変が著しいため、今後、遺物整理作業を通して遺構の年代を確定し、土地利用の変遷を把握する必要がある。

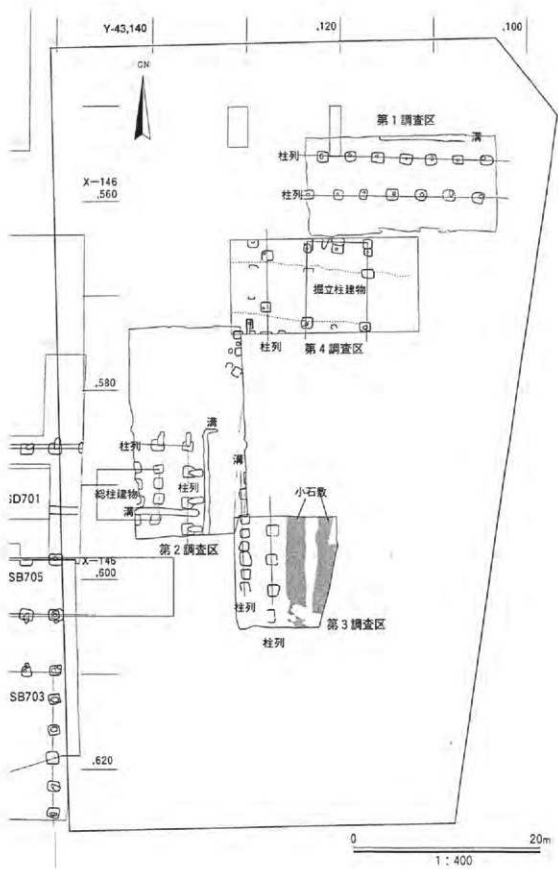


図1 難波宮期の遺構配置図

第1調査区第3b層
上面検出柱列
(西から)



第2調査区第3b層上面検出総柱建物と柱列(南から)

難波宮跡発掘調査(NW05-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区馬場町3
- ・調査面積 約390㎡
- ・調査期間 平成17年10月13日～平成18年1月19日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

中央区法円坂を中心とする一帯では、1954年から始まった発掘調査によって、大きく分けて2時期の宮殿跡が見つかった。主要な部分は史跡に指定され、難波宮史跡公園として整備・保存されている。今回、調査を実施したのは新たに史跡に指定された旧NHK跡地で、前期・後期難波宮の内裏地域に相当する場所で、近代には軍の用地であった。本調査は、史跡整備を行ううえでの資料を得ることを目的として行った。今回の調査地付近では、2003年に試掘調査(NW02-11)が実施されており、難波宮期の柱穴が検出されている。そのために調査区は、建物規模等を明らかにすることを目的として設定した(図1・2)。

調査の方法は近・現代に相当する地層を重機で掘削し、それ以下については、人力で掘削した。

また、最終遺構面上には砂による保護を行った上で、埋め戻しを行った。

本報告で使用した座標は、既往の調査報告との関係上、旧来の日本測地系(国土平面直角座標第VI系)を用い、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図ではTP+Omと記す。



図1 調査地位置図(S=1:5000)

〈調査の結果〉

1. 層序

第0層 近・現代堆積層である。本層には、旧軍関係の整地層、旧NHKに関する整地層、旧NHK移転後の整地層が含まれる。

第1層 後述する土壌SK102の埋土である。本層は北東部を除きほぼ全域に分布していた。

第2層 黄褐色細砂層で、いわゆる地山である。本層上面が土壌SK102で削平されている関係で、西側に比べて東側が高い。



図2 調査区配置図(1～5区はNW02-11次調査の調査区)

2. 遺構と遺物(図4・5)

SK101・102(図4、図版下段)ともに第2層上面で検出した土壌である。
 SK101 調査区北西隅で検出した。その規模については極く一部を確認しただけであるので不明であ

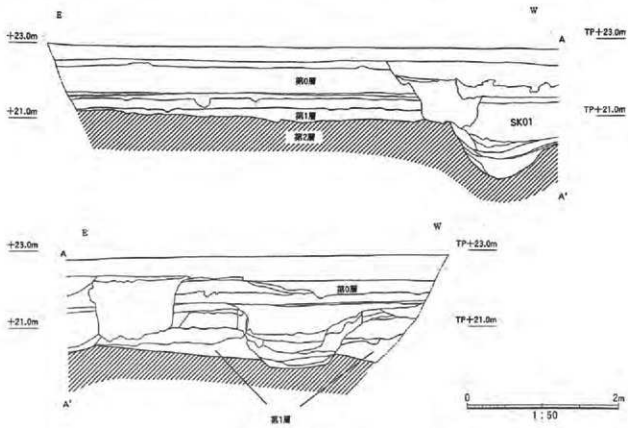


図3 南壁断面図

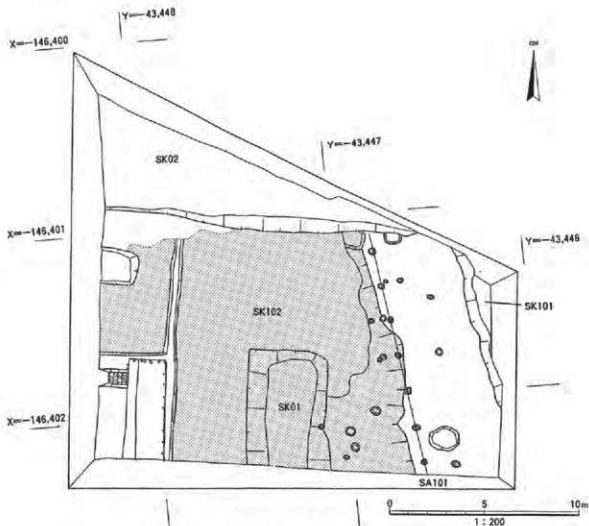


図4 検出遺構平面図

るが、調査区内では南北9.0m以上、東西2.1m以上を測る。深さは1.8mで、埋土は黒色シルトである。出土遺物は図示していないが、後述するSK102と同じく18世紀後半の肥前磁器などがある。

SK102 調査区の大半を占める土壌である。規模は、東西16.0m以上、南北12.0m以上の不定形である。埋土は北側底付近では黄色シルトであるが、それ以外は黒色シルトである。埋土中から、多量の瓦・陶磁器ほかの遺物が出土した。1は土師器の台付鉢である。底部には木の葉圧痕があり、難波宮下層遺跡から普遍的に出土するものである。2～4は須恵器で、2は杯壺、3・4は杯身である。以上の土器は、難波宮下層遺跡に属するものである。6は唐草文軒平瓦で6664B型式である。7～11は土師質土器である。7～9は、焼塩壺の蓋と身である。7の表面には、「イツミ ッタ 花焼塩」の刻印があり、8は7と対になるもので内面には布目の圧痕が見られ、側面および織綿付近には縫い目の痕跡がある。9の外面には「泉州麻生」の刻印がある。10は炮烙、11は十能である。以上の焼塩壺、炮烙、十能はこの土壌から多量に出土した。12・13は瓦質土器である。12は瓦燈皿で、13は火入れである。14は埴摺鉢、15は肥前磁器である。以上のように、この土壌には難波宮および難波宮下層遺跡の時代の遺物が少量含まれているが、遺物の大半は18世紀後半の時期を示すものである。

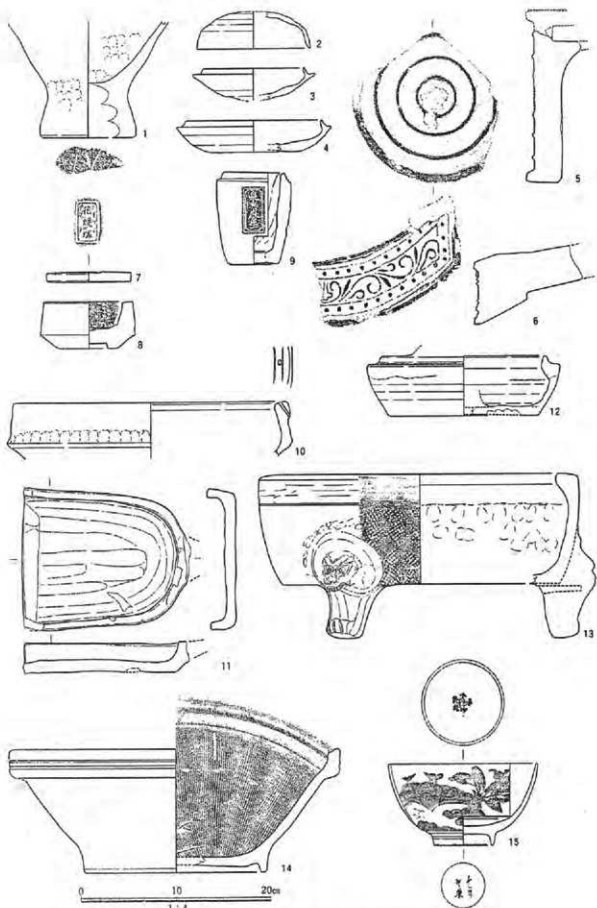


図4 出土遺物実測図(5:SK01,それ以外はSK102)

SA01 調査区東側で検出した柱列である。柱穴の直径は0.30m前後で、柱痕跡径は0.15m前後と細い。埋土は黒褐色シルトで、肥前磁器の細片が出土しており、土壌と同様な時期に構築されたものであろう。ほかに柱穴が数基検出されたが、その埋土はSA01と近似している。

SK01 SK102を切る南北5.0m以上、東西2.4mの方形の土壌である。深さは1.5m以上である。出土遺物から旧軍隊に關係する遺構であろう。埋土中から近代磁器のほかに、江戸時代陶磁器、奈良時代の重圓文軒丸瓦6015A型式5が出土した。

SK02 調査区北辺で検出したSK102を切る落ち込みで、調査ではその南肩部分を検出した。南肩はほぼ東西方向である。埋土中から土管・レンガが出土したことから、SK01と同じく旧軍隊に關するものと思われる。

〈まとめ〉

今回の調査では、難波宮期の遺構は検出できなかった。その主たる要因は調査区の大半が江戸時代の土壌によって当時の地表面が大きく削平されていることによるものであろう。また、東側の地山面の高いところでも検出されなかったのは、その個所については本来難波宮の遺構が存在しなかったためと思われる。ただ、江戸時代の土壌から重圓文軒平瓦・軒丸瓦や布目瓦痕をもつ平瓦・丸瓦が出土していることから、調査区周辺に後期難波宮の建物が存在したことが推定されよう。また、西側では、SK102が浅くなって、地山面が比較的高く遺存していくように窺える。したがって、今回の調査地の西側で、旧建物基礎が存在しなかった個所については、難波宮關係の建物が検出される可能性は高いものと思われる。

今回検出した江戸時代の土壌については、以下のことが特徴として挙げられる。出土遺物は、瓦や陶磁器類が大半で木製品は殆ど見られなかった。自然木が存在することから、木製品が腐朽して出土しないのではなく、元来、あまりなかったものと考えられる。同様のことは、貝、骨等についてもいえ、日常生活における食物残渣は含まれていない。このことは、従来大板城や大板城下町での調査で検出されたゴミ穴と思われる土壌とは異なっている。また、陶磁器は茶陶と考えられるものは極く少量しか含まず、日常使用するものが大半であり、瓦は菊丸棟込み瓦が多く、その文様も10数種にのぼる。

出土した遺物の時期は18世紀後半のものが殆どで、長期間使用されたゴミ穴ではないことが推定される。

なお、当時の絵図によると調査地は屋敷の表現がないことから、空閑地と思われる。大板城に近接する場所であることから、土壌SK101・102は、大板城内の建物の改修や修理に伴って不用となった瓦や、城内で使用された陶磁器類の捨て場として構築されたのではないかと推定される。同時に検出された柱列は、この捨て場と關係するものであろう。

以上のように、難波宮期の遺構は検出されなかったものの、江戸時代の大板城に関して新たな知見が得られた。

調査地全景
(北西から)



南壁地層堆積状況
(北から)



SK102出土遺物



難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW05-4)報告書

調査箇所	大阪市中央区上町8・8-2、上町1丁目28-3
調査面積	約30㎡
調査期間	平成17年10月3日～10月6日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、松本啓子

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地は難波宮の中心部である大極殿・朝堂院地区の西南部にあり、大極殿から南へ約400m、西へ約200mの位置にあたる(図1)。調査地周辺ではこれまでの調査で、難波宮・難波京に関係する柱穴が各所で発見されており、本調査地の東約200mにある大阪市立豊学校内のNW93-5次調査では宮殿最南端の朱雀門とみられる遺構が発見されている。また、本調査地の東に隣接するNW92-11次とその南のNW90-20次調査では、難波宮・京に関連する古代の掘立柱穴のみならず、近世の豊臣期の地層や遺構も発見されている(図3)。周辺の地形を見ると、調査地は標高約20mの、上町台地でも最高所に位置しており(図2、写真図版上段)、時代を問わず、建物を建てるのには絶好の場所と考えられるところである。NW90-20・92-11次の調査では現地表より約0.5m以下で豊臣期の整地層、同じく約1m下で古代の柱穴が発見されている。



図1 調査地の位置

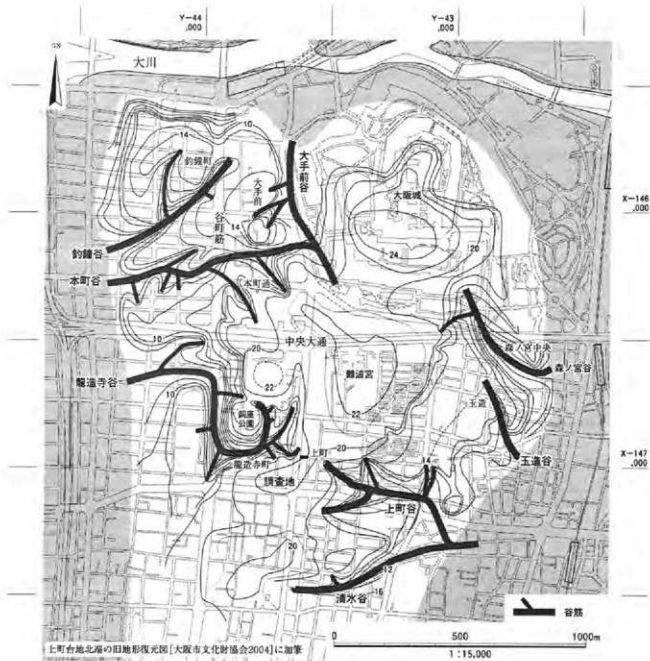


図2 調査地の周辺の地形

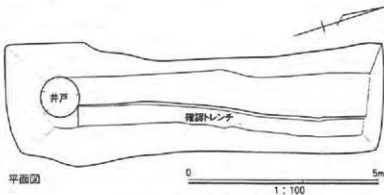
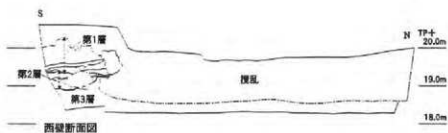
平成17年9月1日に行われた大阪市教育委員会による試掘調査で、調査地中央部では想定される古代の遺構の深さ以上に擾乱をうけていることがわかった。そこで調査地の西端、上町筋に近いところで、遺構や遺物、地層の状況を確認するため、本調査を行うことになった。

平成17年10月3日午前10時より関係者・関係機関と現地で打ち合わせを行い、引き続き、重機によって現代の土を除去して人力による調査に入った。地層の観察と平面の精査・記録作業等を行い、調査に関わるすべての作業を終了した。

なお、本調査で使用した方位は磁北、標高はTP値である。



図3 調査地周辺図



平面図

図4 調査区平・断面図

2) 調査の結果(図4、写真図版中・下段)

現地表から約2mの深さまでの掘削を行ったところ、試掘の結果と同様に、本調査地点においても調査区西南隅の一角以外は後述する第3層の自然堆積層の深いところまで現代の攪乱が及んでいた。

本調査の層序は以下のとおりである。

第1層：にぶい黄褐色ないしは褐灰色を呈する砂礫や粘土、シルトの混在する整地層である。出土遺物がないので、正確な時期はわからないが、周辺の調査の記録を参考にすると、近世の整地層の可能性が高い。本層上面で標高はTP+20.3mである。

第2層：灰黄褐色を呈する砂礫混りの粘土が主体の整地層である。第3層を削って再度盛土したもので、第3層が偽礫状態で混る。遺物の出土はないが、周辺調査の記録より、近世の整地層と推定される。本層上面はほぼ水平で、標高がTP+19.3m、層厚は0.1~0.5mである。

第3層：上部が明褐色砂混り粘土質シルトで、漸次、下部の黄褐色砂礫となる中位段丘層である。もっとも高い本層上端の標高がTP+19.2mで、現地表から下約1mの深さとなる。

本調査区では、古代から近世の遺構はすでに削平を受けており、すべて失われていた。調査区南端にある井戸は現代のものである。

3) まとめ

本調査区においては、古代から近世の遺構や遺物はすでに失われていたが、古代から近世の地層も周辺ではなお残っていることを確認することができた。今後も周辺部での工事等には注意する必要があるだろう。

<引用・参考文献>

大阪市文化財協会2004、『難波宮址の研究』第十二、pp.162

調査地周辺の地形
(東から)
(西から向かって下り坂に
なっている)



西壁地層断面
(東から)



調査区全景
(南から)



難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW05-5)報告書

調査箇所	大阪市中央区安堂寺町1丁目19-1
調査面積	28㎡
調査期間	平成17年10月11日～10月13日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、小田木富慈美

1) 調査に到る経緯と経過

当調査地は難波宮公園の約400m南西に位置し、古代においては難波宮の南端部に近い重要な地点にあった(図1)。また、近世においても豊臣氏大坂城期には大坂城三ノ丸の南に位置し、江戸時代には町家が建並ぶ場所であった。付近では南北方向の古代の柱列のほか、江戸時代の炮塔を多数廃棄した土壌などが検出されたNW00-6次調査、中世以前に遡る可能性のある井戸が確認されたNW00-20次調査をはじめ、数多くの調査が行われている(図2)。今回、建物建設に先立ち試掘調査を行ったところ、近世の焼土や土壌が確認されたため、本調査を行うことになった。調査では近世のほか、付近で検出されている古代の遺構の拡がりを確認することが期待された。

調査は平成17年10月11日から開始した。調査区内では南端部を除いて、近代の擾乱が所々で地山層上面まで及んでいた。これ以外の部分では地山層上面に近世初頭と思われる盛土層が検出された。このため、機械掘削は地山層上面までとし、以下を人力によって掘削し、遺構検出と掘削を行った。近世の石組遺構や井戸などのほか、古代以前の柱穴となる可能性のある遺構が検出された。写真による記録と各遺構面での図面作成を適宜行い、10月13日には発掘調査に関する基本的な作業をすべて終了した。本報告で使用した方位は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値:TP+〇mと略記する)である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

先述のように、調査区内では南端部を除いて、地層の残りが悪く、他では一部で地山層上面に近世と思われる整地層が検出されたのみである。このため、比較的残りの良い南壁の断面で地層の堆積状況について述べる。

第1層：現代盛土層である。

第2層：明黄褐色粘土偽礫を含む中粒砂層



図1 調査地の位置



図2 調査地の周辺

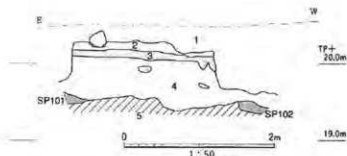


図3 調査区南壁断面図

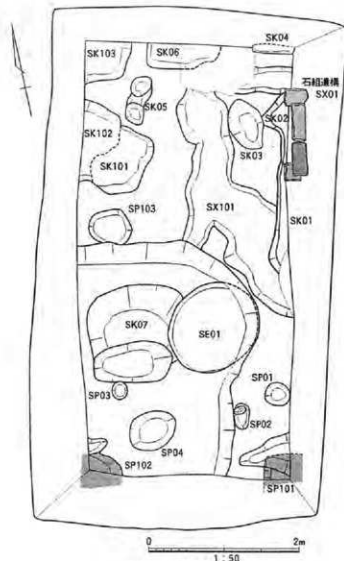


図4 遺構平面図

で、盛土層である。層厚は0.1mである。

第3層：炭・焼土を多量に含む黒色粘土層で、盛土層である。層厚は0.1mである。

第4層：明黄褐色～暗褐色砂質シルト層で、段丘構成層の礫層、焼土、炭を含む盛土層である。当層の上面がある時期の生活面であった可能性がある。層厚は0.6m未満で、調査区の全域に分布していた。時期不明の肥前磁器が出土した。

第5層：黄褐色粘土質砂礫層で、地山層である。

ii) 遺構と遺物(図4)

調査区では、おもに近世初頭以降の遺構が確認された。古代に遡る可能性のある遺構はピット数基のみであった。なお、以下で述べる遺構の番号は0番台が第4層よりも上位から掘削されたもの、100番台は地山層である第5層の上で検出されたものである。

古代の遺構：古代に遡ると考えられる遺構はその埋土の特徴から抽出したものである。SP101・102はいずれも近世のピットや溝に切られている。また、南壁にかけて検出されたため全容は明らかでないが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。深さは0.2m未満である。埋土は黄褐色粘土質シルトで、出土遺物はない。柱痕跡は確認されなかった。

近世の遺構：第4層基底面ではピット、土堀、浅い溝状の窪みが検出された。SP103は浅い不整形のピットで、柱痕跡は認められなかった。これと類似した埋土を持つものとして、この北で検出されたSK101～103がある。これらはいずれも深さ0.1m程度で、平面形は不整形である。これらの土堀の東では南北方向の溝状遺構SX101が見つかった。幅0.6m、深さ0.1m、埋土は灰褐色粘土質シルトで、中世末～近世初頭の土器器皿が出土した。耕作に伴う溝の可能性もある。

第4層上面では井戸と石組遺構のほか、土壁、ピットが認められた。

石組遺構SX01は調査区の東壁で検出されたもので、切石を2個据えた上に横方向に切石を積んで構築されていた。下位に溝状の遺構はないことから、階段状の施設あるいは通路の一部と考えられた。また、調査区の中央から南ではSE01が検出された。直径は1.1mで、検出面から約0.6mまで掘削を行った。井戸側は検出されなかった。埋土は黒褐色粘土質シルトで、18世紀の肥前磁器碗・皿、肥前陶胎染付碗、関西系陶器鉢鉢、土師器皿・炮烙などが出土した。

土壁は7基検出された。これらの中で調査区北東で確認されたSK03から江戸時代後半の肥前磁器碗、北西で見つかったSK05から時期不明の土師器皿が出土した以外に出土遺物はなかった。

小穴は調査区の南を中心に4基検出されたがいずれも浅いものであった。これらからの出土遺物はない。

3)まとめ

今回の調査では当初、西側で行われた調査で検出されたものと同様な古代の遺構が検出されると期待された。しかし、予想以上に後世の削平が深く入り、古代に遡ると思われる遺構はわずかであった。このなかでSP101やSP102は、NW00-6次調査で報告された柱列と同様に建物の柱穴の可能性はあるが、いずれも残りは悪い。これらの遺構については周辺の調査成果を含めて今後検討する必要があるだろう。また、近世では時期は特定できなかったが、江戸時代の石組遺構が検出された。調査地の位置を明治21年作成の「大阪実測図」で見ると、調査地は上町筋に面して東西に長い敷地が並ぶ区画と、長堀通りに面した南北に長い敷地が並ぶ区画との間に位置し、西側には細い路地が通っている(図5)。この地図から考えると、石組遺構は時期はやや遅いものの、これらの区画や通路に伴う何らかの施設であった可能性が指摘できるだろう。



図5 調査地の位置(明治21年「大阪実測図」に加筆)

機械掘削状況
(南から)



調査区西壁断面
(東から)



地山上面遺構
検出状況
(北から)



難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW05-7)報告書

調査箇所	大阪市中央区上町1丁目28、31-17、31-18
調査面積	約150㎡
調査期間	平成18年1月5日～平成18年1月19日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、宮本佐知子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮史跡公園の南に位置し、難波宮の中軸線の約150m西に当る。前期難波宮では朝堂院南回廊の西側であり、後期難波宮では五間門の南延長上にあたる。周辺では数次の調査が行われ、古代の柱穴や溝などが検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1981][大阪市文化財協会2003](図1)。

本調査地も同様の遺構が検出される可能性が高く、平成17年10月24日に大阪市教育委員会が試掘調査を行った。調査結果では、GL-0.6mで地山層が検出されたため、本調査を実施することとなった。調査区は敷地の中央よりやや東寄りに設定し(図2)、平成18年1月5日から調査を開始した。表土層は重機で掘削し、それ以下は人力により掘削した。1月19日には器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を終了した。調査で用いた座標値は世界測地系で、標高はT.P.値(東京湾の平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+〇mと記した。



図1 調査地位置図

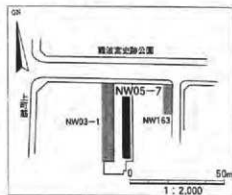


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図3)

本調査地では地山が高く残っているところと、近世後半の土壌などによって深くまで掘進められているところがあった。地山の高いところの一部には、近世初頭頃の堆積層が存在するものの、ほとんどの部分では古代から近世初頭頃の地層の堆積を確認することができなかった。近世初頭の堆積層は数cmの層厚で、青花皿が出土した。

0層：現代表土

1層：近世～近代堆積層

2層：地山

ii) 遺構と遺物(図3～5)

柱穴と溝状の遺構を検出した。柱穴は調査区の西端に9基と中央部に5基を、それぞれに南北方向に並んで検出したが、柱間寸法が一定せず、組合い関係は不明である。

SP101 南北0.66m、南北0.50m以上の長方形の柱穴で、柱痕跡は直径0.36m、残存する深さは

約0.10mである。柱穴の埋土は暗橙褐色シルトで、遺物はない。

SP102 柱穴は南北約0.86m、東西0.48m以上で、上部を削平されており、残存する深さは0.47mである。柱痕跡は直径0.27mである。

SP103 柱穴は南北0.64m、東西は0.52m以上、柱痕跡は直径約0.25mで、上部は削平されて、深さは0.14m残存していた。SP104との間隔は2.3mである。

SP104 柱穴は南北0.95m、東西0.56mで、柱痕跡は直径0.22mである。残存する深さは0.58mである。

SP105 柱穴は南北0.75m、東西約0.5m、残存する深さは約0.20mである。SP104の約7.5m南で検出した。

SP106 柱穴は南北0.84m、東西0.66m、柱痕跡は直径0.23mである。上部は削平されて、残存する深さは0.10mである。

SP107 柱穴は南北0.66m、東西0.50m、柱痕跡は直径0.20m、深さは0.20mである。近世土壌の底で検出した。

SP108 柱穴は南北0.60m、東西0.45m、柱痕跡は直径は0.23m、上部は削平されており、残存する深さは0.29mである。

SP109 柱穴は南北0.49m、東西約0.46m以上、柱痕跡は直径0.13m、残存する深さは0.44mである。

SP110 柱穴は南北0.58m以上、東西約0.80m以上、柱痕跡は直径0.12mで、残存する深さは0.37mである。

SP111 柱穴は南北0.57m、東西0.78m、残存する深さは約0.40mである。柱痕跡の直径は不明である。

SP112 柱穴は南北0.65m、東西約0.80m、柱痕跡は直径0.26mである。上辺を近世土壌で削平されて検出した。

SP113 柱穴は南北0.61m、東西0.54m、柱痕跡は直径0.23m、残存する深さは0.43mである。

SP114 南北0.50m、東西0.30mのピットで、中国漳州窯産の青花皿2が出土した。

SP115 一辺0.60m、深さ約0.10mのピットで、土師器皿1が出土した。

SD101 最大幅は0.70m、深さは約0.05mである。埋土はにぶい橙色シルトで、遺物はない。

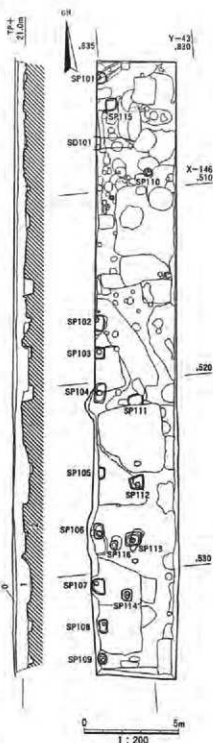


図3 遺構平・断面図

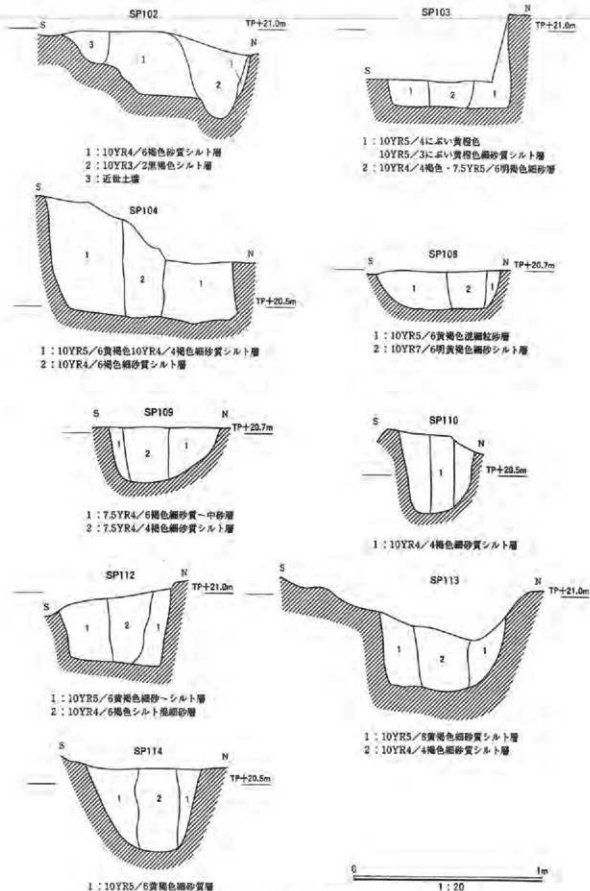


図4 柱穴断面図

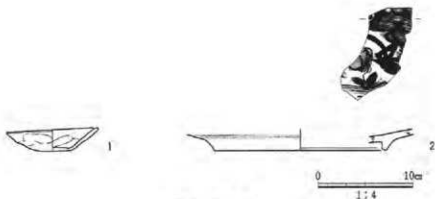


図5 出土遺物

3)まとめ

検出した遺構の中で、SP101とSD101は遺物はないが埋土からみて、古代に属すると考えられる。特に、SD101は1979年に東側で行った調査(NW163次)[大阪市文化財協会1979]で検出した東西溝の西延長部に当る可能性が高い(図6)。一連の溝とすると、東西に約60m延びる。本調査では出土遺物がなく時期の確定はできないが、NW163次調査の溝埋土に焼土や炭が入っているので、SD101も前期難波宮期の溝で、朝堂院の排水溝と考えられる。

他の南北方向に並ぶ柱は、柱穴から青花細片が出土し、近世初頭の時期の柱列である。形が方形か長方形を呈し、一辺が1m近いものもあるが、方位は難波宮のものとは異なり、調査地北の東西通りの方位と直交している。この通りは、江戸時代の絵図に「かみさかえまち」と書かれている[玉置豊次郎1980]。「かみさかえまち」は大坂本願寺期

にもさかのぼって使われている地名である。「かみさかえまち」が中世末から近世初頭から調査地の北側の通りであるなら、本調査で検出したSP102～SP104は近世初頭に道路と直交して造られた可能性が高い柱列であろう。

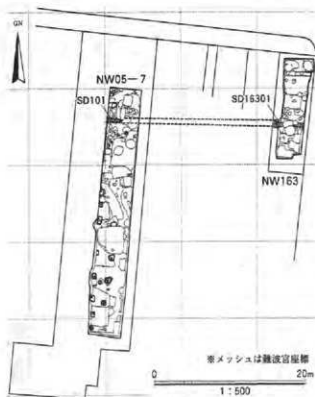


図6 NW05-7とNW163次遺構配置図

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1981、「昭和54年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.17～18
- 大阪市文化財協会2003、「奥野早恵子・奥野裕章氏による建設工事に伴う難波宮跡・大板城跡発掘調査(NW03-1)報告書」
- 玉置豊次郎1980、「新撰増補大坂大絵図」元禄四年：「大坂建設史夜話・大坂古地図集成」

遺構検出状況（南から）



遺構検出状況（北から）



難波宮跡・大坂城跡発掘調査(OS05-3)報告書

調査箇所	大阪市中央区谷町2丁目29-1他
調査面積	270㎡
調査期間	平成17年7月5日～平成17年8月1日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、平井和

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、谷町筋と大手通りが交差する南東角地にあり、大阪府営印刷所の西隣に位置している(図1・2)。地形的には上町台地の北部に立地しており、当該地周辺には小さな谷が縦横に確認されていることから、前期難波宮期以降における京域の造成過程が注目される地域となっている。周辺の調査成果によると、飛鳥～平安時代の建物跡(OS91-32次、OS98-55次)、井戸、溝、飛鳥時代の土器が大量に捨てられた祭祀的性格の強い遺構(OS03-13次)などが見つかっていることから、前期難波宮期造営以前から後期難波宮廃絶後までの難波宮北西部における歴史的景観を復原するために重要な地点であることがわかっていく。また、豊臣氏大坂城期においては、調査地の北西にあるOS97-1次調査地で豊臣前期の塀や建物が確認されており、金箔瓦や陶磁器などが多数出土している。

大阪市教育委員会の試掘調査によって、地表下1.6～2.0mの地層から古代～豊臣氏大坂城期の遺構と遺物が確認されたことから発掘調査をおこなうことになった。調査は、GL-1.6mまで重機によって掘削し、以下の地層については人力によって掘削して遺構と遺物の検出に努めた。

なお、図で使用した基準点は世界測地系に基づき、水準値はTP+値である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査の開始にあたり、重機でGL-1.6mまでの地層を一律に掘削した。この重機掘削と並行して調査区周辺に土留めが施されたため、第1層の後期難波宮期の整地層より上位の地層についての観察



図1 調査地位位置図



図2 調査区位置図

ができなかったが、第1層以下G L-3.1mまでの地層について、おもに南北畦断面(図3)で観察をおこなった。

第0層：暗灰黄色シルト質細粒砂層で、現代の盛土層である。

第1層：調査地北半部の窪地(SX201)を埋める後期難波宮期の地層で部分的なものである。以下のように3層に細分できる。

1a層：オリブ褐色砂礫混りシルト層で、8世紀前～中葉の土器を含む地層である。

1b層：暗灰黄色砂礫混りシルト層で、8世紀前～中葉の土器を含む地層である。

1c層：暗灰黄色シルト質細粒砂層で、水成層である。

第2層：灰オリブ色砂礫混りシルト層で、8世紀前～中葉の土器を含む地層である。本層は後期難波宮期の整地層で、調査地南半部に広く分布している。本層の上面で、豊臣氏大坂城期以降の井戸や土壌を検出したが、層内および上面で古代～中世の遺構は確認できなかった。出土遺物の大半は「難波Ⅲ中」[佐藤2000]段階の須恵器杯H壺15、甕16、広口壺19、土師器杯A17・18であるが、「難波V古」段階の須恵器杯BⅢ蓋20、杯BⅢ21や、縄目の平瓦を含むことから後期難波宮の造営に先立つ、京域整備に伴う整地層と考えられる。

第3層はSX301の埋土で、4層に細分できる。最下位層で水成層が確認できたことから、滞水した時期があったことが考えられる。

3a層：暗灰黄色砂礫混りシルト層で、7世紀代の遺物を含む地層である。

3b層：暗灰黄色砂礫混りシルト層で、上位層に比べてシルトの含有率が多い層相を示している。

7世紀代の須恵器・土師器を含む地層である。

3c層：暗灰黄色砂礫混りシルト層である。

3d層：黄褐色砂礫混り粘土質シルト層で、水成層である。

第4層：黄灰色砂礫混りシルト層で、第7層の礫層を含む整地層である。調査地北部に部分的に認められた。第5～6層とは層相が異なるが、浅い窪地(SX401)を埋める地層である。

第5層：ふい黄褐色中～粗粒砂層で、調査地北部に部分的に認められる地層である。5世紀末～6世紀初頭の遺物を含む浅い窪地(SX401)を埋める地層である。

第6層：オリブ褐色シルト質細粒砂層で、調査地北部に部分的に認められる地層である。5世紀末～6世紀初頭の遺物を含む浅い窪地(SX401)を埋める地層である。第4～6層は層相が異なることから浅い窪地(SX401)の整地が一度におこなわれたものではないことが窺われる。

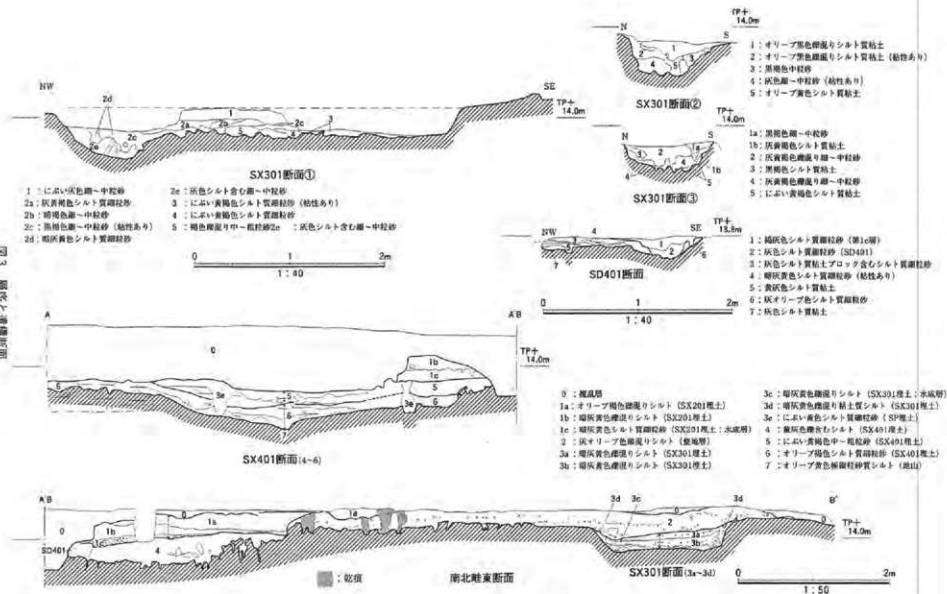
第7層：オリブ黄色極細粒砂質シルト層で、洪積層である。

ii) 遺構と遺物(図3)

a. 古墳・飛鳥・奈良時代(第6層上面および、第7層上面検出遺構)

部分的に残された第6層の上面で飛鳥・奈良時代の遺構を検出したが、遺構の多くは第7層上面で確認された。これらの遺構は本来、浅い窪地を整地して構築されたものであろう。ここでは整地された時期や、遺構が構築された時期を暫定的な画期として4時期に区分しておく。1期(古墳時代後期)

図3 横断と構造断面



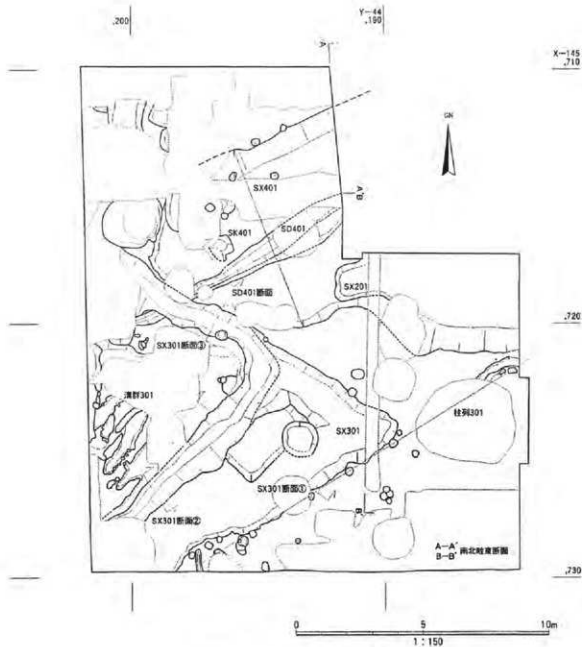


図4 古墳時代から奈良時代の遺構

は、東から西へ緩やかに傾斜する谷地形や浅い窪地を整地した時期である。2期(古墳時代後期)は、円形や不整形な土壇、溝、柱穴を構築した時期で、溝の方位軸は $N65^{\circ}E$ である。当該期の土壇から鉄製品の鑄造に関係すると考えられる羽口と鉾澁が出土している。3期(飛鳥時代)は、2期の遺構が廃絶されて整地された後に、円形の土壇、溝群、V字形の溝状遺構が構築された時期である。この遺構の周辺には柱穴が認められるが、建物として復原できる組み合わせは認められなかった。4期(奈良時代中頃)は、3期の遺構が埋まった後に整地がおこなわれた時期で、上面に遺構は認められなかった。以下に、各時期の主な遺構と遺物について述べる。

① 1期の遺構

SX401 調査地の北半部に広がる浅い窪地で、北東方向から南西方向へ傾斜する地形を整地したも

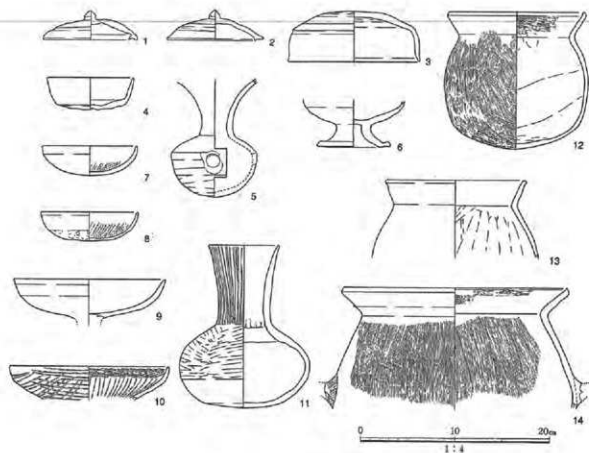


図5 SX301出土土器

のである。復原される範囲は、幅7～11m以上で、深さは約0.5m以上である。この窪地を埋める地層の上面で柱穴、土塼SK401、溝SD401などが確認された。この窪地を埋める第5層から、「難波Ⅰ」段階の須恵器杯身、土師器甕などが出土している。

・2期の遺構

SK401 SX401の上面で確認した土塼である。長径1.1m、深さ0.2mの不整形な土塼で、埋土は焼土を含む褐灰色シルト質粘土である。鉾津、羽口をはじめ、5世紀末～6世紀初頭の須恵器、土師器が出土した。鉄の铸造にかかわる遺構と考えられる。

SD401 浅い窪地SX401を埋める地層の上面で確認した北東から南西方向に延びる溝である。幅0.45～0.9m、深さ約0.15mで、埋土は灰褐色中粒砂である。5世紀末～6世紀初頭の須恵器、土師器が出土した。

・3期の遺構

SX301 調査地東南部で西方向に65度の角度でV字形に広がる性格不明の遺構である。地形が東から西へ緩やかに傾斜していることから、この傾斜地を利用して構築された溝ないしは、建物などの区画にかかわる溝の可能性がある。遺構の大半が調査範囲外であり、その性格については明らかでない。SX301の東端屈曲部から北側の縁辺に沿って西へ4.2mの所には第2の屈曲部があり、この第2の屈曲部を東角にしたV字形に広がる幅1.1m、深さ0.27～0.47mの溝が重複して構築されている。

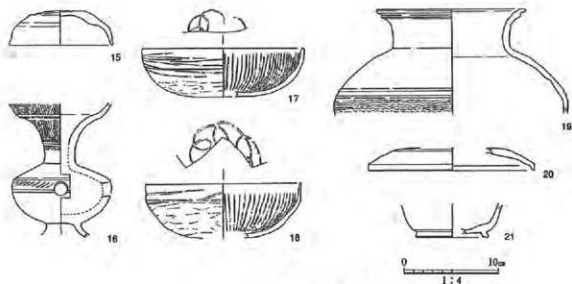


図6 後期縄波宮期の整地層(第2層)出土土器

出土遺物は、「難波Ⅲ中」段階の須恵器杯G蓋1・2、杯G4、杯蓋3、甌5、高杯6、土師器杯C7・8、高杯9・10、壺11、甕A12・13、甕B14など、多様な形態の土器が大量に出土している。

柱列301 SX301の縁辺で直径0.2~0.3m、深さ0.15~0.26mの柱穴を6基確認した。これらはN65°Eを方位軸として、1.5~2.0mの間隔で並ぶが、他の柱穴を含め建物としては復原できなかったことから、横列の可能性はある。出土遺物は須恵器、土師器の細片である。

溝群 調査地西南部で、幅0.25~0.5m、深さ0.6~0.7mの7条の浅い溝を検出した。出土遺物は須恵器、土師器の細片である。溝の一部がSX301に切られていることから当該期の遺構とした。

・4期の遺構

SX201 調査地の北半部に広がる窪地で、第2層による整地後に掘削された遺構と考えられる。復原される範囲はSX401と一部重複しているが、幅7m以上で、深さは約0.3m以上である。この窪地の埋土である第2層上面で豊臣氏大坂城期~徳川氏大坂城期の井戸や土壌を検出したが、古代末から中世の遺構は見つからなかった。出土した遺物は少なく、「難波V古」段階以降の様相を示す土器はなかった。

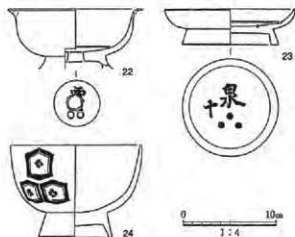


図7 豊臣氏大坂城期の出土土器

SK101(23)、SK102(24)、SK104(22)

の埋土である第2層上面で豊臣氏大坂城期~徳川氏大坂城期の井戸や土壌を検出したが、古代末から中世の遺構は見つからなかった。出土した遺物は少なく、「難波V古」段階以降の様相を示す土器はなかった。

b. 豊臣氏大坂城期(第1層上面検出遺構)
第1層上面で豊臣氏大坂城期の遺構を多数検出した。当該期の遺構は、調査地の西北部に密集しており、井戸と土壌はN5°Eを方位軸として、ほぼ南北に縦列する状況を呈している。これらの遺構の構築状況は、当該地の北西部で確

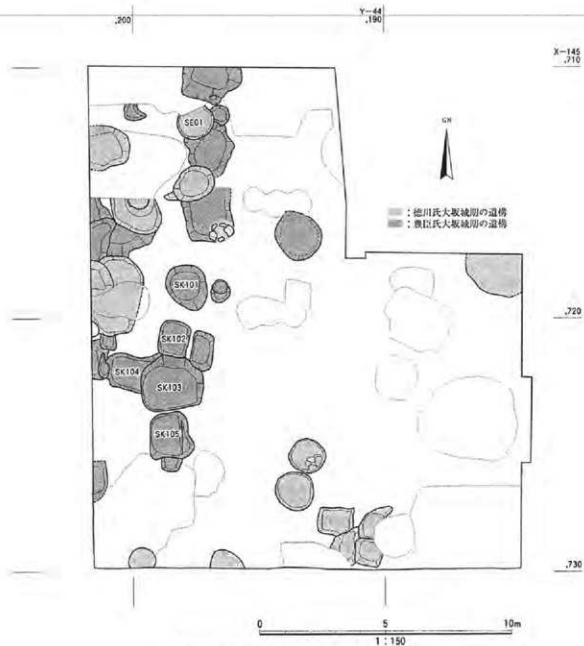


図8 近世遺構：第1 a～2層上面検出遺構

認されたOS97-1次調査地における豊臣前期の建物群と方位が同じであることがわかった。出土遺物は、陶磁器、瓦、木簡、木製品、铸造関係遺物と多様である。陶磁器に豊臣後期の特徴である肥前陶器、瀬戸美濃焼志野・織部・黄瀬戸を含まないことから、豊臣前期の遺構群と考えられる。ここでは、当該期の主な遺構について述べる。

SK101 長径1.9m、短径1.6m、深さ1.0mの円形の土壇で、埋土は緑灰色シルトブロックを含むオリープ黒色細～中粒砂と黒色細粒砂質粘土の互層で構成される。出土した陶磁器は、中国製青花皿、瀬戸美濃焼天目碗・皿、備前焼甕などで、木製品には、赤漆平皿、赤漆椀、曲物、下駄、箸などがある。赤漆平皿23は底部に黒漆で「泉十」に三点文が施されている。他に、判読不明の墨書を施した荷札

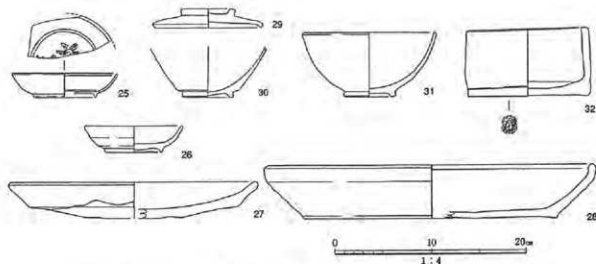


図9 近世遺構出土土器：SK102(28)、SK103(25・27)、SK105(25)、SE01(29～32)

木筒や、鑄造関係の遺物として微量の鉛や錫が付着した増堀が出土している(註1)。

SK102 長軸1.4m、短軸1.2m、深さ1.0mの方形の土壇で、埋土は緑黑色細～中砂である。出土した陶磁器は、中国製青花皿、瀬戸美濃焼天目碗・皿、丹波焼大平鉢28・瓶・甕、瓦質土器火入れ、土師質土器焙烙・皿などで、木製品には、赤漆碗、箸、曲物などがある。赤漆碗24は体部に四弁花を施した亀甲文が三文施されている。丹波焼大平鉢28は、SK103とSK104の破片が接合したことから、これらの土壇は近似した時期に形成されたと考えられる。

SK103 長軸2.2m、短軸2.4m、深さ0.8mの方形の土壇で、埋土は緑黑色細～中砂である。出土した陶磁器は、中国製青花皿、瀬戸美濃焼皿26、備前焼壺・甕、瓦質土器大鉢、土師質土器焙烙27・皿などで、木製品は赤漆碗、箸、曲物などがある。土師質土器焙烙27は、類例の少ない器形であるが、同じ形態のものが5個体以上まとまって出土した。他に、「六月十九日 〇丸 銅正ミ貳百斤入 鳥居小右衛門尉」と書かれた荷札木筒と、この記述内容を裏付ける鏝(錫)や鉛が多量に付着した炉壁が出土した(註2)。これらは、当該地において銅合金の製造がおこなわれていたことを示唆する重要な遺物である。

SK104 長軸1.5m、短軸1.3m、深さ1.2mの方形の土壇で、埋土は緑灰色シルトブロックを含むオリブ黑色細～中粒砂と黑色細粒砂質粘土の互層で構成される。出土した陶磁器は、中国製青花碗、備前焼平鉢、土師質土器皿などで、木製品には、赤漆碗、箸、下駄などがある。赤漆碗22は底部に黒漆で文字と記号が記されており、口縁部に2箇所、底部に1箇所の孔がある。

SK105 長軸1.7m、短軸1.2m、深さ0.6mの方形の土壇で、埋土は緑黑色細～中砂である。出土した陶磁器は、中国製青花皿25、瀬戸美濃焼皿、備前焼壺・甕、瓦質土器大鉢、土師質土器皿などで、木製品には、赤漆碗、箸、曲物などがある。

c. 徳川氏大坂城期(第1層および、第2層上面検出遺構)

第1層および、第2層上面で徳川氏大坂城期の井戸と土壇を検出した。遺構の分布状況は、北半部

に17世紀後半の井戸2基、廃棄土壌1基があり、南端部で17世紀後半の井戸3基、廃棄土壌5基を確認した。ここでは、窯道具と軟質施釉陶器碗をはじめ、18世紀後半の肥前磁器碗などが多数出土した井戸について述べる。

SE01 直径1.5m、深さ1.5m以上の素掘りの井戸で、埋土は褐灰色細砂を主体に炭化物や漆喰を多く含んでいる。出土遺物は、18世紀後半の肥前磁器青磁染付碗、皿、関西系施釉陶器鍋など多数の陶磁器類と、土師質土器焙烙・皿とともに、窯道具と軟質施釉陶器蓋物碗30・31、蓋物蓋29などがある。窯道具は、棒状窯道具・板状窯道具・簀子、匣鉢32がある。製品は、1次焼成された素焼の碗・鉢・掛花生・灯明具と、白泥の上に緑釉を施して低温で2次焼成された蓋物碗29・30が5個体と碗30である。

3)まとめ

今回の調査地は、上町台地の北端部の頂部付近に当たり、西は大阪湾、北は天満砂堆、東は河内湖をかつては眺望できた場所である。当該地では、5世紀末から6世紀初頭の段階に窪地を埋めて整地をおこなったことが確認された他、近隣に居住域があることを示唆する遺構や遺物が出土した。これは、「難波堀江」開削後の「難波津」や、大郡・小郡の運営との関連を考えるうえで、基礎的な資料といえる。また、前期難波宮が造営される直前の7世紀の中頃に構築された規模の大きな溝SX301は、前期難波宮造営以前の歴史的景観を復原していく上で重要な遺構といえよう。前期難波宮期および、後期難波宮期の遺構については検出できなかったものの、該期の整地層から多量の遺物が出土した。

豊臣氏大坂城期では、井戸や廃棄土壌から多量の陶磁器や木製品、木簡が出土した。特に、廃棄土壌から「鎌(鋸)」に関する荷札木簡と、錫を使用したことを裏付ける炉壁や増幅が出土したことから、当該期の銅合金の製造に関する新たな資料を提示することができたことは重要である。

徳川氏大坂城期では、井戸から軟質施釉陶器の生産にかかわる窯道具と製品がまとまって出土したことから、いわゆる「御庭焼」の存在を示唆する資料を提示できた。

以上、古墳時代後期から江戸時代後期にいたる時期の遺構と遺物を部分的ながら明らかにできた。これらは、当該地域の歴史的な変遷過程を究明する上で重要な資料であり、今後の調査成果も含めて検討をおこないたい。

註)

- (1)(2) 増堀と炉壁に付着した金属の成分分析については当協会伊藤幸司が、大阪歴史博物館の「エネルギー分散型蛍光X線分析装置」を用いて非破壊でおこない、木簡の釈文は大阪歴史博物館豆谷浩之がおこなった。

参考文献

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」；大阪市文化財協会編「難波宮址の研究」第十一、pp.253-265

第7層上面検出遺構
(北西から)



第7層上面検出遺構
(北から)



第7層上面全景
(南から)



大坂城跡発掘調査(NW05-3)報告書

調査箇所	大阪市中央区大坂城
調査面積	75m ²
調査期間	平成17年9月26日～平成17年10月14日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、平井和

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は特別史跡大坂城跡内の西南部に位置し(図1)、史跡難波宮跡の推定宮城北端ライン上にある。調査地の西方では、財団法人大阪府文化財センターによる大阪府警察本部棟新築工事に伴う発掘調査(大坂城跡〇三一―調査区)が行われ、谷を埋める古代の地層から「戊申(648年)」と記された紀年銘木簡が出土して注目を集めた。また、その後の同センターによる発掘調査でも、豊臣後期の大坂城三ノ丸の堀と推定される大規模な遺構や、古代の柱列などが確認されており、難波宮の宮城北端ラインや豊臣期の城郭構造を検討する上で重要な地域として認識されている[大阪府文化財センター2004]。

調査区は[大阪府文化財センター2004]の成果を基に、推定宮城北端ラインを復元して設定した(図2)。本調査では、豊臣期から現代の整地層や攪乱層を重機によって慎重に除去した後、中位段丘構成層上面で人力により、遺構の検出や層序の確認に努めた。また、豊臣期と考えられる遺構の規模を確認するために、重機を使って北側へ調査範囲を拡張した。

なお、図2で使用した座標値は世界測地系に基づくもので、図1、4で使用した方位は座標北、図5は磁北を示している。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図ではTP+〇mと記す。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

本調査地には市営駐車場の整地層(第0層)以下、層厚6～30cmの近代から近世の整地層(第1～6層)、および中位段丘構成層(第7層)が分布した。

第0層：1955(昭和30)年以降に整備された駐車場の整地に伴うバラストとアスファルト層で、層厚

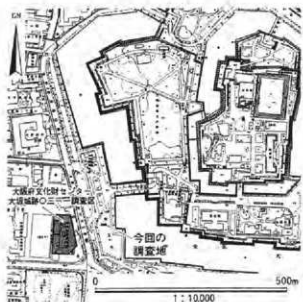


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

は30～40cmである。

第1層：礫を含む灰黄褐色細～中粒砂層で、近代から現代の盛土である。層厚は6～20cmである。本層上面で、SD01を確認した。

第2層：ぶい黄色細粒砂層で、調査地西半部において部分的に分布する整地層である。層厚は平均8cmである。本層上面で明治時代の遺構SA03が検出されたことから、整地の時期は徳川期末から明治時代と考えられる。

第3層：焼土を含む黄褐色中～粗粒砂層で、調査地中央部において部分的に分布する整地層である。層厚は平均6cmである。本層以下で明治期以降と考えられる遺物が出土しなかったことから、整地の時期は徳川期と考えられる。

第4層：黄褐色中～粗粒砂層で、調査地西半部に分布する徳川期の整地層である。層厚は平均6cmである。

第5層：淡黄色シルトの塊を含む細粒砂層で、調査地西半部に分布する徳川期の整地層である。層厚は平均10cmである。

第6層：明黄褐色細粒砂層で、調査地中央部に分布する整地層である。層厚は平均8cmである。本層下面で検出したSP101と豊臣前期の遺構であるSX101と埋土の岩相が近似することから、整地の時期は豊臣後期以降と考えられる。

中位段丘構成層である第7層は、第7a～7g層に細分できる。

第7a層：明黄褐色シルト質粘土層で、調査地東端部において部分的に分布する。層厚は最も厚い部分で約10cmである。

第7b層：黄橙色細粒砂層で、調査地東半部において分布する。層厚は12cm以上である。

第7c層：ぶい黄橙色シルト質粘土層で、調査地東半部に分布する。層厚は8cm以上である。本層上面において、上位の第7b層で埋まる大型哺乳類の足跡化石の可能性のある窪みを検出した。

第7d層：淡黄色シルト質細粒砂層で、調査地中央部南壁断面において部分的に認められた地層である。層厚は10cm以上である。

第7e層：黄色細粒砂層で、調査地西半部に分布する中位段丘構成層上部の地層である。層厚は最も厚い部分で約22cmである。

第7f層：淡黄色粘土層で、調査地南西部の試掘場で確認した。層厚は約15cmである。

第7g層：淡黄色シルト質極細粒砂層で、調査地南西部の試掘場で確認した。層厚は10cm以上である。

ii) 遺構と遺物

a. 豊臣期の遺構と遺物(図3～6)

第7層上面で検出した遺構である。

SX101 幅8m以上、深さ2m以上に復原される溝状の遺構である。SX101の南肩ラインは調査区北半部を東西方向に横切っており、調査区の東半部で南東方向へ屈曲している。調査区東壁断面で確認した法面の傾斜は約80°である。埋土は炭化物や焼土、礫を含むシルトから砂礫を主体とした地層

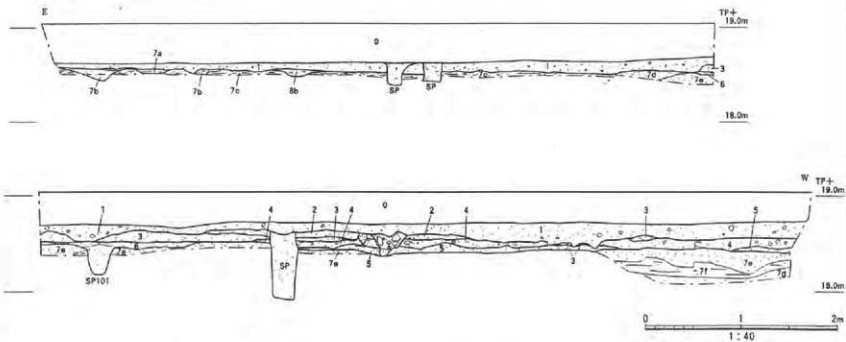


図3 調査地層断面図および、東側断面図

- SX01 1: 礫を含む黒褐色細～中粒砂
- SD01 1: 礫を含むオリーブ褐色中～粗粒砂
- 2: 炭化物を含む灰色中～粗粒砂
- 3: 礫を含むオリーブ褐色細～中粒砂
- SX101 1: 礫を含む黒褐色細～中粒砂の互層
- 2: 礫を含む明黄褐色細～粗粒砂
- 3: にぶい黄褐色細～粗粒砂
- 4: 礫を含む黄褐色中粒砂
- 5: 礫を含む黄褐色～灰オリーブ色中粒砂
- 6: 礫を含むにぶい黄褐色～褐色極粗粒砂～粗粒砂
- 7: 礫を含むオリーブ褐色～中粒砂
- 8: 焼土を含む黄褐色中粒砂
- 9: シルト質粘土ブロックを含む灰黄色中粒砂
- 10: 灰オリーブ色シルト質粘土～中粒砂の互層

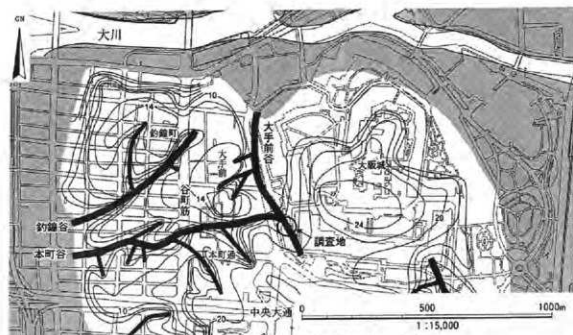


図4 上町台地北端の旧地形復元図【大阪市文化財協会2004使用】

である。中国製青花碗、瀬戸美濃皿2、備前焼、丸・平瓦が出土した。出土遺物に肥前陶器がなかったことから豊臣前期に埋められた遺構と考えられる。SX101を調査する際、遺構の深度が深かったため、一部調査範囲を北に広げて調査を行った。

本調査地は上町台地上に形成された「大手前谷」と「本町谷」の分岐点付近に当ることから、SX101が「本町谷」の地形変化にかかわる遺構とするならば、[江浦2005]の「谷1」と「谷2」に連なることが推測される。[江浦2005]によると、「慶長三年(1598)の大規模な造成工事に関わるものである蓋然性が高い」「堀八三」の掘削によって「谷1」が埋められており、それ以前は谷地形を利用した屋敷地が形成されていたことが指摘されている。一方、SX101は出土遺物から豊臣前期に埋められたものと考えられることから、本丸や二ノ丸築造以前に構築された遺構の可能性が高く、二ノ丸大手口西側で調査された2箇所の近接した地点(大坂城跡〇三一調査区[江浦2005]と、本調査地)で、築城および周辺部の造成に時期的な違いがあることが窺われる。

SP101 第7層上面で確認した穴である。壁面で観察した範囲では、幅約30cm、深さ約30cmで明黄褐色細粒砂を埋土とする。出土遺物がないことから、徳川期の遺構としての可能性も否定できない。

b. 明治～昭和時代の遺構(図5)

徳川期の遺構が検出できなかった理由は、調査地が大坂城の玄関に当る大手口であったことから、明治期の地図から窺えるように、広場として長期間利用されていたことや、1870(明治3)年の廃藩置県で大坂城の所管が明治政府の兵部省に移管され、造兵司や兵舎が設置されたことによる地形的変化が行われたことが考えられる。その後、1928(昭和3)年以降の昭和御大典記念事業による公園化や、1945～1948(昭和20～23)年の進駐軍による接収などがあり、徳川期の大手口の景観が大きく改変された可能性が高い。本調査では明治～昭和時代の遺構を第1～2層上面で検出したことから、上記の時代背景が遺構の形成と関連していることが考えられる。

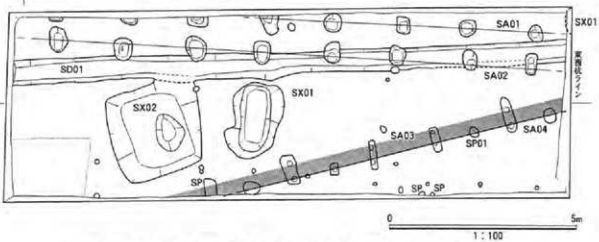
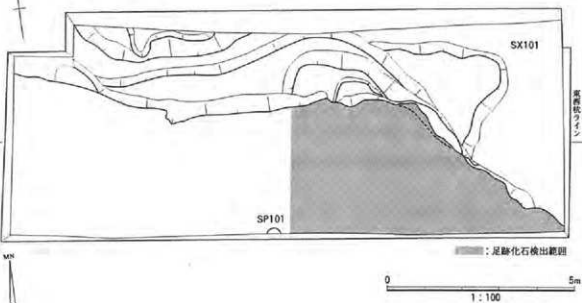
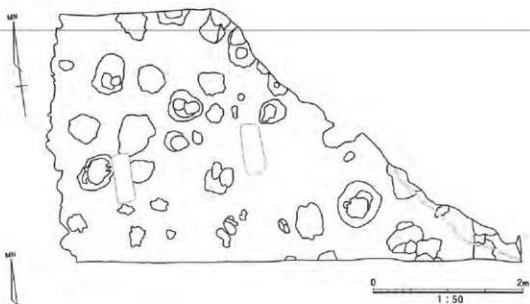


図5 調査地平面図(上:足跡化石分布図、中:豊臣期の遺構、下:近代の遺構)

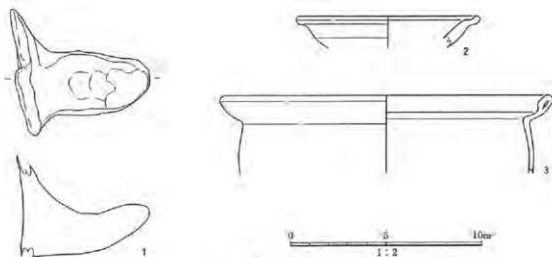


図6 出土遺物
SX01(1・3)、SX101(2)

SD01 第1層上面検出遺構の溝である。幅0.3m、深さ0.25～0.28mの灰色シルト～中粒砂を埋土とするほぼ正方位の東西方向に延びる溝で、出土遺物はない。

SA01・02 第2層上面検出遺構で、東西方向に延びる2列16基の柱列である。柱穴は直径0.4m、深さ0.8～0.9mで、柱間は1.8mである。この2列に並行する柱列の方位はN94°Eで、東西方向に延びている。SA02の柱穴のうち、西から5基はすべて建替えの痕跡が認められた。埋土はにぶい黄褐色細～中粒砂で、産地不明の近世磁器、碇子、肥前磁器が出土した。図5下SA02は、完掘した状態の平面図である。

SA03 第2層上面検出遺構で、柱列の方位はN78°Eで、SA01・02とは異なり南西から北東へ延びるものである。1間1.8～2.2mで、短軸0.2～0.3m、長軸0.7～1.0mの長円形ないし長方形の掘形の底に、直径0.1～0.2mの柱痕跡が認められた。南断面で確認した柱穴の深さは約0.7mで、埋土はにぶい黄褐色細～中粒砂である。肥前磁器、軟質施釉陶器、土師質皿・火入れなどが出土した。

SA04 第2層上面検出遺構で、柱列の方位はN78°Eで、SA03と同方位が同じである。柱穴の直径は0.3mで、深さは0.3mである。SP01については、長軸0.3m、短軸0.25mで、柱痕跡の直径は0.2mである。SA03と一連のものと考えた場合の柱間は1mで、単独と考えた場合の柱間は2.2～2.0mである。前者の場合、柱間が大きく開いた所が出入り口であったと考えられる。埋土はにぶい黄褐色細～中粒砂で、関西系施釉陶器、ガラス製牛乳瓶などが出土した。ガラス製牛乳瓶の表面には、「新喜多町ヒロオカ180cc」と判読できる成形時の押形文字がある。

SX01 第2層上面検出遺構で、長辺1.9m、短辺1.3m、深さ0.4mの不整形な廃棄土壌である。埋土はにぶい黄褐色細～中粒砂である。出土遺物は関西系施釉陶器急須・鍋3、土師質皿などのほかに、土師器の把手1が出土した。この遺構の主軸はSA01・02の主軸と直行すること、埋土の岩相や出土遺物の様相が近似していることから同時期に形成された遺構と考えられる。

SX02 第2層上面検出遺構で、長軸2.3m、短軸2.5m、深さ0.4mの方形の廃棄土壌である。埋土は黄褐色細～中粒砂である。レンガ・ガラス製品(目薬・皿・コップ・板ガラス)・碇子・産地不明施

釉陶器・土師質土器・金属製品・瓦など多種多様な遺物が出土した。この遺構はSA03・04と主軸が直行すること、埋土の岩相や出土遺物の様相が近似していることから同時期に形成された遺構と考えられる。

c. 足跡化石について(図5)

調査区東半部の第7b層上面で足跡化石の可能性が高い窪みを多数検出した。検出面は浅く、現在の地表から約50cmの深さである。今回確認した窪みの大半は、長径40cm前後、短径35cm前後でナウマンゾウの足跡の大きさとしては適当であり、窪の外縁に蹄の跡らしい小さな窪みも認められるものもあった。しかしながら、それぞれについて地層の堆積状況や足印底の観察と計測ができなかったことから、詳細は今後の再発掘調査に委ねられた。

3)まとめ

今回の調査地は特別史跡大坂城跡内の西南部に位置し、史跡難波宮跡の推定宮城北端ライン上に当ることから、難波宮から大坂城の築城にいたる歴史の変遷について、財団法人大阪府文化財センターによる発掘調査成果(大坂城跡〇三ー一調査区[江浦2005])との関連が期待されたが、その成果は得られなかった。しかし、古代以前の谷地形「大手前谷」や「本町谷」を利用して構築したと考えられる溝状遺構を確認することができた。また、明治時代以降の兵部省管轄時期を経て、昭和時代以降には大坂城を公園として整備し、市民へ開放してきた大阪城公園の歴史についても考古学的に新たな事実を提示することができた[大阪市文化財協会2004]、[入江重悦1993]。また、地質学的には、上町台地北端部の中位段丘構成層上部においてナウマンゾウと思われる足跡を多数確認し、中央区の歴史に新たな知見を提示することができたことは重要である。

註)

(1)ここで使用した近世の時期区分は以下のとおりである。

豊臣前期：本願寺焼亡より大坂城三ノ丸築造開始まで(1580～1598年)

豊臣後期：三ノ丸築造より大坂夏の陣まで(1598～1615年)

徳川期：大坂夏の陣以降(1615～1867年)

引用・参考文献

入江重悦1993、『大阪市公園史』(1) (財)大阪市公園協会編

地学団体研究会1994、『ゾウの足跡化石調査法』

財団法人大阪府文化財センター2004、『考古学と実年代ー考古学が歴史を変えるー』

財団法人大阪市文化財協会2004、『難波宮址の研究』第十二、pp.162

江浦洋2005、『豊臣期大坂城と大坂冬の陣ー大阪府警本部地点検出の掘をめぐってー』：『大阪の歴史』65、pp.1～32

SX01遺構断面
(南から)



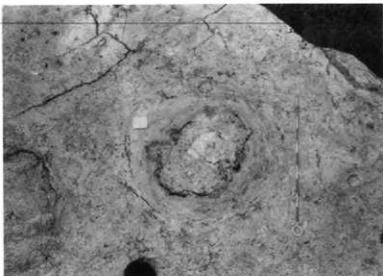
SX101遺構断面
(北西から)



近代遺構検出状況
(東から)



足印検出状況
(南から)



SX101南列地層断面
(北東から)



調査地全景
(東から)



大坂城跡発掘調査(OS05-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区大阪城(山里出柵形内)
- ・調査面積 126㎡
- ・調査期間 平成18年1月5日～平成17年2月20日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、小倉徹也、藤田幸夫、宮本佐知子

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は特別史跡大坂城跡にあり、大阪城公園の中央北西寄り、大阪城天守閣北側に位置する(図1)。豊臣秀吉の築いた大坂城が大坂の陣によって焼失した後、江戸時代初め(元和6(1620)年～寛永6(1629)年)に再建された徳川氏大坂城の山里出柵形に所在する。再建後に度重なる火災にみまわれたため江戸時代の天守などは現在では消失しているが、乾槽や千貫槽などの建物、石垣や堀などは残されており、江戸時代の様相を現在に伝える重要な文化財である。

これまでに本丸内では7個所の発掘調査が実施されている。そのうち天守閣東側の配水池南側で行われたOS84-17次調査では豊臣氏大坂城の本丸詰ノ丸の石垣が発掘され、豊臣氏大坂城を考える上

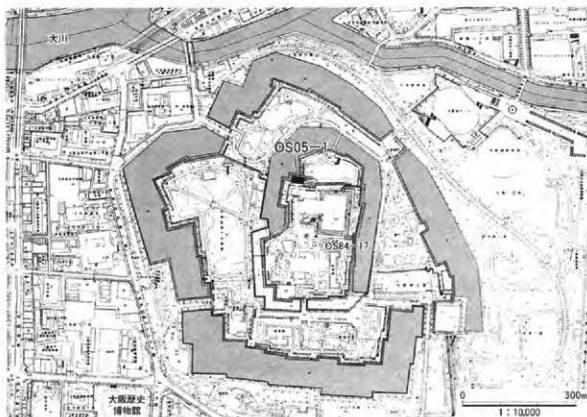


図1 調査地の位置

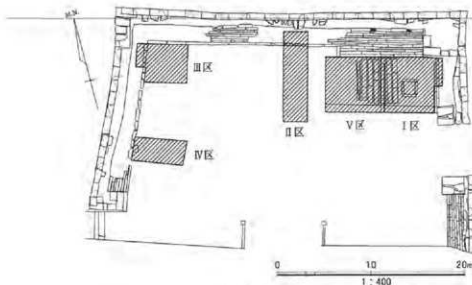


図6 調査区の配置

そこで大阪市ゆとりとみどり振興局と同教育委員会文化財保護課が協議を行い、I区を西に拡張することになった(拡張部をV区と呼ぶ)。

調査の結果、I区・V区では前述の雁木と絵図には描かれていない会所および暗渠が検出され、II～IV区では徳川氏大坂城築城当初の表达の状況が確認され

た。2月15日に現地説明会を実施し、2月20日に遺構の実測・写真撮影などの記録作業と、埋戻し作業および器材類の撤収を含めた現地におけるすべての作業を完了した。

以下の報告で使用した図面に示す標高はTP値、方位は図1が座標北、それ以外は磁北である。

〈調査の結果〉

1. 層序と出土遺物(表1、図7～15)

現地表面下約3.0m(TP+22.5m)までの地層を観察した。基本的な層序の組み立てはII区において行った。以下に層序の概略を記し、各層の岩相や特徴を表1に、各調査区の地層断面を図7～15、各層の出土遺物を図16・17に示す。なお、調査地では徳川氏大坂城築城以降の堆積物が薄いことが予測されたため、旧表土についても詳細に観察を行った。

第0層：第0a層と第0b層に区分した。

第0a層：コンクリート・採石・整地のための砂と、石畳・整地のための砂・礫からなる現代の盛土層である。層厚は45～85cmで、調査地全域に分布する。

第0b層：黒灰色の極粗粒砂～細礫・極細粒砂混り粗～中粒砂からなる旧表土および現代の盛土層で、炭・焼土・瓦・石材を含む。層厚は65cm以下で、調査地全域に分布する。本層からは煉瓦やガラスが出土した。

II区において、第0bi層と第0bii層に細分した。

第0bi層：黒灰色の極粗粒砂～中礫混り粗～中粒砂からなる現代の盛土層で、炭・焼土・漆喰・瓦を含む。層厚は10～30cmである。

第0bii層：II区北側において、第0bii層を上部・中部・下部にさらに細分した。

上部：黒灰色の極粗粒砂～細礫混り粗～中粒砂からなる現代の盛土層で、炭・焼土・瓦・漆喰・石材・シルト偽礫を含む。層厚は5～55cmである。

中部：褐橙色の極粗～粗粒砂からなる現代の盛土層(整地層)である。層厚は5cm以下である。

表1 調査地の層序

OS05-1 層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	遺構	おもな遺物	時代
a	現代盛土 (コンクリート・採石・砂(敷地)と石畳および砂・礫(敷地))	45~85		—	—	
第0層	i	含炭・焼土・漆喰・瓦 黒灰色極粗粒砂～中礫混り粗～中粒砂 [田表土および盛土層]	10~30		→土層	現代 焼土・ ガラス・瓦
		上部:含炭・焼土・瓦・漆喰・石材・砂偽礫 黒灰色極粗粒砂～細礫混り粗～中粒砂 [盛土層]	5~55		→土層	
	b ii	中部:褐色色 腐植～粗粒砂 [豊地層]	≦5		→土層	
		下部:含炭・焼土・瓦・漆喰・石材・砂偽礫 黒灰色極粗粒砂～細礫混り粗～中粒砂 [盛土層]	≦20		→土層	
第1層	i	含焼土・炭・瓦 黄灰色 極粗粒砂～細礫・細粒砂～シルト混り中～粗粒砂 [盛土層]	≦40	炭・瓦を多含、焼土含む I区～V区に分布		瓦・陶磁器
	ii	含焼土・炭・瓦 黒灰色 極粗粒砂～中礫・細粒砂～シルト混り粗～中粒砂 [盛土層]	≦60	焼土・瓦も多含する I区～V区に分布		瓦・陶磁器
	i	含漆喰 灰 黒灰色 炭混り中～粗粒砂	≦5	I区～V区に分布		瓦
	b ii	黄灰色 細～細粗粒砂	≦2	ウミナが観察、I区に分布		近世? (基本)
	注 含漆喰 灰 黒灰色 炭混り粗～中粒砂	≦2	I区に分布	→会所・母屋・幕本		
第2層	i	含炭・瓦・砂偽礫 褐色・黄灰色 細～細粗粒砂・細～中礫 混り粗粒砂 [盛土層]	≦65	北から南へ傾斜して盛土、 下位層との境界は明瞭		瓦 近世
	ii	含シルト・中～大礫・瓦 灰白色砂偽礫・炭 褐色・黄灰色 粗粒砂混り粗～中粒砂 [盛土層]	≦85	北から南へ傾斜して盛土、 下位層との境界は明瞭		
	iii	灰白褐色・色シルト偽礫と含炭・中 礫・砂偽礫・砂偽礫 褐色・中～粗粒砂 混り粗粒砂の互層 [盛土層]	230 ≦			
	iv	褐色色 細～粗粒砂混り粗粒砂 [盛土層]	35 ≦	上層はシルト質になる		

凡例 → 上面検出遺構

下部：黒灰色の極粗粒砂～細礫混り粗～中粒砂からなる現代の盛土層で、炭・焼土・瓦・漆喰・石材・シルト偽礫を含む。層厚は20cm以下である。

V区の第0b層から「大坂瓦師」の刻印のある瓦16が出土している。

第1層：第1a層と第1b層に区分した。第1a層はさらに第1ai層と第1aii層に、第1b層は第1bii層～第1biii層に細分した。第1ai・ii層と第1bi層はI～V区に分布し、第1bii・iii層はI区にのみ分布する。

第1ai層：黄灰色の極粗粒砂～細礫・細粒砂～シルト混り中～粗粒砂からなる近代の盛土層で、焼土・

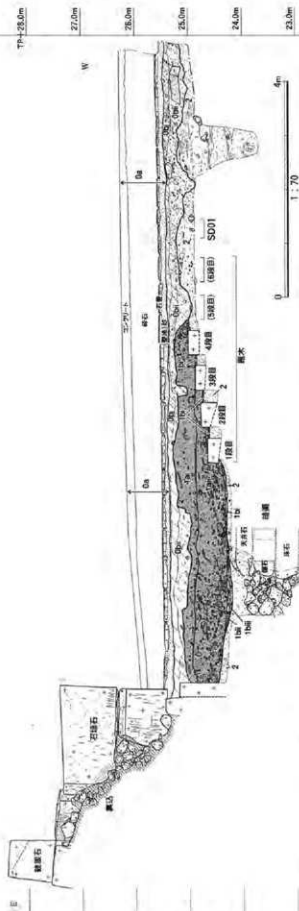


図7 I・V区南壁地層断面

炭を含み、瓦を多量に含む。層厚は40cm以下である。幕末～明治時代の陶磁器が出土した。

第1aii層：褐灰色の極粗粒砂～中礫・細粒砂～シルト混り粗～中粒砂からなる盛土層で、焼土・炭・瓦を多量に含む。層厚は60cm以下である。幕末～明治時代の陶磁器が出土した。

図3によると調査地の東側と南側に櫓が描かれている(東側：山里口門、南側：姫門)。幕末の動乱期の慶応4(明治元、1868)年、徳川氏大坂城はほとんど焼亡したと記録に残されている。第1ai・ii層には焼土が多く含まれること、幕末～明治時代の陶磁器が出土していることから、第1ai・ii層はその時の残骸が堆積したものか、その後整備されて調査地内に盛土されたものと考えた。

第1a層から三葉葵紋鬼瓦1や軒丸瓦2と、刻印のある瓦4～15・17～62が、第1aii層から三葉葵紋鬼瓦3が出土している。

第1bi層：灰色ないし黒灰色の炭混り中～粗粒砂からなり、漆喰・瓦を含む。層厚は5cm以下である。I区および後述する雁木と雁木の間に分布する。

第1bii層：黄灰色の細～極細粒砂からなる。層厚は2cm以下で、I区の南端部にわずかに分布する。淘汰が良く、ラミナが観察された。

第1biii層：灰色ないし黒灰色の炭混り粗～中粒砂からなり、漆喰・瓦を含む。層厚は2cm以下で、I区の南端部、後述する会所の南東側の窪みにわずかに分布する。

第2層：第2i層～第2iv層に区分した。

第2i層：褐灰色ないし黄灰色の細～極細粒砂・細～中礫混り極粗～中粒砂からなる盛土層で、炭・瓦・シルト偽礫を含む。層厚は65cm以下である。下位層との境界は明瞭であった。

第2ii層：褐灰色ないし黄灰色の細粒砂混り粗

～中粒砂からなる盛土層で、シルト・中～大礫・瓦・灰白色シルト偽礫・炭を含む。層厚は85cm以下で、下位層との境界は明瞭であった。北から南へ傾斜して盛土されていた。

第2iii層および第2iv層はⅡ区において観察した。

第2iii層：灰白色シルト偽礫を含む、灰白色ないし褐灰色のシルト～極細粒砂混り細～中粒砂と、細～中礫・灰白色シルト偽礫・灰色砂偽礫を含む、褐灰色中～細粒砂混り極粗～粗粒砂の互層からなる盛土層である。層厚は170cm以下で、下位層との境界は明瞭であった。上位層と同様に、北から南へ傾斜して盛土されていた。

第2iv層：褐灰色の細～細粒砂混り極粗～粗粒砂からなる盛土層である。層厚は35cm以上である。上部がシルト質であった。

なお、石垣の裏込は第2層に傾斜して接しており、裏込の基質部分は接する層準の盛土層と同質であった。裏込石の状況を230cm間を観察した。

2. 遺構(図18～27)

i. I区・V区(図16～23)

平面的な調査は第2層上面において行い、雁木と会所および暗渠を検出した。遺構検出状況を図18に示す。

雁木 調査区中央部で確認した階段で、6段検出した。花こう岩の石材を使用しており、石材の幅は40～50cmで、厚さは約20cm、約15～20cmの間隔をあけて構築されていた。また、雁木石の上面部分は幅約45cmに揃うように成形した痕跡が認められた。南北長は約420～480cm、南側は調査範囲外であるため延長は不明であるが、前述のように南側へ延びているとみられる。上段から3段分は、南側が攪乱を受けて取り除かれていた。雁木石の側面には「く」の字の刻印などが確認された。

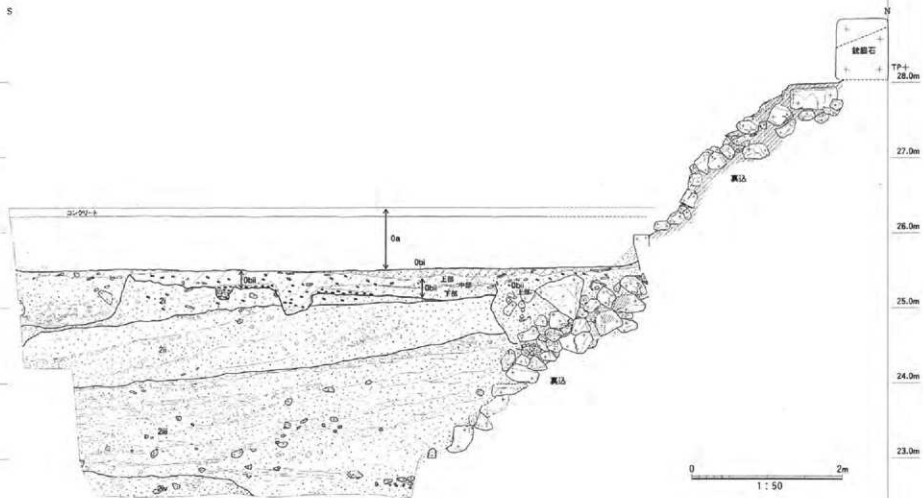
焼土や幕末から明治時代の遺物を含む第1層の下位から見つかっており、明治18年以前の「大阪実測図」(図3)では調査区に階段が示されていないことから、明治維新で大坂城が焼亡した時に地中に埋もれたものと考えられる。

SD01 雁木最上段の西側で雁木と平行する溝を検出した。長さ約440cm、幅約40～50cm、深さ約5～10cmである。SD01の西側がほぼ垂直な壁になっていること、幅がおおよそ雁木石の幅であることから雁木石の抜取りの跡の可能性がある。

会所 調査区東側で検出された遺構である。一辺約160cmと約120cmの花こう岩を上下2段で組み合わせて構築されていた。南東端の上面は火を受けて黒色～赤色に変色していた。また、上面には幅11～12.5cmの溝が1辺につき1本もしくは3本切られており、会所内へ水を流し込むためのものではないかと考えられた。石材の内側には幅約4～5cmの切り込みが確認された。会所を埋めていた埋土の上面に板材の焼けたものが見つかったことから、板で蓋がされていた可能性があり、蓋板をかけるための切り込みと考えられた。

暗渠 会所の内部には、南側と西側に天井石と底石、側石で組まれた暗渠が確認された。上述の溝の3本切られた石材に対してのみ暗渠が構築されていた。出入口の幅は約55～60cm、深さ約65cmである。南側の出入口が礎石とみられる石で蓋がされていたこと、埋土から瓦や磁器が見つかったこと

图 8 II 区西岸地层剖面



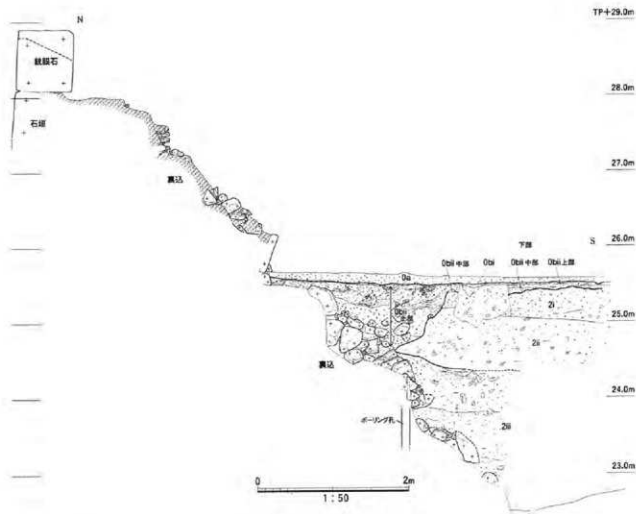


図9 II区東壁地層断面

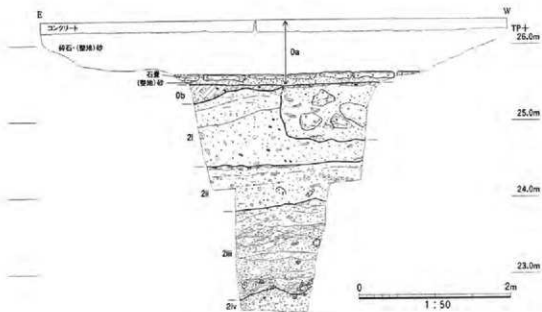


図10 II区南壁地層断面

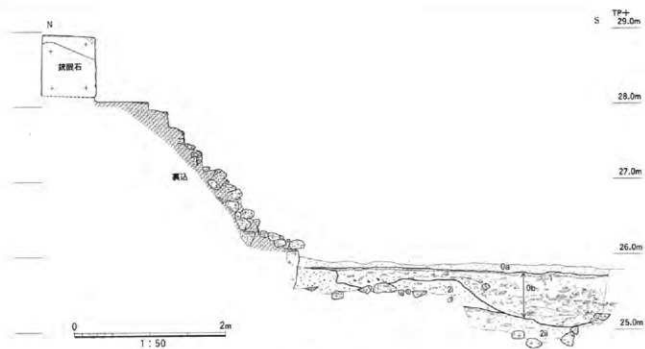


图11 III区东壁地层断面

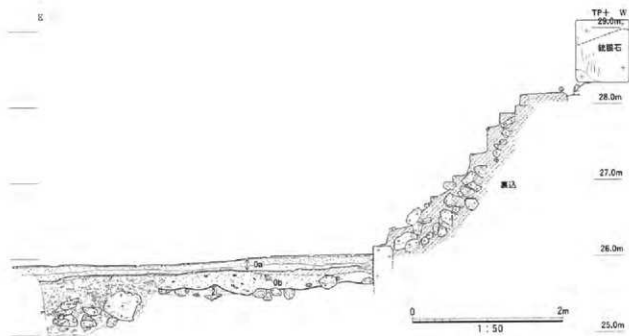


图12 III区南壁地层断面

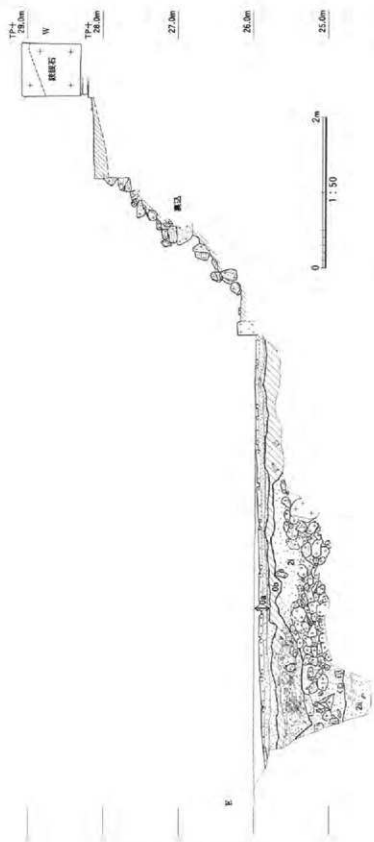


图13 N区南坡地層断面

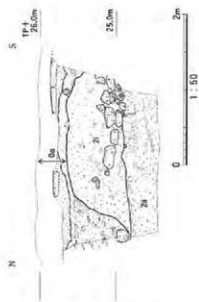


图14 N区東坡地層断面

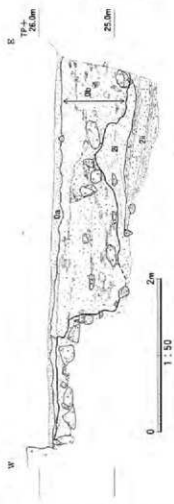


图15 N区北坡地層断面

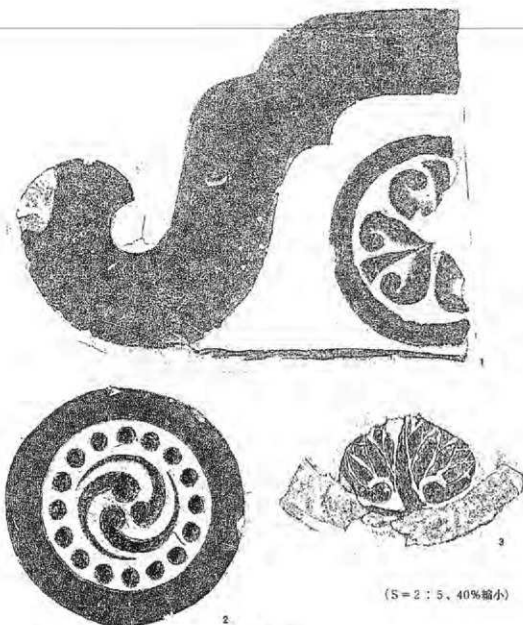


図16 出土遺物

1・3：第1a層，2：第1ai層

から、意図的に埋め戻されたと考えられる。南側の暗渠は南に向かって東へ 4° 振っており、傾斜は南へ約 10° であった。西側の暗渠は西に向かって南へ 5° 振っており、傾斜は西へ約 7° であった。これは会所が両暗渠よりも高いことになり、排水の機能を果たさないことになるが、北側と南側の石材が西に傾いていたことから後世に変形したと考えられる。

ii. II区(図24・25)

石垣背面の裏込の状態を高さ約550cm(TP+22.5~28.0m)を観察した。裏込石は直径約10~90cmで、その中で大きいものは角礫~亜角礫、小さいものほど亜円礫であった。礫種は花こう岩が主体であるが、小さいものには斑れい岩や凝灰岩、砂岩なども含まれていた。観察した範囲における裏込石は、大きなもので約20cmの間隙をあけて積み上げられていた。積み上げの傾斜は、南へ約 $40\sim50^{\circ}$ であった。なお、図8・9に示したように石垣の雁木側には攪乱を受けてはいるものの、後述するⅢ・



図17 第0b層および第1a層出土瓦の拓本

16：第0b層、4～15・17～62：第1a層

IV区の裏込の状況とは異なり、平面的な南北幅が非常に狭い。山里出崩形内ではほぼ中央部に位置する裏込であり、石垣にかかる応力から考えても狭いと考えられた。

iii. III区(図26)

石垣の隅部に当る。調査区のはほぼ全体が裏込石で占められており、幅4m以上あった。裏込石の大きさや露種、積み方などはII区と同様であった。

iv. IV区(図27)

調査区の西から幅約3.2mは平面的に裏込石が積まれていたが、東側は攪乱を受けていたため、正確な裏込の幅は分からなかった。裏込石の大きさや露種、積み方などはII・III区と同様であった。

〈まとめ〉

今回の調査の成果を以下に述べる。

調査区東側のI・V区において、雁木、会所および暗渠を検出した。雁木は6段あり、これに平行する溝が雁木の抜き取り跡である可能性があり、7段あったことも考えられた。会所および暗渠は絵図にも描かれていないもので、今回初めて発見された遺構であり、当時の土木技術を知る上でも重要な遺構である。会所には石材内側に切込みが認められ、埋土の最上部からは焼けた板材が検出されたことから、蓋がされていた可能性がある。会所に取り付く暗渠は、天井石・備石・底石で組まれていた。暗渠の傾斜方向について、会所側が高く、暗渠の奥側に低くなっていた。排水の機能を果たさないことになり、疑問が残った。

また、II～IV区では裏込の状態を観察した。II区では裏込の積み上げの傾斜が、南側へ約40°～50°であることが確認された。また、II区では裏込の状況が平面で南北幅が非常に狭く、III・IV区とは異なることが確認された。

最後に、これまでに大阪城内で行われた発掘調査は少なく、未だ不明な点も多い。今回発見された会所と暗渠もその一つである。今後実施される発掘調査によって、さらに大阪城の実態が明らかになると期待される。

謝辞

発掘調査時には多くの方々にご助言、ご指導をいただいた。特に、中村博司大阪城天守閣館長、同研究副主幹北川典氏・主任学芸員宮本裕次氏・学芸員藤部信氏、王野富雄大阪産業大学教授、増岡徹京都橋大学教授には貴重なご助言・ご意見をいただいた。ここに記して謝意を表する。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1985、『特別史跡 大坂城跡』

1987、『特別史跡 大坂城跡II』

2002、『大坂城跡VI』

大阪城天守閣1997、『大坂加番大名一覧』；『大坂加番記録(一)～安永九年八月～天明元年八月、雁木坂加番京極高久』、

徳川時代大坂城関係史料集 第一号、pp.88～119

岡本良一1970、『大坂城』岩波新書

加藤理文2005、「城の普請 石型」：『城造りのすべて 歴史群像シリーズよみがえる日本の城25』、pp.40～51

三浦正幸2005、「城のつくり方図典」小学館

渡辺武1983、「因説再見大阪城」大阪都市協会

渡辺武1994、「徳川幕府の大阪城再築」：『大阪城 歴史群像名城シリーズ1』、pp.100～103

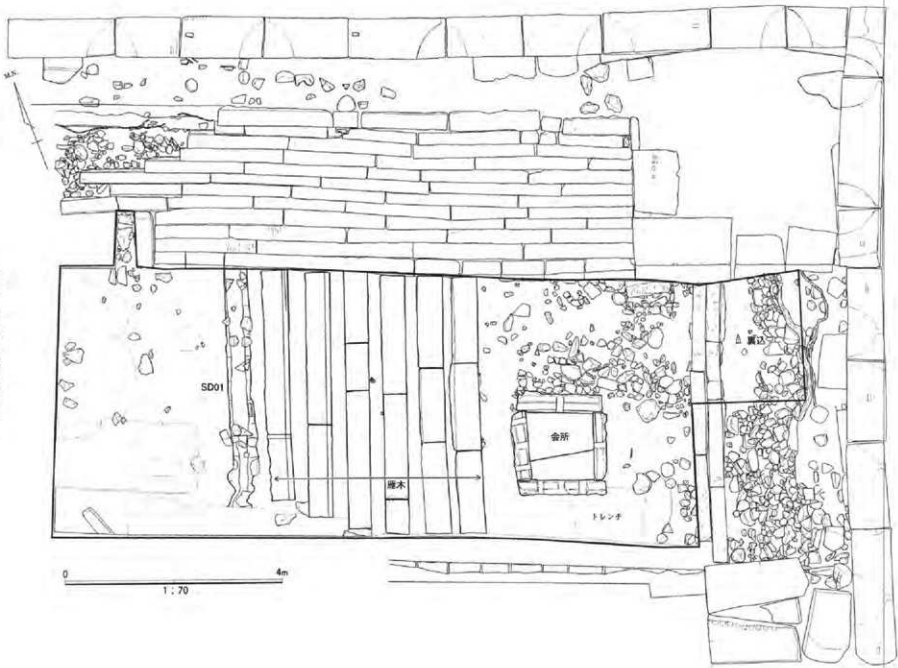


图18 I・VI区検出家屋平面

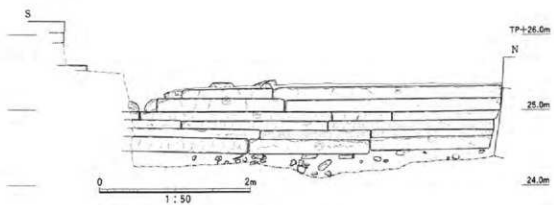


图19 雁木西侧立面

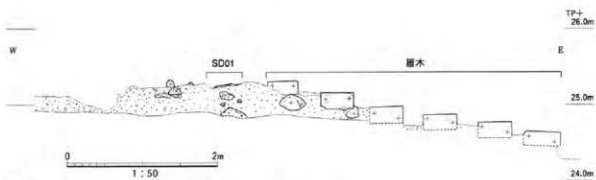
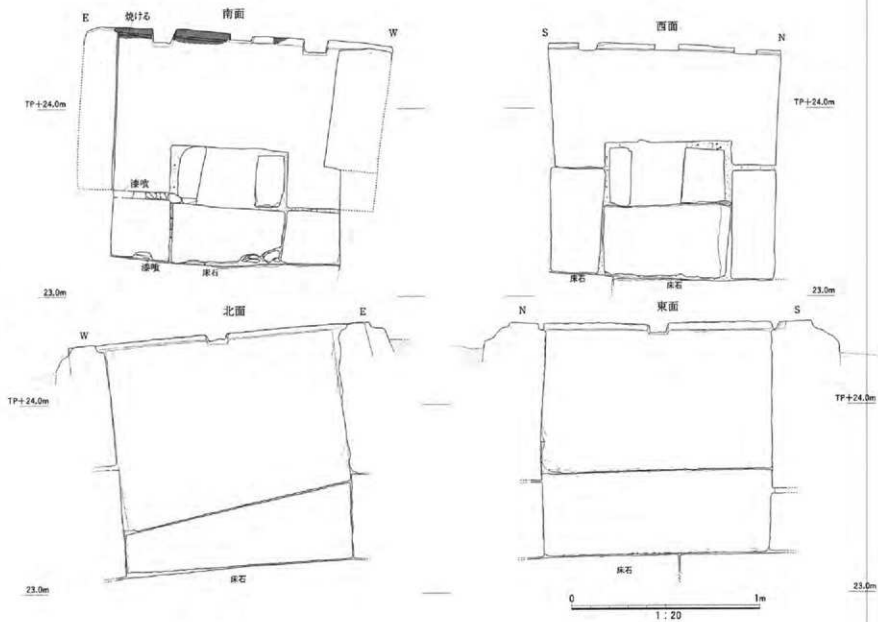


图20 雁木北侧立面

圖五 遺跡



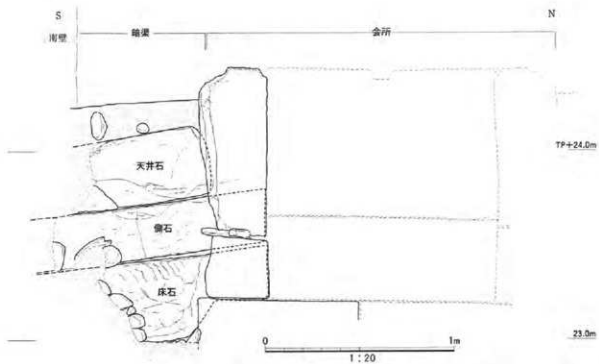


図22 南側暗渠西側面(Ⅰ区トレンチ)

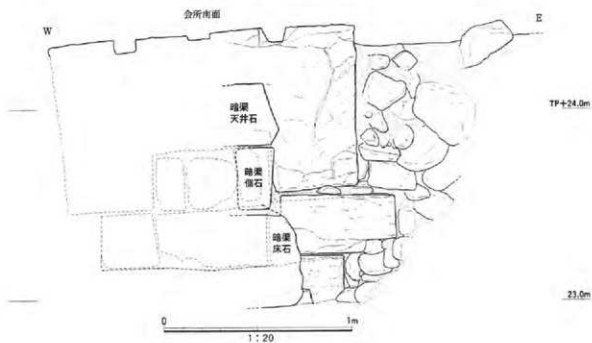


図23 南側暗渠北側面(Ⅰ区トレンチ)

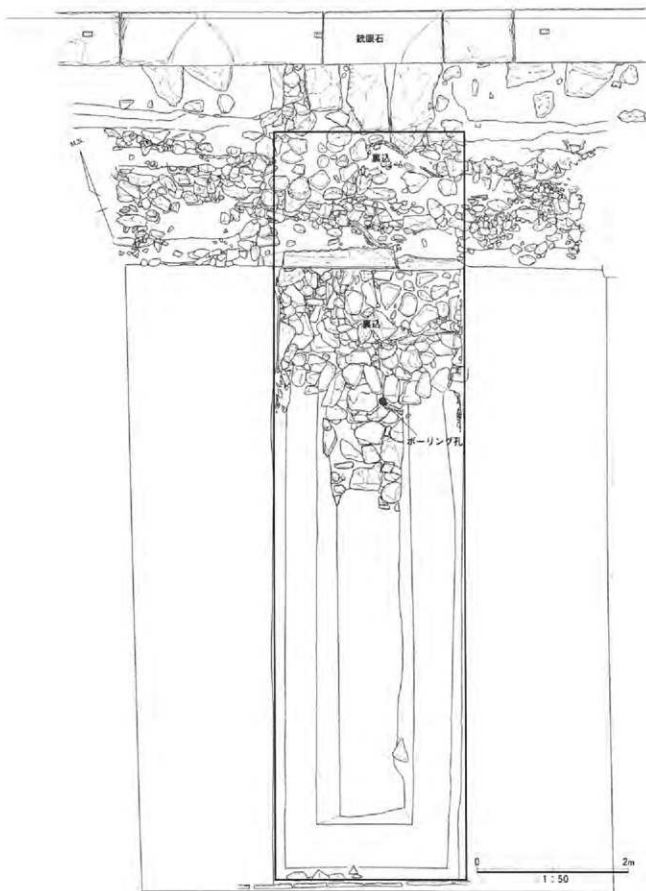


图24 □区検出遺構平面

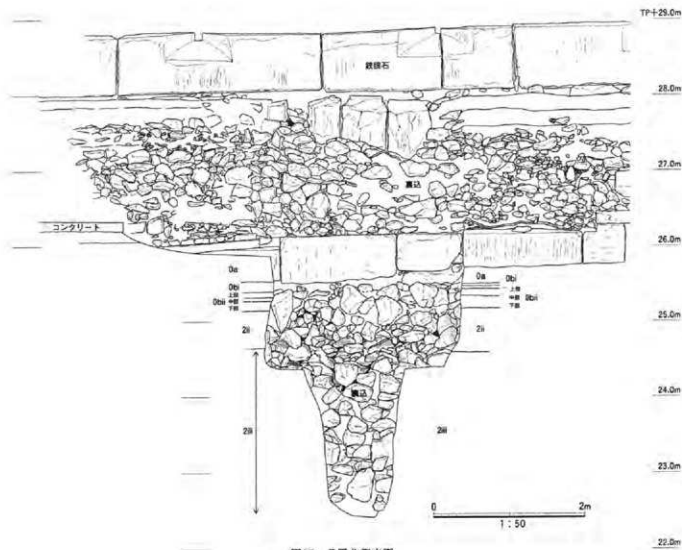


図25 II区北側立面

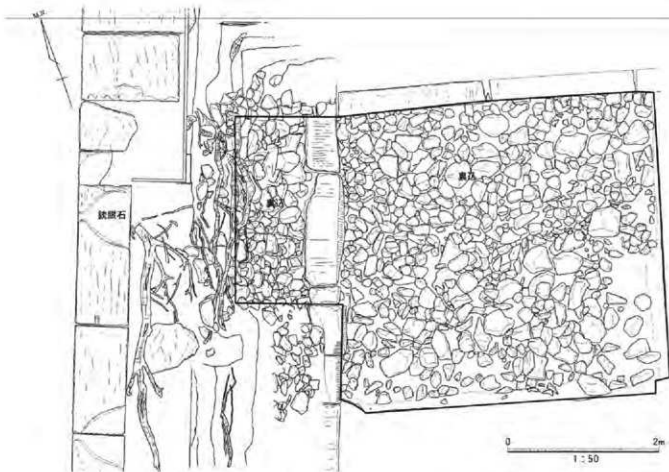


图26 III区检出遗構平面

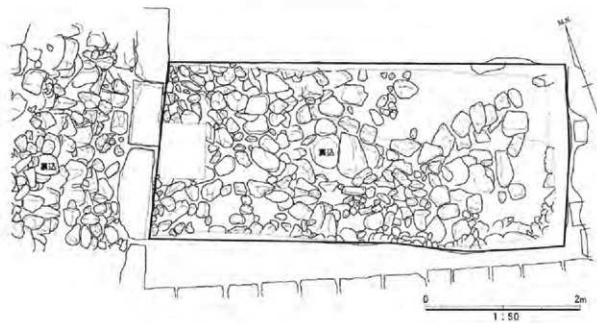


图27 IV区检出遗構平面

調査地遠景
(南から)



I・V区南壁地層断面
(北東から)



II区西壁地層断面
(南東から)



I・V区第2層上面検出状況
(南西から)



I区会所および暗渠完掘状況
(北東から)



I・V区雁木検出状況
(南西から)



Ⅱ区石垣裏込検出状況
(南から)



Ⅲ区石垣裏込検出状況
(南東から)



Ⅳ区石垣裏込検出状況
(北東から)



大坂城跡発掘調査(OS05-4)報告書

調査箇所	大阪市中央区石町1丁目16
調査面積	87㎡
調査期間	平成17年8月3日～平成17年8月9日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、宮本佐知子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地のはは先端の高所に位置する。南側の中央高校建設に先立つ調査(OS90-50)では、奈良時代を中心とする建物群が発見されている(図1)。特に墨書土器や緑軸陶器、鶴尾などが出土していることから、これらの建物群は公的機関の建物で、水上交通にかかわった役所や、鴻臚館などの可能性が考えられている。また中世の遺構としては、東側の調査地(OS86-6)で、断面V字形の堀を検出し、出土遺物から大坂本願時期と考えられている。その堀は、織田信長が本願寺を攻めるために築いた砦の周囲を囲む堀である可能性がある[大阪市文化財協会2003]。また近世については、豊臣大坂城の惣構内に当ることから、町屋の建物などが検出される可能性が考えられる地点でもある。

このように周辺は、奈良時代から近世初頭まで、大阪の歴史上重要な出来事の舞台となったところと考えられる。

平成17年5月24日に試掘調査を行なったところ、地山直上層で須恵器が出土したので、本調査を実施することとなった。調査は敷地内の南半分で実施した。重機で近世前期の層まで掘り下げて、あとは人力により掘削した。

8月9日に器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。



図1 調査地周辺図

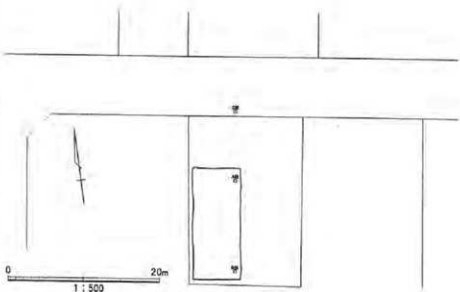


図2 調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

表土層を取り除いた現地地表下0.7mで近世の遺構面となる。その面を第1遺構面とした。第1遺構面を構成する第1層と、その下の第2層を除くと、部分的に第3a層の焼土が広がっている所がある(図4左図のアミ掛け部分)。その第3a層基底面が第2遺構面である。その下の第3b層を除くと北部の一部に第4層が残存している。その下が第5層の地山で、第3遺構面である。

第1層：現代整地層および攪乱を除いた第1遺構面を構成する層で、地山の層が再堆積した粘土ブロックを含む灰色シルト層である。

第2層：第2a層、2b層の2層に分かれ、第2a層はオリブ褐色砂礫シルト層で、2b層は褐色中～粗砂層である。

第3層：第3a層、3b層に分かれ、

第3a層は暗黒褐色細砂層の焼土層である。第3b層の上面が被災した面と考えられる。

第4層：淡灰褐色泥入り細粒砂層で、敷地の一部に残存している。

第5層：淡黄灰色粗砂～砂礫層で、地山層である。

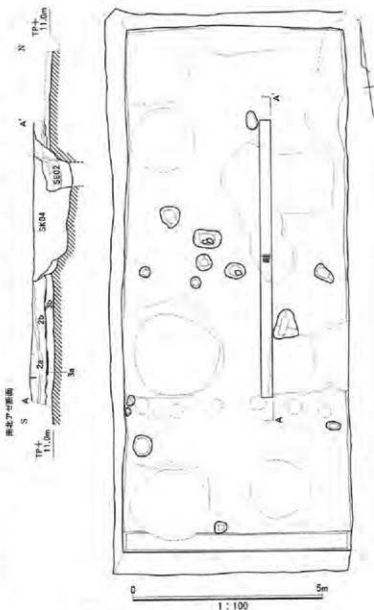


図3 地層断面図と第3遺構面(1:100)

ii) 遺構と遺物

a、第3遺構面検出遺構(図3、図5)

数基のピットを検出したのみである。ピットの中から出土した遺物は、図化できないが、薬灰釉を掛けた唐津焼の瓶の細片が出土している。この遺物から豊臣前期に埋まったピットであると思われる。ほかに第4層で埋まっているピットもあるが、遺物がなく時期不明である。この面の上を覆う第3b層中より青花皿1が出土した。

b、第2遺構面検出遺構(図4、図5)

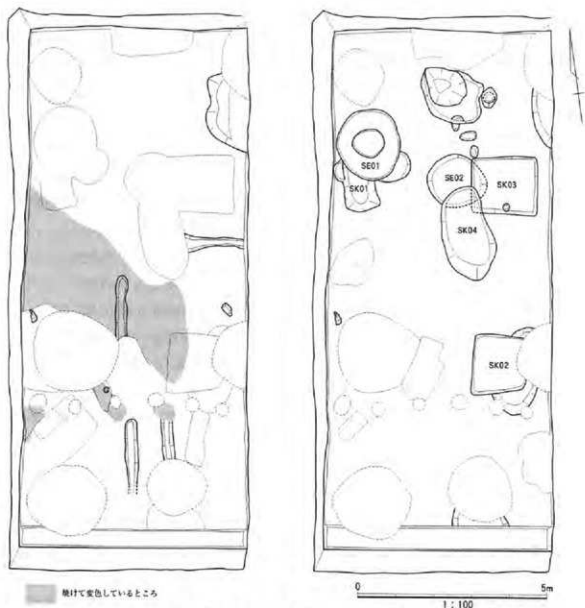


図4 第2遺構面と第1遺構面(1:100)

第2遺構面の一部には焼けて変色しているところが認められた。部分的に第3a層の焼土が残存しているところがある。上面で4条の溝を検出したが、遺物はなく、性格も不明である。第3a層は大坂夏の陣に伴う焼土である可能性が高い。この上を覆う第2層から唐津焼の皿2・3が出土している。

c、第1遺構面検出遺構(図4、図5～7)

第1遺構面で検出したのは井戸2基と、土壌が7基である。

SE01 18世紀後半の瓦製井戸瓦を井筒に使った井戸である。掘形の直径は1.7mで、井筒の直径は0.85mである。

SE02 直径約1.5mの素掘りの井戸で、SK03・04によって壊されている。中からは土師皿4、焙烙5と、肥前産伊万里焼染付輪花皿6が出土した。肥前産陶器では唐津焼碗7、御器手腕8、刷毛目猪口9が出土した。17世紀末ごろに埋められたと思われる。

SK01 幅0.95m、長さ1.1m以上の土壌で、深さは約0.2mである。SE01に壊されている。肥前産伊

万里焼皿10・11と、擋り目の単位が7本の、丹波焼播鉢12などが出土した。これらの遺物からSK01は17世紀前半に埋まったものと思われる。

SK02 一辺1.5m、深さ0.5mの方形の土壌である。SK03と規模も同じで南北に並んで位置していた。出土遺物のうち焼締陶器鉢13は、焼き締まりは甘いが備前焼と思われる。外底面に四角の中に「上」の刻印がある。瀬戸美濃焼の鉄軸の壺14は、内外面とも施釉している。肥前産伊万里焼染付小碗15は、雨降り文で筆描きである。この遺構が埋まったのは17世紀の後半と考えられる。

SK03 一辺1.5mの方形で、深さは約0.5mである。焼けた瓦と数多くの陶磁器と石製碗が入っていた。焼け跡処理の土壌と考えられる。SE02とSK04を壊して掘られている。石製小碗16は珪質岩製で、表面に梅枝の文様を削りだしている。器壁に彫刻するだけでなく、文様の一部は器壁から浮き上がって彫られている。土師皿17と肥前産陶磁器、瀬戸美濃産花瓶18、京焼向付19、丹波焼甕20が出土している。肥前産磁器伊万里焼では、コンニャク印判の碗21・22、染付猪口23、口縁部がラッパ状に開く碗24があり、コンニャク印判か型紙刷りと、筆描きを併用した梅鉢紋を内外面に配している。また、一本線描きの蛸唐草文碗25、染付蓋26・27、染付大皿28、輪花中皿29・30、竜文中皿31、方形小皿32、菊文コンニャク印判の小皿33、型紙刷り変形皿34、青磁皿35、色絵碗36がある。肥前産陶器では京焼風陶器皿37、唐津焼片口鉢38、刷毛目猪口3、銅緑釉皿40などが出土している。これらは17世紀代のものもあるが、蛸唐草文が18世紀後半に位置づけられるので、この土壌は18世紀後半に埋められたものと考えられる。

3)まとめ

調査地の南側は小高い台地上になっており、従来の調査結果から、織田信長が大坂本願寺との戦の時に築いた「龍の岸」の砦があった可能性が指摘されている。本調査地はその台地の北側斜面に位置しており、その時期まで遡る遺構が存在する可能性に注意して調査をおこなった。しかし、地山直上の整地層から唐津焼の破片が出土し、その上には焼土が広がっていたことにより、この地の開発の時期が豊臣後期であることは明らかである。

江戸時代については井戸と土壌を検出し、敷地の裏側のような地点に当る可能性が高い。検出した土壌の中で、SK01出土の陶磁器が一番古く、17世紀の第3四半期である。このころ、大坂夏の陣で焼けたこの地の再開発が始まったものと考えられる。18世紀後半には周辺で火事があり、その焼け跡を整理した土壌からは、1世紀も遡るような陶磁器と、石製碗や京焼などの高級な遺物が出土したことから、周辺に裕福な人が住んでいた可能性が考えられる。

参考文献

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ、pp.7-16

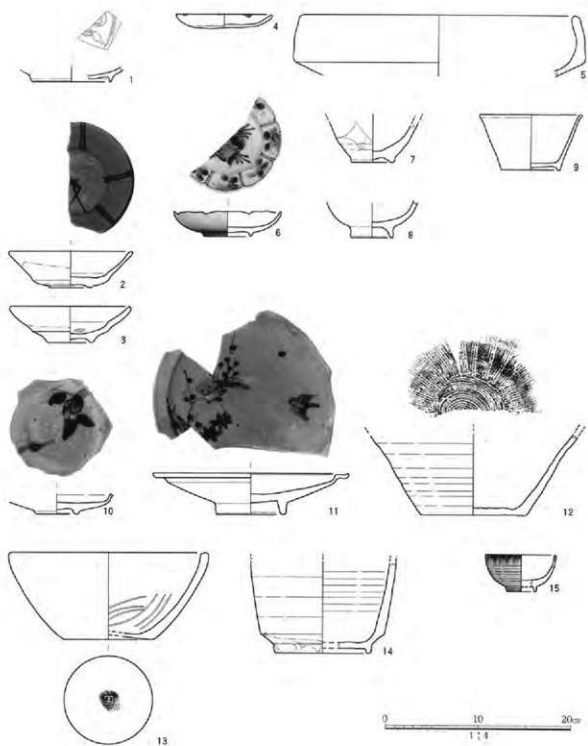


图5 第1遺構面出土遺物
 第3b層(1)、第2層(2・3)、SE02(4~9)、SK01(10~12)、SK02(13~15)

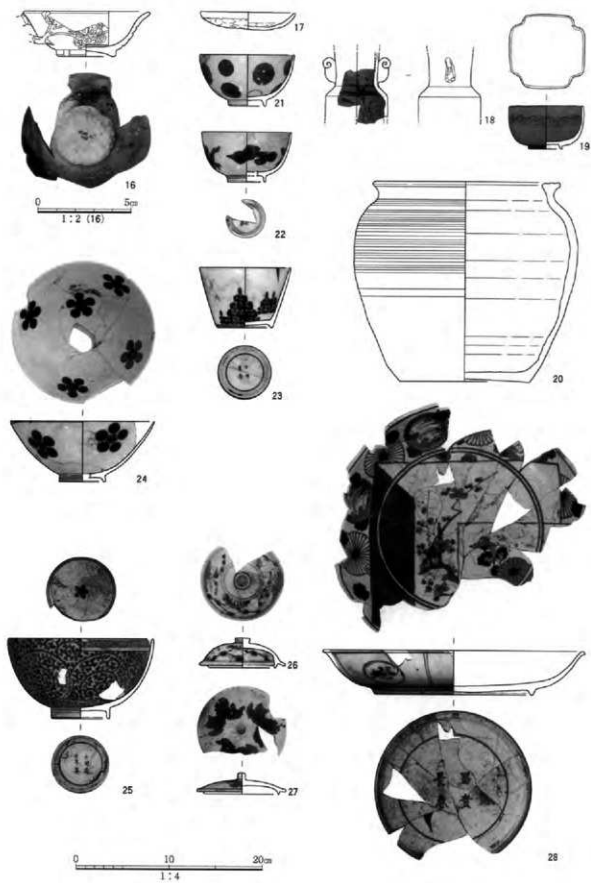


图6 第1遺構面SK03出土遺物(1)

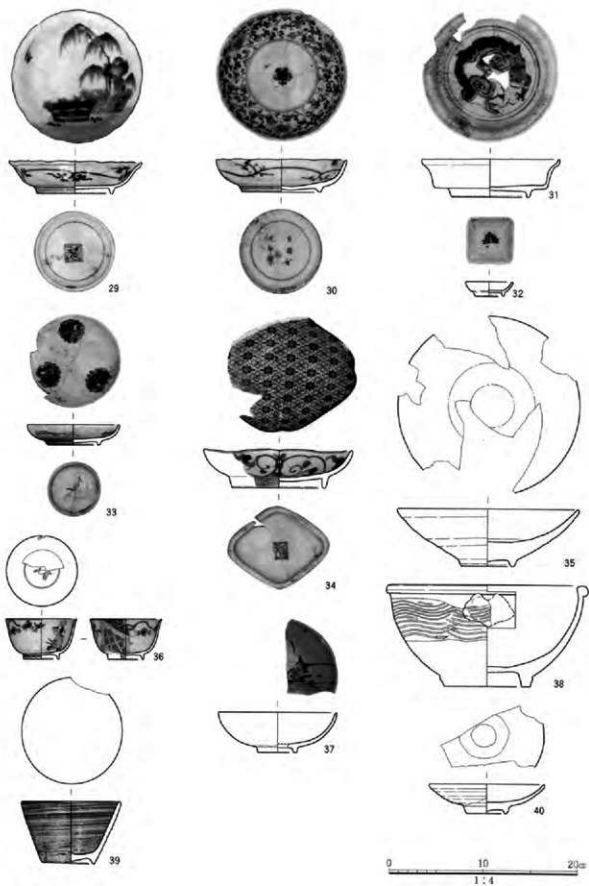


图7 第1遺構面SK03出土遺物(2)

第1遺構面検出遺構（北から）



第3遺構面検出遺構（北から）



大坂城跡発掘調査(OS05-5)報告書

調査箇所	大阪市中央区高麗橋31-1
調査面積	82m ²
調査期間	平成17年10月31日～平成17年11月8日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、伊藤幸司、宮本佐知子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は東横堀川に架かる高麗橋の東約100mで、東西道路の南側である(図1)。豊臣期大坂城惣構の北西端に当り、周辺の調査では建物跡などが検出されており、本調査地も同様の遺構が検出される可能性が高かった。

2005(平成17)年8月4日に大阪市教育委員会が試掘調査を行った。その結果、GL-1.5mで焼土を含む地層が検出されたため、本調査を実施することとなった。

調査区は敷地の南東部に設定し(図2)、表土層は重機で取り除き、それ以下は人力により掘削した。

調査は10月31日から開始し、11月8日には器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を終了した。調査で用いた方位は磁北で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、挿図の中ではTP+0mとした。

2) 調査の結果

i) 層序と各層出土遺物(図3・4)

本調査地の基本層序は以下のとおりである。

第1層：調査区の西部で検出した地層で、黄褐色砂混りシルトを主体とする近世の盛土層である。層厚は最大15cmである。肥前陶器二彩唐津大皿1、肥前磁器茶付碗2、羽口3などが出土した。羽口の壊れた面にガラス質の付着物がある。

第2層：黒灰色シルト質中粒砂を主体とし、幾度かの整地に伴う人為層である。層厚は30cmである。上面で銅の精練に関係する遺構を検出した(図4)。

第3層：明黄色粗粒砂からなる整地層であり、土師器皿4、瓦葺羽釜5・6、瀬戸美濃焼小杯7、瀬戸美濃焼織部碗8、丹波焼大平鉢9、把手付き増塀10などが出土した。本層は瀬戸美濃焼織部碗8を含むものの、調査地の周辺で検出されている豊臣期大坂城三ノ丸築城時に広範囲に行われた1598(慶長3)

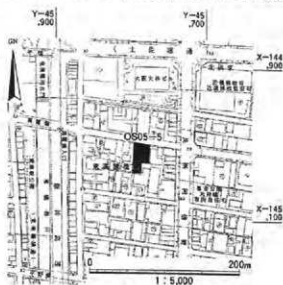


図1 調査地位位置図

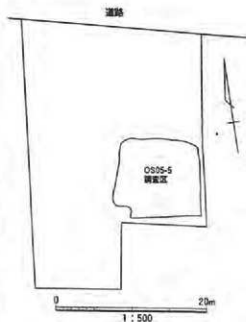


図2 調査区配置図

年の整地層に酷似している。

ii) 遺構と遺物

第2層上面検出遺構と遺物(図4～6)

本層の上面には、銅が固着している。平面で検出した遺構は炉5基と、銅滓の入った廃棄土塊5基・不明遺構・ビットなどである。炉・廃棄土塊の中には上面に固着した銅滓のために、平面での検出が困難で、トレンチを入れて確認したものもある。これらの遺構の様相は、大阪市中央区島之内にあった住友鋼吹所跡[大阪市文化財協会1998]の調査で確認した遺構面と同様の状況であった。以下に主な遺構について記述する。

炉101 直径0.35～0.40mの円形の炉で、0.07～0.10m掘り窪めて作られている。何度かの造り替えが行われたようで、切合いから最低3回の造り替えを確認した。それぞれの炉の壁面は焼けており、内部に炭が詰まっていることから、精錬を行っていたと考えられる。

炉102 直径0.55mの円形で、検出面からの深さは0.13mである。地面を掘り窪めて壁を焼いてから、炭を混ぜた粘土を貼っている。この粘土は何度か貼り重ねていることが確認できた。中は粗い砂で埋められており、使用時の姿をとどめていると考えられる。

炉103 直径約0.80mの円形で、深さ約0.25mが残存していた。本炉も掘り窪めて壁を焼いている。

炉104 南半は工事杭に攪乱されている。最大幅0.35m、深さ0.10mが残存していた。

炉105 炉103と104のそばに0.15m×0.13mの焼き締まった個所があり、炉の底部の可能性が考えられるので炉とした。

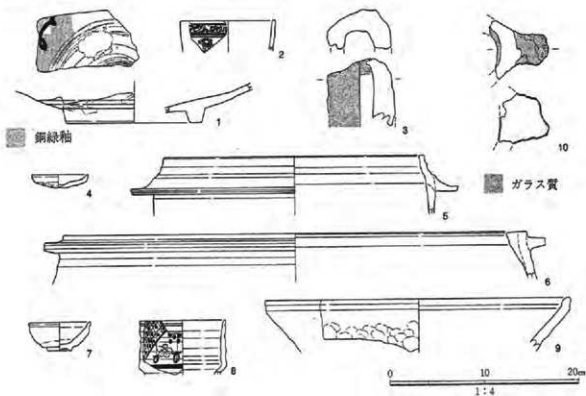
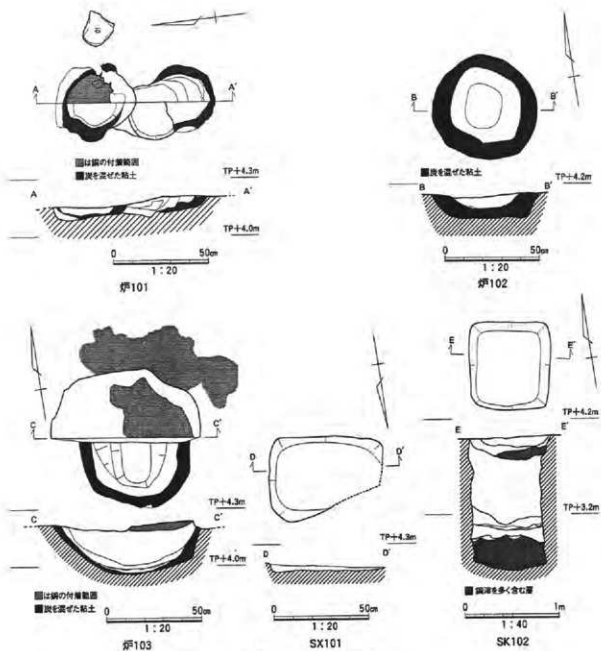


図3 各層出土遺物

第1層(1～3)、第3層(4～10)



る。肥前陶器碗25、肥前磁器染付碗26、青花碗27、焼塩壺28、方形の羽口29・30、水牛の角31(註1)などが出土した。方形の羽口は先端が火を受けて変形し、緑灰色に変色している。29は30に比べ、胎土が細かく先端の口径が小さい。肥前磁器染付碗26が、17世紀第2回半期頃のもので、廃棄土壌が埋められたのもその頃と考えられる。

SK106 長辺1.20m、短辺0.70m、深さ0.30mの長方形の遺構で、中から肥前陶器碗32・33と、南室吹きすの炉の壺に類似する遺物34が出土した。34には2個所の円形の穴があり、1個所は貫通している。表面は溶融し、端面は不規則に凸凹し、どの面にも銅分が付着している。住友鋼吹所跡で出土している南室吹きすの蓋の孔は1個所で、貫通していないものもあり、34より厚い。

不明遺構SX101 東西0.55m、南北0.45mの長方形で、深さは最深0.04mである。埋土は炭の混じっ

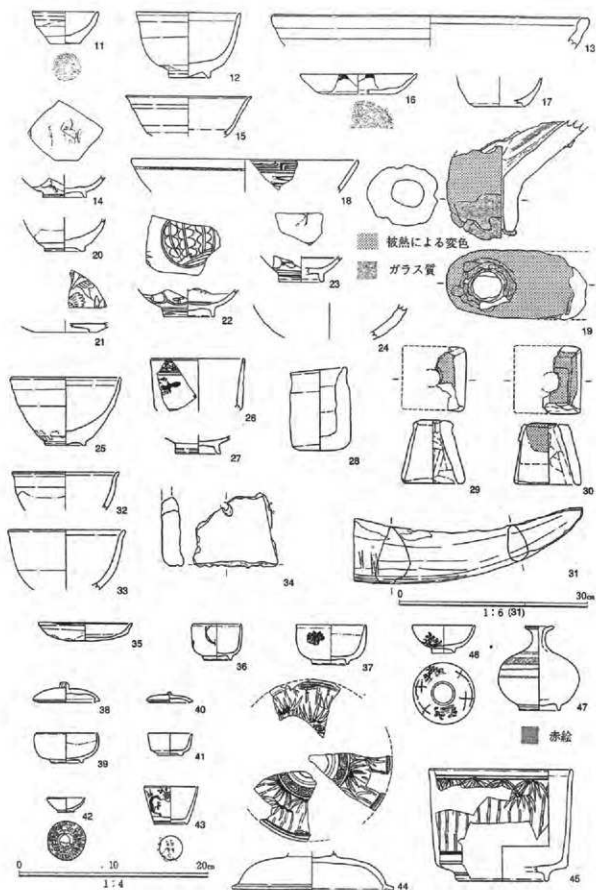


図6 各遺構出土遺物

SK102(11~15)、SK103(16~19)、SK104(20~24)、SK105(25~31)、SK106(32~34)、SK001(35~47)

た粘土で、遺物は無い。精錬関係の遺構であると思われるが、その用途は不明である。

SD101 東肩にのみ木製の板を丸太杭で留めた溝で、幅は0.40m、深さは約0.40m。長さは4.50m分を検出した。側板は幅約0.40mで、直径0.05～0.10mの丸太杭を打ち込んでいる。

SK001 焼土を埋土とする土壌でSK101を切る。土師器Ⅲ35、肥前磁器では染付小碗36・37、白磁蓋付碗38・39と40・41、白磁紅皿42、染付猪口43、染付蓋付碗44・45、染付小杯46、赤絵瓶47などが出土した。これらは蓋付の容器が多く、36・37の碗も口唇部の上面から内側にかけての部分の釉薬を掛けていないため、本来は蓋が付くものと思われる。以上の肥前磁器の年代は17世紀後半から18世紀前半ごろのものである。

他にビッドが数基あるが、建物として復元できなかった。

iii) 銅精錬遺構および関連遺物について(註2)

銅精錬に係わる発掘調査としては住友銅吹所跡のものが知られており、多くの遺構・遺物が発見され、他方、文献史料の研究もなされているが、その作業工程、道具や設備のあり方については現在も不明な点が多く残っている。

そのような中、今回の調査成果で特筆すべきは使用時の姿をとどめたまま検出された炉102である。臼で挽いたのではないと思われるような、非常に精緻に砕いた炭を粘土と混ぜ合わせて炉の内側に一定の厚さで貼り付けて壁をつくっている。住友銅吹所跡でも精錬に係わる炉は多数見つかっているが、使用痕跡を思わせるような炉内への炭層の堆積は見られたものの、本例のように保護するかのようには砂で埋めている例はなく、使用時の構造を残しているものはほとんどない。さらに、貼り付けられた炭の壁は何度かの作業でその内面が傷むのか、あるいは内面への付着物を意図的に剥ぎ取ったのか、数度にわたって貼り替えた様子が確認できた。この炭層の成分分析を行ったところ、銅と鉛を検出した(註3)。

では、この炉102はどのような作業に使用されたものであろうか。『鼓銅図録』の工程に当てはめて考えると、炉を使う工程は「間吹き」・「合吹き」・「南蛮吹き」・「灰吹き」・「棹吹き(小吹き)」・「鉛吹き」である。この中で、間吹きは大きさと検出成分が、南蛮吹きは地上に築く構造が、棹吹きは埴堀を用いることが、灰吹きは検出成分が、鉛吹きは炉に鉄鍋を用いることが、それぞれ炉102と整合しない。残るのは合吹きだけである。遺構の検出時、炉の内面に炭混り粘土がていねいに貼り付けられていたことを前述したが、その内側には粗い砂が満たされており、砂を取り除くと口径0.35m、深さ0.60mと比較的小さな窟みとなった。さて、手がかりとなる『鼓銅図録』の「合吹の図」は、工人が炉の手前に描かれているためにその構造は判然としなないのだが、行っている作業は先端に直径15cm程の鉄球が付く「しんつけ」と呼ばれる道具で炉内で溶かした「合鋼」を絡め取って叩きはずす、というものである。この作業性を考えれば炉102は適合しており、検出成分も齟齬はない。炉102は合吹きの炉と考えて問題はないであろう。

遺物の中で重要なのは2種類の羽口である。

ひとつは羽口19で欠損してはいるが、いわゆる「曲がり羽口」、「折れ羽口」と呼ばれているものである。住友銅吹所跡でも曲がり羽口は見つかっており、灰吹きに用いられたと報告している。『鼓銅図

録]にもあるように、灰吹き作業は炉の真上から下に向かって風を送る必要があることから、曲がった羽口を使用していた。今回見つかったものも形としては似ているが、羽口そのものづくりや被熱、溶融の具合から灰吹きとするには疑問が残る。また、成分分析では銅と鉛を検出している。このようなことを考え合わせると、南蛮吹き羽口という可能性が高くなるのだが、さらに検討すべき要素もあるため、ここではその可能性を指摘するにとどめる。

もう一種類、方形の羽口29・30は、住友銅吹所跡をはじめこれまで当協会が行った発掘調査では類似する出土例はない。方形の羽口でよく知られているのは佐渡金山で使用されていたもので、今回の出土例は「独歩行」の灰吹き項に描かれているものに酷似している[三枝博音編1934]。また、薬賀七三男も佐渡の羽口を「第一に驚かされたのは、角型でしかも小ぶりであること」[薬賀七三男1981]と紹介しており、今回の方形羽口は双方の記載とも合致している。復元した図のとおり非常に短く、送風管の先端部を保護する程度にしかならないのではないかと思わせる。成分分析では多量の鉛と少量の銀・銅を検出している。よって、方形羽口については灰吹きに用いられたと断定できるであろう。

以上のように今回の調査では、遺構・遺物ともにそれほど多くのものが見つまっているわけではないが、これらは銅精錬の工程を示唆する重要な資料である。当地で銅精錬が行われていた可能性が非常に高い。

住友銅吹所跡は敷地が広く、さらに江戸時代を通じて膨大な量の銅精錬を行っていた。このため、同位置での設備の造り替えが頻繁に行われ、また、後の時代に居宅用地になったことなどから、個々の遺構の遺存状態が必ずしも良好であったとは言い難い。よって、いまだに解明できていない部分も多くあるが、その成果は銅精錬遺跡を考える上で重要な指標となっている。

これに対して今回の調査では、資料数は少ないが精錬炉をはじめ多くの資料が比較的良好な状態で検出された。このような良好な資料と、確固たる指標となる過去の成果とを合わせ考えることにより、当地での精錬作業が非常に具体的なものとなった。今回の調査範囲から見て、この精錬所は隣接地に広がってゆく可能性が非常に高い。住友銅吹所跡以外の精錬所の姿がさらに明らかになることが期待できる。

3)まとめ

本調査では精錬炉と廃棄土壌を検出し、出土した精錬関連遺物も銅滓・坩堝・羽口などがある。これらは住友銅吹所跡の発掘調査で検出したものに酷似していることから、本調査地に銅の精錬所があったことが明らかになった。年代は廃棄土壌出土の肥前磁器染付が17世紀第2四半期頃と考えられることから、その頃に操業していたようである。なお、廃棄土壌がSK001によって切られていることから、17世紀後半～18世紀前半頃には操業を終えていたと考えられる。

註)

(1)この遺物については大阪市立自然史博物館の榎野博幸氏に御教示頂いた。

(2)この項の執筆は伊藤幸司が担当した

(3) 使用した機器はエネルギー分散型蛍光エックス線分析装置(エダックス社製DX95型、大阪歴史博物館設置)で表面的な分析(非破壊)を半定量的に行った。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1998、『大阪市中央区住友銅吹所跡発掘調査報告—住友銀行鯉谷新システムセンター建設に伴う発掘調査報告書—』

葉賀七三男1981、「続尾鉦録78佐渡の羽口」『日本鉦業会誌№1120』 p.10

三枝博音編1934、「独歩行」:『日本科学古典全書』朝日新聞社、p.433

調査区全景
(北から)



炉101・103・104・105
検出状況
(西から)



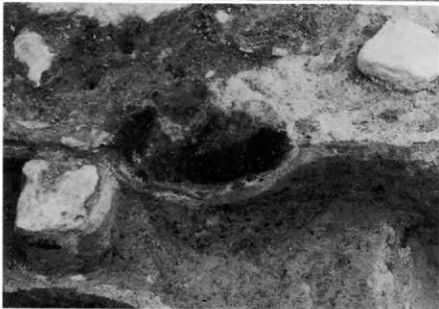
炉102とSX101
(南から)



炉102
(南から)



炉104・105
(北から)



廃棄土壌SK103
(南から)



大坂城跡発掘調査(OS05-6)報告書

調査箇所	大阪市中央区本町橋53-1・55-2
調査面積	200㎡
調査期間	平成17年9月12日～平成17年9月30日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、宮本佐知子

1) 調査に至る経緯と経過

当調査地は豊臣期大坂城惣構の西端で、惣構堀に架かる本町橋の橋詰めの北側に当る(図1)。1614(慶長19)年の大坂冬の陣では、本町橋を扶んで戦脚が繰り広げられたことが『大坂冬の陣図屏風』に描かれている。

調査地の北50mにあるマイドーム大阪の敷地では、1986年に大阪府教育委員会によって発掘調査が行われ、豊臣期から近代の良好な遺構が検出されている[大阪府教育委員会1986]。豊臣期の調査では、道の両側に礎石建物跡が並んで検出されている。本調査地も同様の遺構が検出される可能性が高

く、平成17年8月19日に大阪市教育委員会が行った試掘調査で、GL-3m下において豊臣期の遺構面が検出されたため、本調査を実施することになった。調査は9月12日に敷地の南半分で実施し、攪乱されていた地層を重機で取り除き、その後は人力により掘削した。

9月30日に風戻しを完了し、現地におけるすべての作業を終了した。調査で用いた方位は磁北を指しており、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図ではTP+○mと記す。

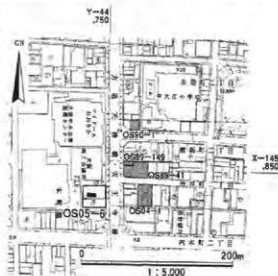


図1 調査地位位置図

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図2・3・5)

現地表下3mまで現代の攪乱で、その下の第1層を除くと、第2層上面が遺構面となる。この遺構面より下位層はトレンチを入れて確認した。

第1層：黄褐色粗粒砂を主体とする豊臣後期の整地層である。

第2層：黄灰色シルト質中粒砂層である。本層は溝SD101の西側で第2 a～c層の薄い層に分かれて、それぞれが生活面になると思われる。豊臣前期の整地層であろう。第2 a層より土師器皿6・7、瀬戸美濃焼灰釉皿9・瓶10、輸入白磁皿8、金箔押し飾り瓦24が出土した。第2 b～c層から青花皿2、李朝白磁鉢3、露胎部に鉄化粧をした瀬戸美濃焼天目碗4、丹波焼大平鉢5が出土した。

第3層：黄褐色砂礫層で、調査地西側では第3a～c層に細分されるが、これらは遺構の埋土の可能性がある。

第4層：黄色中～粗粒砂層で、堆積時期は不明である。調査地の中央部では、本層の下部で南西から北東方向の砂粒のラミナが認められた。土師質攪鉢1が出土した。

第5層：灰色中～粗粒砂層で、瓦器の細片が出土した。

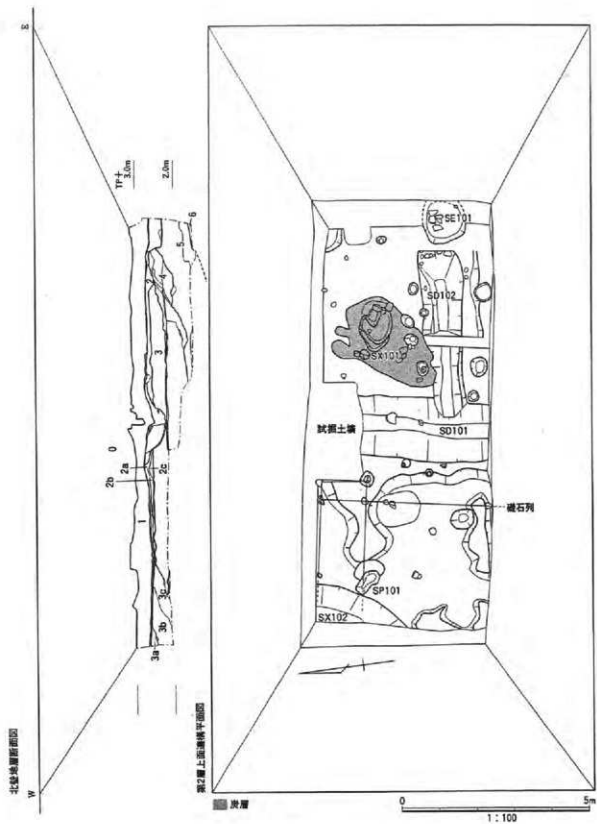


圖2 平面圖・地層断面圖

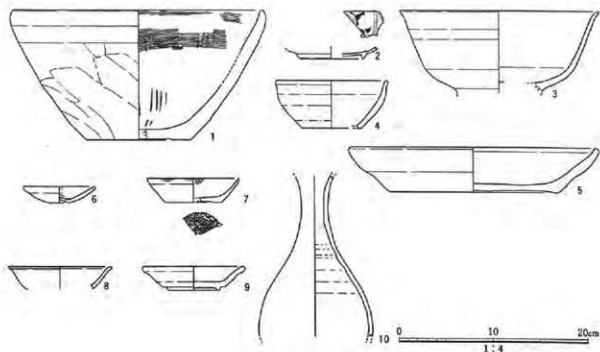


図3 各層出土遺物

第4層(1)、第2b・c層(2~5)、第2a層(6~10)

第6層：黄褐色中粒砂層で、調査地東端でのみ検出した。本層は中粒砂層で分級がよく(砂の粒がそろっている)海浜の砂に類似している。

ii) 遺構と遺物

a. 第2層上面検出遺構(図2・4・5)

T字に交わる溝SD101・102、礎石列、性格不明の土塊状の遺構SX101・102、井戸SE101、ピットSP101等を検出した。

SD101 幅1.8m、深さ0.5mの南北方向の溝で、一度に埋戻されている。埋土から青花皿11と羽口12(図4)が出土した。

SD102 SD101に流れ込む溝で、東端は行き止まりになっている。幅は1.5mあり、SX101との先後関係は明らかにできなかった。埋土から土師器皿13・青花碗14・備前焼播鉢15と、端面に刻印のある平瓦25(図5)が出土した。

礎石列 手の平程度の大きさの礎石が東西方向に3個、南北方向に4個検出されたが、建物の規模や構造などは明らかでない。礎石列はSD101・102と同方位であるため、同時期の遺構と考えられる。

SX101 不整形に炭層が広がった遺構である。その範囲は東西2.0m、南北2.5mで、深さは約0.3~0.5mである。北東部の約1mの範囲が円形に落込んでおり、炭や瓦などが出土した。埋土と周辺の炭層から土師器皿16・丹波焼大平鉢17・備前焼徳利18・瀬戸美濃焼碗19と、ほぼ完形の丸瓦28、厚手の平瓦で側縁の角度が緩やかな26、厚手の平瓦27が出土した。27には端面に花形の刻印がある。26のような特徴の瓦は、豊巨期大坂城惣構内に当る、和泉町1丁目で見つかった瓦窯出土の瓦[大阪市文化財協会2003]と似ている。

SX102 北西部で検出された落込みで、大半が調査地外であるため詳細は不明である。

SE101 直径1.1mで、深さは0.5mまで掘削した。同時期のSD102の東に接するように位置する井戸で、井戸側は明らかではない。この井戸の水をSD102から、SD101まで流れるようにしていたとも考えられる配置である。SD101の東側のSD102・SX101・SE101は相互に関連して、何らかの作業スペースになる可能性もある。埴土から土師質羽釜20・備前焼鉢鉢21・備前焼鉢鉢22と、平瓦29・30が出土した。

他にビットSP101から輸入白磁皿23が出土している。

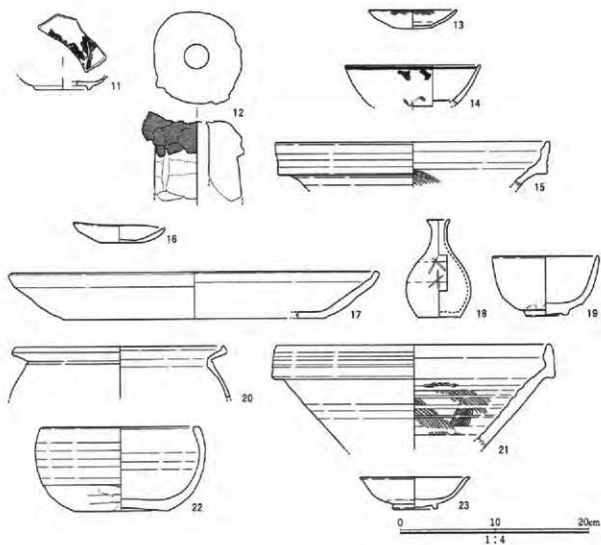


図4 遺構出土遺物

SD101(11・12)、SD102(13~15)、SX101(16~19)
SE101(20~22)、SP101(23)

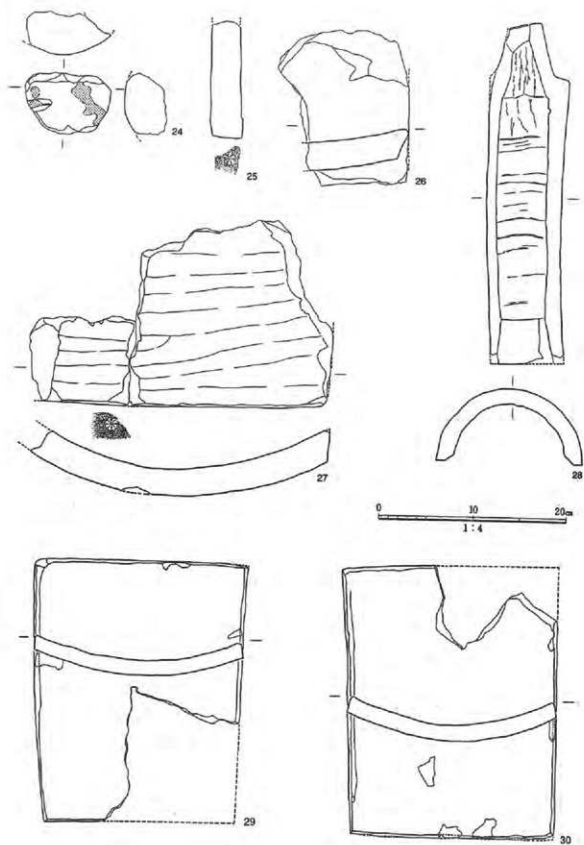


图5 出土瓦

2a層(24)、SD102(25)、SX101(26~28)、SE101(29·30) 標本のA1:2

iii)まとめ

今回の調査で豊臣前期の南北方向の溝と建物跡を検出した。北側の調査地と同じように、前期には町屋が広がっていたことが考えられる。豊臣期大坂城の構造を考えるうえで重要な調査であった。

また、豊臣前期以前はトレンチ調査だけであるが、瓦器の微細片を含む中世の地層があり、その下には海浜の砂と類似した地層を検出した。はっきりした時期は不明だが、中世には本調査地点周辺が海に近い場所であったらしいことが推測できた。

参考文献

- 大阪市文化財協会2003、「OS02-8次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-2001・2002年度-』、pp.49-74
大阪府教育委員会1986、「大坂城惣構・西町奉行所跡発掘調査概要」



調査地全景(東から)



溝SD102(手前左)とSD101(上)検出状況(東から)

大坂城跡発掘調査(OS05-7)報告書

調査箇所	大阪市中央区十二軒町15-1, 15-7, 15-8
調査面積	91㎡
調査期間	平成17年12月16日～平成17年12月21日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、平井和

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、大坂城跡の南西部に位置している(図1・2)。地形的には上町台地の西斜面に形成された深さ6mの急峻な小谷の付近に立地している[趙2004]。今回、事務所建設に伴う基礎工事において、当該地の西側地境付近で石垣状の遺構が見つかったこと、試掘調査で古代・中世の遺物を含む包含層が確認されたことから本調査を実施するはこびとなった。近隣の調査成果を見ると、内久宝寺町三丁目ではOS93-2次調査において徳川氏大坂城期の小鍛冶に関わる遺構が確認され[清水和1993]、粉川町ではOS93-6次調査において難波宮期の大規模な整地層が確認されている[寺井誠2003]。

十二軒町の辺りは寛文期(1661～1673年)の「大坂町中並村々絵図」によると、大坂城代金奉行手代八人および、蔵奉行手代十二人の屋敷が記され、文久三(1863)年の「改正増補国宝大阪全図」においても「御金同心」「ヲクラ手代」と記されていることから、徳川氏大坂城期には金奉行や蔵奉行の手代屋敷地として利用されていたことがわかっていて、したがって、近世における大坂城代奉行所所有地における土地利用のありかたについて考古学的成果が期待された。

調査は、GL-1mまで重機によって掘削し、以下の地層については人力作業によって遺構と遺物の検出に努めた。

なお、図4で使用した方位は磁北を示している。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿入図中ではTP+0mと記した。

2) 調査の結果



図1 調査地位置図



図2 調査地周辺の微地形

i) 層序(図3、4)

調査では現地表面下2.5mまでの地層の観察を行った。以下に層序についての所見を述べる。

第0層：暗褐色中粒砂～礫で構成される現代の盛土層である。本層には8世紀代の須恵器杯蓋(図3-1)や、18世紀代の肥前磁器小杯(図3-4)、肥前磁器碗(図3-5)など下層の遺物が含まれていた。

第1層：オリーブ褐色細～粗粒砂層で、近世の小穴の埋土である。

第2層：灰色細粒砂層で、後述する第6層の上面で部分的に認められた。鎌倉時代の東播系の須恵器鉢3が出土した。

第3層：シルト～粗粒砂層で構成されるSX101の埋土で4層に細分される。

第4層：シルト質粘土～中粒砂層で構成されるSX102の埋土で5層に細分される。飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

第5層：シルト～細粒砂層を主体とするSX103の埋土で4層に細分される。飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

第6層：黄褐色中～粗粒砂層で、洪積層である。

ii) 遺構と遺物(図3、4)

a. 古代

SX101 南西から北東方向に傾斜する遺構で、幅3.5m以上、深さ1mである。東壁の観察から、SX102を切って掘込んだものと考えられる。埋土にはぶい黄褐～灰オリーブ色シルト～粗粒砂層を主体としており、飛鳥～奈良時代の土師器細片が出土した。

SX102 西から東方向に傾斜する遺構で、幅4m以上、深さ0.8mである。東壁および、北壁の観察から、SX103の上部を掘込んだものと考えられる。埋土はオリーブ褐色シルト質粘土～中粒砂層

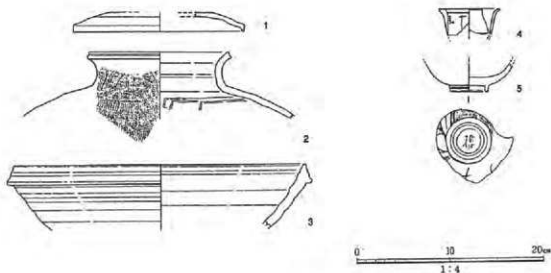


図3 出土遺物

1: 第0層、2: SX102、3: 第2層、4・5: 第0層

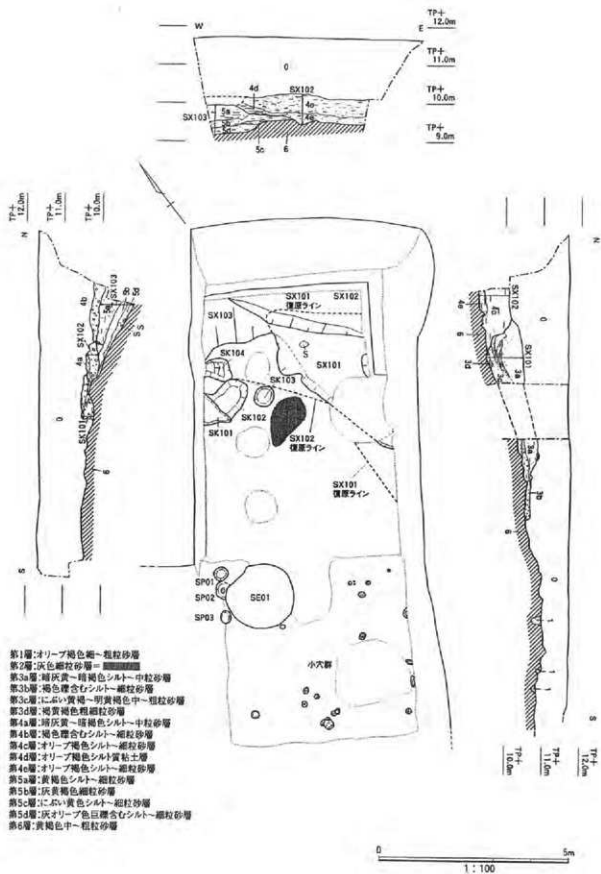


図4 平面図および断面図

を主体としている。落込状の遺構と考えられる。飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器壺2・哺乳類の骨が出土した。これについては保存状態が悪く、同定はできなかった。

SX103 南から北方向に下方傾斜する遺構で、幅2.2m以上、深さ0.7mである。西壁および北壁の観察から、SX102によって上部を壊されていることがわかった。埋土は、黄褐色シルト～細粒砂層を主体としており、谷地形を埋めた遺構と考えられる。飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

SK101 長軸0.7m以上、短軸0.6m、深さ0.17mの不定形な土壌で、埋土はにぶい黄褐～灰オリーブ色細粒砂である。土師器の細片が出土した。SK102を切る第3層上面の遺構である。

SK102～104 長軸0.5～0.9m以上、短軸0.6～0.8m、深さ0.05～0.2mの不定形な土壌である。埋土はにぶい黄褐～灰オリーブ色細粒砂を主体としたもので、SK101と埋土の状況が近似していることからほぼ同時期に埋まった土壌と考えられる。出土遺物はなかった。

b. 近世

ここでは、調査地南部で確認した近世の遺構について述べる。

SE01 直径1.7m、深さ1m以上の井戸で、掘形にそって井戸瓦が組まれていた。19世紀以降、厚手で表面に刻目のある井戸瓦の使用が一般化されることから、その時期に形成された井戸の可能性が高いと考えられる。瓦のほかには出土遺物はなかった。

SP01 直径0.3m、深さ0.1mの柱穴である。

SP02 直径0.3m、深さ約0.4mの柱穴で、直径0.15mの柱痕跡が認められた。

SP03 直径0.3m、深さ0.37mの柱穴である。

これらの柱穴の埋土は、オリーブ褐色細～粗粒砂で、近似した時期の柱穴と考えられるが、出土遺物がなく相互の関係については不明である。

小穴群 調査地南部には、第1層を埋土とする形状が不均一な柱穴が分布していた。これらの柱穴は、直径0.15～0.2m、深さ0.07～0.27mで、時期の判別できる出土遺物はなかった。

3) まとめ

今回の調査地は、上町台地の西側斜面のなかでも急峻な小谷に近い場所に位置している。この急峻な傾斜地を雑壇状に利用して土地区画が行われていることから、史料に記された「十二軒町」の土地利用を継承していることが窺われる。今回の調査によって古代以降の開発で、この谷地形の改変が試みられ、生活の場として利用されていたことがわかった。近世の遺構は、徳川氏大坂城期と考えられる井戸や小穴群が確認できたものの、奉行所手代屋敷地内の建物としての特定はできなかった。今後の調査によって、史料に記された武家屋敷としての「十二軒町」の歴史が、地形的背景を踏まえてより明らかになることが期待される。

引用・参考文献

清水和1993、『ヒガシ運送サービス(株)による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS93-2)略報』:大阪市文化財協会

寺井誠2003、「第8節 F地区の調査」：大阪市文化財協会編「大板城跡」Ⅴ、pp.322

趙哲済2004、「第1節 地形と地質」：大阪市文化財協会編「大板城下町跡」Ⅱ、pp.1-7

古代の遺構
(北から)



骨と土器出土状況：SX102
(南から)



北壁地層断面
(南から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ05-1)報告書

調査箇所	大阪市中央区瓦町3丁目17-2, 18, 19
調査面積	77㎡
調査期間	平成17年8月10日～平成15年8月20日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、藤田幸夫

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、大坂城下町跡の一面にあたる(図1)。今回の調査地では、本調査に先立って大阪市教育局委員会により試掘調査が実施された。その結果、江戸時代前期頃と思われる地層やそれ以前と想定される地層が遺存している事が明らかとなり、本調査を実施した。なお、調査対象となる地層が地表下2mと深いため、安全性を考慮して敷地北辺部の土留工事を先行して実施し、東・西・北と三方を土留めて囲まれた77㎡を調査対象とした(図2)。調査は、江戸時代後期以降の盛土層を重機で掘削し、それ以下を人力で掘削した。後述するように、第1遺構面調査終了後に下面の遺構面での調査を行うべく、サブトレンチを設定して掘削したが、明確な遺構は確認できなかった。そのため、下層の遺構面までの掘削は東・中央・西の3個所に留めた(図7)。その面積は、第1遺構面の約40%にあたる。

2) 調査の結果

1) 層序(図3)

第0層 機械で掘削した層で、主として江戸時代後期以降の堆積層である。

第1層 茶褐色細砂質シルト層で、第1遺構面を形成する層である。層中から図4の須恵器、土師器等が出土した。

第2層 黄褐色細砂層で今回の調査で確認した最下層である。この層の上面からの遺構は確認できなかった。



図1 調査地位置図・S=1:2500



図2 調査区配置図

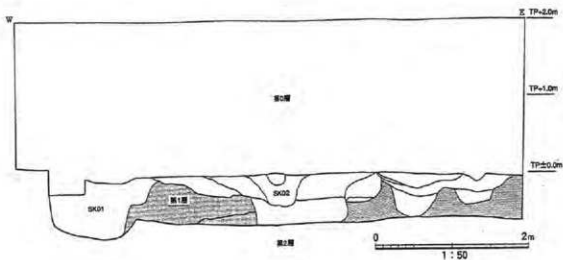


図3 西壁地層図

ii) 遺構と遺物 (図4～6)

第1層出土遺物 (図4)

第1層からは、瓦器の細片とともに須恵器1～3・7、土師器が出土している。

今回の調査地では確認に至らなかったが、周辺に8世紀後半から9世紀の古代の遺構が存在する可能性は高いと思われる。

第1遺構面検出遺構 (図6)

先述したように第1遺構面上面までを機械で掘削したために、検出した遺構は、数時期に分けられるが、江戸時代中期前後の遺構を対象とする。遺構には、井戸・土壇などがある。

また、土壇は不整形のものであり、埋土は殆どが黒色の粘土質シルトである。

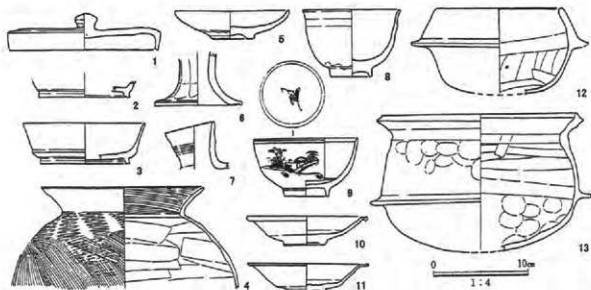


図4 出土遺物実測図

第1層(1～4, 7)、SK10(5)、SX01(6)、SK24(8～11)、SK22(12, 13)

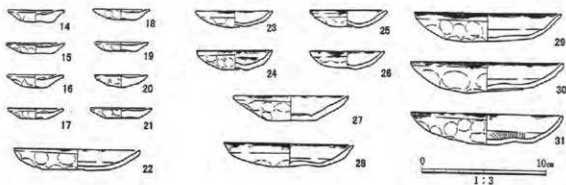


図5 出土土師皿実測図

SK14(17,18,22,29,30),SK22(19~21,23~26,28,31),SK02(27),第1遺構面上面精査中(14~16)

SK14,SK22は調査地東端で検出したもので、埋土には多くの陶磁器類のほかには木質の遺物を含んでいた。これらは、ゴミの廃棄場と思われる。

他の土壌についてはその機能については明らかでないが、やや大型のSK10~12・24は同様の機能が想定できよう。

SE01は、調査区中央で検出した直径約0.6mの井戸である。掘形は1.2m×1.1mのやや不整形である。井筒内の埋土は他の遺構とは異なり細粒砂を多く含むシルトであり、埋め戻された時期が異なる可能性がある。

第1遺構面検出遺構出土遺物(図4・5)

8~11は、SK24から出土した。8は唐津の碗で、9は肥前の染付碗である。10・11は、肥前陶器の溝縁皿である。かなり薄くつくられた透明釉のかかった皿である。これらは、それぞれ17世紀中頃の時期のものである。

5は、SK10から出土した唐津の皿である。土師質羽釜12・13は、SK22から出土した。SK22からは、図示していないが17世紀中頃の肥前陶磁器が多く出土しており、12・13は本来第1層中に含まれていたか、あるいは下面の遺構に含まれていたものであろう。

土師皿は各遺構から出土しているが、主としてSK14・22から出土したものを図示した。

14~21は、口径4~5cmと非常に小型で、内面のくぼみも極く浅いものである。外面はユビオサエで成形している。灯明皿に見られる煤は全く認められない。このような極く小型の土師皿の出土例はないが、その大きさや形状から実用的なものでなく、ミニチュアと思われる。

23~26は、口径6cm前後の小型品である。それぞれ数箇所煤の付着が認められる。

22・27・28は、口径9~10cmの中型の皿である。22は、煤の付着が数箇所に認められるが、27・28は、ほぼ全面に認められる。

29~31は、口径12cm前後の大型の皿である。外面の成形は、小型、中型と同じくユビオサエである。また、煤はほぼ全面に付着している。

今回出土した土師皿は、図示したものでないが殆どが完形品かあるいは完形に復元可能なもので、

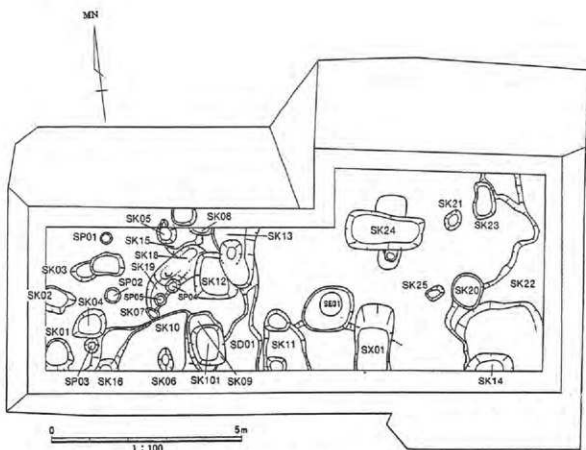


図6 検出遺構平面図

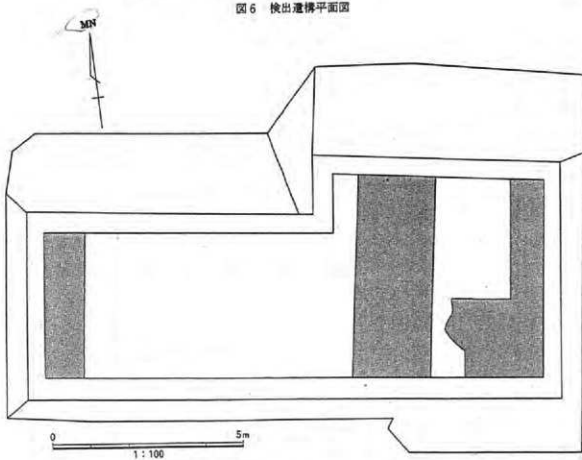


図7 サブトレンチ位置図(網目部分がサブトレンチ)

中型・大型品はほぼ全面に煤が認められた。

3) まとめ

本調査区付近に中世以前の遺構が存在する可能性が認められた。今後、周辺の発掘調査を継続することによって、その実態がさらに明らかになっていくことであろう。

今回の調査では、17世紀中頃の遺構・遺物が中心で、豊臣期の遺構・遺物が判然としなかったが、このことは調査面積の狭小さや、多くの土壌によって破壊されてしまったことによるであろう。

いずれにしても、今後、本調査地周辺での調査が注目されるところである。

第1遺構面
遺構検出状況
(東から)



SX02土師皿出土状況



サブトレンチ掘下げ後
(北から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ05-2)報告書

調査箇所 大阪市中央区本町1丁目9-1
調査面積 40㎡
調査期間 平成17年9月18日～9月20日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 田中清美

1) 調査に至る経緯と経過

調査箇所は豊臣氏大坂城東横堀の西側、大坂城下町跡に位置しており(図1・2)、周辺には古代・中世から近世にかけての遺構・遺物が検出された調査地(OJ92-17・96-11・97-7)がある。大阪市教育委員会が調査地内で行なった試掘調査でも現地表面下1.7mで17世紀後半の肥前陶磁器を含む整地層が、約2.2m下で江戸時代初期と推定される生活面が確認されたため、今回の調査となった。本調査は試掘調査の結果に基づいて、建設工事の影響を受ける範囲に限り、現地表面下1.6mまでを重機で掘削した後、現地表面下2.5m(TP+1.8m)まで実施した。

9月18日に重機による掘削に着手し、引き続き手掘りで遺構・遺物の検出作業を行なった。翌日に江戸時代初期の礎石建物を確認し、写真撮影・実測等を行って、9月20日には礎石建物下の焼土層の掘削と第5層上面の遺構の確認調査を含めて現地における全ての調査を完了した。

本調査で使用した方位は磁北、水準値はTP値である。

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図3・7)

第0層: コンクリート破片を多量に含む整地層である。

第1層: 褐色シルト泥り粗～細粒砂、黒褐色粘土質シルト、暗灰黄色細粒砂から構成される

地層で、層厚は5～30cmあり、土師器灯明皿1、露胎部に鉄錆を塗布した肥前青磁鉢2が出土した。1は17世紀後半から18世紀初頭、2は17世紀の中葉に属するものであろう。本層の下面ではSK101-105、SD101、SP101-105などの遺構が検出された。

第2層: 淡黄色極細粒砂、明黄褐色細粒砂を主体とする整地層で、層厚は15cm前後ある。17世紀



図1 調査地位位置図

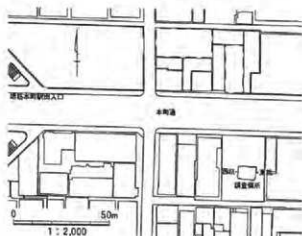


図2 調査区位置図

前半代に属する蛇目高台のある中国磁器青花皿3、中国漳州窯磁器青花碗4、17世紀後半代から18世紀前半代の肥前磁器染付蓋5、内野山系の甕6が出土した。

第3層：黄褐色細粒砂、褐灰色シルト、灰黄褐色粘土質シルトから成る水つきの地層で、層厚は5～15cmある。17世紀初頭頃の中国漳州窯青花碗7、土師質土器焙烙8が出土したが、17世紀末から18世紀初頭に属する8は混入品の可能性がある。第4層上位の本層基底面で礎石建物SB401やSP401～403が検出された。

第4層：本層は第4a層の褐色シルト混り砂礫層と、第4b層の灰黄褐色シルト層から成り、多量の焼土を含む。層厚は10～40cmあり、第4a層から豊臣期とみられる三巴文軒丸瓦9が出土した。本層中に含まれる多量の焼土は大阪冬の陣に関わるものと考えられる。上面の標高は2.8m前後ある。

第5層：本層は第5a層(灰褐色シルト混り細粒砂・にぶい黄褐色細粒砂・灰黄褐色シルト混り細粒砂)、第5b層(粘土礫層を含む灰黄褐色細粒砂～礫混り細粒砂・淡黄色砂礫～粘土混り砂礫層)から成る整地層で、層厚は50cm以上ある。試掘調査では本層直下で地山層と考えられる水成の砂礫層が確認されている。

ii) 遺構と遺物

a：第3層基底面の遺構と遺物(図4・7)

SB401 調査区の北東部に位置する礎石建物で、東西および南北方向に組み合う礎石列を検出した。南側の東西方向の礎石列には礎石間に床束の礎石とみられる3個の小ぶりの石材が確認された。それらの間隔は東から0.8m、0.8m、0.5m、1.3mと不揃いであった。内側の東西方向の礎石の間隔は1.2mあるが、南側の礎石列の間隔西側の礎石とは距離が一致しない。南北方向の間仕切りの礎石とも考えられたが建物の大半が調査範囲外であり、詳細は不明である。間仕切りとみられる礎石の近くから肥前陶器小杯10および肥前陶器瓶11が出土した。小杯10は灰色の軸を掛けており、高台には砂目がある。肥前陶器瓶11は体部を面取りしており、内面には当て具痕がある。前者は17世紀前半代、後者も17世紀中葉以前に属するもので、小杯10の年代とさほど変わらないであろう。なお、SB401の礎石列は現在の本町通りにはほぼ平行する。

SP401～403 調査区の西部に位置する土壇状の小穴群である。SP401は短径0.4m、長径0.5m、深さは約0.3mある。SP402は径約0.25mあり、深さは約0.15mある。SP403は径約0.6m、深さは約0.3mある。以上の遺構の埋土は下層の第4層の礫層を主体にしており、一度に埋め戻された様子が疑がわれた。柱痕跡はなく、遺物も特に出土しなかった。

b：第1層下面の遺構と遺物(図5～7)

大小の土壇や小穴が検出されたが、多くの遺構は調査範囲外に広がっており、全体が確認されたものは少ない。

SK101 短辺0.5～0.6m、長辺1.8mで、平面形は隅丸長方形を呈する。土壇は中央より東側が一段深くなるほか、底は西から東に向かって傾斜している。埋土は上層の黒褐色極細粒砂ないしシルト、暗灰黄色粘土質シルト、下層の灰黄色粘土質シルト、黄灰色シルトに区分される。これらは炭化物や植物遺体を含むほか、極細粒砂や細粒砂のラミナが顕著に観察されており、水つき状態で堆積したも

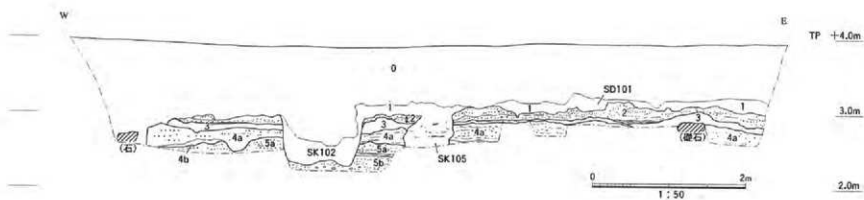


図3 北園断面

第0層：現代整地層

第1層：褐色シルト混り粗～細粒砂・黒褐色粘土質シルト・暗灰黄色細粒砂

第2層：淡黄色極細粒砂・明黄褐色細粒砂

第3層：黄褐色細粒砂・褐灰色シルト・灰黄褐色粘土質シルト

第4a層：褐色シルト混り砂礫

第4b層：灰黄褐色シルト

第5a層：灰褐色シルト混り細粒砂・にぶい黄褐色細粒砂・灰黄褐色シルト混り細粒砂

第5b層：粘土偽礫を含む灰黄褐色細粒砂～礫混り細粒砂

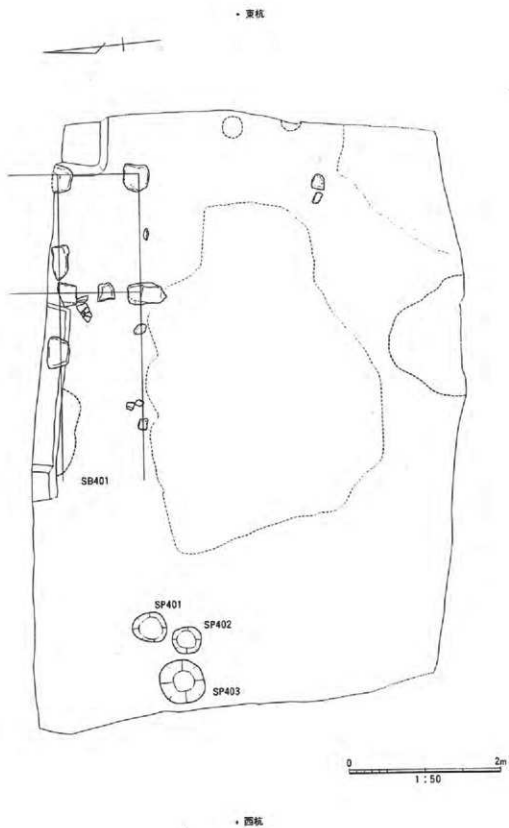


圖4 第3層基底面檢出遺構

のと思われる。各層から陶磁器類が出土したが、中には上下層の遺物が接合したのもあった。

肥前陶器小杯12、肥前磁器染付碗13、肥前青磁香炉あるいは火入14、京焼風の肥前陶器碗15をはじめ、福島区で近年発見された仮称「堂島窯」産とみられる器表面に灰白色の釉を掛けた後、繊細な唐草文が描かれた陶器向付16、口縁部に煤が付着した土師器灯明皿17・18などが出土した。以上のほかにも軟質施釉陶器や土師質土器焙烙、肥前染付などが出土しており、これらは17世紀後半から18世紀前半に属するものと思われる。なお、土壌の検出作業中に出土した肥前磁器染付碗34、肥前陶器刷毛目碗35はともに18世紀前半に属するもので、上述した陶磁器類よりやや新しい。

SK102 平面形が長方形状を呈するが遺構の大半が調査範囲外にあるため、詳細は不明である。土壌の深さは検出面から約0.7mあり、底面から炭化した板材が敷かれた状態で検出された。埋土は漆喰ブロックを含む黒褐色シルト混り粗～細粒砂である。

肥前磁器染付碗19～22、肥前磁器染付皿23・24、肥前陶器碗25、京焼系陶器半筒碗26、巴文軒丸瓦27をはじめ、固化していないが土師質土器大型甕が出土した。以上の陶磁器は17世紀後半から18世紀前半頃に属するものであろう。

SK104 調査区の南部に位置する土壌で、遺構の大半が調査範囲外のため、詳細は不明である。2段に掘り込まれており、最大幅1.8m、最深部は検出面から約0.8mあった。埋土は暗灰色シルト混り細粒砂が主体で、肥前磁器染付碗28、見込みに菊の印花文および8条の御揃文を施した黄瀬戸鉢29、土師質土器焙烙30などが出土した。これらは17世紀後半から18世紀初頭に属するものと思われる。

SK105 SK102の東に位置する土壌で、遺構の大半が調査範囲外であり詳細は不明である。検出面からの深さは約0.6mあり、埋土は炭化物を多く含む黒灰色シルト混り粗～細粒砂で、肥前磁器碗31、肥前磁器染付碗32ほかが出土した。31は17世紀中頃、32は17世紀後半から18世紀前半に属するものである。

SD101 調査区の北東部に位置する幅0.5m、深さ0.2m前後の溝である。溝内には水つきの褐色極細粒砂が堆積しており、香炉または火入れと思われる肥前青磁33や陶磁器の細片が数点出土した。肥前青磁33は露胎部および内面に錆釉を施したもので、17世紀後半から18世紀前半に属するものであろう。

SP101・102 ともに直径0.3mの小穴で、深さは検出面から約0.3mある。埋土は暗灰黄褐色砂礫混りシルトで、柱痕跡は確認されなかったが、掘立柱の掘形と思われる。

3)まとめ

今回の調査は調査範囲が狭い上に既設建物の攪乱もあって、遺構の全体が明らかになったものは少ない。しかし、調査個所の近隣で確認されているような大坂冬の陣に伴う可能性の高い焼土を主体にした整地層が検出されたほか、17世紀初頭から18世紀後半に至る複数の生活面および遺構・遺物を調査することができた。特に本調査で確認した17世紀前半頃の肥前陶器小杯や肥前陶器甕を伴う礎石建物は、当地に大坂冬の陣後さほど時を経ない時期に家屋が再建されたことを物語っており、船場の復興を具体的に示す資料として注目される。

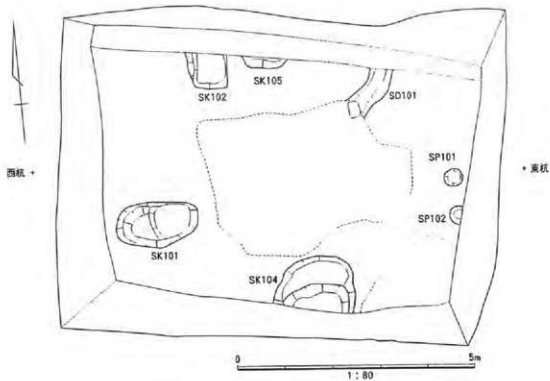
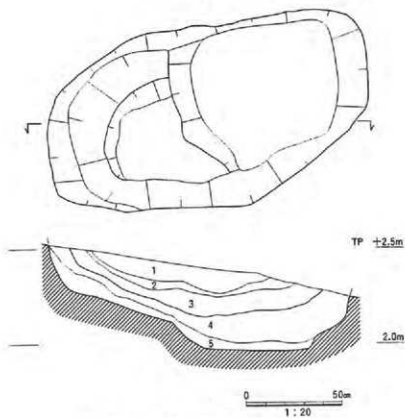


図5 第1層下面検出遺構



- 1: 黒褐色原細粒砂 2: 黒褐色シルト 3: 暗灰黄色粘土質シルト
 4: 灰黄色粘土質シルト 5: 黄灰色シルト

図6 SK101平・断面

本調査では本町筋を挟んで調査個所の北西100m、北東120m地点に位置する調査地点（OJ96-11・97-7）をはじめ、南東100mの調査地点（OJ92-17）で検出されているような中世から豊臣前期にかけての遺構・遺物は確認されなかったが、既述したような大坂冬の陣に伴うものとみられる焼土層は、近隣に豊臣後期の生活面が存在することを示唆しており、今後の調査が待たれるところである。



图7 出土遺物

1-2: 第1層、3-6: 第2層、7-8: 第3層、9: 第4層、10-11: SB401、12-18: SK101、19-27: SK102、
28-30: SK104、31-32: SK105、33: SD101、34-35: SK101檢出面

調査区北壁断面
(南から)



第3層基底面検出遺構全景
(SK101は上層遺構:東から)



SK101断面
(北から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ05-5)報告書

調査箇所	大阪市中央区平野町1丁目24-2
調査面積	90㎡
調査期間	平成17年11月21日～25日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の中央東端、東横堀川の西50mに位置する(図1)。周辺では、北方の大坂魚市場跡を中心にこれまで多くの調査が行われており、近世の町屋や魚市場跡、下層には中世・古代の遺構・遺物が数多く検出されている。また、近接する調査地では、道一つ隔てた西側で、OJ92-29次調査、OJ98-2次調査が行われ、前者では豊臣前期の大きな東西溝、豊臣後期の礎石が検出されている。

この度、当該地において建設工事が行われることになり、平成17年11月1日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下約2.2mで顕著な盛土の違いが認められ、豊臣期の生活面である可能性があったため、本調査を行うことになった。

調査区は敷地中央に南北6.0m、東西15.0mに設定し、地表下約2.0mまでの現代盛土および江戸時代の地層を重機で除去し、その後人力によって掘削を行った。遺構検出作業は地表下約2.2mと3.0mで2度行い、適宜図面・写真などの記録作業を行った。調査区の幅と掘削深度の関係で、地表下3.0m以下については、下位の地層の情報を得るための部分的な調査に留めた。埋戻しを含む発掘調査に係るすべての作業は11月25日に終了した。

なお、本報告で用いた方位は磁北で、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)、本文・挿図中ではTP±Omと記す。

2) 調査の結果

i) 層序(図2)

本調査地における層序は以下のとおりである。

第1層：現代盛土である。

第2a層：黒褐色粘質土を主体とする近世整地層で、層厚は約30cmである。18世紀以降の遺物を含む。

第2b層：黒褐色粘質土層の間に薄い砂層が介在する整地層である。層厚約50cmで、コンニャク印判を施す肥前磁器が出土しており、18世紀以降の年代が与えられる。上面で井戸が検出された。

第3a層：ぶい黄褐色粗粒砂の盛土である。層厚約80cmで、近世初期の遺物を多く含むものの、18世紀以降の瓦が含まれる。

第3b層：灰ナリブ色礫混粗粒砂からなる近世盛土である。層厚は約20～60cmで、近世初期の瓦を多く含む。第3a層同様、本層は南西方向から北東方向へ盛土されていることが地層の観察から窺え、一連の整地作業に伴うものと考えられる。

第4a層：暗褐色中粒砂の盛土である。層厚は約20



図1 調査地の位置

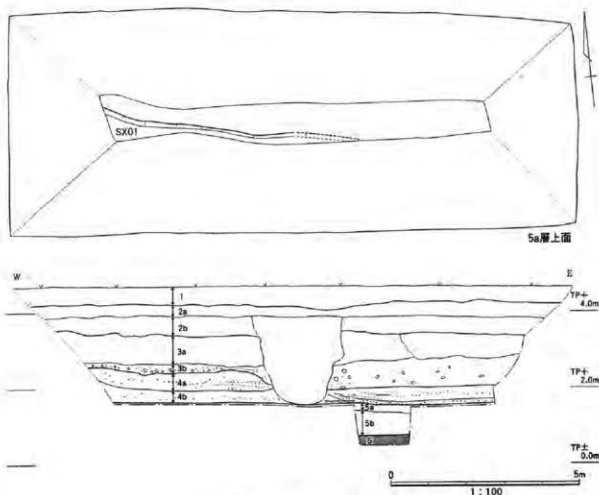


図2 調査区平面・断面図

～60cmで、遺物は確認できず、詳細な時期は不明である。

第4b層：にぶい黄褐色細～粗粒砂で水成層である。層厚約30cmで、遺物は確認できず、詳細な時期は不明である。

第5a層：灰黄褐色細粒砂質シルトの湿地の堆積層である。層厚約10cmで、上面で南西方向の落ちが検出された。水田耕作土の可能性ある。遺物は確認できず、詳細な時期は不明である。

第5b層：にぶい黄褐色中粒砂である。層厚約60cmで、粘質の第5a層から連続的に移行し、下部ではしまりが悪くなる。遺物は確認できず、詳細な時期は不明である。

第6層：黒褐色細粒砂質シルトである。層厚約30cm以上で、堅くしまる。中世の遺物が出土した。

ii) 遺構と遺物(図2・3)

第5a層上面で、SX01を検出した。比高約5cmの南西方向へのわずかな落込みであるが、部分的な検出のため、性格は不明である。

図化した遺物はいずれも遺物包含層から出土したものである。第6層からは、古代の須恵器杯片とともに、中世の瓦質土釜1が出土した。体部が丸く、中位に鈿を巡らす。大阪で広く出土する有段タイプではなく、京都や奈良でよく見られるものである。第3b層からは、土師器土釜、唐津焼碗・片口鉢・播鉢、備前焼播鉢、瀬戸美濃焼天目碗、青花皿などが出土した。2は備前焼播鉢で、口縁端部の拡張が退化し

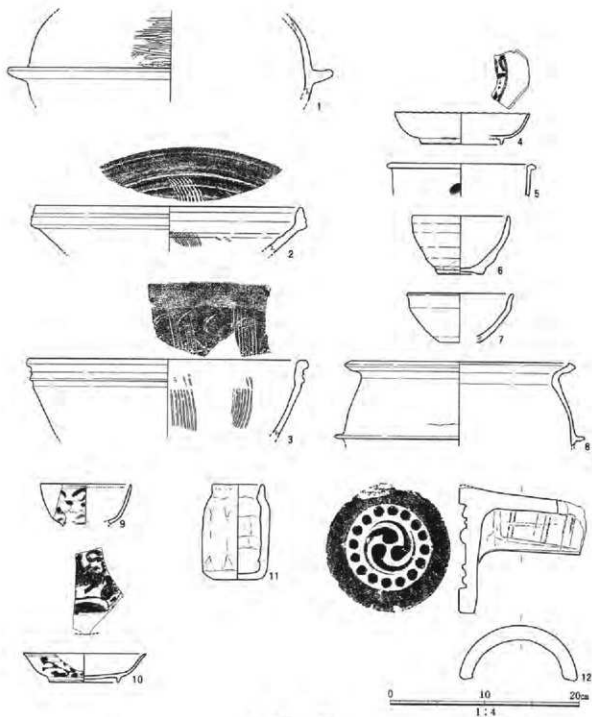


図3 出土遺物

第6層(1)、第3b層(2~8)、第3a層(9~12)

たタイプである。3は唐津焼播鉢で、内面から口縁部の外端面までを施軸する。4は口縁部を細かく切り込んで輪花にした青花皿である。5は小さな破片であるが、口縁端部の形状から唐津焼片口鉢と思われる。6は唐津焼碗である。軟質で口縁が直口のタイプであり、乳白色の釉がかかる。7は瀬戸美濃焼鉄袖天目碗である。8は土師器の大和型土釜で、最大径が体部の中位にあり、内面はていねいなナデで調整される。以上、第3b層の出土遺物はいずれも豊臣期以前のものであり、当該期の地層を客土したものであることがわかる。第3a層からは、土師皿、焼塩甕、備前焼壺、丹波焼播鉢、瀬戸美濃焼皿、青花、軒丸瓦など

が出土した。9は青花碗で、口縁部が直口なタイプである。10は青花皿である。端反り皿で、細い高台で疊付を軸剥ぎしている。11は焼塩壺で、口縁部と体部の境は稜をなさず、内面には布目の痕跡は認められない。12は巴文軒丸瓦で、珠文や巴文の形状、外縁の幅から、18世紀以降に位置づけられる。以上、第3a層は豊臣期の遺物を含むものの、江戸時代中頃以降に客土されたことがわかる。

3)まとめ

今回の調査では、限られた面積であるものの、周辺の調査で観察される豊臣期の顕著な遺構や焼土層が確認できなかったことから、少なくとも当該地においては、江戸時代中頃以降まで大規模な土地開発が及んでいないことが判明した。東横堀川に近接していることが開発の遅れた原因と考えられるが、今回の調査地の西50mに位置するOJ92-29次調査地では、TP+2.0m前後で、豊臣期の遺構が多数検出されていることを考えると、両調査地の間で土地利用に大きな変化があることが予想される。

今回の調査は小規模ながら、大坂城下町および市街地開発の歴史を知る貴重な知見とともに、今後の周辺地域の調査のための手がかりが得られたといえる。

調査区全景
(南西から)



5a層上面検出状況
(東から)



北壁断面
(南から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ05-6) 報告書

調査箇所 大阪市中央区平野町3丁目1-2
調査面積 120㎡
調査期間 平成17年12月8日～平成17年12月16日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 田中清美、宮本佐知子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町の北西部に位置し(図1)、周辺では、古代から近世に至る遺構や遺物が検出されている[大阪市文化財協会2004]。

本調査地も同様の遺構が検出される可能性が高く、平成17年11月10日に大阪市教育委員会が試掘調査を行なった。GL-1.6mで近世の遺構面を検出したので、本調査を実施することとなった。

調査は敷地内の南部で平成17年12月8日より実施した(図2)。重機で近世の遺構面まで掘削し、以下は人力により掘削した。

12月16日には器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。

調査で用いた座標は磁北であり、標高はT.P.値(東京湾の平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+0mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図3、図4)

第1層：表土層を除いたGL-50cmからの層で、黄褐色シルト質中粒砂を主体とする。層厚は50cm～70cmである。本層上面の南壁で、東西方向に花崗岩の切石が北を面として並んで出土した。

第2層：調査地の南に分布する層で、淡黄色細粒砂を主体とし、層厚は約20cmである。

第3層：調査地の南に分布する層で、暗褐色焼土混り細粒砂を主体とし、層厚は約5～10cmである。

第4層：調査地の南に分布する層で、暗黄褐色中粒砂～細粒砂を主体とし、層厚は5～18cmである。

第5層：調査地の南に分布する層で、褐色細粒砂を主体とし、層厚は約5～15cmである。

第6層：褐色シルト質中粒砂を主体とする層で、層厚は5～70cmである。

第7層：黄褐色細粒砂を主体とする層で、層厚は5～25cmである。



図1 調査地位置図

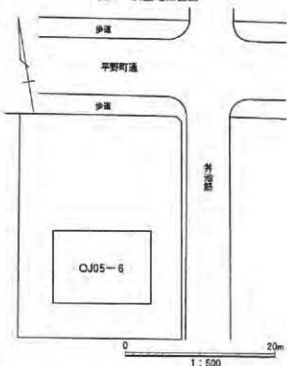


図2 調査区配置図

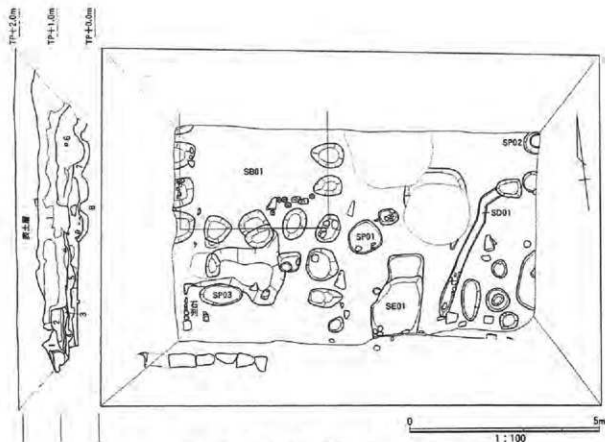


図3 第8層遺構上面検出遺構図及び西壁断面図

第8層：暗褐色シルト質砂層でトレンチを入れて確認した。第8層の下には明褐色粗粒砂層がGL-3mまで続いていた。

層中から出土した遺物は、表土掘削中に肥前陶器胎壺1、備前焼鉢2がある。第5層からは土師器では炆烙3・4、皿5、羽釜9、肥前磁器では天目碗6、染付碗10・11、肥前陶器では皿7、碗8、京焼風皿12、丹波焼播鉢14、信楽焼播鉢13などが出土した。第8層からは肥前青磁皿15が出土した。第5層出土の遺物は17世紀の中頃から後半で、第8層の青磁皿15も同じころのものである。

ii) 遺構と遺物

第8層上面検出遺構と遺物(図3～5)

遺物と溝、石列などを検出した。

SB01 約半間(0.90～1.15m)間隔に東西に並ぶ柱穴5基、直交する柱穴は4基以上を検出した。柱痕跡は明確ではなく、石が入っていた柱穴が多くあり、4間×3間以上の礎石建物と考えられる。柱間隔が狭いことから、蔵である可能性が高い。SB01の柱穴から次の遺物が出土した。土師器では皿20・31、壺36、焼壇壺37、軟質施釉陶器鍋32、瓦質土器瓦椀19・39、肥前染付磁器では碗22・23、皿35、瓶40、水滴21、瀬戸美濃焼碗38、丹波焼播鉢41・33、土人形は猿42・43、狐44、器物45・46、骨角製茶入れ壺34である。

SD01 調査地東部で検出した幅0.20～0.30m、深さ0.26～0.10mの断面U字形の素掘りの溝である。北東から南西方向に折れ曲がっており、敷地外には続かない。

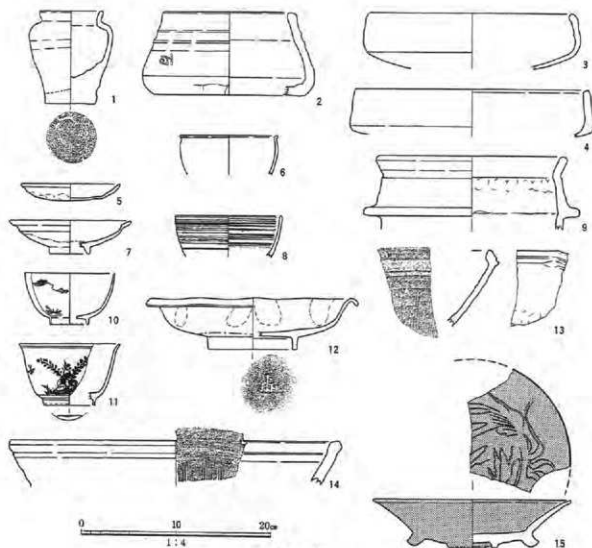


図4 各層出土遺物

克羅中(1・2)、第5層(3~14)、第8層(15)

石列 調査地南西隅で検出した南北方向の石列である。南端に0.20m×0.25mの花崗岩を据え、北約1.2mの位置にも大きな石を据え、間には小さな石並べている。西側に面を持つ石列で、SB01の柱との間は約1.5m離れている。この石列はSB01の南側にあった何らかの建造物の西端を形成している可能性がある。

SE01 上部が攪乱された円形の井戸で、井戸側は不明である。中から出土したのは肥前染付磁器ではままごと道具の小杯24、碗25、皿28、青花碗26、丹波焼播鉢29、土人形の人物27などである。

次にピット出土の主なものを記す。

SP01からは鏡の鋳型の可能性のある遺物16、SP02からは匙き型の可能性のある鋳型17、中国製白磁皿18、SP03からは備前焼甕30が出土した。

第8層上面検出遺構の時期は出土した肥前磁器から見ると17世紀後半である。しかし、軟質施軸陶器鍋32はこの時期までさかのぼるのかの検討の必要がある。

また、土人形は大板では18~19世紀に多く出土するが、京都では17世紀前葉から、江戸では17世紀中葉から出土している[安芸穂子2001]。本調査出土の土人形の特徴は、小型で、合わせ型で作ら

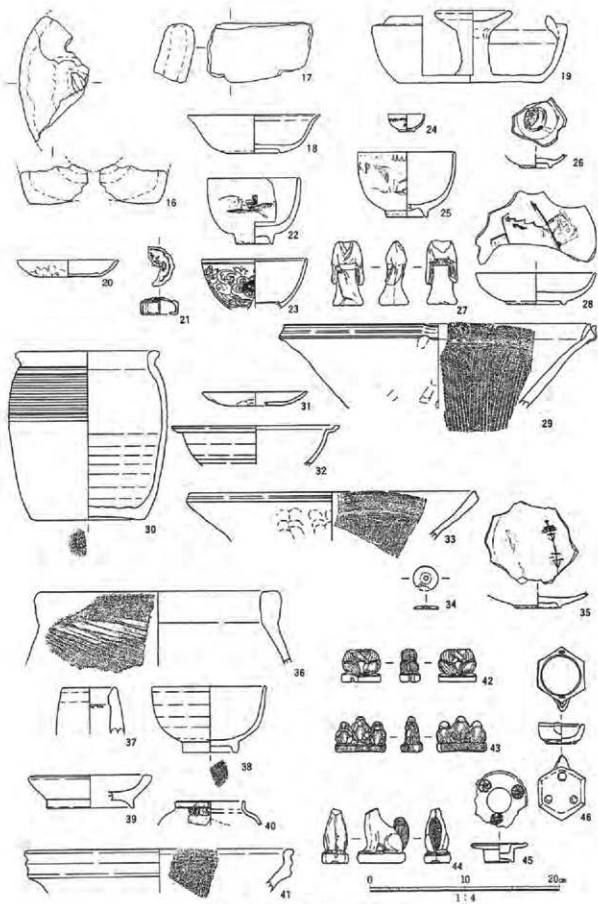


图5 第8層上遺構出土遺物

SP01(16)、SP02(17·18)、SP03(30)、SE01(24~29)、SB01(19~23·31~46)

れ、胎土は淡褐色で、底部の穿孔は竹串で刺したようなものが1点認められる。狐の尾や脚、猿の羽毛などが丁寧に細かく表現されている。このように底部穿孔方法や表現が丁寧なことは、18～19世紀の土人形には余り認められない特徴である。これらのことから本調査出土の土人形は、17世紀中頃から後半に大阪で流行した人形である可能性が考えられる。

3) まとめ

17世紀後半から18世紀初め頃の絵図によると、本調査地周辺は町屋である。町家の造りは一般的に道に面したところに店や母屋があり、敷地の奥まったところに蔵や井戸があったようである。本調査も敷地の裏側に当たるところで、蔵や井戸を検出した。17世紀中頃から後半の町屋内の構造を考えるとうえで貴重な資料が得られた調査である。

参考文献

- 大阪市文化財協会2004、『大阪城下町跡』Ⅱ、pp.281-325
安芸鞠子2001、『土人形』『図説江戸考古学研究事典』、pp.220-221

調査地全景(東から)



SB01と石列(東から)

大坂城下町跡発掘調査(OJ05-7)報告書

調査箇所	大阪市中央区淡路町1丁目4番
調査面積	240㎡
調査期間	平成18年2月2日～平成18年3月10日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、平井和

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の中央部に位置し、瓦町通から淡路町通にかけての近接地の発掘調査では、豊臣秀吉による船場の開発に係わる遺構や遺物が多数発見されており、当時の歴史を明らかにする上で重要な地域となっている(図1・2)。地形的には、上町台地の西側に形成されたTP+2mほどの沿岸州上に立地している[趙哲済2004]。今回共同住宅建設に伴う試掘調査において、豊臣期の生活面が確認されたことから本調査を行うこととなった。同じ淡路町1丁目の調査地点(OJ92-20次調査)では、豊臣期の瓦溜や建物跡が、瓦町1丁目の調査地点(OJ02-3次調査)では豊臣期の溝や土壕が見つかった。また、大坂城下町跡下層の遺構と遺物に係わっては、OJ92-20次調査で奈良時代の井戸や古代の遺物が見つかった[大阪市文化財協会2002]。このことは、伏見町1丁目や道修町1丁目周辺で古代～中世の遺物が多く検出されることも含め、当該時期の集落の状況について、より調査を進展させる成果が得られることを期待させた[大阪市文化財協会編2004]。

調査は、現地表下1.5mまで重機によって掘削し、以下の地層については人力によって掘下げ、遺構と遺物の検出に努めた。

なお、図1の方位は座標北、図2・5～7・9で使用した方位は磁北を示している。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図ではTP+〇mと記す。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査では現地表下2.5mまでの地層の観察を行った。以下に層序についての所見を述べる。



図1 調査地位置図

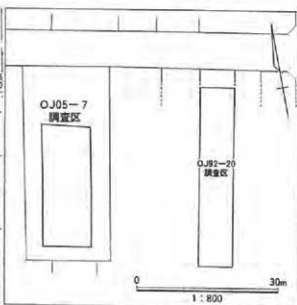


図2 調査地周辺図

第0層：暗褐色中粒砂～礫で構成される現代の盛土層で、層厚は160～170cmである。

第1層：黄褐色細粒砂層と中粒砂層の層厚10cm以下の互層で構成される徳川期の整地層で、全層厚は20～60cmである。

第2層：にぶい黄褐色極細粒砂～暗褐色細粒砂で構成され、炭化物・焼土・焼壁・シルト塊を多く含む大坂冬の陣(1614年)の焼土層である。層厚は10～30cmである。

第3層：灰オリーブ色中粒砂層や黄灰色細粒砂層の薄層が互層した整地層で、層厚は10～20cmである。本層の上面は大坂冬の陣で焼けた生活面であり、後述するSB301内では本層の最上部に部分的にシルト層が分布し、堅く締まった赤黒色の床面となっている。本層は北部で厚く、南部で薄くなり南端部では分布しない。

第4層：灰色極粗粒砂を主体にした整地層で、層厚は15～40cmである。本層は豊臣後期の整地層で、中央部から南端部に分布した。

第5層：褐色細粒砂を主体とする豊臣後期の整地層で、層厚は約10cmである。北端本層上面には鉄分が部分的に沈着している。また、中央部本層の上層には層厚約1cmのオリーブ褐色シルト質粘土層が部分的に分布している。

第6層：堅く締まった明黄褐色シルト質細粒砂層で、南部の南北4m、東西3m以上の範囲に区画性をもって分布する(図7右図網かけ部分)。層厚は約6cmである。豊臣後期の生活面である。

第7層：暗灰黄色シルト質細粒砂層で、部分的に鉄分の沈着した地層である。層厚は10～20cmである。第8層に豊臣後期の遺物が含まれることから、16世紀末以降に形成された地層である。

第8層：にぶい黄褐色シルト質細粒砂層で、層厚は20～40cmである。古代～中世の須恵器・土師器・瓦器や、瀬戸美濃焼や青花皿、金箔軒丸瓦など豊臣後期の遺物が出土した。

第9層：上方細粒化するにぶい黄褐色極細粒砂～極粗粒砂の海成砂層で、層厚は150cm以上である。

ii) 遺構と遺物(図3～9)

ここでは、古代～近世の遺構と遺物について各層ごとに記述をおこない、豊臣後期の生活面を豊臣後期1～5に区分した。

a. 古代～中世(図3～5)

第9層上面で、第8層下面遺構と第9層上面遺構を検出した。遺構から出土した土器の年代観からこれらの遺構が形成された時期は、奈良時代後半から平安時代末頃と考えられる。おもな遺構は以下のとおりである。

SK901 長軸0.5m以上、短軸約0.8m、深さ約0.5mの土壇である。埋土は褐色細粒砂で、須恵器、土師器が出土した。遺物の年代観からみて奈良時代末頃に埋まった遺構である。

SE901 長軸2.2m以上、短軸1.7m以上、深さ1.6mの不定形な素掘りの井戸で、埋土は黒褐色～褐色で一部礫混りの細粒砂～極細粒砂であり、岩相によりa～e層に分けられる(図3、SE901断面図の説明を参照)。最下位のb層はSE901掘削直後に埋め戻されたものである。その上位に重なるc層とd層はともに細粒砂からなり、酷似した岩相を示すが、d層と上位のe層とは漸移していることから、c層形成後にd層が形成されたと考えられる。確実な証拠は掴めなかったが、OJ02～3次調査

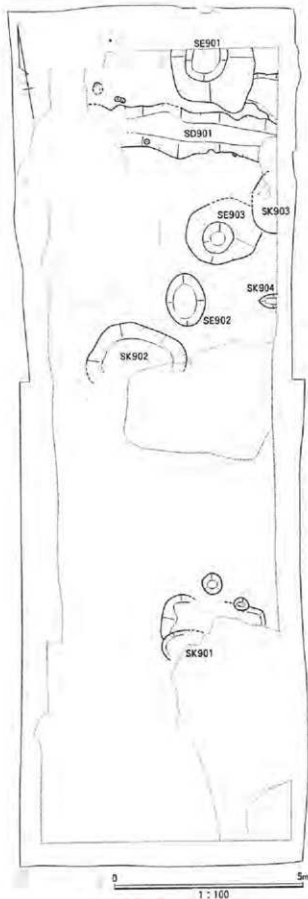


図4 遺構平面図(古代～中世)

査地[大阪市文化財協会2002]で検出した井戸と状況が似ていることから、b層上面に井戸側が据えられ、c層がその裏込めで、d層が井戸側内の堆積層であった可能性がある。a層はb層形成期から掘形斜面に沿って堆積した地層で井戸側を据えた時点まで漸次堆積し続けたのであろう。e層は井戸としての機能が終わった後の地層である。飛鳥時代の須恵器杯G蓋1、平安時代初頭の須恵器杯B蓋3・杯5、土師器鉢13、土師器皿A15のほか、中国製白磁皿などが出土した。平安時代初頭に埋まった遺構である。

SE902 長軸1.38m、短軸1.03m、深さ1.10mの長円形を呈する素掘りの井戸で、埋土は黒色細粒砂である。須恵器、土師器皿A10～12、土師器甕16・17、製塩土器、布目瓦が出土した。平安時代初頭に埋まった遺構である。

SE903 長径1.7～2.0m、短径1.6m以上、深さ約1.56mの円形井戸で、埋土は黒色細粒砂である。土師器杯A8、須恵器杯B4、瓦器小皿22、瓦器輪23～26が出土したことから平安時代末頃に埋まった遺構である。

SK902 長軸2.62m、短軸1.05m、深さ約0.6mの隅丸方形を呈する土壌で、埋土は褐色細粒砂である。須恵器、土師器、瓦器が出土した。南半部を豊臣期の遺構で削平されているが、埋土の状態がSE901上部の状況と似ていることから素掘りの井戸の可能性はある。平安時代末頃の遺構である。

SK903 長軸約1.5m、短軸0.55m、深さ約0.27mの土壌で、遺構の大半は調査区外である。埋土は黒色細粒砂である。須恵器、土師器、瓦器が出土した。平安時代末頃の遺構である。

SK904 長径0.5m以上、短径約0.3m、深さ約0.5mの長円形を呈する土壌で、埋土は黄褐色

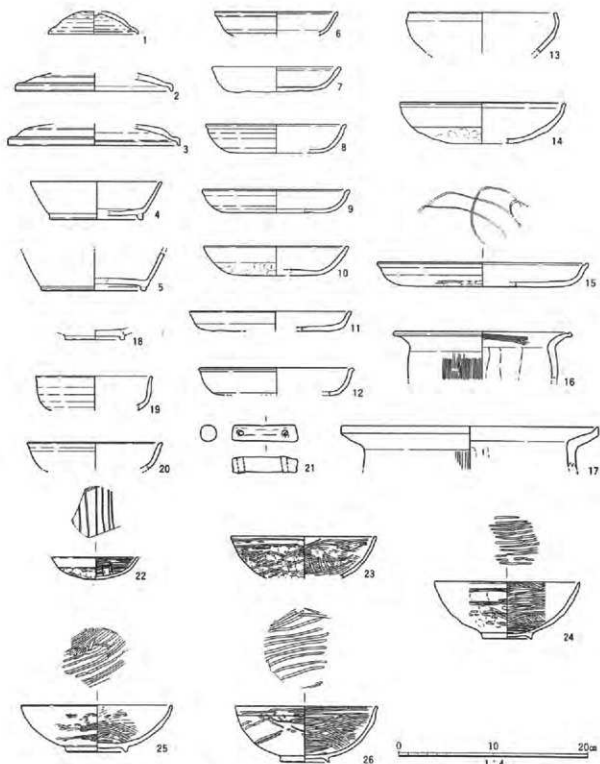


図5 出土遺物(古代~中世の土器)

SK302 : 2・7、SK601 : 18~20、SK803 : 6・14、SE901 : 1・3・5・9・13・15、SE902 : 10~12・16~17、
SE903 : 4・8・22~26、SK904 : 21

細粒砂である。土器が出土しなかったので時期の特定はできなかったが、奈良~平安時代に帰属すると思われる土錘21が出土した。

SD901 長さ4.7m以上、幅1.3m、深さ約0.3mの東西方向に延びる溝である。埋土は暗褐色細粒

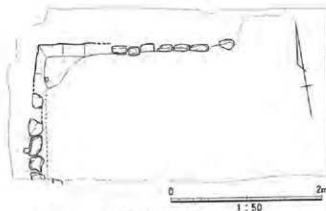


図6 SB601平面図

砂である。居住域を区画するための溝と考えられる。須恵器、土師器、製塩土器、瓦器、古代瓦が出土した。SE901と隣接する遺構で、平安時代末頃の遺構と考えられる。

b. 豊臣後期1(図5・7左・9)

第8層上面で蔵と考えられる建物、小穴群、土壌を検出した。ここでは建物と土壌について述べる。

SB801 東西3m以上、南北8m以上の規模の建物で蔵と考えられる。方位はN11°Eである。SB801北辺の40~50cm大の礎石は土壁で造られた外壁を支えたもので、10cm大の3個の円礫がこの北壁に沿うように並べられていた。このような種類の遺構については、土壁の外側を板材で覆うための押え石である可能性が指摘されている[李陽浩2004]。外壁の内側に並んでいる直径0.4~0.5mの土壌は、床を支える根石の抜き穴の可能性もある。

SK801 長軸1.64m以上、短軸0.8m以上、深さ約0.4mの不定形な土壌で、埋土は暗褐色細~中粒砂である。須恵器、土師器、土師質土器皿、丸瓦・平瓦、壁土、骨が出土した。北側をSK802で切られている。

SK802 長径約1m、短径約1m、深さ0.24mの円形の土壌で、埋土は暗褐色細~中粒砂である。中国製白磁皿37・38、青花碗、瀬戸美濃焼天目碗34・皿33、土師質土器皿27、青銅製焼44、丸瓦・平瓦などが出土した。

SK803 長径約1m、短径0.87mの長円形を呈する土壌で、埋土は暗褐色細~中粒砂である。須恵器、土師器皿A6、土師器碗A14など奈良時代末頃の遺物を含むが、瀬戸美濃焼皿39、丸瓦・平瓦が出土したことから豊臣後期に埋まった遺構である。

c. 豊臣後期2(図5・6・7右・9)

調査区南半部で、東西3m以上、南北4m以上の範囲に明黄褐色シルト質細粒砂層(第6層)が分布していた。この第6層分布範囲は、堅く締まっていること、層厚約0.6cmの均等な整地層であること、これらの状況は後述するような第3層上面で検出されたSB301の床面に近似していることという3つの観点から建物内部の貼床と考えられる。調査区中央部では、第6層上面検出遺構である大型土壌SK601とSK602がある。また、これらの外周を囲むように石列があることから、SK601が埋められた後に建物SB601が構築されたと考えられる。

SK601 第6層上面検出遺構で、東西4m以上、南北4.2m以上、深さ約0.4mの不定形な土壌である。埋土は粘土塊を含むにぶい黄褐色細粒砂で、緑釉陶器18、須恵器杯B19、土師器杯A20、備前焼甕、丸瓦・平瓦などが出土した。

SK602 長軸3m、短軸2.8m以上、深さ約0.7mの不定形な土壌である。埋土は灰黄褐色細粒砂で、瀬戸美濃焼皿・天目碗、肥前陶器皿、土師質土器皿、丸瓦・平瓦などが出土した。

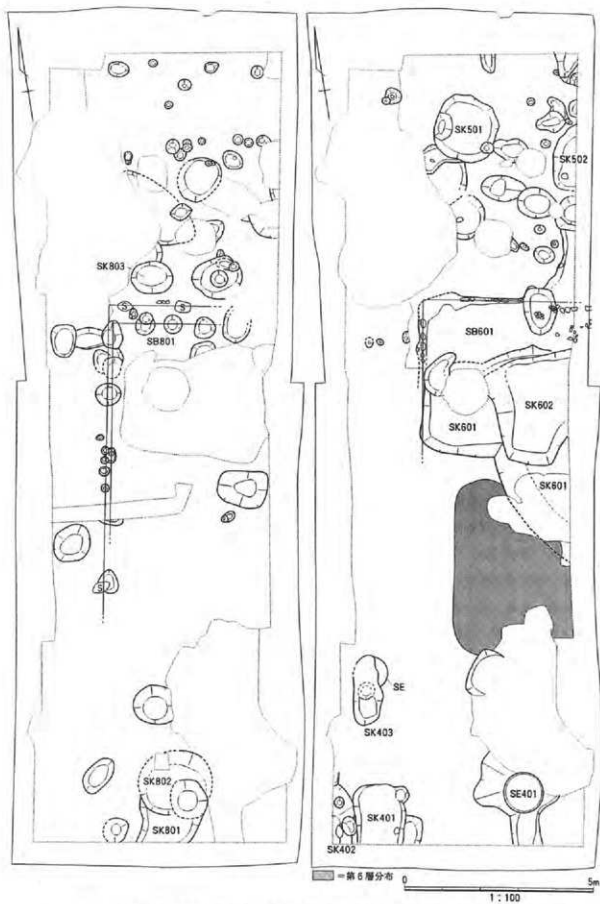


図7 遺構平面図(豊臣後期1：左、豊臣後期2～4および、豊臣後期のその他の遺構：右)

SB601 東西2.5m以上、南北1.8m以上の規模と考えられる建物で、SB801とはほぼ同じ場所に建て直された蔵と考えられる。縁辺に25~30cm程の円礫が並べられていることから、これらの石列の上に角材を置き、土壁を築く「土台建て」工法で建物が建てられていたことが推測される[李2004]。建物の方位はN11°Eである。

d. 豊臣後期3(図7右・9)

第5層上面で土壌、柱穴を検出した。

SK501 長径1.7m、短径1.6m、深さ約0.3mの円形の土壌である。東壁際に長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2mの灰白色粘土が充填された土壌があった。埋土は鉱滓や炉壁を含む灰黄褐色細粒砂で、須恵器、土師器、瓦器、土師質土器皿などが出土した。金属の鑄造に係わる遺構の可能性がある。

SK502 長径1.6m、短径0.6m、深さ1.4mの土壌で大半は調査範囲外である。埋土はシルト塊を含む灰黄褐色細~中粒砂で、須恵器、土師器、黒色土器A類、瓦質土器、瀬戸美濃焼志野菊花皿32、肥前陶器皿など多くの遺物が出土した。

e. 豊臣後期4(図7右・9)

SE401 第4層内で井戸を検出した。直径約1m、深さ約1.4mの円形の井戸で、井戸欄は残っていない。不定形な掘形と井戸内は灰オリープ色粘土で埋められていた。中国製呉須赤絵大皿・青花皿・青花碗、肥前陶器碗・皿31・鉄絵向付36、備前焼播鉢が出土した。36はSK502出土の破片と接合した。

f. 豊臣後期のその他の遺構と遺物(図7右・9)

調査区南半部第4層基底面で、土壌や井戸を検出した。第5~7層が分布しないので詳しい時期は明らかでないが、便宜的に図7右に示した。

SK401 長軸1.8m、短軸約1.7m、深さ0.46mの方形の土壌で、埋土は暗褐色細~中粒砂である。青花碗、瀬戸美濃焼皿、瓦質土器鉢、須恵器、土師器、金属製品、骨が出土した。

SK402 長軸1.6m、短軸約0.6m、深さ0.34mの土壌で、埋土は暗オリープ褐色シルト質細粒砂である。平瓦、焼壁、金属製品が出土した。

SK403 長軸1.86m、短軸0.75m、深さ0.58mの土壌で、埋土は灰白色極細粒砂である。瀬戸美濃焼天目碗・志野向付40、備前焼壺43・播鉢、中国製白磁碗、土師質土器皿28、埴壇など多くの遺物が出土した。

g. 大坂冬の陣直前(図8左・9)

調査区北半部では第3層上面で、大坂冬の陣の焼土面を確認し、礎石列、掘立柱建物、土壌を検出した。調査区南半部における第3層の分布は部分的であったが、本層上面で礎石列、柱穴列、土壌を検出した。

SB301 東西4m以上、南北12m以上の規模と考えられる建物であるが、柱間が不揃いであることから復元される建物については検討が必要である。建物の方位はN11°Eである。

SK301 長軸約1m、短軸約1m、深さ0.34mの土壌で、埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂である。肥前陶器、土師質土器皿、丸瓦・平瓦、土師器が出土した。

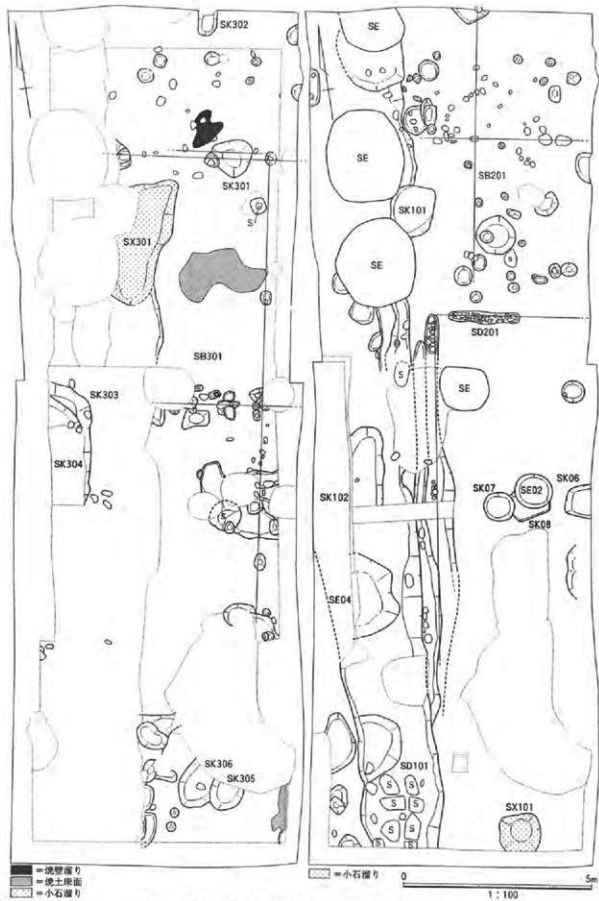


図8 遺構平面図(冬の陣直前:左、冬の陣直後~徳川期:右)

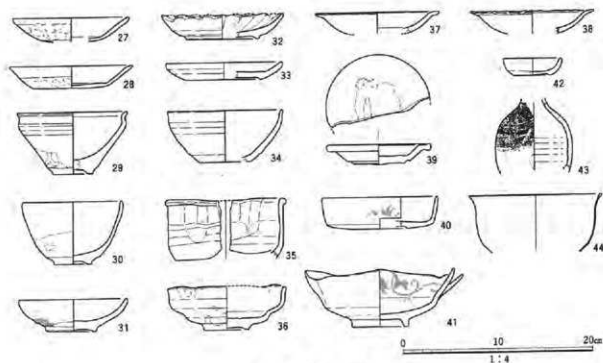


図9 出土遺物(豊臣期)

SK303 : 30・42, SK403 : 28・40・43, SE401 : 31・36, SK502 : 32, SK802 : 27・33・34・37・38・44,
SK803 : 39, 第2層内 : 29・35・41

SK302 長軸0.68m以上、短軸0.5m、深さ0.4mの土壌で、埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂である。古代の須恵器2・7のほか、図化できなかったが志野焼皿、丹波焼甕、土師器の細片が出土した。

SK303 長軸1.2m以上、短軸1.15m以上、深さ0.75mの長円形を呈する土壌で、大半は調査区外である。埋土は暗褐色シルト質細～中粒砂である。肥前陶器碗30・皿、瀬戸美濃焼小皿42、備前焼甕、土師質土器火入れ・皿、丸瓦・平瓦、骨が出土した。

SK304 長軸0.88m以上、短軸0.85m以上、深さ約0.2mの土壌で、底に竈の基部と思われる灰色シルト質粘土が見られた。

SK305 長軸0.7m以上、短軸0.8m、深さ0.33mの土壌で、底に竈の基部と思われる浅黄色粘土や炭層が見られた。埋土は暗赤灰色細～中粒砂を主体とする焼土ある。瓦が出土した。

SK306 長軸1.08m以上、短軸1m、深さ約0.27mの土壌で、埋土は暗赤灰色細～中粒砂を主体とする焼土である。肥前陶器碗・皿が出土した。

SX301 長軸3.47m以上、短軸1.33m以上、深さ約0.2mの砂岩の小石を敷詰めた土壌である。青花碗・皿、肥前陶器、備前焼甕、瓦質鉢、土師質土器皿などが出土した。

h. 大坂冬ノ陣直後(図8右・9)

第2層は大坂冬ノ陣の焼土を成因とする徳川期の整地層で、唐津焼天目碗29、瀬戸美濃焼皿志野碗35、肥前陶器鉄絵向付41など多くの遺物が層内から出土した。本層上面では瓦敷の溝、土壌、柱穴を検出した。

SB201 東西3m以上、南北6.5m以上の礎石建物と考えられるが、柱間間隔が大きく復元され

る建物の規模は不明である。

方位はN10°Eで、豊臣後期の建物と方位が異なる。

SD201 東西4m以上、南北10m以上の建物を区画する瓦を敷詰めた溝で、幅0.3m、深さ0.4mである。建物の外周に設けられた雨落ち溝の可能性はある。方位はN10°Eで、豊臣後期の建物と方位が異なる。

i. 徳川期(図8右)

SD101 幅2.2m以上、深さ約2mの東西方向に延びる溝であるが、調査区北半部へのつながりは、井戸や掘削で削平されていたために確認できなかった。南端部ではこの溝を埋めるのに伴って、70~80cm太の花崗岩の切石を並べていることから、敷地の境が溝から石敷の通路へと変化した可能性がある。肥前陶磁器、瓦、砥石など18世紀頃の遺物が出土した。

SK101 長径0.56m、短軸0.34m、深さ0.7mのやや不定形な土壇で、埋土にはふい黄色粗粒砂である。肥前陶磁器碗・皿、関西系施釉陶器花瓶・植木鉢・壺、温石など18世紀後半頃の遺物が多数出土した。

SE101 直径約1.1m、深さ約1mの井戸で、井戸側は残っていない。掘形の埋土は黄褐色細粒砂を主体とする。肥前磁器小杯碗、土師質土器羽釜・皿、丹波焼播鉢が出土した。このほか、規模の違いがあるが複数の井戸が確認された。

SK102 長軸2m以上、短軸1m以上、深さ約0.7mの土壇で、大半は調査区外である。埋土は暗褐色中~粗粒砂である。肥前陶磁器、瀬戸美濃焼天目碗、備前焼播鉢、瓦質土器羽釜、土師質土器皿、硯、砥石、丸瓦・平瓦など多くの遺物が出土した。

SX101 直径約1m、深さ約0.2mの円形の土壇で、内部には5cm大の円礫が多量に埋められていた。これらの礫の大半はいわゆる那智黒石(黒色頁岩)で、その他砂岩・珉岩・石英が混在していた。和歌山県熊川市神川町原産の那智黒石がまとめて出土した事例は珍しく、今後遺構の性格や類型について検討を行いたい。肥前陶磁器、土師質土器皿、瓦片が出土した。

3) まとめ

今回の調査地は、大坂城下町跡のなかでも地形的に高い場所に位置している。豊臣後期の建物跡や柱列、土壇などが多数見つかった。豊臣秀吉の「船場」の開発以降、当該地に居住した人たちが、整然とした土地区画上に瓦で屋根を葺いた屋敷と蔵を構築して、大坂冬の陣で焼失するまでの約17年間同じ敷地内で建替えを行いながらも、それらの建物の配置や方位を変えることなく生活していたことがわかった。また、今回大坂城下町下層の遺跡として奈良時代末頃の井戸や平安時代の井戸と溝などが見つかったことから、今後、調査が進めば奈良~平安時代の集落の実態が明らかになるものと思われる。

引用・参考文献

佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編「長原遺跡」V、pp.102~114

- 大阪市文化財協会2002、『船場瓦町建設工事に伴う大阪城下町跡発掘調査(OJ02-3)報告書』
- 趙哲済2004、「地形と地質」：大阪市文化財協会編『大阪城下町跡』Ⅱ、pp.1-7
- 李陽浩2004、「大阪市内の発掘調査からみた近世建築のディテール三例」：関西近世考古学研究会編『関西近世考古学研究』XⅡ、pp.39-51

SE901検出状況
(東から)



第9層上面検出遺構
(北半部西から)



第9層上部検出遺構
(南半部西から)



第8層上面検出遺構
(北半部西から)



第8層上面検出遺構
(南半部西から)



第3層上面検出遺構
(北半部西から)



第6層上面検出遺構
(南半部西から)



第2層上面検出遺構
(北半部西から)



第2層上面検出遺構
(南半部西から)



大坂城下町跡(OJ05-8)発掘調査

調査箇所	大阪市中央区道修町2丁目2-7
調査面積	28㎡
調査期間	平成18年3月24日～平成18年3月30日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、松本啓子

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地は大阪市中央区道修町2丁目2-7に所在し、堺筋西側の道修町の通りに北面する敷地で、薬の神様として知られる少彦名神社の真向かいに位置している(図1)。文献史料などから、東横堀川から西、御堂筋あたりまでの道修町の通りは、城下町として整備されて以降、大坂城下町の中でも特に隆盛した場所と推定されていて、江戸時代からは薬問屋の本店が立ち並ぶ街として広く知られるようになる。また、発掘調査でも富裕な商家とみられる町屋などが見つまっている[大阪市文化財協会2004]。平成18年2月9日の大阪市教育委員会による試掘調査で、中世末から近世初頭とみられる生活面が確認されたことから、平成18年3月24日より本調査を行うことになった。

調査は関係諸機関と協議の上、図2のように敷地の奥に調査区を設定した。このあたりの現在の標高が約2.5mで、大阪市教育委員会の指示に基づいて地表面から2.5mまで、すなわち標高0mあたりまでを重機により掘削後、地山とみられる自然堆積層の上面までの約1mの間を人力によって調査した。ただ、試掘当初に地山とみられた地層は古代～中世の遺物を豊富に含んでいたため、再度、関係諸機関と協議し、調査最終日に東壁際にトレンチを設定して地山の確認をした。調査には7日間を要し、平成18年3月30日に発掘調査に関わるすべての作業を終えた。

なお、今回使用した方位は磁北を示し、標高水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文の挿入図ではTP±0mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)



図1 調査地の位置(1:5,000)

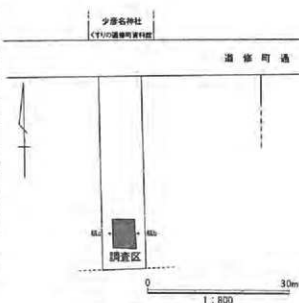


図2 調査区的位置(1:800)

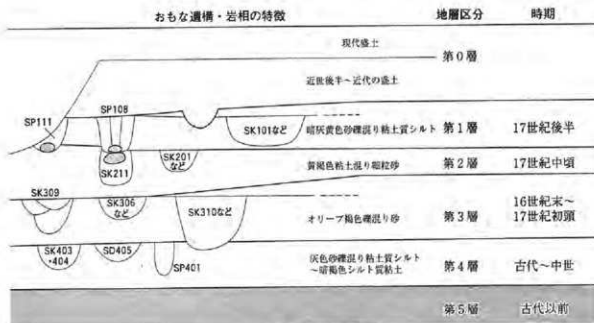


図3 地層と遺構の関係

本調査地の基本層序は図3・4のとおりである。

第0層：重機によって除去した近世後半から現代までの地層である。

第1層：上部がオリーブ褐色シルト混りの砂、下部が暗灰黄色砂礫混り粘土質シルトからなる層厚約35cmの整地層である。17世紀後半までの遺物が出土した。本層上面でSP108やSK101などの17世紀後半～18世紀初頭の土壌・柱穴・ピットが検出された。

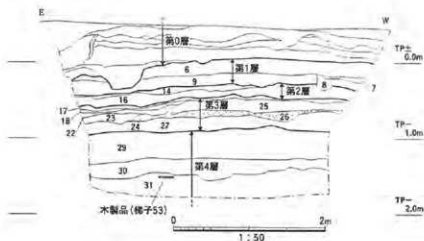
第2層：層厚40cmほどの整地層で、黄褐色粘土混りの細粒砂を主体とし、その上に灰白色の砂や粘土の混る砂礫が南から北へと積まれていた。第1層に比べて堆積物の締まりが悪い。本層からは古代の遺物や16世紀後半ごろの遺物とともに、17世紀前半でも中ごろに近いころの遺物が出土した。本層上面でSD203やSK201、SK211といった17世紀中ごろの溝・土壌・柱穴を検出した。

第3層：オリーブ褐色礫混りの砂が主体の整地層で、層厚は約45cmである。調査区南東隅では、本層最上部に締まりの良い黒褐色シルト質粘土と暗灰黄色細粒砂や粘土質シルトの堆積が見られた。本層よりも下位層に由来する古代～中世の遺物と16世紀末～17世紀初頭の豊臣後期の遺物が出土した。本層上面で豊臣後期のSK310などの土壌を検出した。

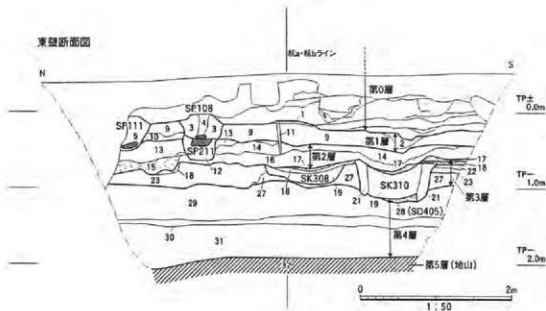
第4層：本層上面から第5層の地山までの層厚は約110cmで、本層は3つの層に分けられる。上から灰色砂礫混り粘土質シルト層(第4-1層、層厚約35cm)、褐灰色最粒砂混りシルト層(第4-2層、層厚約20cm)、暗褐色シルト質粘土層(第4-3層、層厚約55cm)である。試掘調査の時に地山とした締まりの良い地層で、本調査の側溝掘削時に本層から遺物が出土したため、本調査最終日に東と南の壁際を0.6mほどの幅で深掘りして確認した。面的な調査は行っていない。第4-1・4-2層とも古代と中世前半の13世紀～14世紀前半ごろの遺物が出土し、第4-3層は一本を削った梯子が出土した。本層の上面で溝SD405やSK404といった13世紀～14世紀前半ごろの土壌・ピットを検出した。また、本層上面で検出したSK312は第3層下面の土壌である。

第5層：均質な灰色シルトの自然堆積層(地山)である。東壁の深掘り部分で観察するかぎり、本層

南壁断面図



東壁断面図



第1層

- 1: 5Y4/2灰オリーブ色シルト混り砂礫
- 2: 5Y7/3灰白色砂混りシルト質粘土
- 3: 5Y5/1灰色砂礫・粘土混りシルト (SP108)
- 4: 10Y4/4褐色粘土混り細粒砂
- 5: 5Y5/1灰色砂礫・粘土混りシルト (SP111)
- 6: 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト混り砂
- 7: 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫混りシルト
- 8: 2.5Y4/2暗灰黄色砂混り粘土質シルト
- 9: 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫混り粘土質シルト
- 10: 2.5Y5/3黄褐色シルト・粘土混り砂礫
- 11: 7.5YR3/3暗褐色砂混り粘土 (板の痕跡?)

第2層

- 12: 2.5Y7/3黄褐色砂礫混りシルト (SP211)
- 13: 2.5Y7/3黄褐色粘土・砂礫混り砂
- 14: 5Y7/2灰白色粘土混り砂礫 (炭を含む)
- 15: 2.5Y7/1灰白色細粒砂
- 16: 2.5Y5/3黄褐色粘土混り細粒砂

第3層

- 17: 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～粘土質シルト (南壁では暗色化)
- 18: 2.5Y3/2黒褐色シルト混り粘土
- 19: N5/1灰色細粒砂混りシルト (木質を含む, SK308)
- 20: 7.5YR3/2黒褐色シルト質粘土
- 21: 7.5Y5/1灰色砂混り粘土質シルト (SK310)
- 22: 7.5YR3/1黒褐色細粒砂混り粘土
- 23: 5Y5/1灰色細粒砂混り粘土質シルト
- 24: 5Y4/3オリーブ褐色シルト混り細粒砂
- 25: 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂礫混りシルト (炭を含む)
- 26: 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂礫
- 27: 2.5Y4/4オリーブ褐色砂混り砂

第4層、地山

- 28: 5Y4/1灰色シルト混り細粒砂 (SD405)
- 29: 2.5Y4/1灰色砂礫混り粘土質シルト
- 30: 10YR4/1暗灰色細粒砂混りシルト
- 31: 10YR3/3暗褐色シルト質粘土
- 32: 10Y5/1灰色シルト (地山)

図4 南壁・東壁地層断面

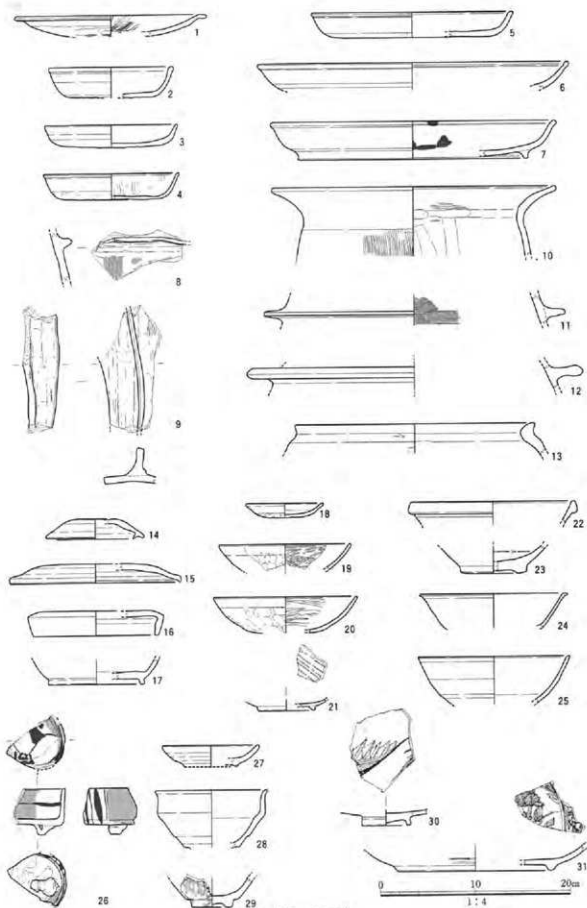


図5 各層の出土遺物

第4層(3・6・7・11・13・14・20・21)、第3層(1・2・4・5・8~10・12・15~19・23・24・31)、
第2層(22・25~28・30)、第1層(29)

の上面は北に向って緩やかに低くなっている。

ii) 遺構と遺物

a. 各層出土の遺物(図5・11)

第1層の遺物として鉄質施軸陶器碗29を示した。17世紀末～18世紀初頭のものであろう。第2層の遺物として中世前期の中国製白磁碗25と、16世紀後半の瀬戸美濃焼灰釉皿27、17世紀前半～中頃の肥前磁器染付や肥前陶器大皿30、瀬戸美濃焼白天目碗28・織部向付26を示した。第3層のものとして古代～中世前半の須恵器(蓋15・16、底部17)や土師器(高杯1、杯2・4・5、甕8・9、甕10、羽釜12)、瓦器(皿18、椀19)、中国製白磁碗23・24、豊臣後期の青花皿31、下駄50を示した。第4-1・4-2層は同じ時期で、第4-1層から出土した土師器(皿3・羽釜11、甕13)、中国製白磁碗22、瓦器椀20・21は13世紀～14世紀前半の遺物で、本層の時期を示すものである。合わせて、第4-1層出土の7世紀中頃の須恵器蓋14と8世紀後半～9世紀初頭の土師器大皿6・7と、第4-3層の一木を削って成形した梯子(図11の53)を図示した。

b. 中世前半の遺構と遺物(図6・10、図版2上段)

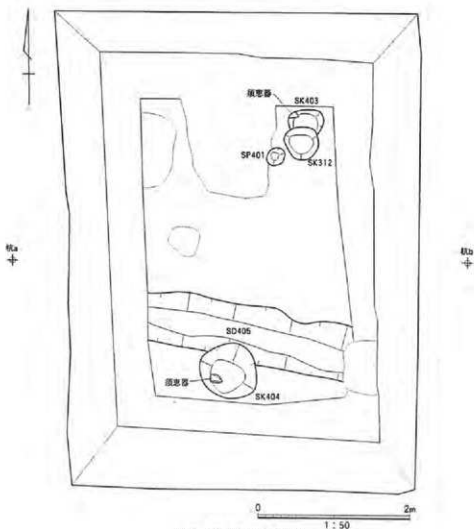


図6 第4層上面の遺構

第4層上面で溝SD405、土壌SK403・404、ビットSP401と、第3層下面で土壌SK312を検出した。SD405は東西方向の浅い溝で、幅は約0.7m、深さは0.2mほどで、灰色シルト混り細粒砂で埋っていた。溝の底にはマンガンの沈着が見られ、東に向かって緩やかに流れていたとみられる。土師器や須恵器、縄目タタキのある瓦などの破片が出土したが、いずれも下層層に由来するものである。35は8世紀末～9世紀初頭ごろの土師器高台付き大皿である。

SK403は東西0.5m、南北0.3m以上の平面が円形または楕円形の土壌で、深さは0.1mほどである。SK302に切られている。埋土は灰褐色砂混りシルトである。土師器や須恵器の破片が出土した。

SK404は東西、南北とも0.7mほどの平面円形の土壌で、深さは約0.2mである。埋土は暗黄褐色細粒砂で、底部にマンガンの沈着が見られた。土師器や須恵器、縄目タタキのある瓦などの破片が出土した。これらは下層層由来のものと考えられるが、図10に示した土師器杯32・33、壺37は古代のものである。

SP401は直径0.2mほどの円形のビットで、埋土は灰黄褐色シルトで、深さは約0.3mである。土師器や須恵器、縄目タタキのある瓦の破片が出土した。

層序でも述べたように第4層が13世紀～14世紀前半ごろの包含層とみられることから、第4層上面の遺構も同じころの遺構と考えられる。

SK312は直径0.5mほどの円形土壌で、深さは約0.2mである。SK403を切っている。埋土は暗灰黄色砂混り粘土質シルトで、第3層に似ている。須恵器・土師器とともに肥前陶器の破片が出土した。第3層下面の、16世紀末～17世紀初頭の豊臣後期の遺構と考えられる。

c. 豊臣後期の遺構と遺物(図7・10・11)

第3層上面では土壌を検出した。第3層上面・下面の遺構には300番台の遺構番号を付けている。

SK301とSK302は、埋土の似た東西方向に長い、浅い溝状の土壌で、規模はSK301が幅0.2m、長さ0.4m以上、深さが約0.1m、SK302は幅0.2m以上、長さ0.9m以上、深さ約0.1mである。埋土はともに淡灰色砂混り粘土で、SK301から瓦器碗34や青花47、SK302から土師器皿といった破片が出土した。豊臣後期の遺構と考えられる。

SK306は平面楕円形の東西0.6m、南北0.4m、深さ0.1mほどの浅い土壌である。肥前陶器と加工木材が出土した。

SK308は平面が円形とみられる土壌で、東西0.3m以上、南北0.6m、深さ約0.3mある。埋土は灰黄褐色砂混りシルトである。下駄51、土師器や瓦器の破片が出土した。

SK307とSK310はほぼ垂直に掘り込まれた土壌で、埋土の状況がよく似ている。ともに調査区外へと続くため全体の形状はわからないが、おそらく平面は隅丸長方形と考えられる。埋土の上部は炭を含む淡灰褐色細粒砂混りの粘土質シルトで、これが下部では暗色化し、最下部は暗茶褐色砂混りシルト質粘土となっていた。土壌内に水が溜っていたものと推定される。SK310では断面に杭の痕跡のような砂混り粘土質シルトが見られたが、検出できた部分の平面には杭やその痕跡は見られなかった。規模はSK310が南北1.1m、東西1.2m以上、深さ0.5mで、SK308は南北0.8m以上、東西0.5m以上、深さ0.3mである。SK308から土師器と瓦器の破片が出土した。SK310では上部で板材の破片と、奈

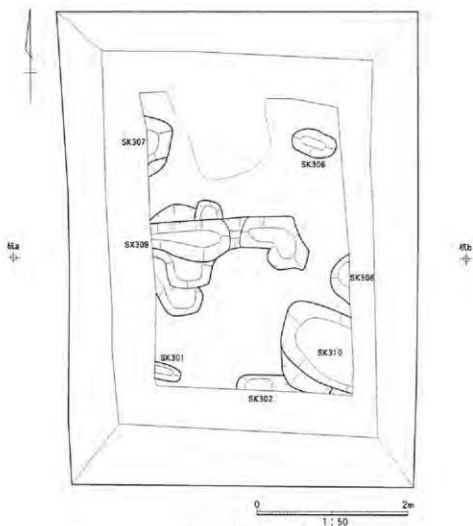


図7 第3層上面の遺構

良時代の土師器・須恵器が出土したが、下部ではこれら古代の土器とともに、焼塩壺と壁の破片が出土した。

SK309はいくつもの土壌が複雑に重なって掘られたものとみられる。埋土はおおよそ3つに分れるが、遺物に明確な時期差は見られない。最上部は幅0.4mの東西に長い溝状の土壌と、これよりやや大きい不整形の土壌が重なったもので、深さは0.4mほどである。埋土は灰黄褐色砂混りシルトで、丹波焼大甕41と鉄釘、須恵器、土師器が出土した。この下に埋土が淡灰黄色粘土・砂混りシルトの南北0.3m以上、東西0.4m、深さ0.1mほどの楕円形の土壌がある。土師器皿や下駄、朱塗りの板が出土した。その下には淡灰褐色炭・細粒砂混りの粘土質シルトが埋土の土壌がある。南北は1.5m、東西は0.8m以上で、二段掘りようになっていて、深いところで約0.3m、南側の浅い部分が0.1mほどである。近世の瓦と土師器皿、板材、10世紀ごろの灰軸陶器の高台36、須恵器が出土した。

d. 江戸時代前半の遺構と遺物(図8)

第2層上面で、溝・土壌・柱穴・ビットを検出した。200番台の遺構番号を付けている。

SD203は幅0.3m、もっとも深いところで0.15mの浅い溝である。東西1.9m分が見つかった。埋土は暗灰褐色砂礫混りシルト質粘土で、固化する遺物はないが、肥前陶器、備前焼、近世の土師器皿

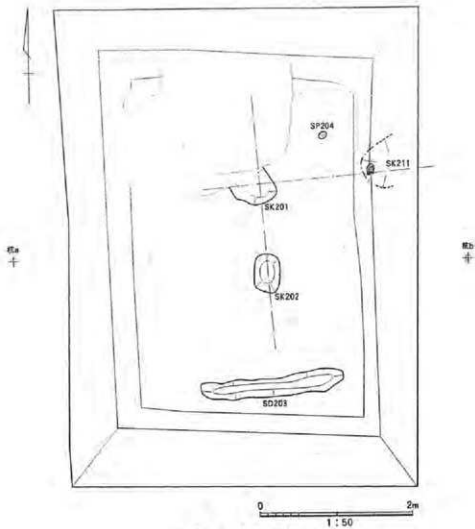


図8 第2層上面の遺構

や古代の土師器甕が出土した。

SK201は南北0.5m以上、東西0.5m、深さ0.4mの平面が隅丸長方形か楕円形の土場で、埋土は炭を含む灰褐色砂泥り粘土質シルトである。SK201から中国漳州窯産の磁器や国産の丹波焼、肥前陶器、肥前磁器、土師器皿・焙烙、近世瓦などの破片が出土した。固化するものはないが、遺物は17世紀中ごろまでのものである。

SK202は南北1.0m、東西0.7m、深さ0.2mほどの隅丸長方形の土場である。埋土は灰褐色粘土混りシルトで、近世の土師器皿と甕の破片が出土した。

SP204は直径0.10mほどの円形のビットで、深さは0.15mである。埋土は赤褐色粘土混り砂で、遺物は出土していない。

SK211は東壁で確認した東西0.4m、深さ0.4mの土場で、埋土は浅黄色砂礫混りシルトである。側溝掘削のため、平面形や遺物は確認できなかった。同様に東壁にかかるSP108はこのSK211の真上であり、両者の境にある2個の石のうち下の大きいほうは、SK211の礎石と考えたが、上のSP108の礎石の可能性もある。

SK201とSK211は埋土や規模が比較的似ており、2.0mほど離れたところにある。両者を結ぶ線と

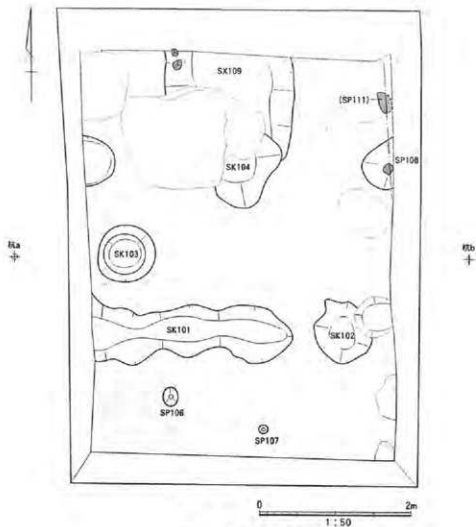


図9 第1層上面の遺構

SD203の方向がほぼ平行し、また、SK201とSK202を結ぶ線がこれに直交することから、SK201・202とSK211は建物や塀の一部であるのかもしれない。

遺物からみて、これらの遺構は17世紀中頃のものと考えられる。

e. 江戸時代中頃の遺構と遺物(図9・10・11)

第1面は重機掘削直後の調査面で、第1層上面の遺構のほか、第0層の層中・下面・基底面の遺構も検出したが、ここでは第1層上面の遺構に100番台の遺構番号を付し、これらについて報告する。

SK101とSK102は埋土のよく似た土壌で、SK101は南北0.8m、東西2.5m以上の溝状を呈している。SK102は南北・東西方向とも約0.8mの平面が円形に近い土壌である。深さはどちらも0.10mほどで、埋土は灰褐色細粒砂混り粘土質シルトである。遺物はSK101から近世の瓦や土師質焙烙・羽釜・壺、肥前陶器、古代の土師器が出土した。SK102から近世の瓦や土師質焙烙・火鉢・皿、丹波焼、肥前陶器、鉄釘などが出土した。図化したものはない。

SK103は直径0.75m、深さ約0.3mの円筒状の掘形をもつ土壌で、その内側は直径0.55mで、検出面から約0.6mの深さまで円筒状に掘込んでいる。桶の痕跡などは認められなかった。掘形の埋土は灰黄褐色砂混りシルトで、内側の円筒状部分は炭を多く含む暗赤褐色粘土混りの砂で埋っていた。遺

物は暗赤褐色粘土混り砂から近世の瓦や土師器皿、肥前磁器、丹波焼や肥前陶器、銅銭が出土した。掘形からは近世の瓦、土師器皿、肥前陶器碗、古代の瓦と須恵器などが出土した。いずれも破片で図化できなかった。

SK104は南北1.0m以上、東西0.9m以上、深さ0.35mの土壌である。埋土は灰赤褐色砂混りシルトである。土師質の焙烙39を図示した。SX109と同じ17世紀後半のものである。

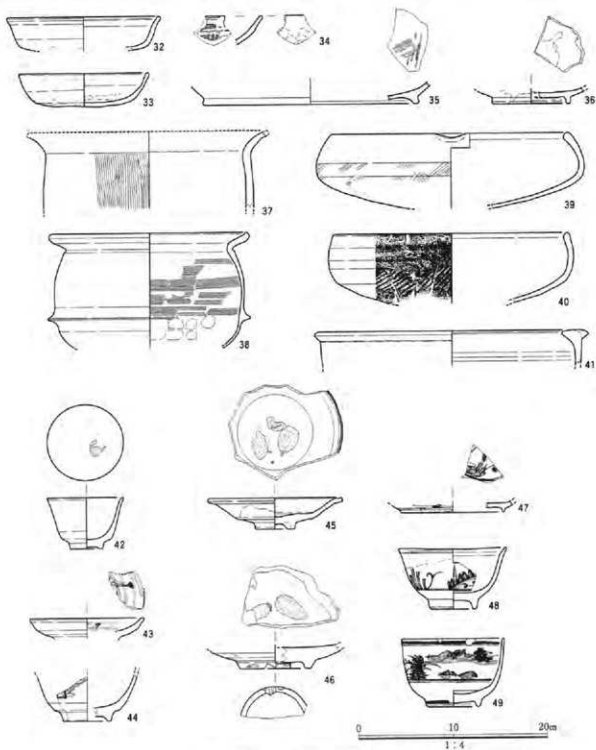


図10 おもな遺構出土の遺物

SK404(32・33・37)、SD405(35)、SK301(34・47)、SK309(36・41)、SK104(39)、SX109(38・42・46・48・49)

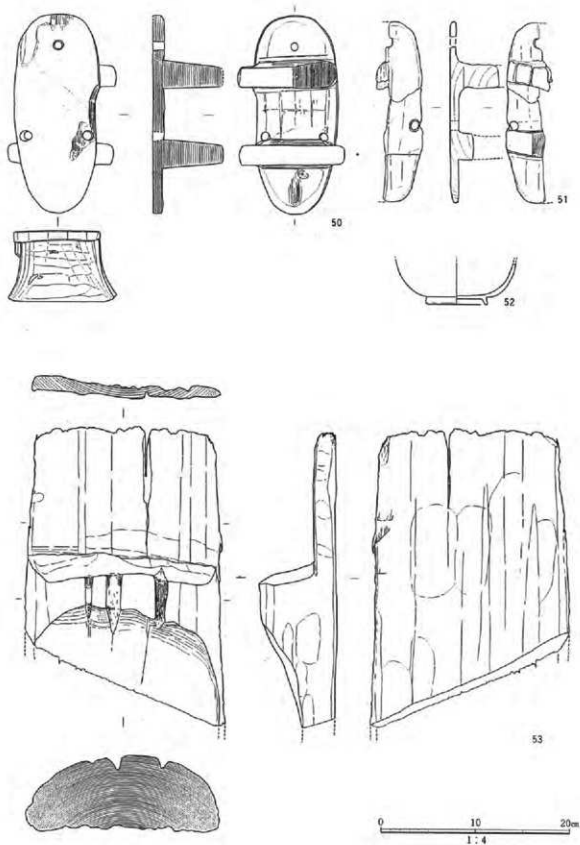


图11 出土遺物(木製品)
第4-3層(53)、第3層(50)、SK308(51)、SX109(52)

SX109は南北1.4m以上、東西1.7m、深さ0.8mの土壌で、埋土は大量の炭が混る灰色砂混り粘土質シルトと褐色砂が互層となって堆積していて、何回も土砂が投入されたことが窺える。遺物は大量に出土したが、そのうちの瀬戸美濃焼志野小杯42・志野鉄絵皿43、肥前陶器皿45・46、肥前磁器碗48・49、軟質施釉陶器碗44、土師質の焙烙40、釜38と朱漆塗椀52を図示した。遺物は17世紀中頃までのものが多いが、第1層上面の遺構であることから、SX109は17世紀後半の廃棄土壌と考えられる。SK104に切られている。

SP106とSP107は暗灰褐色砂混りシルトが埋土のピットで、SP106は南北に長い楕円形で、長径が0.25m、短径が0.20m、深さ0.08mである。SP107は直径0.1m、深さ0.06mの平面が円形のピットである。遺物はSP106から壁材と土師質土器の破片が、SP107から近世の平瓦が出土した。

東壁にかかるSP108は南北0.6m、深さ0.35mの柱穴である。柱穴の掘形の埋土は灰色砂礫・粘土混りシルトで、柱部分は褐色粘土混り細粒砂である。柱穴の底部、柱の真下に礎石が置かれていた。

同じく東壁にかかるSP111もSP108同様に底に礎石がある柱穴で、南北0.4m以上、深さは0.45mある。埋土は灰色砂礫・粘土混りシルトで、SP108の掘形の埋土と同じである。

これら2つの柱穴の距離は礎石中心で約1.8mあり、組み合うものと考えられる。第1層の遺物が示す年代から、これらの柱穴は17世紀後半以降のものと考えられる。

ここで報告した第1層上面の遺構は、遺物からみて17世紀末～18世紀初頭のものと考えられる。

3) まとめ

今回の調査は30mにも満たない狭い範囲で、しかも敷地の奥まった所の調査であったため、母屋に当る建物や区画塀などの構築物を検出することはできなかったが、いつの時期に土地を改変したかについての良好な資料を得ることができた。

また、今回近世初頭の整地層の下に、7世紀前半～14世紀前半のあまり摩耗していない遺物を豊富に含む地層を確認したことは、周辺に中世や古代の遺跡の存在を推定させるものであり、この地域の歴史を考える上での重要な手がかりとなる。

以上のように、今回の調査は当地域の歴史的な変遷を解明する上での重要な資料となりえよう。関係者のご理解とご協力に深く感謝するとともに、今後の調査成果と合わせてさらに検討を加えたい。

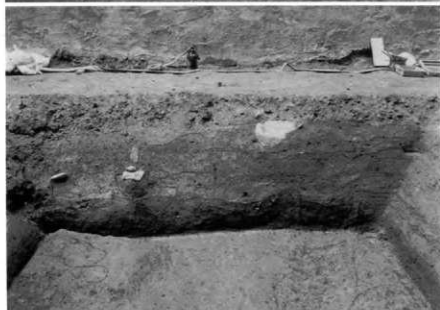
引用・参考文献

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町Ⅱ』

調査地全景
第2層上面の遺構完損状況
(北西から)



東壁断面
(西から)



南壁第4層以下
確認トレンチ
(北から)





第4層上面と第3層下面の遺構完掘状況(北から)



第3層上面の遺構完掘状況(北から)

大坂城下町跡(OJ05-9)発掘調査

調査箇所	大阪市中央区久太郎町3丁目36
調査面積	約100㎡
調査期間	平成18年3月27日～平成18年4月8日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、松本啓子、宮本康治

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地は大阪市中央区久太郎町3丁目36に所在し、御堂筋の東、中央大通の南にあって、大坂城の西側に広がる船場城下町の南西隅に当たる(図1・2)。

現在までの発掘調査は、おもに中央大通の北側で行われ、富裕な商家とみられる町屋や工房など、豊臣期以降の大坂城下町のようなすが寝える遺構や遺物が見つかった。また、場所によっては、その下に弥生時代や古代、あるいは中世前期の遺構・遺物が見つかることもある。本調査地の近辺では、中央大通を挟んで向かい側の3例の調査(OJ95-8・99-2・00-4次)が行われたが、ここでは弥生時代・古代・中世前期の遺構・遺物が見つかる[大阪市文化財協会2002・2004]。

平成18年2月3日に行った大阪市教育委員会による試掘調査で、中世末から近世初頭とみられる生活面が確認されたことから、平成18年3月27日より本調査を行うことになった。

調査は関係機関と協議の上、図3のように敷地の南西奥に調査区を設定した。大阪市教育委員会の指示に基づいて、現代から近世後半までの地層を重機で掘削後、地山とみられる自然堆積層の上表面までの約0.7mの間を人力によって調査した。平成18年4月7日に発掘作業を終え、翌8日に撤収して調査を完了した。

なお、今回使用した方位は磁北を示し、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文の挿図中ではTP+〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図4・5)



図1 調査地の位置(1:5,000)



図2 大坂城下町(船場)の推定範囲(1:20,000)

大阪市文化財協会2004「大坂城下町Ⅱ」、図9に加筆

本調査地の基本層序を図4・5に示した。

第1・2層：重機によって除去した近世後半から現代までの地層である。

第3層：18世紀後半の遺物が出土した整地層である。調査区の東半と西半で地層が異なっていて、間に遺構や擾乱が密集してあるため、東半と西半の整地層は直接には繋がっていない。東半は上から順に、灰色細粒砂混りシルト層(第3-1層)、黄灰色砂混り粘土質シルト層(第3-2層)、オリーブ黄色砂混りシルト層(第3-3層)で、各層とも炭を含んでいる。西半は上から黄灰色砂混りシルト層(第3-1層)、暗

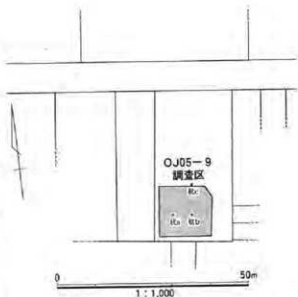


図3 調査区的位置(1:1,000)

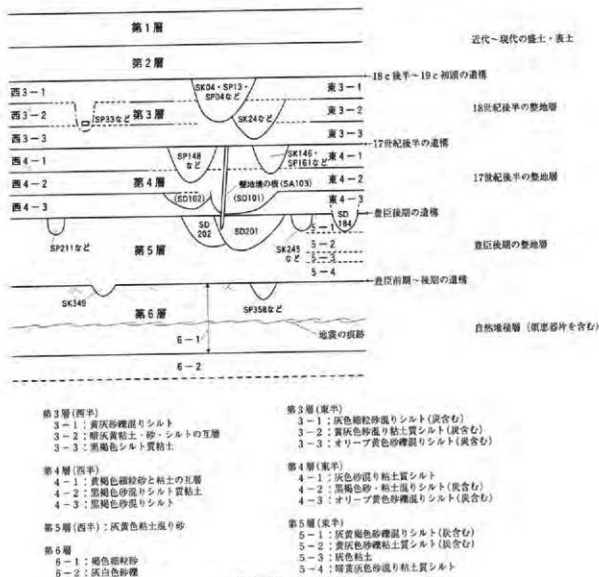
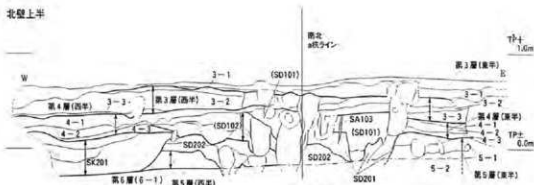


図4 地層と遺構の関係

北壁上半



- 第3層(西平)
 3-1: 黄灰砂礫混りシルト
 3-2: 暗灰質粘土・砂・シルトの互層
 3-3: 黒褐色シルト質粘土

- 第4層(西平)
 4-1: 黄褐色細粒砂と粘土の互層
 4-2: 黄褐色砂混りシルト質粘土
 4-3: 黒褐色砂混りシルト

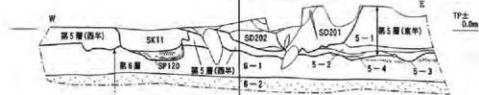
- 第5層(西平): にぶい黄灰色シルト混り細粒砂

- 第3層(東平)
 3-1: 灰色細粒砂混りシルト(炭含む)
 3-2: 黄灰色砂混り粘土質シルト(炭含む)
 3-3: オリーブ黄色砂礫混りシルト(炭含む)

- 第4層(東平)
 4-1: 灰色砂混り粘土質シルト
 4-2: 黒褐色砂・粘土混りシルト(炭含む) (SD101)
 4-3: オリーブ黄色砂礫混りシルト(炭含む)

- 第5層(東平)
 5-1: 灰黄褐色砂礫混りシルト(炭含む)
 5-2: 黄灰色砂礫粘土質シルト(炭含む)

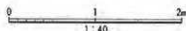
北壁下半



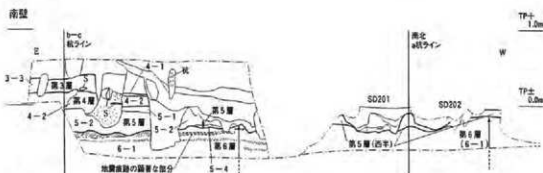
- 第5層(西平): 灰黄色砂混りシルト質粘土

- 第6層
 6-1: 褐色細粒砂
 6-2: 灰白色砂礫

- 第5層(東平)
 5-1: 灰黄褐色砂礫混りシルト(炭含む)
 5-2: 黄灰色砂礫粘土質シルト(炭含む)
 5-3: 灰色粘土
 5-4: 暗黄灰色砂混り粘土質シルト



南壁



- 第3層(東平)
 3-3: オリーブ黄色砂礫混りシルト(炭含む)
 第4層(東平)
 4-1: 灰色砂混り粘土質シルト
 4-2: 黒褐色砂・粘土混りシルト(炭含む)

- 第5層(東平)
 5-1: 灰細砂混りシルト
 5-2: 灰オリーブ砂混り粘土質シルト(炭混り)
 5-3: 暗黄褐色砂混りシルト質粘土
 5-4: 灰細粒砂混り粘土質シルト

- 第5層(西平): 黄灰色砂混り粘土質シルト
 第6層(西平) 6-1: 褐色細粒砂

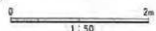


図5 北壁・南壁地層断面図

灰黄色粘土・砂・シルトの互層(第3-2層)、黒褐色シルト質粘土層(第3-3層)である。東半・西半とも第3-1層は強く締まった地層で、この上面が安定した生活面である。また、西半第3-2層も強く締まった互層となっていて、西半第3-2層上面も生活面とみられる。層厚は東半で約25cm、西半で約30cmである。

第3-1層上面でSK04などの土壌とSP13などのビットを検出した。また、第3層掘削中に検出した柱を支える礎板(SP33-36)やSK24などは正確な検出面を確認できていないが、検出状況から、第3-2層上面のものともみられる。

第4層：17世紀後半の遺物を含む整地層である。第3層と同様に、東半と西半で地層が異なっていて、間に溝や杭などの遺構が密集してあるため、東西の整地層は直接には繋がっていない。東半は上から灰色砂混り粘土質シルト層(第4-1層)、炭を含む黒褐色砂混りシルト層(第4-2層)、オリブ黄色砂礫混りシルト層(第4-3層)で、西半は黄褐色細粒砂と粘土の互層(第4-1層)、黒褐色砂混りシルト質粘土層(第4-2層)、黒褐色砂混りシルト層(第4-3層)である。層厚は東半で約20cm、西半で約25cmである。

東半・西半とも第4-1層は強く締まり、西半は互層となっているので、第4-1層上面は安定した生活面と考えられる。本層上面でSK146などの土壌と、ビット群(SK161など)、敷地境界とみられる立板SA103などを検出した。北壁の断面でSA103を設置する際の溝とみられる掘込みSD101・102を確認したが、SD101の埋土が調査区東半の第4-2層とよく似ていて、SD101・102のあたりに杭や立板SA103などの遺構が密集していたため、平面で確認することができなかった。SD101・102は東・西とも第4-3層上面からの掘込みで、東半は第4-2層で埋め、西半は第4-2層の上に積んでいる。第4-2層上面も生活面の可能性があるが、この面の遺構は確認できていない。

第5層：豊臣後期の遺物が出土した整地層である。東半は層厚約50cmで、4層に分けられる。上から順に、炭を含む灰黄褐色砂礫混りシルト層(第5-1層)、炭や有機物を含む茶灰色砂混り粘土質シルト層(第5-2層)、灰色粘土層(第5-3層)、暗黄灰色砂混り粘土質シルト層(第5-4層)である。西半は層厚約25cmの灰黄色粘土混り砂を主体とするが、場所によっては粘土と砂がこなれて砂混り粘土質シルトやシルト混り細粒砂であったりする。本層も東半と西半では若干状況の違いがあるが、第3・4層ほどの締まり具合の差や地層の違いはなく、一連の整地作業とみられる。本層上面でSK245などの土壌と区画施設SA201・202を構成するSP211などのビット群、そしてSA201・202を設置時の溝SD201・202、および第4層下面の溝SD184を検出した。

第6層：本層は上部の第6-1層が褐色細粒砂層、下部の第6-2層が灰白色砂礫層の自然堆積層である。層厚は第6-1層が約45cm、第6-2層は15cm以上である。第6-1層は層中に帯状の厚さ3~6cmの黒色細粒砂混りシルトが水平に挟まれており、この層壁にコンポルト層が観察された。第5層が形成される直前の地震による変形とみられる。慶長の大地震(1596年)がこれに相当する可能性がある。

本層上面で検出した遺構には第5層基底面のSP358や第5層下面のSK349といった土壌やビットがある。また、調査区の西端では鍬の痕跡とみられる凹凸が本層上面で観察された。第6-1層から土

師器甕の破片が出土した。

ii) 遺構と遺物(図6～9)

a. 豊臣前期～後期の遺構と遺物(図6)

第6層上面で第5層下面または基底面の土壌とピットを検出した。

土壌SK349が暗灰色砂混りシルトであることを除けば、遺構の埋土はいずれもよく似ている。土壌が灰黄色粘土混り砂質シルトで、ピットはこれよりもやや粘土質のシルトである。土壌は径0.4～1.1mの平面楕円形あるいは円形で、深さは0.2～0.4mである。ピットは平面円形のもの直径0.1～0.3m、楕円形ものは短径が0.2～0.3m、長径が0.3～0.5mで深さは0.05～0.25mである。遺物はSK349から肥前陶器の破片が出土したほか、SP355から土師器と近世の土師器、SP357から近世瓦、SP358から丹波播鉢と須恵器が出土した。いずれも破片のため図化できなかった。SK349は第5層下面の豊臣後期の遺構で、他は第5層基底面の豊臣前期～後期の遺構である。

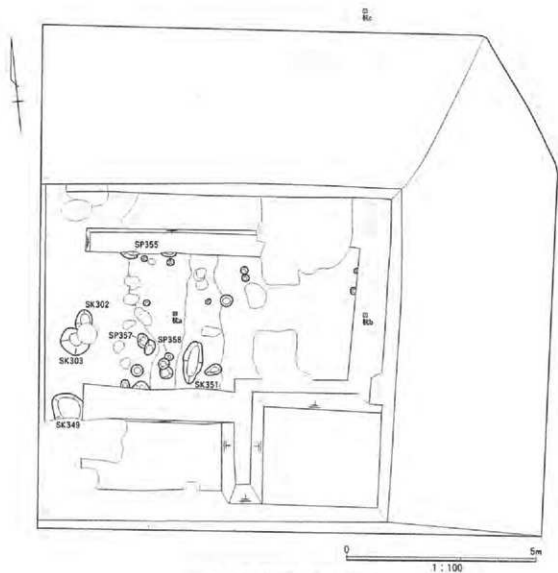
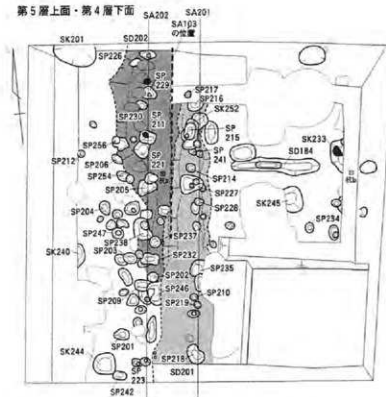


図6 第5層下面・基底面の遺構

第5層上面・第4層下面



第4層上面

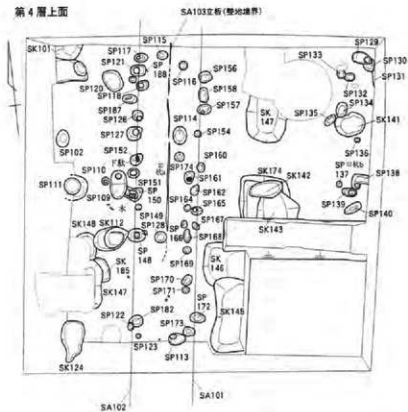


図7 第5層上面および第4層上面の遺構

b. 豊臣後期の遺構と遺物(図7・9)

第5層上面で、豊臣後期の土壌とピット群、溝、および第4層下面の江戸時代前期の溝SD184を検出した。おもな遺構と遺物について述べる。

SD201・202は第5層の整地の最終段階に掘られた敷地境界溝である。SD201は埋土が暗灰黄色砂混り粘土で、幅0.7~1.2m、深さ約0.4m、SD202は埋土が灰色砂混りシルトで、幅1.0~1.5m、深さ約0.4mの、ともに南北方向の溝である。水の流れた痕跡はなく、掘られてすぐに埋められたものと思われる。SD201はSD202の埋戻した後に掘られ、SD202の東肩を切っている。後述の敷地境界の板SA103はこの2つの溝の境界とほぼ同じ位置に設置され、SD201に15cmほど縦に食い込んでいた。SD201から古代の土師器や須恵器、灰釉陶器とともに備前焼、肥前陶器、焼塩壺などの豊臣後期の遺物が出土した。図9にSD201出土の灰釉陶器鉢1、SD202出土の土師質焜炉4を示した。

土壌やピットはSD201・202が埋まった後に掘られている。

ピットはSD201の西肩、第4層上面のSA103あたりを境に西側・東側で違いがある。

東側のピットは直径0.15m内外で深さ0.15mほどの、茶褐色シルト質粘土が埋土のもの(SP210・219・228・241など)が、SD201の西肩から0.7mほど離れて南北に並んでいる。これらは塀または櫓(SA201)の柱か杭と考えられる。SA201のピットに切られる平面長方形のピット(長径0.6m内外、短径0.3m内外、深さ約0.2m)がほぼ同じ位置に南北に並んでいる(SP216・235・218など)。これらは灰褐色砂混り粘土質シルトが埋土で、SA201の前段階の櫓か塀と考えられる。これらのピットから豊臣後期までの遺物が出土した。このうちSP218出土の瀬戸美濃焼灰釉皿9・11とSP241出土の青花菖蒲底皿13を図示した。

西側のピットも、一辺が0.3~0.6m内外の平面隅丸長方形や楕円形をしたものが、SD201の西肩から0.6mほど離れてSP209・211・223・232・238などが南北に並んでいる。灰~暗灰青色砂混りシルト質粘土が埋土で、柱痕跡や礎石のあるものもある。これらも塀または櫓(SA202)の柱か杭であったと考えられる。このほかにも径0.3m程度の円形または不整形のピットや柱穴が多数見つかった。これらのピットや柱穴から豊臣後期の遺物が出土した。これらのうちSP226出土の漳州窯系色絵磁器14を図示した。

土壌は長径0.7m内外、短径0.5m内外、深さ0.4mほどの規模で、平面が隅丸長方形をしていて、ほぼ垂直に掘られている。埋土はSK245を例にとると、下部が茶灰色細粒砂混りシルト質粘土、上部に炭を含む灰色細粒砂混り粘土質シルトが堆積していて、ほとんどの土壌がこれに類似した埋土である。大半が廃棄土壌と考えられる。これらの土壌から豊臣後期の遺物が出土した。SK252出土の土鍾3を図示した。

c. 江戸時代前期の遺構と遺物(図7・9)

SD184は幅0.4m、深さ約0.15mの浅い東西溝で、確認できた長さは2.3m分である。東半の第4~3層で埋まっている第4層下面の遺構である。17世紀前半頃の肥前磁器染付碗16を図示した。

第4層上面で土壌と、櫓か塀などの区画施設とみられるSA102を構成するピット群、敷地境界とみられる立板SA103などが検出された。層序で述べたように、SA101~103を設置する際の溝状の掘込

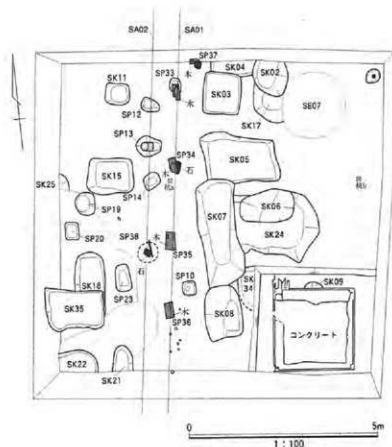


図8 第3層上面の遺構



写真1 第3層中の礎板

みSD101・102は、北壁で確認した。主な遺構について述べる。

SA101は径0.2~0.4mの平面円形または楕円形の南北に並ぶピットSP154・156・161・167・172などからなり、柵のような区画施設と考えられる。深さは約0.15mである。埋土は暗灰黄色砂礫混りシルトで、茶灰色砂混り粘土質シルトの詰った直径0.10mほどの柱痕跡のあるものもある。遺物は17世紀後半までの遺物がこれらのピットから出土し、SP167出土の肥前磁器染付皿19を図示した。

SA101の西へ約0.2m離れたSP161とSP173を結ぶ線上にも、同様のピットがSA101と平行して並んでいる。扉のつくり替えがあったものとみられる。

SA102は南北0.4m、東西0.3mほどの平面隅丸長方形または楕円形のピットSP117・126・148・151・182などからなり、扉などの区画施設と考えられる。深さは約0.15mである。埋土は暗灰黄色砂混りシルトで、茶灰色砂混り粘土質シルトの詰った直径0.10mほどの柱痕跡のあるものもある。これらのピット出土の遺物は17世紀半ばまでのもので、SP117出土の肥前陶器碗6と小杯5を図示した。

敷地境界とみられる立板SA103は、厚さ約3cm、幅40cmの板を第5層中から第4層上面まで南北方向に立てている。第5層には約0.15mくい込み、最下部の数箇所を図示したような鉄釘21が東側から斜め方向に打込まれていた。SA101・102のちょうど真ん中に位置し、両者とは約0.8m離れている。

土壌はすべて廃棄土礫とみられ、南北0.6~1.3m、東西1.1~1.5m、深さ0.4~0.6mの、平面が南北に長い隅丸長方形か隅丸正方形のものがほとんどである。埋土はいずれもよく似ていて、SK143を例にとると、炭を多く含む灰褐色砂混りシルトと砂、黒褐色粘土が互層になって堆積していて、多く

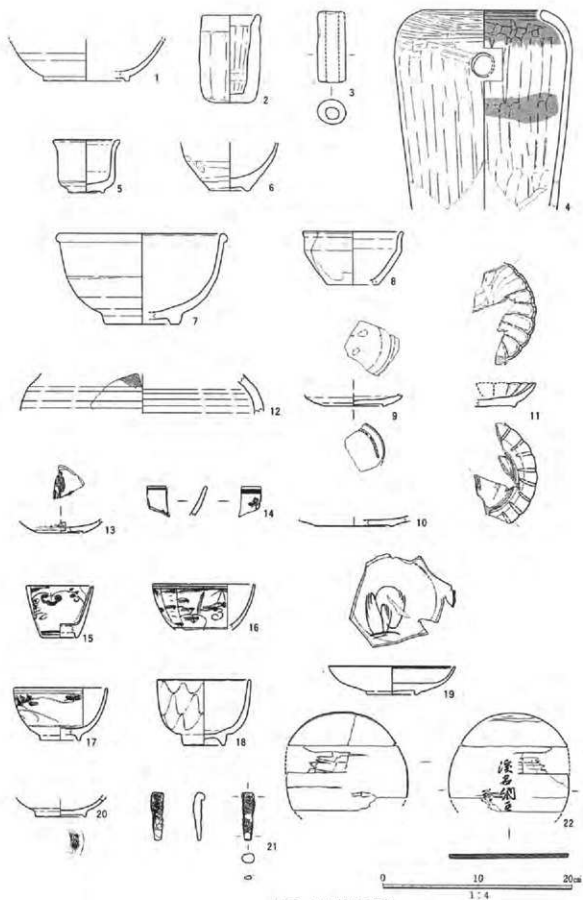


圖9 出土遺物実測圖

第4層(10・12・18)、第3層(17・22)、SD201(1)、SD202(4)、SK252(3)、SK227(11)、
 SP218(9)、SP241(13)、SP226(14)、SA103(21)、SD184(16)、SK145(8)、SK174(2)、
 SK185(7)、SP117(5・6)、SP167(19)、SK04(15)、SK35(20)

の切合いが見られた。遺物は17世紀半ば頃のものが出土し、SK174出土の土師質焼壺2、SK145出土の肥前陶器天目碗8と、SK185出土の肥前陶器鉢7を図9に示した。

d. 江戸時代後期の遺構と遺物(図8・9)

第3層上面で廃棄土壌と構または塀が、また、層中で礎板SP33~36などが見つかった。

廃棄土壌は一辺約1.0mの正方形のものから短辺約1.0mで長辺約3.0mの長方形をしたものまでさまざまな規模のものがある。深さは0.3~0.9mで、埋土は炭を多く含む黒褐~暗黄褐色の砂混り粘土質シルトと黒色粘土が互層になっている。これらの土壌から18世紀後半~19世紀初頭の遺物が出土した。SK04出土の肥前磁器染付蕎麦猪口15とSK35出土の関西系陶器底部20を図示した。

SP12~14は長径0.5~0.7m、短径0.4~0.6m、深さ約0.15mの長方形または楕円形の平面の柱穴で、埋土も灰黄褐色砂混り粘土質シルトで、SP13は直径0.2mの暗灰黄褐色粘土質シルトの柱痕跡がある。これらは南北に一直線に並び、この延長線上にこれらの深さと上面の高さがほぼ同じで上面を水平に置いた石SP38があり、竈などの区画施設SA02を構成するものと考えられる。18世紀後半の遺物が出土した。

SA01は第3層中で見つかった礎板SP33~36からなり、これらは南北5.8mの間にはほぼ等間隔で配置されている。SA01はSA101とまったく同じ位置にあり、18世紀後半頃の敷地境界を示す塀などの区画施設と考えられる。

e. 各層の出土遺物(図9)

第3層の遺物のうち、東半の第3~3層出土の肥前磁器染付碗17と、側溝掘削時に東半の第3層のいずれかの層から出土した「浜名納豆」という墨書のある円形の薄板22を図示した。22は種の底板とみられる。これらは18世紀後半のものである。「浜名納豆」は静岡県浜名地域の名産品で、大徳寺納豆のような塩辛い調味料である。

第4層の遺物は、西半の第4~3層出土のベトナム産の焼締壺12、東半第4~1層出土の肥前磁器染付碗18志野皿10を図示した。これらは17世紀後半頃までのものである。

第5層の遺物で図化した遺物はない。

また、第6層の土師器も細片であるため、図化していない。

3) まとめ

今回の調査は敷地の奥まった所の調査であったため、母屋に当たる建物は検出することはできなかったが、豊臣後期に始まり、江戸時代に引き継がれる明瞭な敷地境界を確認することができた。これらは、まだ調査があまり行われていない船場地域西部の大坂城下町のようなすを窺うことのできる良好な資料であり、この地域の歴史を考える上での重要な手がかりとなる。今後の調査成果と合わせてさらに検討を加えたい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2004、「大坂城下町」II

2002、「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1999・2000年度—」

調査区全景
(北から)



南壁東半断面
(部分、北から)



地震による地層の乱れ
→

北壁西半断面
(部分、南から)



第6層上面検出の遺構
(北から)



第5層上面検出の遺構と
第4層上面のSA103
(北から)



第4層上面検出の遺構
(北から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ05-10)報告書

調査箇所	大阪市中央区瓦町1丁目1-4他
調査面積	72㎡
調査期間	平成18年3月22日～4月4日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、宮本佐知子、杉本厚典

1)調査に到る経緯と経過

調査地は中央区瓦町1丁目、トーマンビルの南対面に位置する。本調査地の北東では淡路町1丁目ではOJ92-20・05-7次調査、瓦町1丁目ではOJ02-3次調査等が、また、西側の瓦町2丁目ではOJ92-33・99-7次調査が実施され、いずれにおいても豊臣後期の遺構が多数検出されている。また、海浜成層の上面が周辺よりやや高いOJ92-20・05-7次調査地では、奈良時代の井戸や土壇などの古代の遺構が分布する[大阪市文化財協会2006b]。

調査地において平成18年2月に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、スラグを含む17世紀前半以前の土壌が検出されたため本調査を行うことになった(図1・2)。調査は周辺でも確認されているような16～17世紀の遺構の分布と具体的な性格を明らかにすることを目的とした。

調査は平成18年3月22日から開始した。表土や近世後期の石垣を重機によって除去し、以下TP+0.8mの海浜成層までを人力で掘削し、適宜写真撮影と記録作業を行った。4月4日には調査記録を完了し、埋戻しを行った。本報告で使用した方位は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文の挿図ではTP+0mとした。また煩雑なため、図中の遺構記号は省略している。

2)調査の結果

i)層序(図3・10・11)

第0層:19世紀～現代にかけての盛土層である。

第1層:層厚100cmの黄褐色中～粗粒砂で構成される盛土層であった。層中には18世紀後半の遺物が含まれていた。この層の上面で礎石と石組を検出した。



図1 調査地位置図



図2 調査区的位置

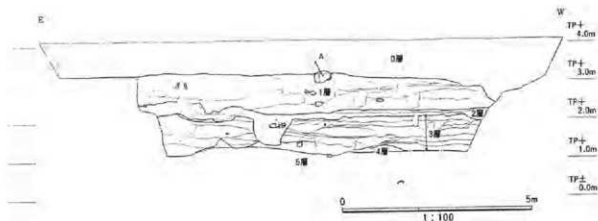


図3 南壁断面図

第2層：層厚20～80cmの灰褐色シルト混り細粒砂層であった。本層は整地層とみられ、北側ほど厚く堆積していたが、上面がTP+2.2mの高さにそろっていた。層中には18世紀前半の遺物が含まれていた。

第3層：層厚100cmの黒～黒褐色細粒砂層であった。層中にはスラグや炭・焼土が多く含まれていた。第3層内には多くの棄層が認められたが、層厚が不均一で、明確な広がり把握することが困難であったため、個々に層名をつけることは行わなかった。そのかわりTP+1.5mを境にして上・下層に大別して遺構の検出を行った。本層上面では土壌や礎石、上部層中から土壌・炉跡・溝、下部層中から土壌などをそれぞれ検出した。本層中には豊臣後期の遺物が含まれていた。

第4層：層厚40cmのにおい黄褐色～暗灰黄色細粒砂層であった。本層上部から備前焼釜鉢15、肥前陶器皿16、層中から肥前陶器碗17・瀬戸美濃焼皿18、肥前陶器皿19・20、肥前陶器碗21、瀬戸美濃焼志野大皿22が出土した。いずれも豊臣後期の時期におさまる遺物である。

第5層：TP+0.8m以下に分布しており、上部が暗褐色シルト混り中～粗粒砂層、下部がにおい黄褐色中粒砂層でそれぞれ構成されていた。上部は淘汰が悪く、薄く暗色化していることから、古土壌層とみられる。下部はにおい黄褐色中粒砂で構成され、ラミナが認められた。OS87-153次調査地の第8層、OJ92-33次調査地第12層、OJ05-7次調査地の第9層などの海成層に対比される。

ii) 遺構と遺物(図4～11)

a. 第5層上面検出遺構(図4)

土壌3基を検出した。

SK501 一辺0.75mの隅丸方形の土壌で、深さ0.3mであった。

SK502 東西1.55m、南北1.25mの楕円形の土壌で、深さ0.7mであった。

SK503 直径1.15mの円形の土壌で、深さ0.5mであった。

b. 第4層上面～層中検出遺構(図5)

第4層上面で落込み3基(SX401～403)、層中で落込み1基(SX404)と土壌2基(SK405・406)を確認した。

SX401 東西1.35m、南北0.5mの楕円形の土壌で、深さ0.3mであった。瀬戸美濃焼志野織部皿8

が出土した。豊臣後期のものとみられる。

SX402 東西1.0m以上、南北1.5m以上の不定形の落込みであった。深さ0.32mで、下層がスラグを多く含む黒褐色細粒砂、中層が炭の細片、上層がオリーブ褐色シルト質粘土でそれぞれ構成されていた。SX403を切っていた。

SX403 東西3m以上、南北2.6mの不定形の落込みであった。深さ0.45mであり、埋土はスラグや炭を多く含む灰褐色シルトであった。

SX404 東西3.0m、南北1.6mの不定形の落込みで、深さ0.3m以上であった。瀬戸美濃焼灰釉皿1、肥前陶器皿2、肥前系陶器大平鉢3、備前焼香炉4、土師器皿5-7、備前焼片口24が出土した。土師器皿はいずれも立ち上がり明瞭で、6は内面に圏線が認められる。土師器皿の形態が古いこと、また、備前焼・瀬戸美濃焼が多く肥前磁器は供伴しないことから、豊臣後期のものとみられる。SK405・406を切っていた。

SK405 東西1.8m、南北1.1mの土壌であった。深さ0.5mであり、埋土の下層は暗褐色細粒砂、上層は黄灰色シルトで構成されていた。

SK406 東西1.9m以上、南北0.7m以上の土壌であった。深さ0.40mであり、埋土にはぶい黄褐色細粒砂であった。

c. 第3層下部層中検出遺構(図6)

土塊10基・ビット3個・落込み3基を検出した。

SK333 東西1.6m、南北0.6mの長方形の土塊であった。深さ0.10m、埋土は黒褐色細粒砂であった。

SK334 一辺1.4m、の隅丸方形の土塊であった。深さ0.12mで、埋土は炭や焼土を含む暗褐色細粒砂であった。

SK335 東西0.7m、南北1.6mの長方形の土塊であった。東辺中央に0.3mの張り出しが認められた。深さは0.15mであった。

SK336 東西1.0m以上、南北0.7mの方形の土塊であった。深さ0.2mで、埋土は黒褐色細粒砂であった。

SK337 東西0.5m、南北0.65mの楕円形の土塊であった。深さ0.11mで、埋土にはぶい褐色シル

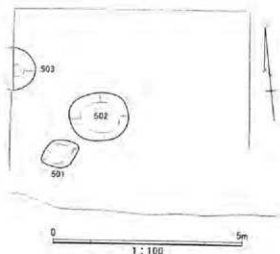


図4 第5層上面検出遺構

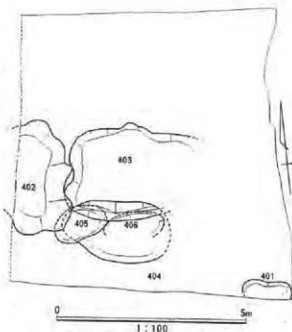


図5 第4層上面～層中検出遺構

トの上に、0.02mの炭層が堆積し、さらにその上には明褐色の焼土が覆っていた。また、この焼土中から轆羽口の破片が出土した。

SK338 東西0.6m、南北0.65m以上の楕円形の土壌であった。上部が削られており、0.10mが遺存していた。

SK339 東西0.85m、南北1.1m以上の楕円形の土壌であった。SK338と同様に上部が削られており、0.10mが遺存していた。ワラ灰釉を施した上野高取焼鉢14が出土した。

SK340 東西0.8m、南北1.1mの方形の土壌であった。北辺から轆羽口が出土した。深さ0.16mで、下層は暗オリーブ色細粒砂、中層は炭混り黒褐色細粒砂、上層は淘汰の良いオリーブ褐色細粒砂であった。土壌の北辺から轆羽口25が出土した。直径7.8cmで孔部分は直径2.4cmである。胎土には1~7mm大の砂粒を多く含んでおり、先端には鉾滓が付着する。

SK341 東西0.75m、南北0.5mの隅丸長方形の土壌であった。深さ0.15m、埋土は褐色シルト～細粒砂であった。土壌の中央に層厚0.08mの炭の堆積が認められた。

SK342 東西0.6m、南北0.5mの方形の土壌であった。深さ0.15m、埋土は炭混り黒褐色細粒砂であった。

SP343 直径0.3mの円形で、深さ0.04mの小穴であった。

SP344 直径0.1mの円形の小穴であった。深さ0.03mであった。

炉跡345 窪みの周囲が焼けており炉跡と判断した。窪みは東西0.6m、南北0.4m、深さ0.10mであり、焼土・灰によって埋まっていた。

SX346 東西1.1m以上、南北3.2mの楕円形の浅い窪みであった。深さ0.3mで、埋土は黒褐色細粒砂で、スラグが多く含まれていた。

SX347 東西1.0m以上、南北1.45mの不定形の落込みであった。深さ0.15mで、埋土は黒褐色細粒砂であった。

SX348 東西1.5m以上、南北1.80mの不定形の落込みで、底から轆羽口が3点出土した。深さ0.30mで、埋土は黒褐色細粒砂であり、焼土・スラグが大量に出土した。

d. 第3層上部層中検出遺構(図7・8)

土壌10基・落込み1基・集石遺構1基・溝3条・炉4基を検出した。

SK314 直径0.60mの円形の土壌で、深さ0.30mで埋土は黒褐色細粒砂であった。SD327を切っていた。

SK315 東西0.75m、南北0.55mの楕円形の土壌であった。深さ0.10mで、東側が黒褐色シルトで埋まった後、東側の凹みに炭の薄層が堆積し、その上を褐色シルト層が覆っていた。SK321・322、SD326を切っていた。肥前磁器染付鉢11・碗12が出土した。11は見込みに植物とみられる文様を描く。12は高台畳付を釉剥ぎし、外側面を区割りして文様を描く。これらの特徴に加え、口径に対して底径も広いことから、1620~30年代のものと思われる。

SK316 東西0.7m、南北1.3mの長方形の土壌であった。深さ0.35mで、埋土は褐色シルトで構成され、下部にスラグが多く含まれていた。

SK317 東西1.4m、南北0.4m以上の方形の土壌であった。深さ0.80mで、埋土は炭混り黒色細粒砂であった。

SK318 直径0.70mの円形の土壌であった。深さ0.75mで、埋土は黒～黒褐色細粒砂であった。埋土の中ほどにスラグや鑄羽口の破片が含まれていた。

SK319 東西0.35m、南北0.6mの楕円形の土壌であった。深さ0.15mであった。

SK320 一辺が0.7m以上の方形、または長方形に復元される土壌であった。深さ0.3mで、埋土は黒褐色細粒砂であった。

SK321 東西0.5m、南北0.7mの隅丸長方形の土壌で、深さ0.10mであった。埋土中から肥前磁器皿23が出土した。菊花形に型打成形しており、高台臺付部分は軸を剥ぐ。口径に対して底径が広く、1620年代のものと思われる。

SK322 東西1.1m、南北0.8mの方形の土壌であった。深さ0.15mで、埋土は黒色細粒砂であった。下部に焼土や備前焼大甕の破片が含まれていた。肥前磁器碗9、丹波焼播鉢10が出土した。9は外側面を区割りして、竹や菊花などを描く。口径に対して底径が狭い器形であり、1640～50年代のものと思われる。

SK323 東西1.3m、南北1.1mの隅丸方形に復元される土壌であった。深さ0.30mで、埋土は黒褐色シルト～細粒砂であった。瀬戸美濃焼碗13が出土した。上部がSD326～328によって切られていた。

SX324 東西2.5m、南北0.5mの不定形の落込みであった深さ0.40mで、下層は黒褐色シルト混り細粒砂、上層はにぶい黄褐色シルト混り細粒砂で構成されていた。上層にはスラグや焼土塊が顕著であった。

SX325 東西0.4m、南北0.8mの範囲に広がる集石遺構である。集石は中～巨礫で構成されていた。
SD326 幅1.1m以上の東西方向に延びる溝であった。深さ0.3mで、埋土は黒褐色細粒砂であった。
SD327 幅0.6m以上の東西方向に延びる溝であった。深さ0.3mで、埋土はSD326と類似する黒褐色細粒砂であった。

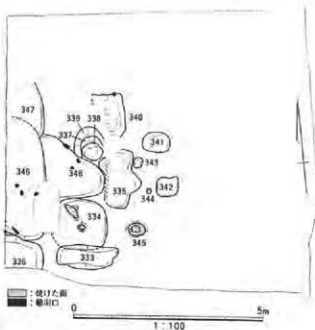


図6 第3層下部層中検出遺構

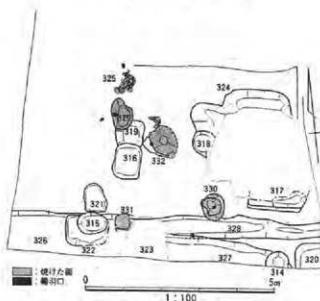


図7 第3層上部層中検出遺構

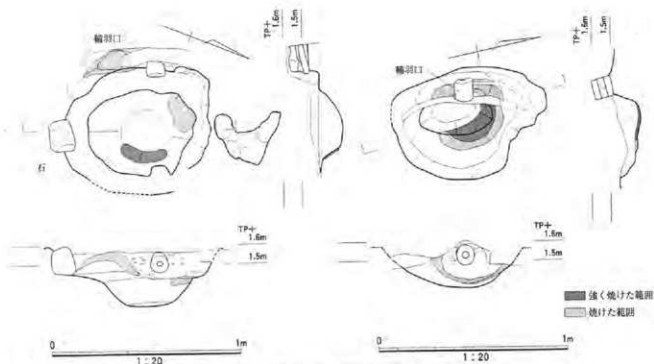


図8 炉跡332(左)・炉跡329(右)平・立面図

SD328 幅0.6m以上の東西方向の溝で、溝底は西へ下っていた。深さ0.15mで、埋土は黒褐色細粒砂であった。SD326・327に切られていた。

炉跡329 東西0.5m、南北0.8mの炉であった(図8)。輪羽口の長軸を延長した付近を中心にして、土壌の壁面が赤く焼けていたことから、羽口の位置はおおよそ原位置を保っていると判断した。窪みの部分の深さは0.20mであり、黒色の炭で埋まっており、焼土塊が含まれていた。

炉跡330 東西0.6m、南北0.7mの炉であった。深さ0.21mで、埋土は黒色細粒砂と炭との互層であった。SD328を切っていた。

炉跡331 直径0.4m以上にわたって円形に焼土面が広がっていたことから炉跡と判断した。焼土部分は0.10mの厚さで焼けていた。

炉跡332 東西0.65m、南北0.85mの楕円形で、深さ0.19mの窪みの周囲に炉壁が遺存していた(図8)。窪み部分の埋土は下から焼土、炭、焼土の各層で構成されていた。炉壁に一部埋まった状態で輪羽口26が出土した。26は直径9.1cmで、孔部分は直径3.2cmである。胎土には直径1cmの礫をはじめ、多くの砂粒が含まれており、先端部分には鉍滓が付着する。

e. 第3層上面検出遺構(図9)

土塊10基・ビット3基・礎石7個を検出した。

SK301 東西1.34m、南北0.58m以上、深さ0.31mの土塊であった。埋土は黒色細粒砂であった。

SK302 東西0.66m、南北1.14mの楕円形で、深さ0.20mの土塊であった。埋土は貝殻を含む黒色細粒砂であった。

SK303 東西0.76m、南北0.58mの方形で、深さ0.05mの窪みであった。この中に小礫が敷き詰められていた。

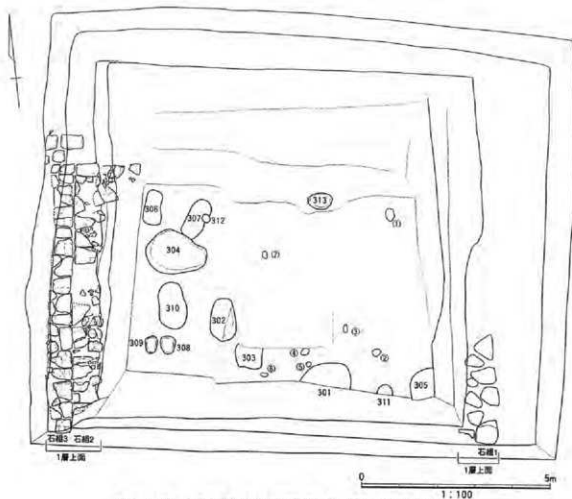


図9 第3・1層上面検出遺構(○番号は第3層上面検出の建物礎石)

SK304 東西1.64m、南北1.16mの不定形の土壇であった。深さ0.26mで、埋土は下から黒褐色細粒砂・黄褐色細粒砂・オリーブ褐色シルトで構成されていた。

SK305 南北0.62m以上の円形の土壇であった。深さ0.04mで、埋土は黒色細粒砂であった。

SK306 東西0.38m、南北0.92mの長方形の土壇であった。深さ0.20mで、埋土は黒褐色シルト混り細粒砂であった。

SK307 東西0.50m、南北1.05mの長方形の土壇であった。深さ0.09mで、埋土は暗オリーブ褐色細粒砂であった。

SK308 東西0.42m、南北0.48mの円形の土壇であった。深さ0.1mで、埋土は灰～黄褐色シルトであった。

SK309 東西0.34m、南北0.46mの円形の土壇であった。深さ0.1mで、埋土は灰～黄褐色シルトであった。

SK310 東西0.72m、南北1.24mの隅丸長方形の土壇であった。深さ0.45mであり、埋土は3層に細分された。下層はしまりの悪い黒褐色中粒砂で、偽礫も認められたことから人為的に埋戻された層と判断される。中層は層厚0.1mの焼土層であり土壇の全体に広がっていた。上層は下部に細粒砂が堆積し、その上に暗褐色のシルトが堆積していた。

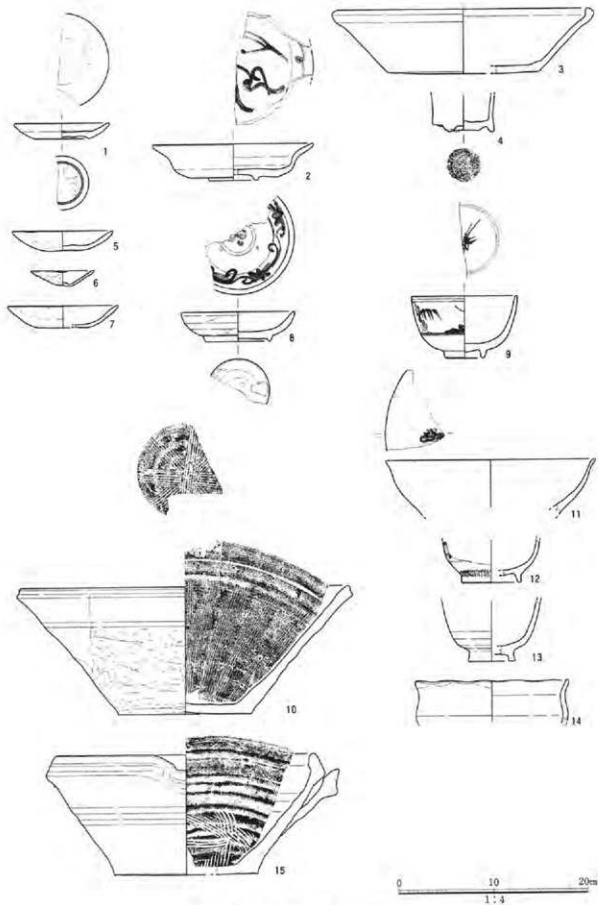


図10 各層および遺構出土遺物実測図(その1)

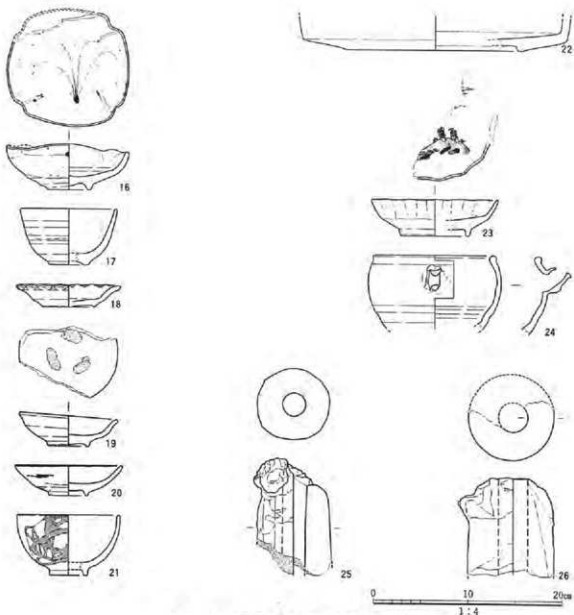


図11 各層および遺構出土遺物実測図(その2)

SP311 直径0.38mの円形の小穴であった。深さ0.02mで、埋土は黒色細粒砂であった。

SP312 直径0.2mのピットであった。深さ0.20mで、埋土は黒褐色シルト混り細粒砂であった。

SK307を切っていた。

SP313 東西0.65m、南北0.46mの楕円形の柱穴であった。深さ0.25mであり、埋土は上層が黒色シルト、下層が偽礫を含む灰黄色シルトであった。掘形の西側には直径0.4m、深さ0.2mの柱の抜取り穴が認められた。

礎石1~7 柱筋を復元するには至らなかったが7個の礎石を検出した。礎石はいずれも直径0.2mの円形で扁平な花崗岩を用いていた。

f. 第1層上面検出遺構(図9)

石組1~3と礎石Aを検出した。石組1・3は西向き、石組2は東向きに面をそろえており、石組1・2

の間隔は11.2mであった。これらの石組は現在の南北方向の道路とはほぼ平行して延びていた。いずれの石組も堅牢なつくりであり、掘削中に漆喰壁の破片がいくつか認められたことから、土蔵のような建物基礎であった可能性が高い。敷地奥に土蔵が設けられていたとみられる。

3) まとめ

今回の調査で次のことが明らかになった。

1、古代・中世にさかのぼる遺構・遺物は検出できなかった。しかし、TP+0.8~0.7mにかけて暗色化した地層が認められ、中世以前の古土壌であった可能性が高い。

2、第4層上面に豊臣後期の不定形の土壌が認められた。土壌内からは多数の土器・陶器が出土しており、ゴミ穴としての性格が考えられる。

3、豊臣後期から徳川期にかけて、鍛冶あるいは鋳物を行ったとみられる炉跡を検出した。炉跡の中には加壁とみられるものが遺存し、その部分に鑪羽口が据えられた状態のものもあった。鋳型や鍛造剥片等が出土しておらず、何が生産されていたかを特定することはできないが、調査区全体にスラグや炭、焼土塊が厚く堆積しており、生産規模が大きかったことが想像される。

4、鍛冶あるいは鋳物を行ったとみられる遺構群が埋没した後、町屋になっていたとみられる。これらの遺構からは18世紀前半の遺物が出土しており、下層の金属器生産関連遺構の下限年代を特定することができる。

5、18世紀後半頃に盛土がなされた後、土蔵と考えられる建物基礎が築かれていた。この建物基礎は現在の敷地の方位とはほぼ一致する。

今回の調査では豊臣後期頃から居住が始まり、やがて高熱を要する金属器生産の場に変遷した。調査地一帯は豊臣後期に城下町となったと考えられており[大阪市文化財協会2004]、豊臣後期に居住が始まったことは、この見解と矛盾しない。

本調査地で行われた金属器生産とはどのようなものであったのだろうか。道修町1丁目のOS86-20次調査地では豊臣前期の鋳造関連遺構が見つかった。飯炉と考えられる炉跡が検出され、梨先鋳型・鍋耳鋳型・挽型鋳型片・埴塼・鋳型焼成用支脚や羽口が出土した[大阪市文化財協会2004]。また、高麗橋1丁目のOS05-5次調査地では1620~50年代の銅の精錬炉が検出され、鑪羽口の他多量の銅滓が見つかった[大阪市文化財協会2006a]。鑪羽口が出土することは共通するものの、OS86-20・05-5次調査地で見つかったような鋳型・支脚等の鋳造作業を具体的に示す遺物は本調査地では出土していない。そのため鋳物よりむしろ鍛冶が営まれていた可能性が高いと思われる。金属器生産の実態や豊臣期の城下町の構成を知るためにも、今後、周辺地域の調査を慎重に進めていく必要がある。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡』II

大阪市文化財協会2006a、『東高麗橋における大坂城跡発掘調査(OS05-5)報告書』

大阪市文化財協会2006b、『アジ住宅株式会社による建設事に伴う大坂城下町跡発掘調査(O)05-7)報告書』

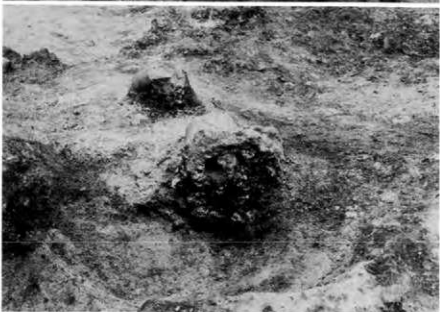
南壁東半
(北西から)



第3層上部層中
検出遺構
(東から)



弁路329
(東から)



今橋4丁目所在遺跡発掘調査(IB05-1)報告書

調査箇所	大阪市中央区今橋4丁目39ほか
調査面積	約440㎡
調査期間	平成17年7月20日～平成17年9月22日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、松本啓子

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地は大阪市中央区今橋4丁目39ほかに所在し、大阪市立愛日小学校のあった場所である。ここは淀屋橋南西詰めから約200m南下した地点で、今橋通りに南面している(図1)。江戸時代初期に豪商「淀屋」の屋敷と米市場があったといわれる淀屋橋南西詰めの大川町の通り(現・土佐堀通り)から2筋南に当り、当時の日本の経済・金融の中心地であった場所とは至近距離にある。現在までに、西横堀川から御堂筋までの間の大坂城下町と推定される地域では土佐堀1丁目の萩蔭蔵屋敷跡を除くと、発掘調査が行われたことはなく、平成17年2月16日に行った大阪市教育委員会による試掘調査で、中世末か近世初頭とみられる生活面が確認されたことから、平成17年7月20日より本調査を行うことになった。

調査は大阪市教育委員会の指示に基づき、地表面から3.7mまでを重機で掘削して、地山とみられる自然堆積層の上層に当たる標高0m前後の1mほどの間を人力により掘削した。

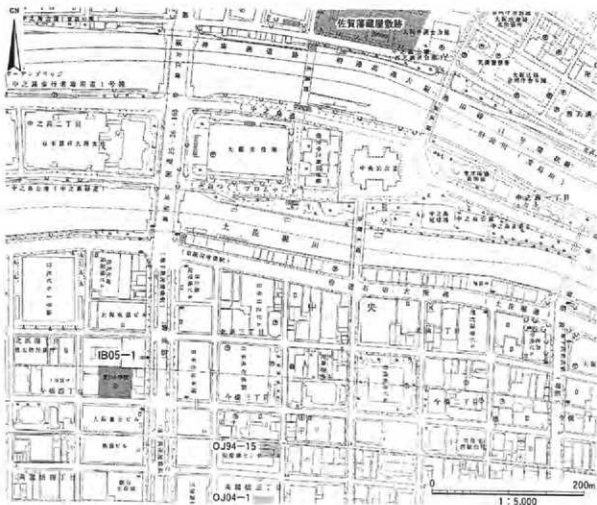


図1 調査地の位置(1:5,000)

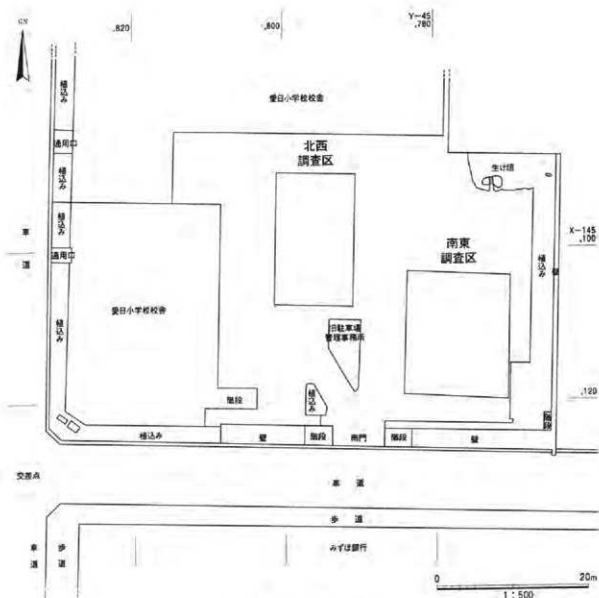


図2 調査区の位置(1:500)

調査は南東・北西の二つの調査区を設定し(図2)、南東調査区から着手した。本調査区の調査を終了し、埋戻した後、平成17年8月23日から北西調査区の調査を行った(写真図版1上段)。北西調査区の発掘作業は平成17年9月9日に終了し、平成17年9月22日に埋戻しを含めたすべての作業を終えた。

なお、今回使用した方位は座標北を示し、座標値は世界測地系2000、標高水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文の挿図中ではTP±〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序

本調査地の基本層序は図3・4のとおりである。

両調査区ともTP-0.7mほどで自然堆積層(地山)が確認され、これより上の地層はすべて人為的な

盛土(整地)によるものであった。

a. 南東調査区の層序(図3)

南東調査区は後述する第6層の上面近くまで重機掘削したが、西壁部分がちょうど各時期の整地の境に当り、地層のつながりが不明確であったので、一部を拡張して地層の検討をした。南東調査区の層序は以下のとおりである。

第0層：近代から現代までの地層で、旧愛日小学校の基礎のコンクリートや第二次大戦時の焼土などが見られた。

第1層：近世後期の層厚95cmの整地層である。

第2層：18世紀前半とみられる層厚30cmほどの盛土層で、図11の伊万里焼鉢30が出土した。礎石とみられる石が1個壁に残っていた。

第3層：17世紀後半～18世紀初頭頃と推定される層厚50cmほどの整地層である。

第4層：オリブ褐色砂礫混り粘土質シルトを主体とする層厚30cmほどの整地層で、最上部には炭の混る黒褐色シルト混り粘土層がある。17世紀後半の整地層である。

第5層：下部が黄褐色砂の盛土層で、上部は西側が炭や焼土の混るオリブ褐色、東側が灰色の細粒砂混りシルトとなる層厚35cm程度の整地層である。上面が生活面である。図11に本層から出土した唐津焼碗21・22・25を図示した。17世紀中頃の盛土整地層である。

第6層：東半は暗灰黄色、西半は黄褐色を呈するシルト混りの砂を主体とする整地層である。上面は著しく削平されていた。厚いところで層厚は50cmある。上面直下に部分的に残る暗褐色砂礫混りシルト層の上面が生活面であったものとみられる。17世紀前半の遺物が出土した。

第7層：東半が暗黄褐色、西半がオリブ褐色を呈する炭・焼土・焼壁が大量に混る粘土混りシルト～細粒砂層で、最大層厚は25cmある。本層は1614年の大坂冬ノ陣の火災の跡を整理した地層である。1620～1630年頃の遺物を大量に含んでおり、この頃に町が再建されたことがわかる。図7に本層から出土した瀬戸美濃焼志野織部皿4と中国・州窯系磁器の大皿8を図示した。

第8層：細粒砂とシルト質粘土を主体とする層厚30cm程度の整地層である。西半はオリブ褐色、東半は黄褐色を呈している。唐津焼の破片などを含むことから豊臣後期の整地層と考えられる。

第9層：TP-0.7m以下に堆積する層厚10cm程度の白～黄褐色の細粒砂層で、自然堆積層(地山)である。

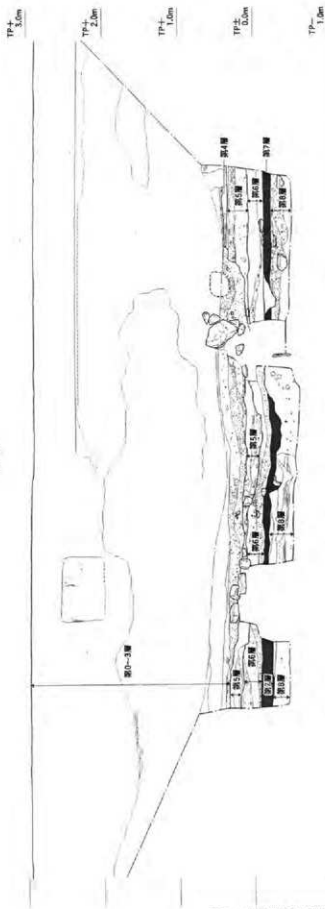
これより下は埋戻し前に重機を使って深く掘り、断面を観察した。TP-0.8m以下は褐色の砂、TP-1.0m以下には褐色砂礫が堆積しており、ここから湧水する。TP-1.1m以下、少なくともTP-1.4mまでは淘汰のよい灰白色細粒砂が堆積していた。

b. 北西調査区の層序(図4)

南東調査区の成果を受けて、北西調査区では第0～4層に相当する地層を重機で掘削し、第5層上面に相当する面から調査を開始した。

第5層：黄褐色シルト混り細粒砂による盛土層であり、さらに上面を西側が暗褐色、東側が灰色砂混り粘土で盛土して固めている。上面が生活面となっていたものと考えられる。17世紀前半～中頃の

南壁



西壁 (第7層以下)

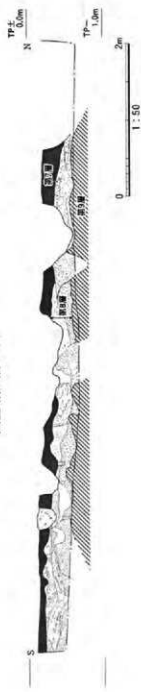


图3 南東調査区地層断面

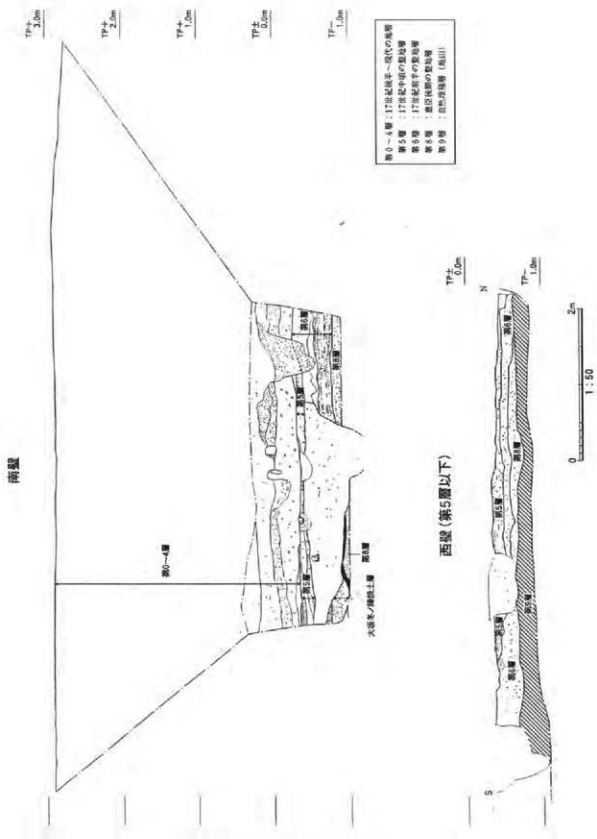


图4 北西調査区地層断面



図5 南東調査区第8層上面の遺構

遺物が出土した。本層の層厚は20cmである。

第6層：下部の黄褐色砂と、上部の東側が褐色、西側が暗灰黄色の炭・焼土・砂混りシルト質粘土からなる層厚40cmの整地層である。上面が削平されているため遺構の残りはよくない。17世紀前半の遺物が出土した。

第7層：調査区の南東隅で南東調査区第7層に相当する炭や焼土が大量に混る暗褐色粘土混りシルト～細粒砂層が厚さ5cmほど堆積しているのが見られた。図8にその範囲を図示した。

第8層：西側が灰褐色、東側が黄灰色の細粒砂が主体の整地層で、本層から鍛冶滓・土師器皿・壁

材・瓦・唐津焼破片などが出土した。豊臣後期のものと考えられる。層厚は約30cmである。

第9層：褐色砂層で、本層以下が自然堆積層である。

ii) 遺構と遺物

a. 豊臣後期の遺構と遺物

出土遺物から時期を判別すると、第8層は17世紀初頭の豊臣後期の整地層である。両調査区の第8層上面で土壌・ピット・溝・礎石などが検出された(図5・8、写真図版1中段・下段)。

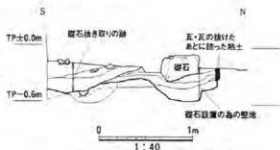


図6 南東調査区第8層上面SX79 断面

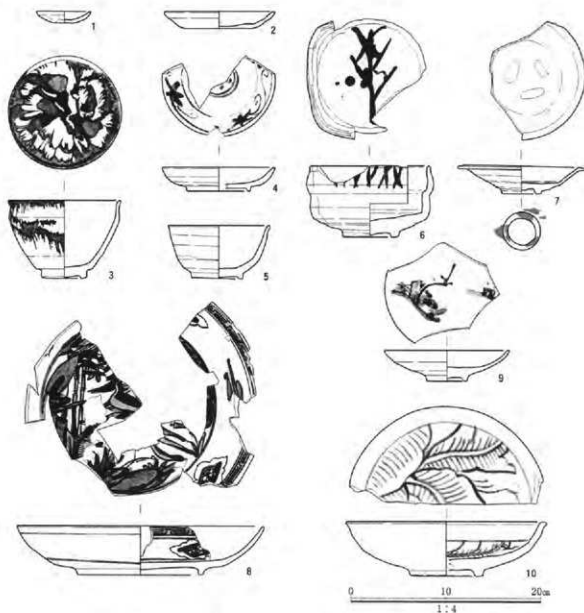


図7 出土遺物(1)

第7層(4・8)、南東調査区SK22(3)、SK36(1・2・7・9・10)、南東調査区SK70(5・6)

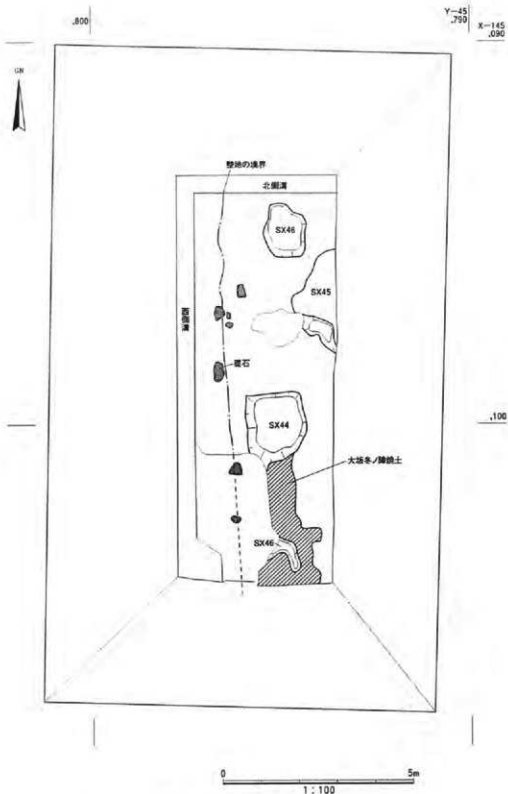


図8 北西調査区第8層上面の遺構

南東調査区第8層上面(図5)では、平瓦を立てて礎石を囲んだ瓦組み遺構SX79(図6)が検出された。瓦の区画の内側に東西30cm、南北45cm、厚さ25cmの礎石がある。断面(図6)で見ると、礎石は南側にもう1個あったと推定される。瓦組みも東と南に延びることから、SX79は1列建物と考えられる。SX79の瓦組みの北延長線上に同じ埋土のピットSP59・61・63・64が並んでおり、このライン

を境に東と西の整地土が異なっていた。これは整地の境界であり、おそらくピット列が塀や柵の柱であったものとみられ、敷地の境界と考えられる。この面の遺構から出土した遺物のうち、土壌SK70出土の唐津焼碗5と向付6を図7に示した。17世紀初頭のものである。このほか多数の土壌やピットが見つかるが、上部構造や遺構の性格の判明したものはない。

また、南東調査区第8層上面では南部で、部分的にはあるが、著しく地面が焼けた痕跡が見られ(写真図版2上段、写真中央、中位の黒色部分)、この上を第7層が覆っていた。1614年の大坂冬ノ陣の火災痕跡と考えられる。

北西調査区の第8層上面でも整地層の違いが見られ、整地の境界上で礎石が検出された。ここに塀や柵などの区画施設があったものとみられ、敷地境と考えられる(図8、写真図版1中段)。

北西調査区の第8層上面には大坂冬ノ陣の火災痕跡の認められる地面は残っていなかったが、層序の項でも述べたように、第7層の大坂冬ノ陣の焼土による整地層が南東部に一部残っていた。

b. 17世紀初頭～前半の遺構と遺物

南東調査区の第7層上面(図9)では、土壌・ピット・溝・礎石などが検出された。SP40～44や浅い溝状の土壌で南端に礎石の抜き取り穴のあるSK23・24が南北に列状に並んでいて、これを境に整地層の違いが見られた。塀や柵などの施設があったものとみられ、敷地の境界と考えられる。境界の位置は第8層上面のそれとほとんど変わらない。

東側の敷地で、礎石やその抜き取り穴とみられるSP25～27・31・32・34・35が敷地の境界線に平行して2列に並んでおり、東西約3.6m、

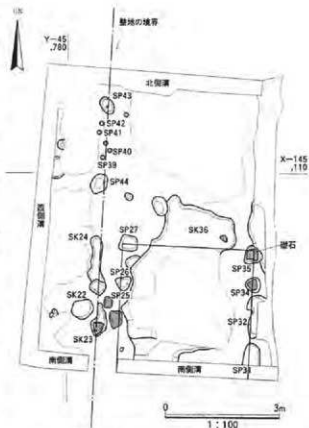


図9 南東調査区第7層上面の遺構



図10 南東調査区第5層上面の遺構

南北3.6m以上の礎石建物があつたものと考えられる。

東側の敷地の広範囲に掘り窪められたSK36からは大量の遺物が出土した。それらのうち、土師器皿1・2、唐津焼折縁皿7、伊万里焼染付皿9と青磁陰刻大皿10を図7に示した。17世紀前半頃のものである。また、西側の敷地の土壌SK22(図12)から出土した瀬戸美濃陶器の天目碗(図7の3、写真図版2下段)は、1620~1630年代に生産されたものである。

こ. 17世紀前半~中頃の遺構と遺物

第6層は17世紀前半の整地層であるが、両調査区とも上面に本来あつた生活面は著しい削平を受けしており、遺構の残り具合はあまりよくなかつた。図13のように、北西調査区の第6層上面では、不整

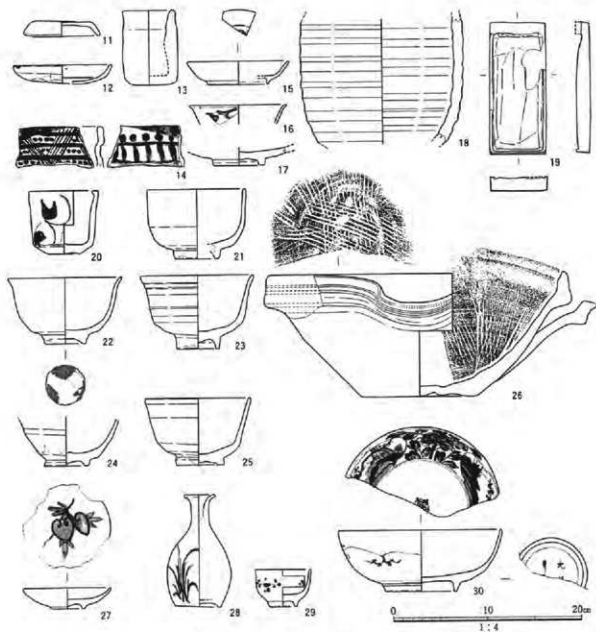


図11 出土遺物(2)

第5層(21・22・25)、南東調査区SK16(11~20・23・24・26~29)、第2層(30)

形な土塊や礎石が見つかったが、性格のわかる遺構はなかった。

17世紀前半～中頃の整地層である第5層の上面で竈や土塊・柱穴・ピット・溝・礎石などの遺構が検出された(図10・14)。

南東調査区の第5層上面(図10)では、南北方向の浅い溝状に掘り込まれた土塊SK01・02があり、これらを境に整地土が異なっていた。SK01の南端とSK02の北端には礎石の根石とみられるこぶし大の石が数個残っていることから、SK01・02は南東調査区第7層上面のSK24・25のような区画施設とみられ、ここが敷地境界となっていたものと考えられる。境界線の位置は第7層上面のそれとはほぼ同じである。

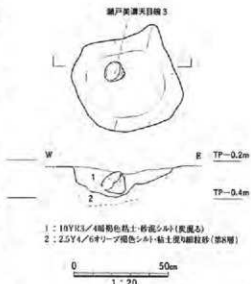


図12 南東調査区第7層上面SK22 平・断面

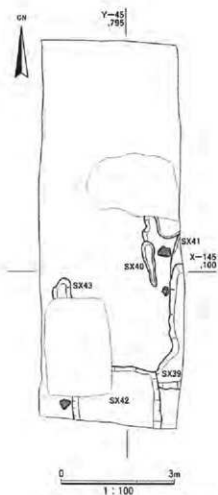


図13 北西調査区第6層上面の遺構

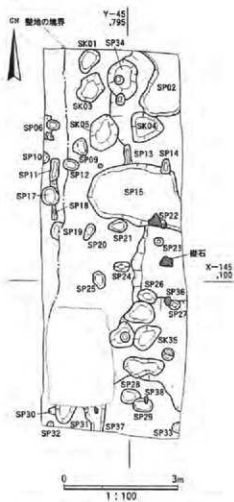


図14 北西調査区第5層上面の遺構

北東隅のSK16は土壌が重なって何度も掘られたもので、ここから大量の遺物が出土した。大半は陶磁器である。図11にSK16から出土した遺物のうち、焼塩壺13とその蓋11、土師器皿12、焼締め陶器壺18、備前焼播鉢26、瀬戸美濃焼織部向付14、唐津焼香炉20と碗23・24、伊万里焼皿27・徳利28・小杯29といった国産の陶磁器と硯19、中国製青花皿15・16、李朝白磁皿底部17を図示した。これらは17世紀前葉のものである。

北西調査区の第5層でも整地層の違いによる境界が見られた(図14)。やはり同調査区第8層上面の境界線とはほぼ同じ位置にあった。

土壌SK15からは大量の炭・焼土とともに鍛冶滓・輪の羽口などが出土した。

この面では、ほかにも多くのピットや土溝・溝・礎石などが見つまっているが、性格の判明したものはない。

3) まとめ

今回の調査の大きな成果は、第一に、御堂筋西側で初めて近世初頭の遺構と遺物が見つかったことである。そして豊臣後期からこの付近が開発されたことがわかり、さらに大坂冬ノ陣の火災がこの付近にまで及んでいた証拠を得たことである。

第二に、各時期の敷地境界と考えられる整地層の境の位置がほとんど変化していなかったことが確認できたことである。このことから、第8層以後の整地がそれぞれの敷地ごとに行われていることがわかる。これまで、城下町建設に際し、広く整地した後で敷地の分割が進んだと考えられていたが、本調査地周辺では当初から敷地単位の整地が行われているようである。

また、北西調査区では17世紀前半頃の炭や鍛冶滓の詰まった土壌が見つかり、輪の羽口などの鍛冶に関連する遺物が出土したが、これらはここに居住した人々の生業を復元する際の手がかりになるものである。

以上のように、今回の調査では当地域の歴史的な変遷を解明する上での重要な手がかりを得ることができた。今後の調査成果とあわせてさらに検討を加えたい。

調査地全景
(北西から)



北西調査区第8層上面
遺構検出状況
(南から)



南東調査区第8層上面
遺構検出状況
(南から)



南東調査区第8層上面の
地面が焼けた痕跡
(北西から)



南東調査区南半部
第8層上面の遺構
(西から)



南東調査区
SK22遺物出土状況
(南から)



上本町北遺跡B地点発掘調査(UN05-2)報告書

調査箇所	大阪市中央区上本町西5丁目
調査面積	108㎡
調査期間	平成18年3月16日～平成18年3月25日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、小田木富慈美

1)調査に至る経緯と経過

上本町北遺跡は上町台地上に位置し、難波宮跡および大坂城跡の南西に抜がる古代から江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡の東には難波京朱雀大路が南北に通っており、この周辺では百済寺に比定される堂ヶ芝廃寺や百済尼寺と関連する墨書土器の出土した細工谷遺跡をはじめ、摂津国分寺、四天王寺などの古代寺院が多く立地する。また、調査地の南方では、四天王寺旧境内遺跡や伶人町遺跡などを中心に調査が行われ、中世の遺構・遺物も多く検出されている。以上のように調査地周辺では古代～近世にかけての遺跡が密に分布しており、歴史的に重要な地点である(図1)。

今回の調査地は上本町北遺跡の指定範囲よりも南に位置しているが、周辺では古代～近世の遺構が見つかったUH92-2次調査や、中世～近世の井戸や土城などが確認されたUN04-1次調査ほか、数多くの調査が行われている(図2)。中でも、調査地の北東にある専念寺敷地内で行われたUH92-2次調査では、中世以前と近世とで溝の方位が変化しており、古代における正東西を意識した地割がある段階で現在の上町筋方向に合致する地形に沿った地割に変わったことが推定されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993]。

調査に先立ち行われた試掘調査で、現地表下1.4m以下に中世～近世とみられる遺物包含層が複数確認された。このため、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、本調査を行うことになった。調査区は逆L字状に設定し、便宜上南北方向の調査区をⅠ区、東西方向をⅡ区と呼称した(図3)。作業はまず、現代盛土を重機で掘削し、それ以下を人力で掘進め、随時、図面・写真による記録に努めた。



図1 調査地と周辺の遺跡位置図



図2 周辺の既往調査位置図

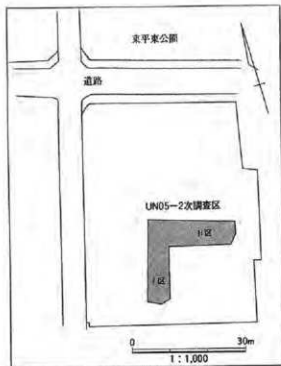


図3 調査区位置図

なお、本報告で示す水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+〇m」と記した。方位は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(図4・5)

I区の西半部は段丘構成層上面まで攪乱を受けており、地層の堆積状況は不明であったが、I区東半とII区では江戸時代以前の地層が良好な状態で残存していた。調査地の地形は現状ではほぼ平坦であるが、段丘構成層上面の地形は、北西端で最も高く、東および南に向かって低く傾斜していた。この上には中世の遺物包含層と近世初頭の盛土層が認められた。近世初頭の盛土によって、調査地はほぼ平坦になったと思われる。なお、現代盛土の層厚は約140

～220cmであった。本調査地での層序は以下のとおりである。

第1層：含礫黒褐色粘土質シルト層で、II区南壁でのみ確認された盛土層である。層厚は10cm未満で、江戸時代(18世紀後半)の国産陶磁器を多く含む。

第2層：含礫暗灰黄褐色中～粗粒砂層で、3枚に細分される。第2a層は層厚が70cm未満の盛土である。I区で認められ、南に向かって厚く堆積していた。この盛土によって、調査地南部はほぼ平坦な地形となったとみられる。出土遺物は江戸時代前半(17世紀前半)の国産陶磁器と土器である。第2b層はおもにII区で認められた盛土層である。出土遺物は中国産青花・瀬戸美濃陶器・肥前陶器(唐津焼)・瓦器・黒色土器・須恵器・土師器で、豊臣後期に属すると思われる。第2b層の上面では江戸時

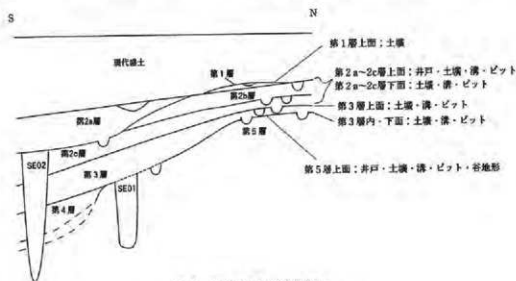


図4 調査区地層断面模式図

代の井戸・土壌・溝・ピットなどが検出され、下面では溝・ピットが確認された。第2c層は、層厚が20cm未満の含礫暗褐色粘土質中粒砂層で、作土層と思われる。第2c層の上面では井戸、下面では溝が検出された。本層からは、中国産白磁・瓦質土器・瓦器のほか土師器・須恵器が出土しており、下位の第3層上面で検出された遺構からは、大坂本願寺期と思われる青花が出土している。このことから、本層は中世末に形成された地層と思われるが、その下限は第2b層からの出土遺物の時期より、豊臣期に降る可能性がある。

第3層：含礫暗褐色粘土質シルト層で、鉄分やマンガンの沈着が著しい。Ⅱ区内では東に向かって厚くなり、最大の層厚は50cmとなるがⅡ区東端では徐々に薄くなる。本層はⅡ区では少なくとも2枚に分けられ、作土となっていた可能性がある。本層からは中国産白磁・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦が出土し、中世に属すると思われる。本層の下面・基底面では土壌・ピット・溝、上面では溝や土壌が検出された。

第4層：含礫暗褐色～灰オリーブ色粘土質中粒砂層で、Ⅰ区南端の谷地形内で確認された。層厚は30cm未満である。飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器を多く含むほか、埴輪が出土している。谷の深い部分では数枚に細分される可能性がある。

第5層：灰白～黄褐色砂礫層で、段丘構成層である。

ii) 各層出土の遺物(図8)

1・2は第4層から出土した。1は突帯を有する形象埴輪で、スカシ孔が認められる。2は須恵器杯身である。TK209型式に属する。3は第3層から出土した白磁碗で、口縁部は玉縁状である。12世紀のものであろう。4は第2c層から出土した白磁皿で、15～16世紀のものと思われる。5～7は第2a層から出土した。5は肥前陶器(唐津焼)碗で、藁灰軸を施す。6は瀬戸美濃陶器(志野焼)菊花皿である。7は丹波焼甕である。5は16世紀末～17世紀初頭の豊臣期、6・7は17世紀前半のものであろう。

iii) 遺構と遺物

a. 古代～中世の遺構と遺物(図6・8)

Ⅰ区では第5層上位の第3層基底面で、南へ落ち込む谷SX01のほか、溝・井戸・土壌・ピットが確認された。SX01内の第4層からの出土遺物は、飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器が中心であり、埴輪片も含まれていた。この上位の第3層からは土師器・須恵器および黒色土器・瓦器の細片が出土している。Ⅱ区では溝・土壌・ピットが検出された。

溝：第3層下面で検出されたSD01は、Ⅱ区の東端で確認された南東～北西方向の溝状の落込みである。これより南東にかけては段丘構成層の上面が緩やかに低くなっており、谷地形の一部の可能性はある。この中からは須恵器・土師器・瓦器が出土している。

SD02・SD03は第3層上面で検出された。SD02は磁北よりやや東に振る南北方向の溝である。埋土上層は灰褐色粘土質シルト層で、人為的な埋戻し層であり、最下部は灰色粘土層で滲水した痕跡が認められた。青花・瀬戸美濃陶器・土師器・須恵器・瓦器の細片が出土したが、詳細な時期を知りうるものはなかった。9はSD02から出土した青花皿である。口縁部は端反りである。16世紀代で、大坂本願寺期のものであろう。SD03はⅠ区の北半で検出された南北から東西方向へ屈曲する溝で、方位

はSD02と同じく磁北よりやや東に振れる。南は調査区内で途切れている。幅0.5m、深さ0.4mであった。断面形はU字状で、埋土は上下2層に分けられた。下層には水の溜まった痕跡があり、上層は段丘構成層の偽礫を含む粘土層で人為的に埋戻されている。上層より土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器のほか、備前焼播鉢の細片が出土したことから、詳細な時期は不明であるが、中世末ごろに埋められたと思われる。

井戸：SE01がI区の第5層上位の第3層基底面で検出された。井戸側は認められなかったが、形状より井戸と考えられる。直径0.7m、深さ1.3m以上で、底までは完掘しえなかった。埋土は黄褐色粘土の偽礫を多く含む灰黄褐色砂質シルトである。出土遺物はごくわずかの土師器・須恵器・黒色土器のみである。

土壇：I区の第5層上位の第3層基底面で検出されたSK01は、平面形が長方形を呈する土壇であり、南北2.9m、東西1.1m、検出面からの深さは0.4mである。後述するSE02に切られる。埋土は灰褐色粘土質シルトで、人為的な埋戻し土であり、最下部には段丘構成層の偽礫を多く含む。出土遺物は中国産白磁・土師器・須恵器・瓦器・瓦であった。8は白磁多角杯で、高台部を挟み込んでいる。底部内面には墨書が認められるが、判読しえなかった。14世紀後半～15世紀であろう。

II区では第3層中でSK02が確認された。SK02は直径1.3m、深さ0.5mの円形を呈すると思われる土壇である。埋土は粘土偽礫を多く含む灰オリーブ色粘土質砂礫で、出土遺物は須恵器平瓶片のみである。

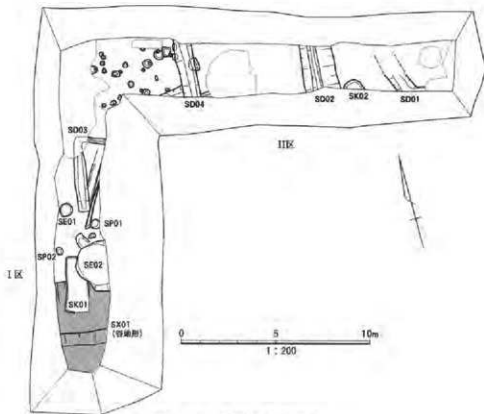


図6 古代～中世期の遺構平面図

ビット：Ⅰ区では、古代にさかのぼるとと思われるSP01・SP02が第3層基底面で確認された。SP01からは奈良時代以前と考えられる土師器高杯が出土している。Ⅱ区では、標高の最も高い西端部の第3層下面および基底面で多数のビットが検出された。これらの中には浅い窪み状のものや、柱穴の可能性のあるものがある。以上のビットは中世以前にさかのぼるものと推定されるが、詳細な時期や性格については不明である。

b. 豊臣期の遺構と遺物(図6・8)

Ⅰ区では第2c層の上面で井戸が検出された。SE02は直径2.6mで、検出面からの深さは2.0mであった。井戸側は確認されなかった。埋土は人為的な埋戻し層で、下層は段丘構成層の偽礫を多量に含み、上層は砂・礫を多く含んでいた。遺構上部を覆う第2a層から外面に鉄絵を施す肥前陶器(唐津焼)片および丹波焼甕7が出土したことから、17世紀前半に最終的に埋戻されたことがわかる。このほかの出土遺物は、青花・瀬戸美濃陶器・土師器・須恵器・黒色土器の細片のみで、詳細な掘削時期を特定できる遺物は認められなかった。このほか、埋土の下部から建物の礎石に用いられたとみられる人頭大の花崗岩が十数個出土している。Ⅱ区では溝1条が検出された。SD04は上部が第2b層で覆われる南北方向の溝である。方位はSD02・SD03とはほぼ一致し、段丘構成層である第5層上面が東に向かって低くなる地点に掘削されている。幅は0.9m、深さ0.2mであった。埋土は炭・焼土を多く含み、青花のほか、備前焼播鉢・瓦質土器・土師器が出土している。豊臣期あるいはそれ以前にさかのぼる溝の可能性があり、10・11はSD04から出土した。10は土師器皿で、底部内面が彫らむいわゆるへそ皿であ

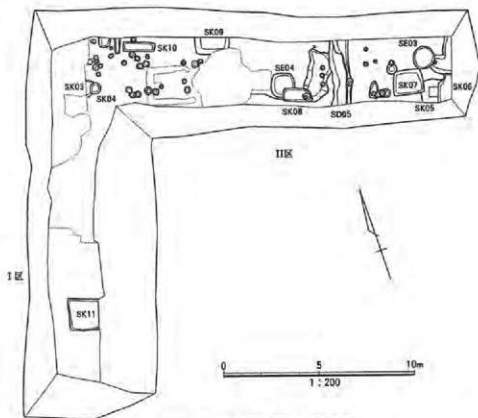


図7 江戸時代(徳川期)の遺構平面図

る。11は備前焼挫鉢である。口縁部下端の外方への張出しは弱い。大坂本願寺期のものであろう。

c. 江戸時代前半以降(徳川期)の遺構と遺物(図7・8)

I区では第2a層の上面で土壌が1基検出されたのみである。II区では第2b層の上面で井戸2基・溝1条のほか、土壌およびピット多数を検出した。

溝:SD05はII区東部で検出された南北方向の溝で、下位のSD02とはほぼ同じ位置に掘削されている。ただし、方位はSD02よりも北で東へ振っており、上町筋の方向に合致すると思われる。幅0.9m、深さ0.2mで、埋土は灰オリープ色含礫シルトであり、よくしまっている。17世紀代とみられる肥前磁器片が出土したが、詳細な時期については不明である。

井戸:SE03はII区東端で検出された。直径1.1mで、検出面からの深さは0.9mである。18世紀初頭の肥前磁器をはじめとする国産陶磁器・土器類、瓦、砥石が出土した。SE04はII区の中央で認められた。直径1.3m、深さ0.4mで、壁面には粘土を貼付けており、底には板が敷かれていたことから、水溜め遺構と思われる。18世紀後半の肥前磁器のほか、国産陶磁器・土器類、土人形、砥石が出土している。12~15はSE04から出土した肥前磁器染付である。12は蓋で、内面には松竹梅文を描く。13は青磁染付碗である。14は筒茶碗である。12・13の口縁部および14の外面には四方禪文が認められる。15は花瓶である。これらは18世紀後半に属すると思われる。

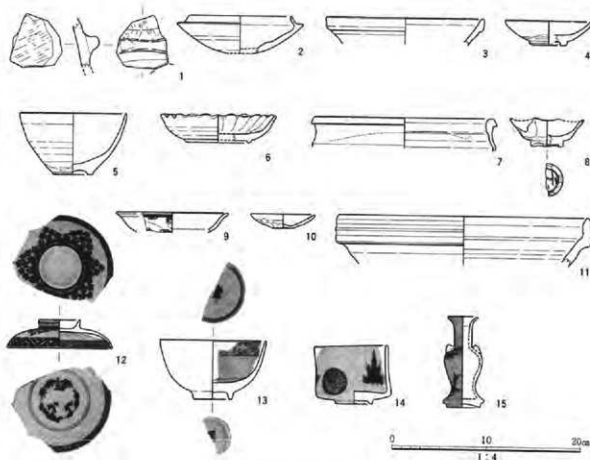


図8 出土遺物実測図

第4層(1・2)、第3層(3)、第2c層(4)、第2a層(5~7)、SK01(8)、SD02(9)、SD04(10・11)、SE04(12~15)

地の南部は一段低い地形であったことが判明しており、柱穴の分布状況から居住地は北部にあったと思われる。

また、今回の調査では南北方向を中心に、中世から近世初頭の溝が多く検出されている。これらの溝の方位の変遷について、『大阪実測図』と比較してみると、現在の上町筋に合致した方位をもつ溝は、豊臣後期の盛土層の上位に掘削されたSD05のみである。これ以前の溝は、上町筋ではなく、調査地のすぐ東を通り、調査地の南東でやや屈曲する南北道と方位が合うように思われる。この道路の成立した時期と遺構との関連については、周辺での調査成果の増加を待つて慎重に検討する必要があるだろう。

参考文献

- 内田九州男1989、「豊臣秀吉の大坂建設」：『よみがえる中世』2 平凡社、pp.34-55
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993、「専念寺庫裏建替工事に伴う発掘調査」：『平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.69-80

調査地遠景
(南西から)



I区江戸時代の
遺構検出状況
(南から)



II区江戸時代の
遺構検出状況
(西から)



Ⅱ区南壁断面
(北東から)



Ⅱ区西端部遺構
完掘状況
(北から)



SE02断面
(西から)



Ⅲ 天王寺区

難波京朱雀大路跡発掘調査(NS05-1)報告書

調査箇所	大阪市天王寺区勝山1丁目42他
調査面積	30㎡
調査期間	平成17年8月4日～8月9日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、小田木富慈美

1) 調査に到る経緯と経過

調査地は難波京朱雀大路跡の西部に当り、後期難波宮大極殿跡からは南に約3kmの地点にある。付近には四天王寺をはじめ古代寺院が多く立地している(図1)。調査地の周辺では四天王寺旧境内遺跡や難波京朱雀大路跡の発掘調査が数多く行われており、なかでも北西150mの地点で行われたST96-4次調査では、中世の遺構として16世紀前半築造の石垣とそれに伴う幅10m、深さ2mの堀、井戸多数が検出された。さらにここでは奈良時代の遺構として南北溝と井戸が確認された。南北溝は難波京条坊道路の側溝である可能性が指摘されており、井戸からは木製壺鏡と墨書土器が出土した。また、南で行われたNS89-22・90-5次調査では鎌倉時代の東西大溝が検出されたほか、古代の瓦が多数出土している[大阪市文化財協会1990]。調査地では平成17年6月に大阪市教育委員会による試掘調査を行ったところ、地山上面で中世以前と思われる遺構が確認されたため、本調査を行うことになった(図2・3)。調査では、周辺の調査で確認されたような古代～中世の遺構の拡がりを確認することが期待された。

調査は平成17年8月4日から開始した。表土および近世の盛土層を重機によって除去し、以下地山上面までを人力で掘削した。2枚の遺構面で中世～近世にかけての遺構を検出し、適宜写真撮影と記録作業を行った。8月9日には埋戻しを行い発掘調査に関する基本的な作業をすべて終了した。本報告で使用した方位は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値：TP+〇mと略記する)である。

2) 調査の結果

i) 層序(図4)



図1 調査地の周辺



図2 調査地の位置

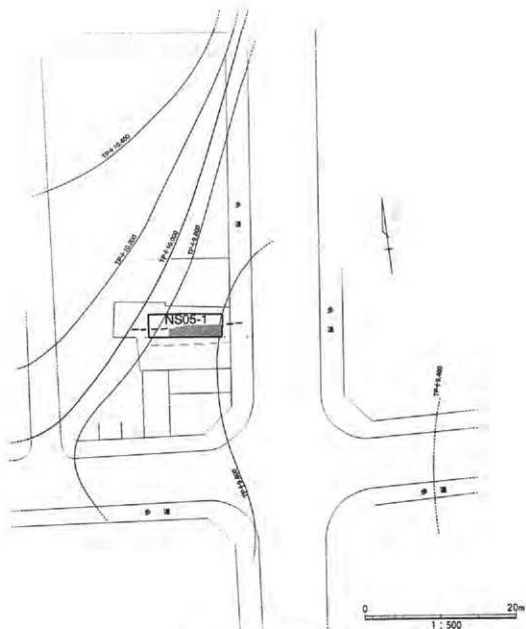


図3 調査区周辺地形測量図

調査では地山層の上面に中世～近世の地層が良好な状態で残存していた。各層の下面および基底面では遺構が検出された。以下で各層の特徴について述べる。

第1層：現代盛土層である。

第2層：層厚0.1m未満のオリーブ褐色砂質シルト層である。出土遺物はない。当層の基底で近世と考えられる土壌を検出した。

第3層：にぶい黄褐色粘土偽礫を含む砂質シルト～中粒砂層で、層厚は0.5m未満である。当層は盛土層で調査区の全域に分布する。出土遺物は中世の青磁、瓦質土器、土師器、瓦である。この上に掘られた遺構の年代が江戸時代後半であることから、当層も近世の所産と考える。

第4層：暗灰黄色中粒砂～粗粒砂質シルト層で、層厚は0.4m未満である。調査区の西半部で認められた作土層である。出土遺物はない。

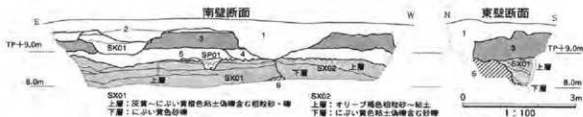


図4 調査区地層断面図

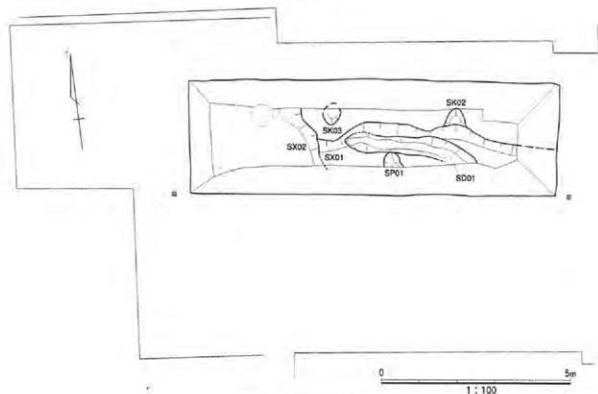


図5 中世の遺構平面図

第5層：にぶい黄褐色粘土質中粒砂層で、層厚は0.4m未満である。当層も第4層と同じく作土層であり下面では耕作に伴う東西方向の溝が認められた。調査区の東半に分布する。出土遺物は中世後半の国産焼締陶器、土師器、瓦である。

第6層：灰黄色砂礫層で段丘構成層である。当層の上では東西方向の落込みや土壌のほかビットが検出された。

ii) 遺構と遺物 (図5)

中世の遺構

地山層の上面では東西方向の溝状の落込み2基、土壇2基、柱穴1基が検出された。

SP01は調査区の南東で南壁にかけて検出した柱穴である。掘形の直径は0.4m、柱痕跡の直径は、0.15mである。調査区内ではこれに組合う柱穴は検出されなかった。

SK02は調査区の北東で確認された土壇で後述するSX01に切られる。南北は0.4m以上、深さは0.2



図6 調査地の位置〔大阪実測図〕に加筆、約1万分の一

mである。埋土は炭を多く含む埋戻し土で、SX01と類似する。時期不明の白磁碗、12世紀代の瓦器椀、土師器皿、瓦片が出土した。

SK03はSX02の北東で認められた円形の土壌で、直径は0.4mである。土師器片が出土した。

SX01は調査区東半で検出された東西方向の溝状の落込みである。西側はSX02に切られている。調査区の南側の敷地内を試掘調査した際には、同様の埋土を持

つ北へ向って深くなる落込みが確認されていることから、SX01はこれと一連の落込みの北側の肩に当り、本来東西方向の溝であった可能性が高い。埋土の最下部には厚さ0.1m未満の砂礫層が堆積しており、水の流れた可能性がある。これより上位は地山層である灰黄色粘土や砂礫の偽礫を多く含み、すべて人為的な埋戻し層である。下層からは11～12世紀の土師器羽釜が出土したほか、上層の埋戻し層からは12～13世紀の瓦器片、土師器、瓦片が比較的多く出土した。

SX02は調査区の西端で検出された落込みで、西へ向って深くなる。深さは0.6m以上で、埋土下層はSX01の上層と類似する埋戻し土である。詳細な時期は不明であるが瓦器、土師器、石、丸瓦が出土した。

第5層の下面では東西方向の溝SD01が認められた。埋土からは12～13世紀の瓦器、土師器、平瓦片が出土した。第5層は作土と思われることから、この溝は耕作に伴うものと思われる。

近世の遺構

第2層の基底では、調査区の東端で土壌SK01を検出した。SK01は断面で確認した遺構であるため、平面形やその規模は不明である。出土遺物は肥前磁器碗・皿で18世紀代のものである。その他、断面では第2層の基底および上面で土壌状の落込みが数基確認された。

3) まとめ

今回の調査は難波京朱雀大路跡と難波京を区切る条坊跡の検出を目的としたものであったが、古代の遺構については検出されず、当該期の出土遺物もごくわずかであった。しかし中世以降では、東西方向の溝状の遺構SX01をはじめとして比較的遺構や遺物の分布は密であった。周辺で行われた過去の調査をみると、いずれも今回の調査と同様に平安～室町時代の溝が検出されている。ただし、直接四天王寺との関係を示す資料はない。また、四天王寺の寺域の東限については、難波京朱雀大路をこれに当てる説が示されており、中世の四天王寺は堀に囲まれた寺院都市という景観を呈していた可能性が指摘されている〔大阪市文化財協会1996〕。当調査地はこの範囲の中となり、調査地で検出され

たSX01が東西方向の溝であるならば、道路に関連した側溝や寺域を区切る区画等の施設である可能性が考えられる(図3)。なお、調査地の位置を明治21年内務省発行の「大阪実測図」で見ると、調査地は四天王寺東門より東へ通ずる道沿いに当る(図6)。寛永年間の絵図にもこれを示すと思われる道の記載が認められる。調査区内では近世の盛土や土壌が認められたことから、居住域に近いと推測されたが、道路に伴うと思われる遺構は確認されなかった。

このように現段階では中世～近世にかけての周辺の遺構が十分明らかにされたとは言えず、四天王寺東側の当時の様相については今後の調査成果の増加を待って検討することとしたい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1990、「兼火」26号

大阪市文化財協会1996、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告」1

機械掘削状況
(北西から)



調査区南壁断面
(北西から)



地山上面
遺構検出状況
(北西から)



遺構完掘状況
(東から)



南西部SX02断面
(北東から)



南西部SX01断面
(北西から)



上本町南遺跡発掘調査(US05-1)報告書

調査箇所 大阪市天王寺区藤山2丁目136・137
 調査面積 約50㎡
 調査期間 平成17年10月18日～10月22日
 調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
 調査担当者 調査課長 田中清美、松本啓子

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地は7世紀から続く四天王寺の東門から東へ約250m、南へ約80mの位置にある。また、7世紀と8世紀に営まれた難波京の朱雀大路は難波宮の中心から真南に延びて、その西端が本調査地南東の興国高校の東端付近を通ると推定されているが、本調査地はそこから西約100mの地点に位置している。したがって、難波京のなかでも中心大路から四天王寺東門にいたる重要な位置と考えられる場所である。

過去の調査では、興国高校内のNS89-22次調査(図1・2のG)で奈良～平安時代の土器を含む地層から難波宮や摂津国分寺の瓦と同文の瓦が出土し、本調査地北東約200mのST96-4次調査(図1・2のD)では8世紀の井戸から木製の鍔鉾や墨書土器、10世紀の井戸から火成岩製の瓦などが出土した。

中世においては、四天王寺が信仰の寺として隆盛を極め、寺の周辺に傘下の塔頭が並び、参詣者が増えて道路や門前町が整備されていくが、本調査地はこの四天王寺の境内あるいは門前町の中にあると考えられる場所にあたる。過去の調査では、本調査地の北東約350mにあるST94-7次調査(図1・2のA)とST96-4次調査で、中世後期の南北方向の大規模な堀や石垣が検出されている。

中世末期から近世になると、豊臣秀吉が大坂城建設に伴って城下町を整備し、この中に四天王寺周辺の町場は取り込まれた。



図1 周辺の調査地と四天王寺の「御廬地」・「寺域」推定線

(大阪市文化財協会1996の図69に加筆 1:10,000)

- A: ST94-7次調査、B: ST94-6次調査、C: ST95-9次調査、
 D: ST96-4次調査、E: ST96-1次調査、F: NS05-1次調査、
 G: NS89-22次調査、H: 今回調査地



図2 四天王寺の「寺域」東半の調査地

(内務省1888年製「大阪実測図」に加筆 縮尺:約1万分の1、
 調査地の記号は図1に同じ)

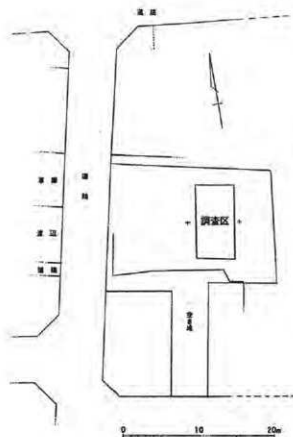


図3 調査地の周辺の地形(1:500)

その後、石山の合戦や大坂冬の陣で四天王寺は戦場となるが、それぞれ秀吉や徳川家康が直ちに再興し、江戸時代を通じてこのあたりは大部分が徳川幕府領、一部が四天王寺領となっていた。

このように調査地周辺は古代から隆盛を極めた重要な場所であった。現在、四天王寺は寺域全体は「四天王寺旧境内」として国の史跡に指定されている。

工事に先立ち、平成17年10月4日に大阪市教育委員会によって試掘調査を行ったところ、敷地の東半部に中世とみられる包含層が残っていたので、ここに調査区を設定し、本調査を行うことになった(図3)。

調査は平成17年10月18日より開始した。近・現代の地層を重機によって除去し、以下、人力により地山までを精査し、写真・図面等で記録し、平成17年10月22日に埋め戻して作業を終えた。

なお、本調査で使用した方位は磁北、標高はTP値である。

2) 調査の結果

i) 層序(図4、写真図版中段)

本調査の基本層序は以下のとおりである。

第1層：現代の建物のコンクリート基礎と盛土層である。

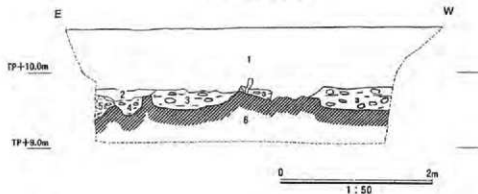
第2層：黄褐色砂混りシルトを主体とする近世の盛土層である。肥前磁器の白磁・土師器・丹波焼・瓦器皿(図6の2)・近世の瓦などの破片が少量出土した。本層の時期は、第3層が形成される18世紀後半以降の近世と考えられる。

第3層：本層は後述の第4層を掘り込んだ遺構に投入された埋土である。上位は浅黄色シルト・粘土混り砂礫、下位に黄褐色粘土・シルト混り砂礫やふい黄褐色粘土混り粗～細粒砂などであり、いずれも第4層が偽礫状に混る。土質の状況がよく似ているので、これらはほとんど時期差なく投入されたものと考えられる。

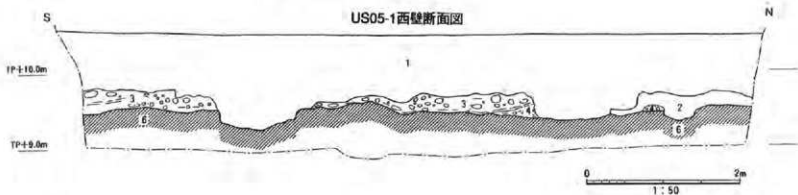
古代の瓦や中世の瓦器・常滑焼などとともに肥前磁器や関西系陶器、軟質施釉陶器などが出土しているので、本層は近世の地層で、およそ18世紀後半ごろとみられる。

第4層：橙色粘土・シルト混り砂礫層である。水中生物の巣穴化石(写真1)が見られ、水中で形成された自然堆積層である。本層のもっとも高い所で標高は9.5mであるが、本来は上位に離水した部

US05-1南壁断面図



US05-1西壁断面図



- 1 : 2.5Y4/4オリーブ褐色砂混り粘土質シルト・コンクリートなど(第1層・現代埋乱層)
- 2 : 2.5Y5/3黄褐色砂混りシルト(第2層)
- 3 : 2.5Y7/4淡黄色シルト・粘土混り砂礫(第3層)
- 4 : 10YR5/8黄褐色粘土・シルト混り砂礫(第3層)
- 5 : 10YR5/6にぶい黄褐色粘土混り粗～細粒砂(第3層)
- 6 : 5YR5/6橙色粘土・シルト混り砂礫(第4層・地山層)

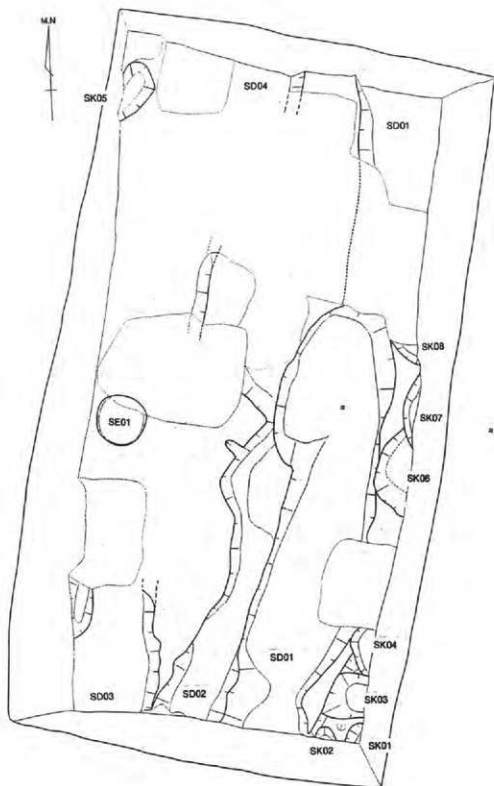


図5 遺構配置図

分があったはずで、かなり削平を受けている。削平された部分には古代や中世の生活面があったと考えられる。

(ii) 遺構と遺物(図5・6、写真図版上・下段)

今回の調査では、第4層上面で溝SD01~05・井戸SE01・土壌SK01~08などを検出した。以下に主な遺構について述べる。

SD01~04は底部がU字状を呈する南北方向の溝状の掘り込みであるが、水の流れたような痕跡は認められない。いずれも掘削後、あまり時間をおかず第3層でいっきに埋められたものである。

調査区全体に攪乱が著しく、形状は明らかではないが、幅はSD01・03・04が1.2~1.5mで、SD02が約0.9m、深さは残りのよいSD03で0.25m程度あり、どの溝もほぼ同じ深さ(標高約9.4m)まで掘られている。

出土遺物からいずれも18世紀後半頃の溝と考えられるが、古代や中世の遺物も含む。

図6にSD01から出土した古代の雁振瓦8・縄目叩き平瓦9と中世の瓦器椀3、SD04から出土した古代の格子叩き平瓦7、中世の瓦器椀1・瓦質土器火鉢4・中国製白磁口壳皿6、近世の肥前磁器青磁染付筒碗5を図示した。7は7世紀後半、8・9が9世紀以前に作られた瓦で、付近に古代の瓦葺き建物の存在を推定させる。溝出土の中世の遺物は13世紀後半~16世紀のもので、4や6は13世紀後半~14世紀初頭頃のものである。

SE01は直径約0.65mの円筒形をした素掘りの井戸である。検出面から0.9m以上の深さがあるが、

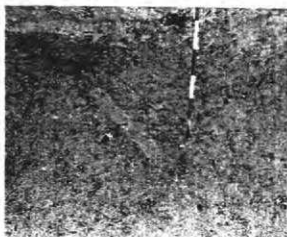


写真1 第4層に見られる巣穴化石

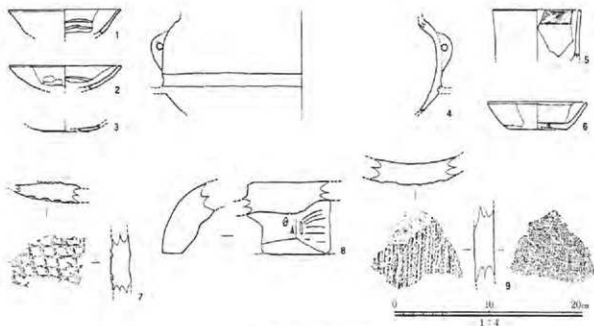


図6 出土遺物実測図

完掘していない。埋土は灰褐色砂混りシルトで、第2層と似た土である。SE01は埋土から古代瓦・近世瓦・土師器・肥前磁器染付などの破片が出土しており、第2層の時期の遺構の可能性はある。18世紀後半か、それ以降に埋められた井戸であろう。

土壌は調査区の南東隅・東端と北西隅で見つかった。いずれも調査区外へと延びる。形状の推定できるSK05は長さ0.7m以上、幅0.5mの楕円形の土壌で、深さ0.25mである。第2層に似た黄褐色砂混りシルトで埋められていた。

東端のSK06～08、南東隅のSK01～04は第3層に似た黄褐色粘土・シルト混り砂礫やにぶい黄褐色粘土混り粗～細粒砂で埋められており、深さは0.3mほどである。埋土の状況は溝に似ており、遺物は出土していない。

3)まとめ

今回検出した遺構はすべて近世後期のもので、この時期にはすでに地山が削平され、これ以前の遺構が失われてしまっているが、これらの遺構の埋土である第3層に地山の偽礫が混り、中世以前の遺物があまり摩滅せずに多く含まれることは、これら遺物が近くから混入したことを推測させる。

中世後期ごろの四天王寺の「境内」と「寺域」を図1のように推定されており[豆谷1996]、これによると本調査地は「境内」東側の「寺域」内に入っている。1888年内務省作成の『大阪実測図』によると、調査地は畑地の中にあつて字名はついていないが、西に「東寺ノ町」、さらに西に「西寺ノ町」、北に「東門前」「毘沙門」「真法院」といった、寺院に関連する字名が見える(図2)。これらがいつまで通れるものかは定かではないが、近世以前に「四天王寺」以外にも寺院があったことを推測させ、調査地の古代や中世の遺物はこれらと関係する可能性も考えられる。

引用・参考文献

- 豆谷浩之1996、「第3節 四天王寺の寺域と「境内」について—調査の成果をてがかりに—」：大阪市文化財協会
『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』1、pp.120-132

調査区遺構検出状況
(北から)



西壁南端断面
(東から)



SE01
(西から)



IV 浪 速 区

船出遺跡発掘調査(FD05-1)報告書

調査箇所	大阪市浪速区難波中2丁目
調査面積	約500㎡
調査期間	平成17年5月23日～平成17年6月15日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、趙哲済、杉本厚典

1)調査に至る経緯と経過

船出遺跡は大阪湾に面した砂堆上に位置する。明治18年に古墳時代後期のものとみられる舟舟が出土したことから、周辺に古墳時代から古代の港があったと推測されている。

また、江戸時代の享保年間から明治維新にかけて、幕府の米蔵である難波御蔵が置かれた。この米蔵は享保18年(1733)に開設され、東西126m、南北324mの敷地に8棟の倉庫群と36m四方の船入(船着場)が設けられていた。この船入から北北西に入堀川(新川)と呼ばれる運河が延びており、道頓堀を經由し大阪湾へとつながっていた。寛政3年(1791)、天王寺御蔵が移転して来たために、さらに大規模な倉庫群となった。明治維新後、大蔵省の管轄となり建物は存続するが、明治37年(1904)に煙草専売局大阪工場となる。この工場は第二次世界大戦時に空襲で焼失したものの、その跡地には昭和25年(1950)に大阪球場が建てられた。

なんばパークス第二期工事に伴い平成16年4月21日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、調査地の南側の試掘壕において現地地表下1.10～1.70mの所から、中世の遺物包含層が検出され、以下に古代から古墳時代の地層が良好に遺存していると想定された。さらに、明治19年の地図によると、調査地が難波御蔵の敷地の中に当り、その建物の一部が見つかることも予想されたため、本調査の実施となった。

調査は敷地の東にA地区(100㎡)、西にB地区(400㎡)の調査区を設けて実施した(図2)。5月23日から重機によってA地区の表土掘削を開始し、翌24日から遺構面の調査に入った。また、B地区も24日から重機掘削を開始し、26日より遺構面の調査に入った。調査はGL-2.0mまでを平面調査の対象とし、それより深部はトレンチ調査を行った。現地における調査はA地区が5月31日、B地区が6月15日に終了した。調査にはT.P.値、世界測地系を用いた。

2)調査の結果

i)層序(図3・8、図版)

第0層：コンクリートの碎石で構成される近現代の整地層である。

第1層：暗褐色(10YR3/4)細粒砂～礫層であり、この層中に煉瓦やコンクリートの建物基礎が設

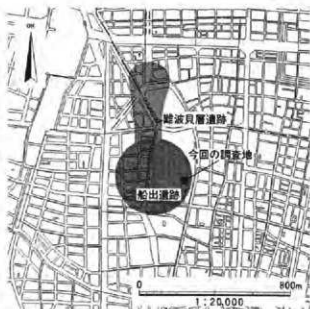


図1 調査地位置図(1:20,000)



図2 トレンチ位置図(1:2,000) 太線は図3断面図の位置

置されていた。25は本層から出土した磁器の皿である。外面に「大尊義」の文字がプリントされている。また、本層中より多数の煉瓦が出土しており、煉瓦製作会社である大阪窯業、岸和田煉瓦の刻印を持つものがあつた。

第2層：炭や細礫を含む褐色(10YR4/4)細粒砂で構成された作土層である。A地区ではこの上面で高を検出した。B地区では上面で溝、下面で鉄と土壌を検出した。層中より陶胎染付24が出土した。

第3a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫混り細粒砂層で構成される整地層である。層厚15~20cmであり、B地区南半部に認められた。

第3a層には18世紀の遺物が多く含まれていた。22は本層から出土した伊万里焼皿である。見込みに五弁花を施し、高台の内側に圏線を入れる。口縁部内側は花卉状に区切っており、各区画に植物を描く。これらの諸特徴から18世紀前半のものとみられる。

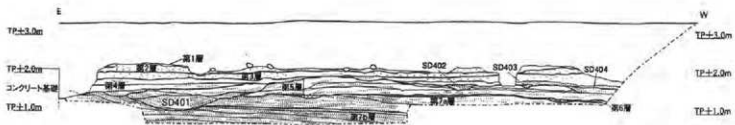
第3b層：B地区に見られた褐色(10YR4/6)礫混り粗粒砂層であつた。SX401~404やSD401~404の埋土に当る。

第4層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂で構成される層厚15~20cmの中世の古土壌である。

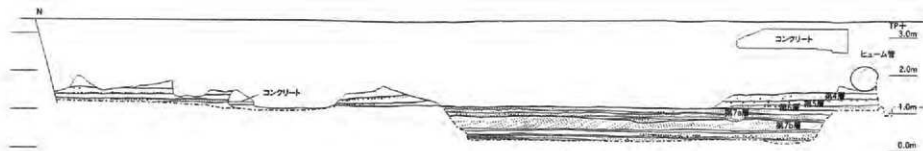
第5層：黄褐色(10YR5/6)細粒砂の中にまばらに細礫が含まれる風成堆積層である。全体的に暗色化しており、わずかに平行ラミナが認められた。

本層中からは古代のものと見られる土器の他、古墳時代中期の土師器高杯3・4、古墳時代中~後期の土師器高杯5、壺6・7をはじめ古墳時代のものともみられる管状土鍾8が出土した。3は有後高杯であり、口縁端部に強い横方向のナデを施す。7は外面をハケ、内面をオサエで整える。胴部内面や口縁部外面には輪積みの痕跡がある。

第6層：層厚5cmの褐色(2.5Y4/3)礫層であつた。直径5~3cmの円~亜角礫で構成されていた。



北半



南半

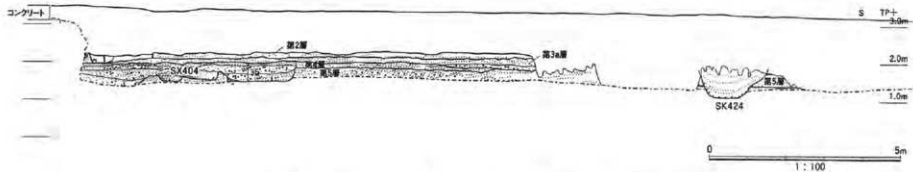


図3 断面図(上:A地区南壁、中:B地区東壁北半、下:B地区東壁南半)(1:100)

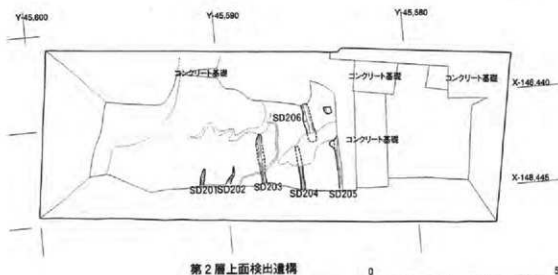
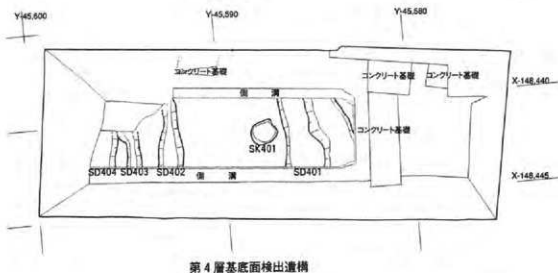
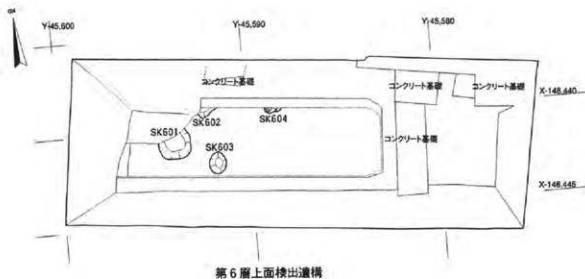


図4 A地区各層検出遺構(1:100)

B地区ではこれらの礫群が南北方向に帯状に分布しており、フォアセットラミナもほぼ北北西へ傾いていた。また、礫どうしの重なりには覆瓦構造が認められた。このような堆積状況からB地区に一時期、南北方向に汀線が延びていたものと推測される。

A地区では本層上面に比較的安定した生活面があり、その面に形成された落込みから奈良時代後半期の土師器杯が出土した。第6層の年代は古墳時代中期から奈良時代と考えられる。

第7a層：層厚30cmの暗褐色(7.5Y3/4)細礫～細粒砂層であった。特に下部の礫層から古墳時代前期の小型丸底壺や山陰系土器が出土した。本層はプレーン型の斜交層理が発達しており、上面の勾配は13：100で北北西に下っていた。

第7b層：層厚100cm以上のぶい黄褐色(10YR5/4)の細礫～細粒砂層であった。本層はプレーン型の斜交層理が発達していた。また、本層上面の標高はTP+0.8mであり、勾配は7：100で北北西に下っていた。A地区では弥生時代後期の高杯脚部2、B地区では弥生時代中期の壺底部1が出土した。

ii) A地区の遺構と遺物

a) 第6層上面検出遺構と遺物(図4)

SK601 東西1.80m、南北1.60m以上、深さ0.08～0.10mの土壌である。埋土中から土師器杯9が出土した。口径17.2cm、器高4.3cmであり、外面底部付近をユビオサエ、内面をナデ、口縁部を強い横方向のナデで整える。端部は丸く肥厚させており、奈良時代後半期のものとみられる。

SK602 直径1.00m以上、深さ0.05mの土壌である。

SK603 東西0.90m、南北1.15mの楕円形で、深さ0.05mの土壌である。

SK604 直径0.90mの円形で、深さ0.08mの土壌である。

これらの土壌の埋土は褐色の中粒砂であり、腐食した植物が含まれていた。

b) 第4層基底面検出遺構(図4、図版)

第4層の基底面で溝を検出した。

SD401 幅3.5m、深さ0.60mの溝である。埋土は細砂混りシルトであり、最下層にシルト質粘土が堆積していた。

SD402 幅1.30m、深さ0.15mの溝である。

SD403 幅0.80m、深さ0.08～0.10mの溝である。

SD404 幅1.30m以上、深さ0.15mの溝である。

これらの遺構の埋土はいずれも細砂混りシルトであり、埋土内から瓦器の細片が出土した。

c) 第2層上面検出遺構(図4)

第2層上面で島の畝間溝SD201～206を検出した。溝は幅0.15～0.20m、深さ0.10mであり、南北方向に延びていた。溝と溝の間はやや高くなっており、畝とみられる。

iii) B地区の遺構と遺物

a) 第4層基底面検出遺構(図5)

SK425 直径0.57m、深さ0.08mの土壌である。埋土は黄褐色粗粒砂であった。

SK426 直径0.30m、深さ0.05mの土壌である。埋土は黄褐色粗粒砂であった。

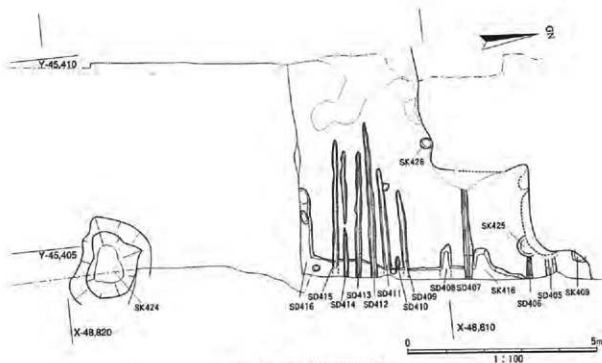


図5 第4層下・基底面検出遺構

b) 第4層下面検出遺構(図5、図版)

SD405~415 幅0.20~0.30m、深さ0.03~0.08mの畝間溝である。いずれも東西方向に延びており、トレンチの東端に位置するSD416を切っていた。

SD416 幅0.30m以上、深さ0.05mの溝である。南北方向に延びており、南端で西へ向かって曲がっていた。

これらの溝の埋土からは瓦器碗の細片が出土しており、また、作土中には瓦質土器や備前焼播鉢が含まれていたため、14~15世紀頃の畝とみられる。

c) 第4層上面検出遺構(図6~8、図版)

SP401~404・礎石1~4 SP401~404はそれぞれ礎石1~4を据えるための掘形であり、直径0.40m、深さ0.20mであった。礎石は一辺が0.20~0.30m、厚さ0.10mの扁平な割石であり、石の上面の高さはTP+1.80mにそろっていた。

SD401~404 幅0.80~1.00m、深さ0.60mの溝である。第4層の上面から垂直に掘り込まれており、埋土は溝底から0.5mの高さまでが淘汰の悪い細礫混り細粒砂であり、その上から溝の肩にかけて淘汰の良い細粒砂であった。この細粒砂は層厚0.10mであり、溝の中に均等に堆積していた。

SX401~404はその用途や性格が不明の遺構である。

SX401 東西2.05m、南北5.80mの長方形の落込みである。深さは0.60mを測り、細礫~細粒砂で埋まっていた。

SX402 東西2.00m以上、南北2.60m以上の方形の落込みである。深さは0.50mを測り、細粒砂で埋まっていた。

SX403 東西3.00m以上、南北1.50m以上の円形の落込みである。深さは0.80m以上を測り、細粒

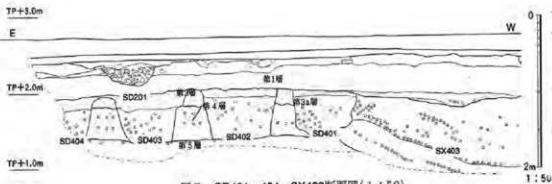


図7 SD401～404、SX403断面図(1:50)

砂で埋まっていた。

SK404 東西6.50m以上、南北5.00～5.74mの不定形の落込みである。深さは0.55～0.70mを測り、南半の上部は細礫、その他は細礫混り細粒砂によって埋まっていた。

埋土中から17世紀後半から18世紀後半にかけての伊万里焼10・18・20・21、京焼風肥前碗19が出土した。

10～14は碗である。10は外面に二重の網目文を描き、底部高台内には渦福銘を入れる。11・12は印刷染付であり、11は菱形の中に牡丹、12は団鶴と植物を描く。12は18世紀前半のものである。13は外面に草花文を描き、底部高台内には変形文字を入れる。14は雨降文を施した小型丸碗である。15は蕎麦猪口、16は小型筒形碗である。15は外面に桃と植物の文様をもつ。16は青磁染付であり、外面に菱形と紐で宝文を描き、口縁部内面に四方標文、見込みに五弁花を入れる。14の小型丸形碗、15・16の小型筒形碗は18世紀後半に特徴的な器形である。17は仏飯具、18は端反の小碗である。20・21は皿である。20は蛇目軸刺ぎをしており、口縁部内面に濃み絵で唐草文、見込みに五弁花を描く。外面には省略された松葉文を施しており、高台内側には圏線を入れない。これらの諸特徴から18世紀後半の時期のものとみられる。21は円形の高台をもつ角皿である。口縁を施し、内外面の花唐草文は輪郭を手描きして、呉須で塗りつぶしている。ていねいな手法で描かれた花唐草であり、高台内に圏線が施されることから18世紀中葉のものとみられる。

SK424 東西2.45m、南北1.73mの隅丸長方形の土壌である。深さ0.55mであり、細粒砂で埋まっていた。土壌の底の堆積には偽罫が認められ、機能時に側壁が崩落していたとみられる。埋土中から九瓦や甕前後播鉢などが出土した。九瓦にはコビキの痕跡が認められ、16世紀以降のものとみられる。

次に述べるSK401～422、SP404～413はSX404の底面および側面に設けられていた土壌や小穴である。いずれも深さが0.05～0.20mと浅く、茶褐色細礫混り細粒砂で埋まっていた。

SK401～SK423 長方形(SK401)、円形(SK412)、楕円形(SK403・410)のものを除いて不定形のものが多い。SK404～406、SK411～414、SK416～420、SP405・SK421・422は各群内で切り合いを持つ。また、SK408・409・410はSX404の側壁を抉っていた。

これらの土壌や小穴からは18世紀中頃の伊万里磁器、土師器が出土した。23はSK419から出土した伊万里焼碗である。蛇目軸刺ぎを行っており、外面は濃み絵で梅樹を描く。高台部分の外側には二重の圏線、高台からやや離れた部分に一重の圏線がそれぞれ巡る。

SP405～413 直径0.2mの円形の小穴である。SP406～413はSX403内の高い部分に認められ、土

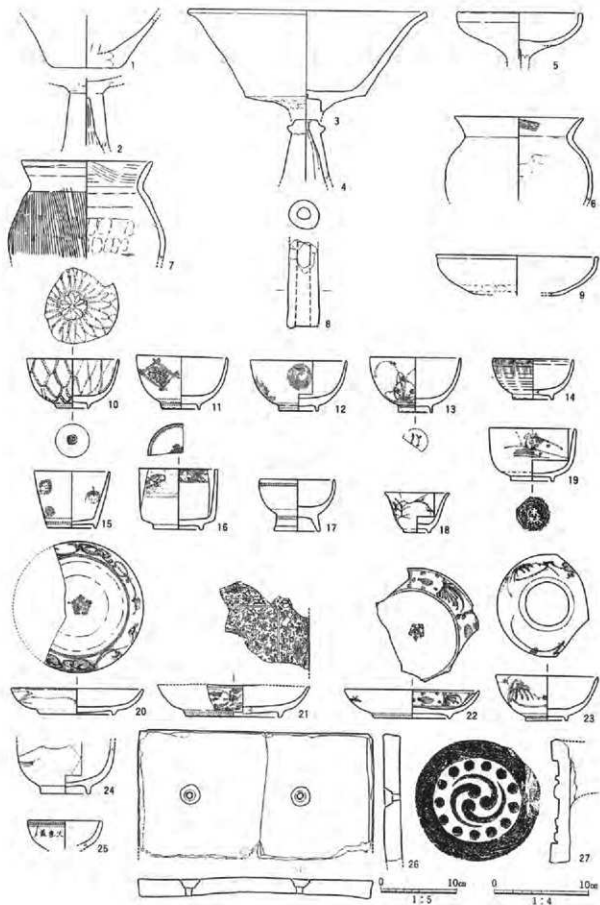


图8 各層・遺構出土遺物

墳と同様に切り合いを持っていた。

d) 第2層下面検出遺構(図6・8)

SD202-213 幅0.30m、深さ0.2mの溝であり、溝底に加工痕を持つものもあった。いずれも調査区北半で検出した。

SD214-219 南半で検出した幅1.20-1.40m、深さ0.10mの東西方向の溝である。

SK201 直径0.70mの円形で、深さ0.10m土壌である。

SK202 直径0.60mの円形で、深さ0.10mの土壌である。

SK203 南北1.70mの、東西0.40m以上の長方形で、深さ0.10mの土壌である。東側をSD201によって切られていた。

SK204 南北1.80mの、東西0.60m以上の長方形で、深さ0.10mの土壌である。東側をSD201によって切られていた。

SK205 南北0.80m以上の、東西0.40m以上の方形で、深さ0.10mの土壌である。

SK206 南北0.80mの、東西0.50mの長方形で、深さ0.10mの土壌である。SK201-206の埋土は暗茶褐色細粒砂で構成されていた。

e) 第2層上面検出遺構(図6・8)

SD201 幅0.80m、深さ0.08-0.10mの溝である。埋土から18-19世紀の伊万里焼、土師器皿が出土した。

SK201 SX401を切って設けられた土壌である。攪乱で大部分が壊されていたが、南北2.0m、東西1.0m以上の規模に復元される。埋土中から漆喰壁の破片や瓦類が多数出土した。これらに伴う陶磁器や土師器は18-19世紀のものであり、難波御蔵を廃絶した時に棄てられた建築部材とみられる。

26は磚と考えられる。平瓦を二つ連結した形をしており、中央に2つの孔がある。27は軒丸瓦である。巴文の周囲に圏線は無く、巴文の頭部分が大いことから、18世紀以降のものと考えられる。また、出土した瓦の中には棧瓦が少量含まれていた。

3) まとめ

今回の調査地における成果は以下の通りである。

1、第7層の海成層中から弥生時代の土器や古墳時代前期の土師器が出土することから、調査地は古墳時代前期以前において大阪湾沿岸部に位置していたといえる。

2、B地区では古墳時代中期から古代にかけてのある時期に汀線があったとみられる。その後、古墳時代中期から奈良時代にかけて陸化が進み、古土壌が形成される。第5層の堆積構造から、風による砂堆の移動があったことがうかがえる。

3、第4層下面で検出した畝間溝の存在から、中世においては農地として用いられていたと推測される。また、18世紀に入ると第4層上面に礎石1-4やSD401-404、SX401-404といった遺構が設けられるようになる。絵図、文献記録、明治時代の地図などから、これらの遺構が難波御蔵に関連すると考えられる。

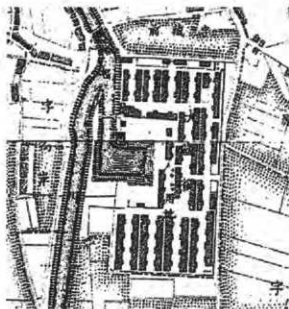


図9 明治19年陸地測量部大阪地図(2万分1)



図10 大正13年大阪市パノラマ地図(南西から)

4、難波御蔵の建物解体後は短期間ではあるが農地として用いられていたことが、第2層に畝の畝や畝間溝が存在することからうかがえる。この後、調査地には煙草専売局大阪工場の煉瓦造りの建物が築かれていた。

難波御蔵は享保18年(1733)に建設され、寛政3年(1791)には敷地の南側に天王寺御蔵が移転して来たと考えられる。御蔵の建物や船入などの構造物は明治時代に入っても残っており、明治19年の陸地測量部地形図には、敷地のほぼ中央に船入、その周囲に約30棟もの蔵が描かれている(図9)。

明治37年(1904)、この蔵屋敷の跡地に煙草専売局大阪工場が建設される。大正13年の大阪市パノラマ図(図10)から、煙草工場は赤煉瓦造りであり、船入であった場所には管理棟が設けられ、その周囲に東西方向に長い工場が建ち並んでいたことがうかがえる。

今回の調査で検出した遺構で確実に倉庫の基礎と判断されるものは検出できなかった。しかし、18世紀の遺物を含む遺構や礎石の存在から、調査地が難波御蔵の敷地内であった可能性がさらに高まった。今後、難波御蔵の全体像については発掘調査成果だけでなく、内閣文庫や大阪歴史博物館の所蔵する絵図や古文書などをもとにして、より多角的に蔵屋敷の構造を検討していく必要があろう。

(参考文献)

大阪市文化財協会2005、『株式会社ヤマダ電機による建設工事に伴う船出遺跡発掘調査(FD04-1)報告書』

日下わらじ屋1924『大正13年大阪市パノラマ地図』

玉置豊次郎1980、『大阪建設史夜話 大阪古地図集成』

浪速区役所1957、『浪速区史』

陸地測量部1886、『明治19年陸地測量部大阪地図』

基本層序
(B地区南半東壁)



A地区第4層下面
検出遺構
(南東から)



B地区第4層下面
検出遺構
(東から)



B地区北半第4層
上面検出遺構
(北から)



B地区北半第4層
上面検出礎石群
(東から)



B地区北半
SX403・SD401～404
断面(北西から)



V 東 住 吉 区

桑津遺跡発掘調査(KW05-3)報告書

調査箇所	大阪市東住吉区駒川1丁目100-1
調査面積	16m ²
調査期間	平成17年12月13日～12月14日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、寺井誠

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は桑津遺跡の指定範囲の南端近くで、これまでの調査ではもっとも南に位置する。西側は田辺廃寺推定地に接し、近隣ではKW91-26次や91-18次調査が行われており、古代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている[大阪市文化財協会1998]。

今回の調査地は平成17年11月18日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、GL-0.5m以下に厚さ約40cmの、中世と推定される作土層が残っていて、地山の残存状況も良好であることが確認された。その結果、事業主と協議の上で実働2日間(16m²)の発掘調査を行うこととなった。

12月12日に事業主側によってGL-0.5mまで重機掘削が行われ、翌13日より本調査を開始した。調査では後述の第2層を人力で掘削した後、遺構検出・掘削・写真・図面などの記録作業を行った。

なお、調査で用いた水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文の挿入中ではTP±〇mと記し、図に用いた座標値は大阪市道路現況図(1:500)を基にして導いた世界測地系によるものである。

2) 調査の結果

i) 層序(図3、写真図版上段)

北壁および東壁で地層の観察を行った。

第0層:現代盛土で、a・bの2層に細分することができる。第0a層はごく最近の盛土で、第0b層は地山や包含層の偽隙で構成されており、この地が住宅化し始める頃に地山や包含層の削平が行われたことが推定される。桑津遺跡の標準層序の0層(以下、「桑津●層」と略)に相当する[大阪市文化財協会1998]。

第1層:オリブ黒色細礫混り極細粒砂質シルトの現代作土層で、平均層厚は20cmである。桑津1



図1 KW05-3次および周辺の調査地

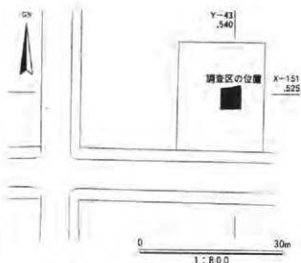


図2 KW05-3次調査区配置図

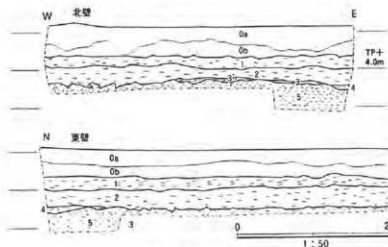


図3 KW05-3次調査地断面図

層に相当する。

第2層：試掘時に中世と推定されたオリブ褐色細礫混り極細粒砂質シルトの作土層で、平均層厚は30cmである。土師器・須恵器・埴輪・古代の瓦・瓦器・青磁・白磁に加え、肥前陶磁も含まれていることから、江戸時代(18世紀頃)の作土層

で、桑津2層に相当する。

第3層：オリブ褐色シルト質粗粒砂層で、地山が高く残っている部分にのみ分布し、層厚は最大で5cmである。飛鳥時代の須恵器杯口の破片が1点出土したのみで、正確な時期は不明である。

第4層：褐色細粒砂質シルト層で、調査地の北東隅にのみ分布し、層厚は最大で5cmである。弥生土器片とサヌカイトが出土した。弥生時代の遺構であった可能性がある。

第5層：黄褐色シルト質粗粒砂の低位段丘構成層(地山層)である。

ii)遺構と遺物

遺構(図4、写真図版中段)

SX201：調査地中央を南北方向に延びる土手状の高まりで、第2層下面で検出された。上端の幅は1.20mで、両側の低い部分との高低差は0.05mである。大畦畔の削り残しと思われる。

SK201：第2層基底面で検出した、南北0.4m、東西0.5m、深さ0.1mの不整形な土塊である。埋土は第2層とほぼ同じであるが、第5層の偽礫が多く含まれる。土師器の細片が出土した。

遺物(図5、写真図版下段)

遺物の総量は非常に少なく、大半が第2層からの出土である。以下では第2層出土の中・近世遺物

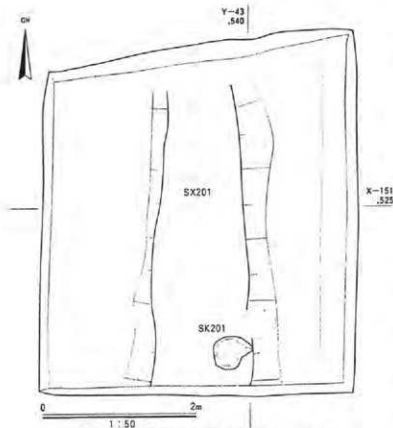


図4 KW05-3次第2層下面・基底面検出遺構

について報告する。

1は土師器碗の底部で、高台径は5.0cmで、断面は三角形を呈する。2は東播系の須恵器鉢である。口縁端部が内側に拡張する形態から、[森田稔1995]の第Ⅱ期第2段階(12世紀末-13世紀初頭)に該当するものであろう。3は口縁端部が玉縁の白磁碗である。外面は口縁部以下にケズリが施されている。4は青磁碗である。外面に蓮弁が片切彫りで表現されている。5は肥前陶磁の染付小皿である。高台皿付は軸剥ぎされていて、体部に丸みがあることから、17世紀末から18世紀初頭のものと思われる。

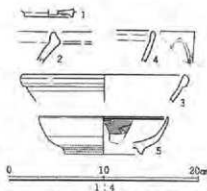


図5 KW05-3次出土遺物
1～5:第2層

3)まとめ

桑津遺跡はこれまで弥生時代から奈良時代にかけての調査成果が目玉されていて、特に本調査地は田辺廃寺推定地に接していることから、寺院に関連する遺物・遺構が検出されることが予想された。しかし、結果的には第2層から古代の瓦の細片が1点出土したのみであった。弥生時代の地層である第4層からは生駒西麓産の弥生土器片とサヌカイトの剥片が出土したが、当調査地がこれまでの桑津遺跡の調査の中で最南端に位置することから、今後の調査の進展でさらに南側でも弥生時代の遺構が検出されることが期待できる。

また、遊離資料ではあるものの、青磁・白磁といった輸入陶磁が出土したことは、中世集落の存在を想定させる。桑津遺跡では中世の遺物はしばしば出土するが、本調査地の北約50mの地点に位置するKW91-18次調査地で平安時代末から鎌倉時代初頭を中心とした井戸や土壇が検出されていて、遺跡内でもっともこの時期の遺構が濃密な地域である[大阪市文化財協会1998: pp.168-185]。この地区は西で田辺廃寺推定地に接していることから、田辺廃寺を基礎にして桑津の中世集落が発達したのであろう。

江戸時代になると、本調査地でも明らかになったように耕地化されたようで、KW91-18次調査地では溜池と思われる遺構や井戸が検出されている。本調査および周辺調査の成果から見て、耕地化の年代は少なくとも18世紀以降と思われる。

ここで近隣に点在する中世の遺跡に目を向けてみよう(図6)。まず、桑津遺跡の約2km北には勝山遺跡がある。この遺跡は御勝山古墳や縄文時代前期の土器が出土することで知られているが、御勝山古墳の周濠部からは玉縁の白磁碗や青磁、瓦器に加え、柿経も出土している[高井健司・松本百合子1991]。また、墳丘裾付近では平安時代後半から中世にかけての丸瓦・平瓦が大量に出土しており、墳丘に瓦葺きの建築物があり、周辺に同時期の集落が広がっていたことが想定される。また、御勝山古墳の南西に位置する桃谷高校の調査では、谷状の窪みから古代の瓦が出土しており、近隣に古代寺院が存在した可能性もある(註1)。

南東約3kmには平野環濠都市遺跡が、北西約2kmには四天王寺日境内遺跡がある。これらの遺跡でも平安時代末から鎌倉時代の遺構・遺物が検出されており、桑津遺跡とは奈良街道沿いにあるという

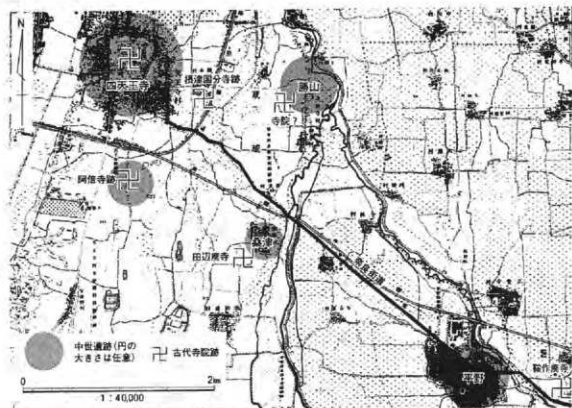


図6 桑津遺跡とその近隣の中世遺跡(地図は陸地測量部明治20年作成のものを用いた)

点でも共通する。また、四天王寺の南約1kmの地点にある阿倍寺跡では、16世紀前半に埋まる漆跡から古代の瓦とともに平安時代後期から鎌倉・室町時代の瓦・陶磁器が出土している[大庭重信2001]。

桑津遺跡や周辺に点在する中世集落は、四天王寺周辺は当然のことながら、勝山遺跡や阿倍寺跡で見られるように、古代寺院を核にして発達しているような傾向が読み取れる。また、長原遺跡の研究では平安時代末に集村化することが明らかになっているが、より精緻な研究が進むことによって、同様な状況が窺えるかもしれない。

桑津遺跡の中世集落についての検討は端緒に付いたばかりである。今後とも問題意識をもって調査・研究に取り組む必要がある。

註)

(1) 桃谷高校の調査成果については、大阪府教育委員会の阪田育功氏よりご教示頂いた。

参考文献

大阪市文化財協会1998、「桑津遺跡発掘調査報告」
 大庭重信2001、「阿倍寺跡の調査」：大阪市文化財協会編「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1998年度—」, pp.51—60
 高井健司・松本百合子1991、「(株)長谷工都市開発による建設工事に伴う発掘調査(OK90-2)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編「平成2年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」, pp.77—93
 森田稔1995、「中世須恵器」：中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」, pp.356—366

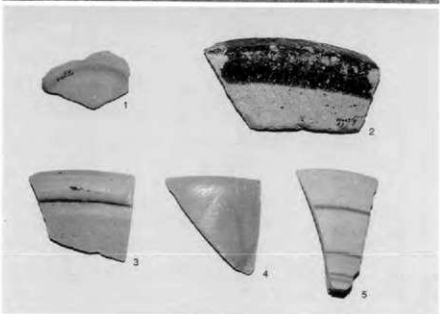
北東隅地層断面
(西から)



完掘後全景(南から)



遺物写真



桑津遺跡発掘調査(KW05-4)報告書

調査箇所	大阪市東住吉区桑津2丁目18-1
調査面積	75㎡
調査期間	平成18年1月20日～平成18年1月24日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、京嶋覚、植野清

1) 調査に至る経緯と経過

東住吉区に所在する桑津遺跡は1929(昭和4)年に弥生時代の集落跡として発見された。1975(昭和50)年ごろから本格的に発掘調査が行われ、弥生時代を中心とする旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかとなってきた。2001(平成13)年現在、南北0.9km、東西0.8kmの範囲が埋蔵文化財包含地とされており、南部で古代の田辺廃寺と重なり、東部では杭全遺跡と接している。

本調査地は遺跡範囲の北西縁に当る(図1)。近隣では東南東約160mにある京善寺境内や、南約200mの桑津3丁目～5丁目付近で、弥生時代中期の方形周溝墓のほか、古代、近世の遺構が見つかった[大阪市文化財協会1998]。

表題の建設工事に伴って平成17年12月6日に大阪市教育委員会文化財保護課が試掘調査を行ったところ、須恵器を含む土壌状の落込みや土師器片を含む遺物包含層が見つかったことにより、本調査を実施することになった。

調査範囲は東西3m、南北25mで(図2)、当初8日間の期間を予定していた。しかし、重機による掘削を始めたところ、攪乱が著しく、遺構・遺物の残りがたいへん悪いことがわかったので、主たる調査は遺構を検出できた調査地南部で行い、実働3日間で終了した。

調査で用いた水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+0m」と記す。

2) 調査の結果

i) 地形の概要

桑津遺跡の中央部は、長池や桃ヶ池を通して上町台地上を南南西-北北東に延びる浅い谷に沿って延びる、標高7.5～6.5mの低い峰筋に位置する。この峰には北の生野区で御膳山古墳が造られている。遺跡の東部は今川とその東に広がる沖積面に向かって緩く傾斜し、遺跡の西部は長池-桃ヶ池の谷に向かって緩く傾斜する。調査地は長池-桃ヶ池の谷から分岐する南東ないし南南東に延びる浅い谷の中に当たっている(図1)。

ii) 層序

本調査地の地層を以下の4層に区分した(図3・4)。

第0層：現代盛土・基地堆積物および攪乱堆積物からなり、層厚は薄いところで約5cm、厚いところでは100cm以上あった。

第1層：ぶい黄褐色礫・砂混りシルトからなる近現代の作土層で、層厚は5～15cmであった。下面で土壌SK101、溝SD101を検出した。

第2層：ぶい黄橙色細粒砂質シルト～シルトからなる人為層で、層厚は5cm以下であった。須恵器の小片、土師器または弥生土器の小片、瓦質土器の小片を含んでいた。本層の上面で溝SD201を検出した。

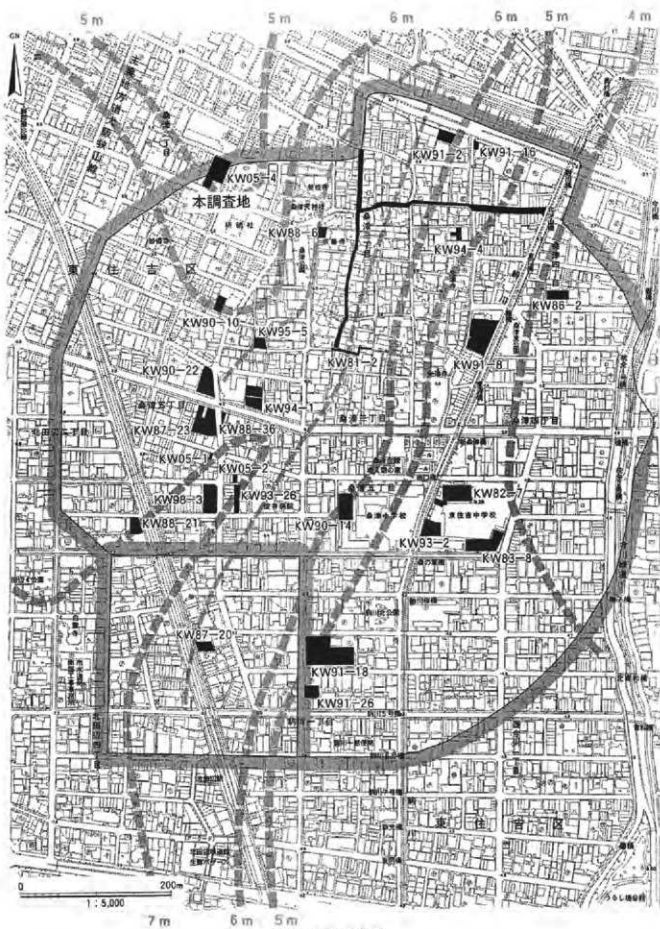


図1 調査地の位置と等高線



図2 調査範囲

第3層：上部層はにぶい黄橙色極細粒砂質シルトからなり、層厚は25cm、下部層はにぶい黄褐色礫・砂からなり、層厚は攪乱堆積物の厚さよりはるかに厚く100cmを超えた。本層は無遺物層であり、当地域の上町台地の表層部を構成する更新統である。

iii) 遺構と遺物

第1層下面で土壌と溝を、第2層上面で溝を検出した(図3・4)。

SK101：調査地南部の第1層下面で検出した北西-南東に長軸がある土壌である。長軸75cm、短軸40cmで、深さは浅く最大で10cmであった。埋土は第1層と同質のにぶい黄褐色礫・砂混りシルトであった。

SD101：調査地南部の第1層下面で検出した北西-南東に延びる溝である。幅は70-90cm、深さは15cm前後で、溝底は比較的平らであった。埋土は第1層と同質のにぶい黄褐色礫・砂混りシルトであった。肥前陶磁器(刷毛目唐津)のほか、明治時代以降の遺物が含まれていた。

SD201：SD101の真下で検出した北西-南東に延びる溝である。幅は70-80cm、深さは10cm前後で、溝底は比較的平らであった。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトが主体であり、第2層および第3層堆積物からなる中礫サイズの偽礫が多数含まれていた。近代の陶磁器が出土した。

第2層に含まれた瓦質土器は、小破片であったため中世のものか近世のものかは分からなかった。



図3 地層と遺構の関係

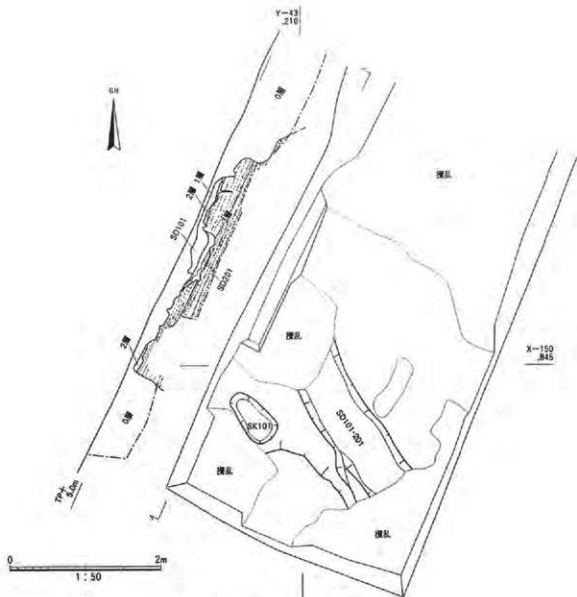


図4 遺構平面・西壁地層断面

また、須恵器や土師器または弥生土器も小破片で、年代を特定することはできなかった。

3) まとめ

今回の調査範囲は擾乱が著しく、桑津遺跡の特徴を示すような遺構や遺物は見つからなかった。しかし、第2層に含まれる土器は、本調査地周辺に、弥生時代以降、近世に至る複数時期の遺構が分布する可能性を示唆している。また、SD201・101、SK101の延びの方向は、長池-桃ヶ池の谷から分岐する枝谷の方向である北西-南東ないし北北西-南南東方向とよく似ており、土地利用の観点からは興味深い資料となった。

引用参考文献

大阪市文化財協会1998、『大阪市東住吉区桑津遺跡発掘調査報告』、287ps.

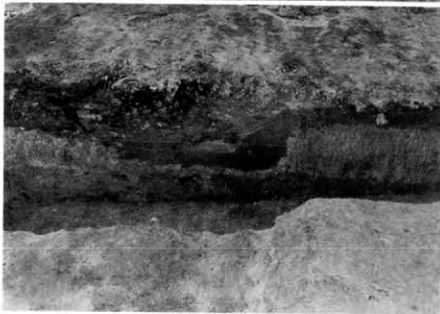
調査地全景
(南から)



遺構検出状況
(東から)



SD101・201断面
(東から)



VI 住 吉 区

帝塚山古墳群発掘調査(TZ05-1)報告書

調査箇所	大阪市住吉区帝塚山西2丁目
調査面積	408㎡
調査期間	平成17年12月1日～平成17年12月27日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、小倉徹也、松尾信裕

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地南部の西縁に立地し、帝塚山古墳群の地域内に所在する。本遺跡内には大阪市内で唯一、墳丘をほぼ完全に残す前方後円墳の史跡帝塚山古墳がある。調査地はその約120m南方、小帝塚山古墳の推定地[上田宏範1988]に位置する(図1)。これまでに、調査地北側の帝塚山古墳周辺ではTZ80-1次・86-2次・95-2次調査が実施されている。古墳前方部の北東側で行われた80-1次では、狭小な調査ではあったが、周溝の可能性のある落込みが検出されている。後円部の南東隅に当たる86-2次では墳丘裾部に沿った方向の落込みが検出されており、墳裾の斜面または周溝の可能性が推定されているが、近世の土取り穴の可能性も指摘されている。前方部の北西側で実施された95-2次では、近世の土取り穴と考えられる落込みが検出されている。また、本遺跡東方の帝塚山東遺跡では、TE04-1・2次調査において帆立貝形前方後円墳が発見されている。

大阪市教育委員会が平成17年10月13日に試掘調査を行った結果、古代とみられる土師器や須恵器を含む土壌および包含層が確認された。この結果を受け、平成17年12月1日から発掘調査を実施することになった。

調査区は敷地内の中央西寄りに設定した(図2)。敷地内に残土の仮置場を確保するために北区と南区に分け、まず、北区から調査を開始した。調査は現代盛土から近世の盛土層までを重機によって除去し、以下を人力によって掘下げた。その結果、近世の土取り穴と考えられる方形の土壌が多数検出された。12月13日に北区の調査を終了し、北区の埋戻しと南区の重機による掘削を並行して行い、12月15日から南区の調査を開始した。南区においても北区と同様に、多数の土壌が検出された。多数の遺構と遺物の検出に努め、記録作業を行った後、平成17年12月27日に埋戻し作業および器材類の撤収を含めた現地におけるすべての作業を完了した。

なお、以下の報告で使用した図に示す標高はTP値、方位は図1が座標北、それ以外は磁北である。

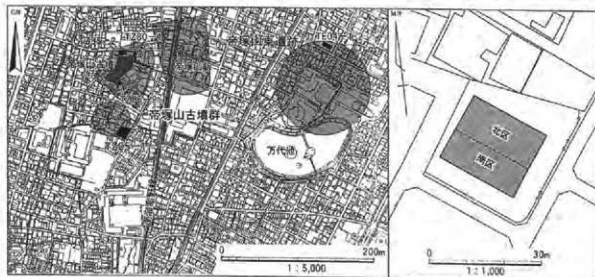


図1 調査地の位置



図2 調査区の配置

2) 調査の結果

i) 層序と出土遺物(表1、図3～5)

現地表面下約2.0m(TP+12.5m)までの地層を観察した。以下に層序の概略を記し、各層の岩相や特徴を表1に、地層断面を図3・4、出土遺物実測図を図5に示す。

第0層：現代の盛土層で、層厚は20～170cmである。

第1層：現代の作土層で、層厚は10～30cmである。黄白色砂質シルトの偽礫や炭を含む、黒色の細～中礫混り中～粗粒砂からなる。

第2層：灰褐色ないし茶色の細粒砂～シルト・極粗粒砂～細礫混り中～粗粒砂からなる、盛土層および遺構埋土である。黄白色細粒砂質シルトないしシルトからなる下位の中段段丘構成層の偽礫や、暗灰褐色細粒砂質シルトからなる暗色化した古土壌の偽礫のほか、炭や中礫を含む。偽礫の大きさは人頭大のものも観察された。層厚は100cm以下で、本層の母材は岩相から作土であった。上面で後述する土壕SK001～175を確認した。また、本層からは須恵器・土師器とともに、瓦器皿1、東播系須恵器蓋2、中国青磁碗3、中国白磁碗4、黒色土器碗5、肥前磁器碗6のほか、19世紀前半ごろの瀬戸美濃磁器小杯7が出土した。以上から、調査地付近に残る古土壌や中段段丘構成層と作土層を土壌の埋戻しに利用したと考えられた。埋戻した時期は、幕末～明治時代の遺物を含まないことと、7が出土したことから19世紀前半ごろと考えられた。なお、埴輪などの古墳に關係する遺物は出土しなかった。

第3層：黄白色ないし黄褐色の極細～細粒砂からなる中段段丘構成層である。乾痕が顕著に発達する。最上部の厚さ約20cmは風化による粘土化が進んでおり、極細粒砂質シルト～粘土質シルトであった。観察した調査地の範囲では、地層全体として淘汰が非常によい。なお、巣穴などの生痕化石は見つけられなかった。

表1 調査地の層序

T205-1 層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	遺構	おもな遺物	時代
第0層	現代盛土	20～ 170		—	—	現代
第1層	現代作土 (含黄白色砂質シルト偽礫・炭 黒色細～中礫混り中～粗粒砂)	10～30		—	—	
第2層	含黄白色細粒砂質シルト～シルト偽礫 暗灰褐色細粒砂質シルト偽礫・炭・中礫 灰褐・茶色細粒砂～シルト・極粗粒砂 ～細礫混り中～粗粒砂	≦100	母材は作土 (盛土層・遺構埋土)	→SK001～175	陶磁器・瓦器・ 須恵器・土師器 庄内式土器	近世
第3層	黄白・黄褐色極細～細粒砂 (最上部の約20cmは 極細粒砂質シルト～粘土質シルト)	130<	乾痕が顕著 淘汰が良い			中期 旧石器

凡例 →：上面後出遺構

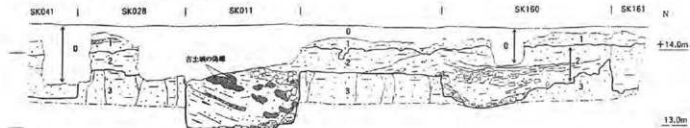
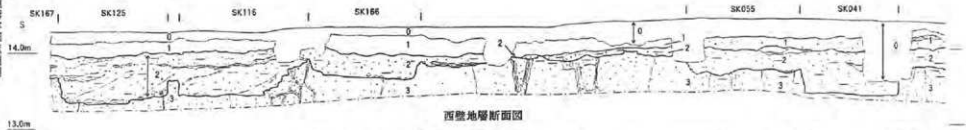
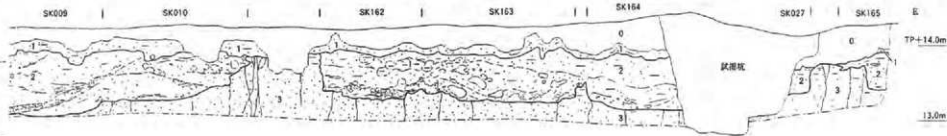
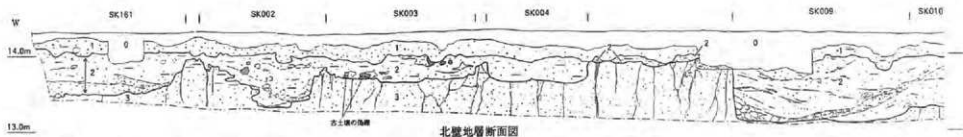
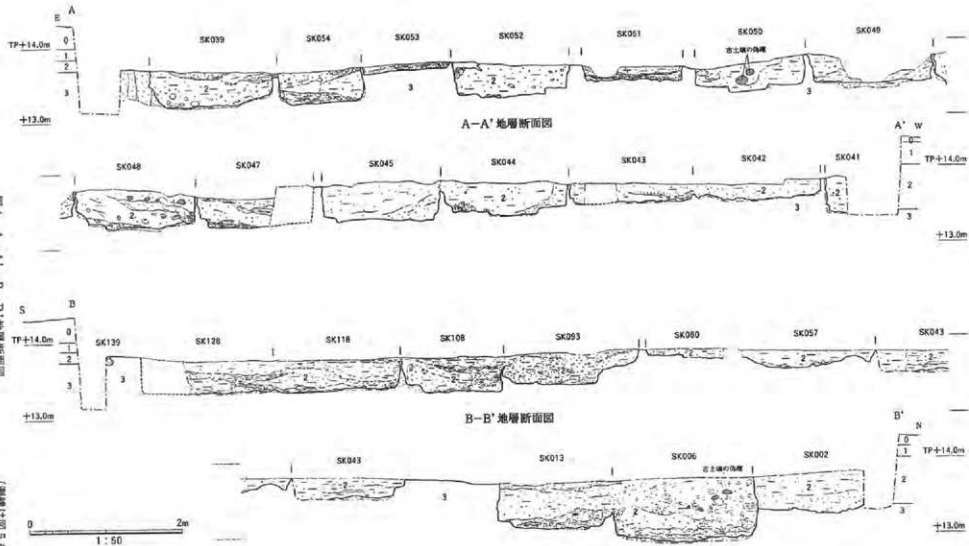


図3 北壁および西壁地層断面図

図4 A-A'・B-B'地層断面図

(図録は図5を参照)



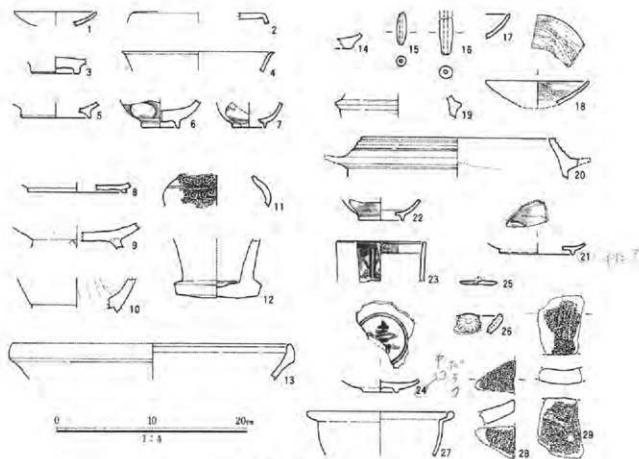


図5 出土遺物

1~7: 第2層, 8~20: SK126-127, 9: SK067, 10: SK021, 11: SK115, 12: SK064, 13: SK137, 14-18: SK100, 15: SK124, 16: SK109, 17: SK155, 19-22-24-29: SK148, 21: SK051, 23: SK007, 25: SK039, 26: SK001, 27: SK018, 28: SK108

ii) 遺構と遺物(表2、図5~6)

第3層上面において土壌SK001~175を検出した。検出した遺構平面を図6、各遺構の大きさと深さを表2に示す。なお、遺構の断面は図4を参照されたい。

土壌の大きさは平均して、東西幅が約150~160cm、南北幅が約120~140cmとやや東西に幅広い長方形を呈する。深さは一定せず、浅いものでは約5cm、深いもので約80cmであった。土壌の底はほぼ平らになっており、加工時形成層は認められないか、認められても非常に厚さの薄いものであった。およそ3分の1の土壌の底には直径約30~150cm、深さ約5~10cmの楕円から円形を呈した窪みが認められた。そのうち、SK155は窪みの周辺部に幅8~10cmの歯車状の凹凸が認められた。掘削時に使用した工具の痕跡の可能性がある(図版参照)。土壌間には間隙があり、畦状に壁が残っていた。壁はほぼ垂直に切られており、壁の厚さの薄いものは約5cmで、わずかでも壁を残すように掘られたと考えられた(図4参照)。また、壁面の中には幅約0.15mで下に凸の「コ」の字形をした痕跡が認められた。これは壁面の上方が浅く、下方は壁面奥側に深くなっていたことから、掘削時に使用された鋤などの掘削用工具の痕跡の可能性がある。土壌の埋土の岩相からごみ穴とは考え難く、畦状の壁を残すように規格された土壌であり、これらの土壌は土取り穴の可能性が高いと考えられた。土壌はほぼ規

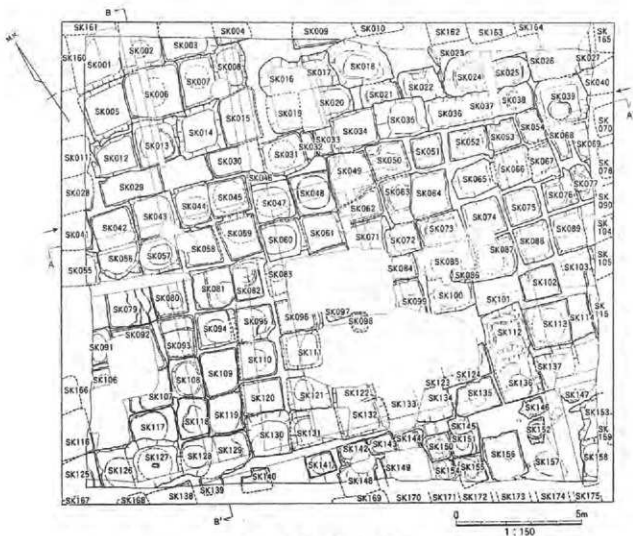


図6 第3層上面検出遺構平面図

則的に整然と列んでおり、その列ぶ方向はほぼ $N15^{\circ}\sim 20^{\circ}E$ とこれに直交する方向が卓越していた。現在の道路とは一致していないが、上町台地の方向(およそ $N20^{\circ}E$ 前後)にはほぼ一致しており、地形に制約された島などの区画内を掘ったものと考えられた。また、A-A'ラインよりやや北側(図6の+印部)を境にして、その北側と南側では土取り穴の列び方に食い違いが認められた。これの西側には比較的大きく深い土取り穴が集まって検出されており、中央部から東側では遺構の配置が南側に比べて規則性に欠けていた。何らかの境界を示していると考えられたが、その意味を明らかにすることはできなかった。

遺構から出土した遺物のうち、代表的なものは図5に示す通りである。SK126・127から平成Ⅱ～Ⅲに比定される須恵器杯8底部と瓦質土器羽釜20、SK067からTK43～209に比定される須恵器台付壺9、SK021から9世紀初めに属する須恵器台付壺10、SK115から統一新羅時代の壺11、SK064からTK43～209に比定される須恵器こね鉢12、SK137から東播磨須恵器鉢13、SK100から庄内式土器底部14と瓦器皿18、SK124から土鐘15、SK109から土鐘16、SK155から瓦器碗17、SK148から瓦質土器釜19と肥前磁器碗22・肥前磁器皿24・布目が残る平瓦29、SK051から中国製青花皿21、SK007から肥前磁器筒形碗23、SK039から備前焼小型壺蓋25、SK001から関西系陶器灯明皿26、SK018か

表2 遺構寸法一覧表

遺構番号	東西幅	南北幅	深さ	備考	遺構番号	東西幅	南北幅	深さ	備考
SK001	(180)	(170)	(50)		SK074	150	130	55	備考
SK002	170	—	50	北壁に延びる	SK075	120	130	8	
SK003	(170)	—	(20)	*	SK076	130	120	16	
SK004	(150)	—	30		SK077	(80)	(120)	40	
SK005	(170)	(170)	(60)		SK079	190	(180)	45	
SK006	(180)	(200)	(80)		SK080	120	(150)	5	
SK007	150	(180)	67		SK081	(160)	(150)	(20)	
SK008	120	(170)	40		SK082	110	(140)	(20)	
SK009	180	—	70	北壁に延びる	SK083	—	(120)	—	西側のみ残存
SK011	—	—	70	西壁に延びる	SK084	(130)	(110)	50	東側のみ残存
SK012	(170)	150	40		SK085	(180)	(130)	(80)	
SK013	170	170	50		SK087	(150)	(135)	(40)	
SK014	180	180	70		SK088	120	140	7	
SK015	(150)	(200)	80		SK089	(140)	160	40	
SK016	(180)	(140)	(50)		SK091	—	(120)	(10)	
SK017	(120)	(130)	70		SK092	170	190	—	北・東側のみ残存
SK018	200	(180)	25		SK093	(145)	170	(20)	
SK019	(130)	(150)	(38)		SK094	160	130	40	
SK020	(120)	(120)	(60)		SK095	140	(120)	20	
SK021	150	(120)	30		SK096	(140)	120	(70)	
SK022	140	(150)	40		SK099	—	(150)	30	北東側のみ残存
SK023	—	—	—	SK024に複写	SK100	170	(130)	60	
SK024	(150)	(140)	(40)		SK102	120	(120)	20	
SK025	150	(120)	(24)		SK103	(130)	(120)	(5)	
SK026	(180)	(120)	—	西側のみ残存	SK107	160	140	20	
SK027	50	(200)	(30)		SK108	160	(130)	40	
SK029	170	100	25		SK109	(150)	170	40	
SK030	(150)	(100)	(20)		SK110	150	140	25	
SK031	160	150	(61)		SK111	(150)	140	40	
SK032	(50)	(100)	(30)		SK112	170	170	60	
SK033	(70)	(120)	(15)		SK113	180	170	30	
SK034	180	140	60		SK114	(50)	155	(2)	
SK035	150	140	46		SK115	150	130	11	
SK036	(140)	(110)	(30)		SK117	170	140	50	
SK037	(120)	(110)	(30)		SK118	(130)	140	40	
SK038	(150)	(110)	70		SK119	(130)	(140)	40	
SK039	(170)	(180)	(54)		SK120	165	130	20	
SK041	—	(150)	30	西壁に延びる	SK121	160	(120)	(5)	
SK042	160	140	30		SK122	(160)	(120)	60	
SK043	170	160	30		SK124	168	126	(50)	
SK044	120	150	42		SK126	150	170	60	
SK045	150	140	50		SK127	200	130	80	
SK046	(70)	(50)	(50)		SK128	(150)	(130)	60	
SK047	150	150	40		SK129	(140)	(120)	50	
SK048	150	160	50		SK130	170	140	40	
SK049	150	(130)	(50)		SK131	(180)	(150)	40	
SK050	140	130	47		SK132	(180)	(120)	60	
SK051	130	120	25		SK134	(150)	(120)	40	
SK052	150	120	46		SK135	(158)	120	5	
SK053	110	110	8		SK136	170	160	70	
SK054	(100)	120	40		SK137	(150)	(150)	20	
SK055	—	(120)	7	西壁に延びる	SK139	—	—	(13)	北側のみ残存
SK056	(170)	(120)	10		SK140	(120)	(70)	(5)	
SK057	159	164	33		SK141	105	85	20	
SK058	150	150	(27)		SK142	120	95	40	
SK059	142	162	35		SK143	100	80	40	
SK060	150	150	40		SK144	100	(60)	(30)	
SK061	150	150	50		SK145	120	60	18	
SK062	(170)	(110)	30		SK146	(100)	(50)	(6)	底部のみ残存
SK063	(130)	140	20		SK147	(100)	(50)	15	
SK064	170	160	(30)		SK148	—	(140)	20	北側のみ残存
SK065	150	130	60		SK150	105	100	40	
SK066	120	120	20		SK151	120	60	25	
SK067	(120)	(150)	(30)		SK152	—	—	—	底部のみ残存
SK068	(50)	(140)	30		SK153	—	—	—	西側のみ残存
SK069	(60)	(120)	30		SK154	(80)	(130)	(10)	
SK071	(170)	(150)	70		SK155	120	120	40	
SK072	120	120	60		SK156	155	180	25	
SK073	150	(120)	50		SK157	—	—	—	底部のみ残存
					SK158	—	—	—	西側のみ残存

単位はcm、()は残存値を示す。

なお、大きく攪乱を受けている遺構や壁面を確認した遺構は本表から除いている。

ら関西系陶器土鍋27、SK108から布目が残る平瓦28が出土した。

先にも述べたように、遺構の埋土には人頭大の古土壌の偽礫が含まれており、この古土壌の偽礫中から古代の須恵器の破片が出土した。これらのことから、調査地近辺に古代かそれ以前の地層が残されている可能性があると考えられる。

3) まとめ

今回の調査の成果を以下に述べる。

第3層上面で土取り穴と考えられる土壌SK001-175を検出した。これらの土壌は畦状にほぼ垂直な壁を残して方形に掘られており、整然と規則的に列ぶことが確認された。また、底はほぼ平らに整えられており、ここには加工時形成層が観察されないか、わずかに薄く堆積していた。これは土壌が正確に規格して掘られたことを示唆している。この土壌が土取り穴であると仮定すると、方形に掘られたことは掘削した土量を土壌の容積から計算するためであったのではないかと考えられる。また、掘られた土は粘土質シルト～極細粒砂で、非常に淘汰のよいものである。瓦や土器、陶器などへの利用に十分耐えられるものであると考えられ、このことから検出された土壌は土取り穴である可能性が高い。

土壌の列ぶ方向はほぼN15°～20°Eとこれに直交する方向が卓越しており、上町台地の方向(およそN20°E前後)にほぼ一致していた。地形に制約された畝などの区画を掘ったものと考えられた。

土取り穴と考えられる土壌は、調査地付近にも広く分布していることが想像される。調査地に存在したと推定されている小帝塚山古墳の墳丘部は、土取り目的で既に削割されて失われているように思われる。上町台地周辺の調査で埴輪が出土することは少なくないが、このような土取りの目的で墳丘が破壊された古墳も存在したのではないかと推測される。

帝塚山地域での発掘調査例は少なく、まだ不明な点も多い。今後行われる調査の結果を合わせてさらに検討していくことが必要である。

引用・参考文献

- 上田宏範1988、「住吉古墳群」：新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史』第1巻、pp.374-384
大阪市文化財協会1998、「付章2 帝塚山古墳調査報告」：『南住吉遺跡発掘調査報告』、pp.103-110
岸本直文・江角啓・向田一成・森オリ江・金谷健一・奥村宏美2001、「大阪市帝塚山古墳の測量調査」
：大阪市立大学日本史学会『市大日本史』第4号、pp.122-145

第3層上面遺構検出状況
(北区、東から)



第3層上面遺構検出状況
(南区、東から)



西壁断面
(南区、北東から)



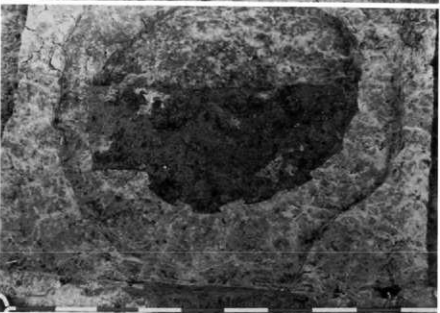
第3層上面遺構検出状況
(北区、西から)



SK066埋土断面
(北区、東から)



SK155検出状況
(南区、真上から)



住吉大社境内発掘調査(SM05-1)報告書

調査箇所	大阪市住吉区住吉2丁目9-89
調査面積	200㎡
調査期間	平成18年1月16日～平成18年3月1日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、宮本康治

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は住吉大社境内にあり、同社本殿区画北側の一段小高くなった地点にある。奈良時代に設けられたとされる住吉神宮寺の比定地に当る。地形上では細江川の北、上町台地の西緩斜面に位置している。住吉大社は、建造物としては市内で唯一の国宝に指定されている本殿をはじめ、多数の指定文化財をかかえる全国有数の神社である(図1)。その歴史は古くにさかのぼり、航海や外交、後には文芸にもまつわる神社として信仰の対象となっていた[住吉大社2002,ほか]。細江川の河口付近には古代国家にとって重要な港であった住吉津が比定され[新修大阪市史編纂委員会1988,ほか]、そこから東に延び、大和への交通路であった磯衛津路も推定され、一帯は交通の要衝であった。また、古墳の存在が推測される地域でもある[上田安範1989,ほか]。

以上のように古くからの歴史が知られる住吉大社であるが、住吉大社旧境内遺跡における考古学的な側面からの資料はあまり多くはない。大社の神主として知られる、津守氏の氏寺と推測される津守廃寺で戦前に古瓦が採集されていたが、寺院の実態は明らかにはなっていない[藤森栄一1967・藤沢一夫1998]。1980年代以降になり、小規模ながら開発に先立つ発掘調査が大社の一帯でも行われるようになり、大社の北東側でのSM83-2・96-5次調査では、古代および中世の遺構が密に分布しているのが確認されている[大阪市文化財協会1983・1996]。東方の南住吉遺跡におけるMN85-37次調査では飛鳥・奈良時代の掘立柱建物跡が多数検出され、津守氏との関係が推測された[大阪市文化財協会1998]。その後も大社東方のSM94-4、あるいは大社南側のSM88-4・89-2次発掘調査等



図1 調査地の位置



図2 住吉大社と調査区の位置



図3 調査区の配置

において古代から中世の遺構が確認されている[大阪市文化財協会1988・1989・1994]。近年でも小規模な調査であるが、大社東側のSM04-1次調査において各時期の遺構が稠密に検出されており[大阪市文化財協会2005]、一帯における繁栄の一端が明らかになっている。これまでの調査から、古代でも飛鳥時代を中心とする時期、および中世に活況を迎えたと推測され、住吉津および磯津津路という交通路に沿った地点が繁栄の中心であったとみられている[大阪市文化財協会2004a]。

以上のように、大社周辺では調査が行われ状況が少しずつ明らかにされつつあるが、境内の内側については資料がほとんどない状態であった。その中で堀田啓一氏による踏査があり、工事時点での地層の状況や遺物の出土状況がまとめられており、貴重な知見となっている[堀田啓一1979]。

今回、住吉大社において社務所の増築が計画され、試掘調査を行ったところ遺物包含層が確認された。そのため工事で破壊を受ける範囲について遺跡の状況を明らかにするため、発掘調査を実施することとなった。調査では工事の予定される地点に計3箇所、200㎡の調査区を設けた(図3)。

2006年1月16日から第1・2調査区において重機掘削を開始し、人力での掘削および調査に進んだ。第3調査区については重機の搬入が周囲の状況から不可能であったため、人力での調査となった。その後、近世以前の盛土が厚く残っている箇所があったため、第1・2調査区について再び重機を導入して調査した。適宜、遺構・遺物の検出を行い、実測・写真撮影などの記録作成作業を進めた(註1)。第3調査区については東西両端で坪掘りを行って地層の状況を確認した。2月24日には住吉大社および関係の方々、報道関係者への現地公開を行った。3月1日には埋戻しを終了し、器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。

図等で用いる標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文の挿図中ではTP+〇mと記す。座標は世界測地系である(註2)。

2) 調査の結果

i) 層序と各層出土の遺物(図4～6)

調査地では、近現代の工事によって攪乱を受けていた部分以外では近世以前の地層が良好に遺存していた。現地表面は東側が平坦で西側で西へと下る地形である。現在の標高は第1調査区の東端およびその周辺でTP+6.5m前後で、斜面の下にある同調査区の西端でTP+4.0m前後であり、2mあまりの差がある。第2調査区付近が傾斜の変換する肩部となっており、傾斜変換線の方向は北で東に振れる方位を示している。これは上町台地の方位と沿ったものである。

また、第1調査区東端では現地表下約0.4mほどで地山が検出されるが、肩部に近い第1調査区および第2調査区の連結する付近、および第2調査区では1.5mほどの厚みがある整地層が堆積していた。第3調査区では第2調査区の南部と同様な堆積の状況が確認された。

a. 層序の概要

以下、第1および第2調査区での知見をもとにして層序の概要を示し(図4)、各層出土のおもな遺物を示すことにする(図5・6)。なお、各地層の年代についてはその多くを重視で除去したため、層相や整面から採集した遺物から推測したものがある。

第0層：近現代の整地層および攪乱層である。層厚は10～40cmである。焼土や炭化物が部分的に抜がるところがある。

第1層：近世に属するとみられる整地層である。特徴から第1a層と第1b層の2層に大別できる。

第1a層はオリブ褐～暗オリブ褐色のシルト質砂～砂礫層で、層厚は10～20cmである。広範囲で認められ、上面は平坦で、建造物のための整地の可能性がある。18～19世紀代の遺物を含む。第1b層は第1調査区の東部で確認される整地層で、褐色シルト質細粒砂～シルト層である。層厚は10cm前後である。

第2層：暗灰黄～黄褐色細粒砂質シルト～砂礫層で、古代・中世の遺物を含む。層厚は50～60cmである。非常に堅くしまり、砂礫は地山に由来するとみられる。部分的に東から西へと下る単位が見られる。中世の盛土層で、近世に降る可能性もある。第1調査区の中央から西部にかけて分布する。

第3層：褐～暗褐色粘土～シルト層で、古代から中世の遺物を多く含む。層厚は30～70cmである。第1調査区の東部に分布する。中世あるいは近世の盛土層である。第2層と同じく、東から西へと下る傾斜を示す単位が見られ、盛土した状況が推測される。

第4層：にぶい黄褐～褐色シルト質細粒砂～砂礫混りシルト層で、中世の遺物を包含する古土壌である。第1調査区の西部から第2・3調査区にかけて分布する。一部は耕作土とみられる。第4a～c層の3層に細分される。

第4a層は黄褐～にぶい黄褐色細粒砂シルト～細粒砂からなり、層厚は15～20cmである。第4b層はにぶい黄褐色細粒砂からなり、層厚は5～10cmである。第4c層は褐色細粒砂質シルトからなり、層厚は10cm前後である。

第5層：中世の遺物を包含する古土壌であり、2層に大別される。第5a層は灰黄褐～黄褐色細粒砂シルト～細粒砂からなり、古墳時代から中世の遺物を少量含む。第1調査区の一部、第2・3調査区

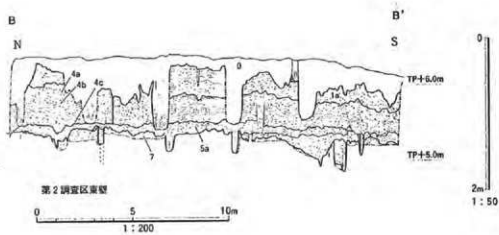
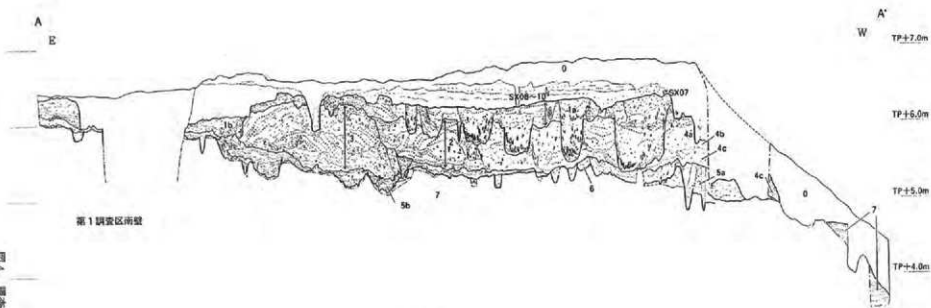


图4 调查区位置示意图
水平方向1:200 垂直方向1:50

で認められる。第5b層は褐〜にぶい黄褐色粘土細粒砂からなり、水成堆積層である。層厚は5〜15cmである。第1調査区の東部に分布する。

第6層：褐〜褐灰色シルト〜粘土層で、層厚は5〜10cmである。第1調査区から第2調査区で部分的に認められ、古代にさかのぼる可能性がある。

第7層：褐〜黄褐色粘土〜砂礫層で、地山である。第1調査区の東部を中心に粘土から細粒砂の堆積が確認され、標高の低くなる西側では砂礫層が認められる。

b. 各層出土の遺物

各層から出土した遺物のおもなものを図示する。一括して掘削した部分もあるため、それについてはまとめて示すことにする(註3)。

第5・4層出土遺物(図5)

第5および4層からは土師器・須恵器・瓦器などが出土した。多くは中世のものであるが、7〜9のように古墳時代から古代のものも含まれていた。1〜8は土師器である。1〜6は土師器皿および杯で、12〜13世紀代ものを含む。7は高杯脚部、8は飯である。9は須恵器杯身でTK47型式のものである。10〜12は瓦器で11〜12世紀ころ、13は青磁碗の口縁部である。14・15は土錘である。

第3・2層出土遺物(図6)

第3・2層からは土師器・須恵器・緑釉陶器・未詳中世陶器などが出土している。古墳時代あるいは古代にさかのぼるものが多く含まれている。16〜19は須恵器で、16は杯壺、17は無蓋高杯の身の部分である。18は長頸壺である。19は平瓶の可能性がある破片である。20は土師器皿で糸切のものである。21は緑釉陶器で壺あるいは瓶類の体部である。22は体部に波状文のある陶器であるが、産地

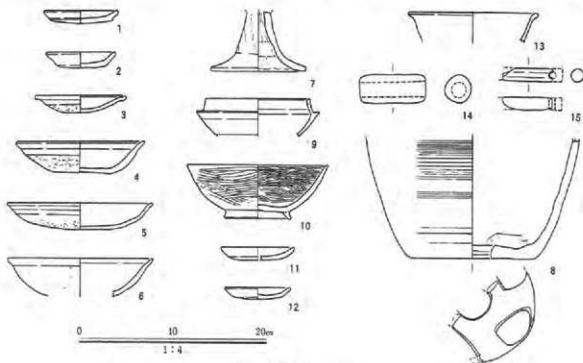


図5 各層出土の遺物(1)

第5・4層: 1〜15

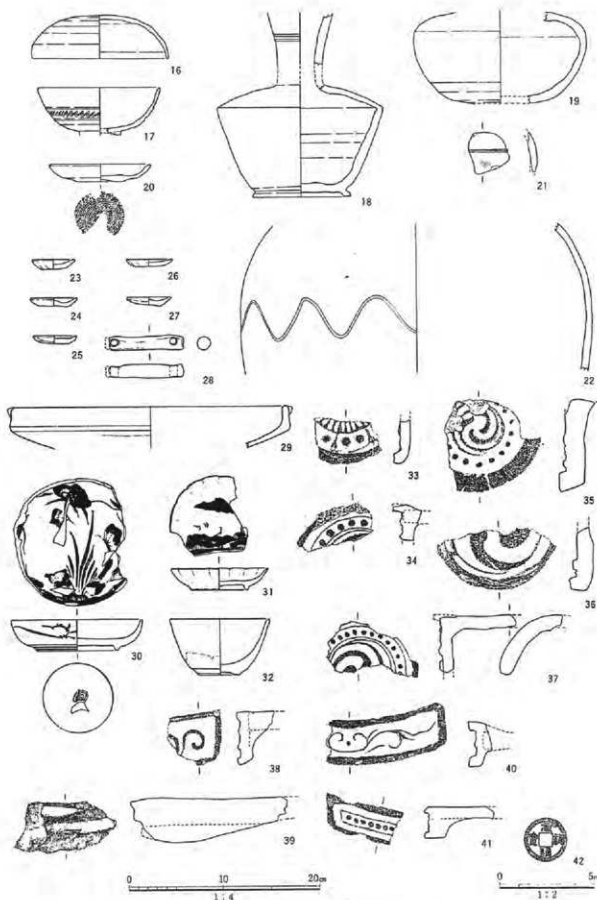


図6 各層出土の遺物(2)

第3・2層:16~22、33~36、38~41、第1層:23~32、37、42

を明らかにできていない。

第1層出土遺物(図6)

第1層からは近世陶磁器・土師質土器・瓦などが出土している。23~27・29は土師質土器、28は土師質の土甕である。23~27は口径4.5~5.0cm程度の小型の皿である。29は焙烙で、D類である[難波1992・積山1994]。30・31は肥前磁器で18~19世紀代の皿である。32は肥前陶器で17世紀代のものであろう。33~37は軒丸瓦、38~41は軒平瓦である。42は銅銭である。

ii) 遺構と出土遺物

a. 遺構の概要(図7)

調査の結果、各調査区では多数の遺構が検出された。検出作業は第4層・5層および第6層の基底面、すなわち地山上面で行ったものである。遺構の時期区分については、遺構から出土した遺物の年代によったが、少量の遺物しか出土しなかった遺構については、他の遺構と埋土の特徴を比較して推測したものがある。

全体の分布では、第1調査区の東部および第2調査区の南半を中心に柱穴が多数検出され、100基をこえる数がある。その中にはSB01~05として建物として組み合う関係が明らかにできたものがある。また、第1調査区の中央から西部、第2調査区にかけては溝状あるいは不定型な落込みSX02~06があり、いずれも中世に属するものである。第1調査区の西端である、西へと下る傾斜から西の地点においては、近世あるいは近代とみられる落込みが認められているのみである。

b. 各時期の遺構と遺物(図7~12)

以下では検出された遺構のおもなものについて、時期を古墳時代から古代の遺構、中世・近世に大別して示し、遺物についても合わせて示していく。

古墳時代から古代の遺構と遺物(図7~9)

掘立柱建物SB01~05および多数のピットがある。このうち、SB04は出土遺物等から古墳時代に属する可能性があり、SB01~03・05についてはおおむね古代と考えられる。方位は前者がN22°Eに対し、後者はN8~10°Eにまとまっている。

SB04(図7・8) 第2調査区中央で認められた建物である。南北3.92m(2間)、東西1.70m以上(1間以上)の建物で総柱建物と考えられる。方位はN22°Eであり、他の建物より北で東に振れている。柱穴からの出土遺物には土師器・須恵器がある。図示できるものがないが、須恵器には無蓋高杯などがあり、古代に降るものは出土していない。他の建物に先行する可能性が考えられる。

SB01(図7・8) 第1調査区の東部で検出された。東西3.56m(2間)の建物である。南北方向は調査区外に延びると考えられた。方位はN8°Eである。土師器・須恵器が少量出土し、7世紀代の可能性がある。時期は不詳ながら瓦の細片もあるため、古代のいずれかの時期の可能性もある。

SB02(図7・8) SB01と重複するように位置している建物である。東西4.20m(3間)かで調査区北端にあるピットが組む可能性があるため、北へ延びると推測した。SB02と同じような位置にあり、建替えの可能性もあろう。方位はN9°Eである。埋土からは土師器や須恵器が出土している。須恵器には長脚で2段透孔をもつ高杯脚部52や杯身などがあり、6世紀代から7世紀代のものが含まれ

ている。ただし量は少なく、詳細は明らかではない。

SB03(図7・8) SB02・03の西に位置する建物である。東西2.92m(2間)で、南北方向の展開は明らかにできなかった。方位はN8°Eである。埋土からは土師器・須恵器・瓦が出土している。須恵器には杯・杯蓋・高杯などがある。43~46は杯身で、47・48は無蓋高杯と推測した。49・50は高杯の脚部である。51は軒丸瓦の細片である。瓦当は薄く、須恵質の硬質な焼成である。

SB05(図7・8) 第2調査区南部で検出された建物である。東西方向への展開は明らかにできなかったが、建物と推測しておく。地形から東に延びるとみて図示している。南についても調査区外に延びる可能性がある。南北6.90m(4間)で、方位はN7°Eである。北端の柱穴でのみ底に栗石が確認された。出土遺物には土師器・須恵器・円筒埴輪などがある。53~55は須恵器で、53は杯蓋で平坦なつまみがつく。54は高杯の脚部で円形の孔が穿たれる。55は杯身でTK10型式である。56は円筒埴輪で、表面の調整で一部タテハケが認められ、V期[川西宏幸1978]のものである可能性がある。

SD01(図7) 第1調査区東部でSB01・02の東にある南北方向に延びる溝である。幅0.65~0.70m、深さ0.15~0.20mで、方位はN10°Eである。位置関係からみて建物SB01・02と関連した可能性もあろう。土師器・須恵器が出土している。59は出土した須恵器杯身で、TK10型式のものである。

SD02(図7) 第2調査区の北部で東西方向に延びる溝である。幅0.7~0.8m、深さ0.2m前後、西側では中世のSX02に切られている。埋土からは土師器や須恵器が出土している。58は須恵器杯身で、TK217型式のものであろう。

以上のほか、第1調査区の東部および第2調査区の南を中心に多数の柱穴が認められた。第1調査区東部ではSP21・22・28・42・43・48など多数があるが、組み合わせ関係はわからなかった。また、第2調査区南部ではSP103・109などが分布している(図7)。少量ではあるが、遺物の出土があり、57はSP21出土の須恵器杯蓋である。

遺構の分布では、第1調査区中央から西にかけて分布が希薄になる地点が見られ、SP68・69など

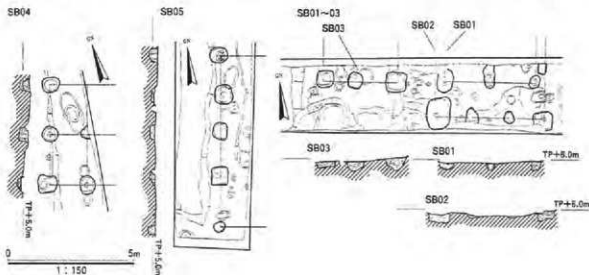


図8 SB01~05平・断面図

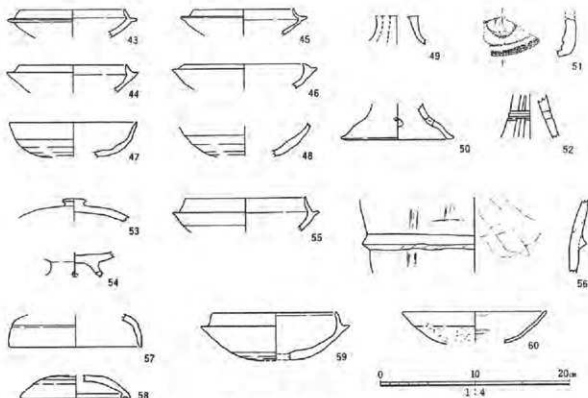


図9 遺構出土の遺物

SB02:52, SB03:43-51, SB05:53-56, SP21:57, SD01:59, SD02:58, SP40:60

散発的に見られるのみである。同調査区東部で認められた柱穴の深さからみて、同じように形成されていれば、残存する可能性があろう。そのため、現状での分布の傾向は、本来の分布の状況がある程度は反映した可能性があると考えられる。

中世の遺構と遺物

中世に属する遺構には柱穴SP23などや落込みSX02~06がある。

中世の柱穴には第1調査区東部で検出されたSP23・40や第2調査区のSP110などがある。ただし建物等としての組み合わせ関係は明らかにできなかった。SP40からは瓦器60が出土している(図9)。

SX02(図7・10) 第2調査区から第1調査区の間にかけて南北方向に延び、一部溝状を呈する落込みである。東側の肩は確認されたが、西側は不明で東西の規模は明らかではない。南端は調査区の南端近くで認められた。南北の長さ32m以上、東西幅1.4m以上である。埋土は2層に大別される。下層は褐色細粒砂質シルト~細粒砂で、上層は黄褐色シルト質細粒砂である。下層では遺物は少なく、上層でまとまって遺物が出土している。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦器などがある(図10)。61~78は土師器である。そのうち73~75は底部に糸切の痕跡があり、褐色の胎土が特徴的である。搬入品とみられ、瀬戸内あるいは紀伊のもの可能性がある。79は須恵器鉢の底部で、糸切痕が見られる。80~82は瓦器で、80・81は椀、82は皿である。80は端部内面の沈線状の凹みから大和型とみられる。83・84は軒九瓦である。数量の検討を行っていないが、土器のうち食膳具が多くを占めること、土師器で底部に糸切痕をもち搬入品とみられるものが含まれること、瓦器に大和型が含まれることが特徴として認められる。年代はおお

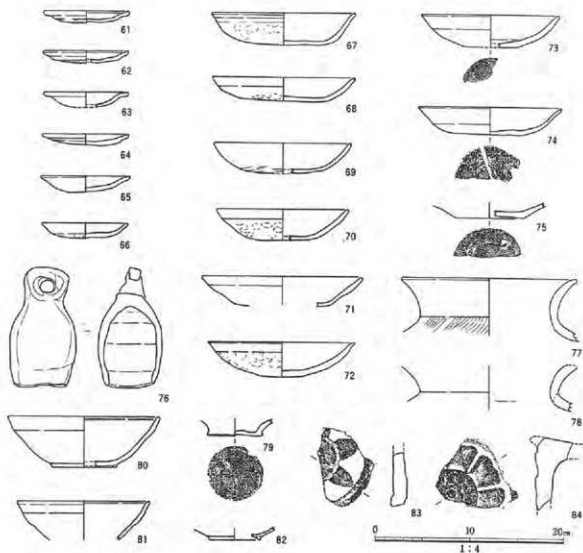


図10 SX02出土遺物

むね11～12世紀代のものとみられる。

第1調査区においては落込みSX03～06が検出されている。東から見ていくことにする。

SX03(図7・11) 第1調査区の東部で確認された落込みである。南は調査区外へとさらに延びている。検出範囲では東西3.2m、南北1.5m、深さ0.15mである。埋土は褐色シルト質細粒砂で、瓦がまとまって出土した。85・86は軒平瓦で、85は偏向唐草文の可能性があり、86は均整唐草文である。87は丸瓦で広端側が欠けるが、それほど延びないとみられる。

SX04(図7・11) SX03の西にある落込みである。南側は調査区の外へと延びており、規模は不明である。確認された範囲で東西4.4m、南北1.2m、深さ0.2～0.3mである。埋土からは瓦が多く出土している。88は土師器皿である。89は軒丸瓦で複弁八葉蓮華文の可能性があり、後述する95に類似する。90は丸瓦で、硬質な焼成で丸みをおびた端部が特徴的なものである。

SX05(図7・12) 第1調査区の中央で確認された溝状の落込みである。東から西へとゆるやかに下っており、一連のものであろう。南北とも調査区の外に延びており、全体の規模や形状は不明である。東西幅6.9m、東側の肩から深さ0.5m前後である。東西の肩とも明瞭ではあるが、落込み内の

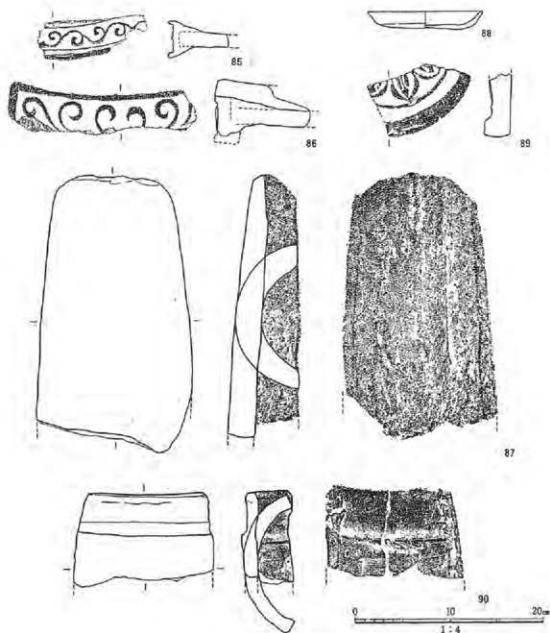


図11 SX03・04出土遺物

傾斜はゆるやかだが凹凸があり、排水などを目的とした溝ではないとみられる。埋土は2層に大別される。上層は褐色細粒砂質シルト～細粒砂からなる水成堆積層であり、下層は黄褐～褐色粘土～粘土質シルト層で、部分的に細粒砂のラミナを挟在する。上層は堆積構造が変形するところがあるが、ともに水成堆積である。埋土からは瓦や瓦器の細片などが出土している。91は左巻巴文の軒丸瓦で、尾は長く延びる。92～94は連珠文軒平瓦で、瓦当面近くまで平瓦を差込んで接合する点で共通する。

SX06(図7・12) 第1調査区の西よりで検出された落込みである。不定形で、検出された範囲では東西幅6.0m、南北3.0mである。埋土からは土師器・須恵器・瓦器・瓦などが出土している。95は軒丸瓦である。複弁八葉蓮華文で、内区の珠点は不明瞭なものである。同范の確認はできていないが、類似する文様のものが荘厳浄土寺境内遺跡で出土している【大阪市文化財協会2004 a】。96は唐草文軒平瓦である。97は全幅のわかる平瓦で、凹面側にはコビキ痕跡が残り、凸面側には縄タキが見ら

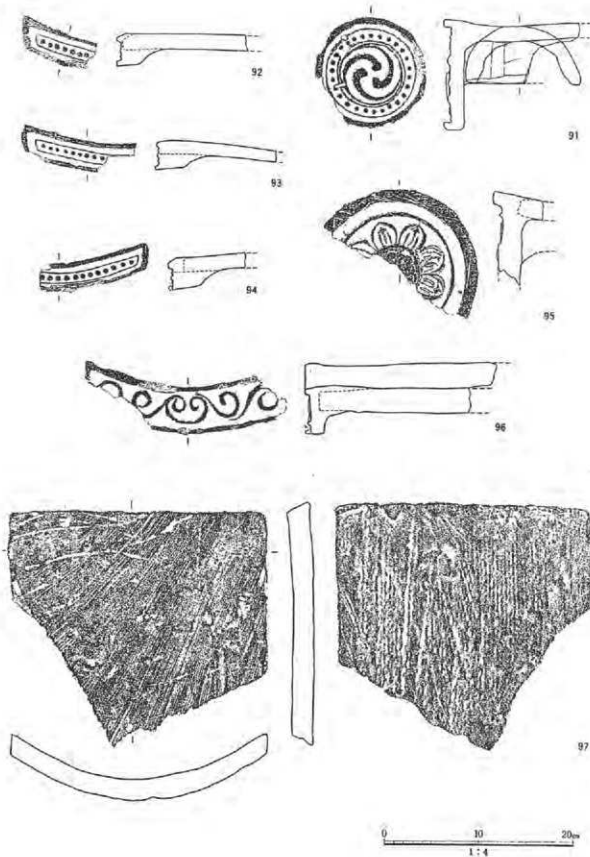


图12 SX05·06出土遗物

れる。幅27.2cmである。

近世の遺構と遺物

近世に属する遺構については、他の遺構と同様に地山上面で確認されたもののほか、平面的な調査は行わなかったが、断面の状況や掘下げ途中の状況から認められたものがある。おもなものに柱穴・廃棄土壌・溝状の落込みのほか、整地地業と推定される盛土が壁面で見られた。

柱穴SP33ほか(図7) 柱穴には第1調査区で認められたSP33などがある。底に平瓦を敷き礎盤としていたものがあつた。

廃棄土壌SX08~10(図4) おもに瓦類を捨てたとみられる土壌が数基認められた。平面的な調査を行うことはできなかったが、掘削時に遺物の採集を行った。

地業の状況(図4) 第2・3層については近世の遺物は確認できていない。だが、中世の遺物を含む堆積が二次的に盛土されており、近世に降る可能性が高いと考え、ここで記す。第2および第3層はともに東から西へと下る傾斜が壁面で観察され、盛土していったことが推測された。また、第2・第3層は第2・第3調査区では確認できていない。そのため、第1調査区でも西へと下っていく地点よりも東側に限られたものである可能性がある。傾斜面の東側では、第2・第3層の上面では平坦となっている。そのため、これらが建造物のための地業である可能性が推測された。また、傾斜面の手前では溝状の落込みSX07が南・北の壁面で認められ、南北方向に延びているとみられる。地業の一部の可能性が考えられた。これらは神宮寺に伴う整地の可能性が高いといえよう。溝状の落込みSX07からは鬼瓦98・99が出土している(図13)。近接した地点において、第1層から鬼瓦100も出土しており、合わせて図示している。

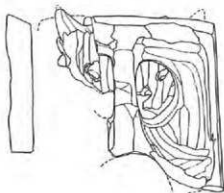
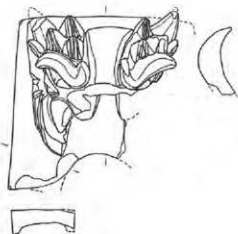
3) まとめ

今回の調査では200㎡と、大規模な調査ではなかったが、100基近い柱穴や落込みなど多数の遺構が検出され、コンテナにして25箱におよぶ遺物が出土した。これまで本格的な発掘調査の例のなかった住吉大社において発掘調査のメスが入れられたことの意義は大きい。そして発見された遺構・遺物では、古墳時代後期から古代、中世ならびに近世と各時代における状況が明らかになり、各時代の活発な土地利用が明らかになった。最後に、調査地で検出された遺構・遺物をもとに歴史の変遷を整理し、周辺での知見などもふまえて検討を加え、まとめとすることにしたい。

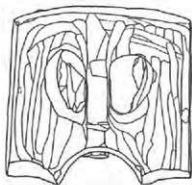
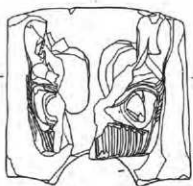
i) 調査地点で見られる歴史の変遷

今回の調査においては古墳時代中期以前にさかのぼる資料は非常に少なく、遺物量が増加するのは古墳時代後期そして飛鳥時代である。本調査地付近には古墳の存在が推測されており、調査地付近を前方後円墳の前方部に比定する見解がある[上田宏範1989]。今回の調査では、古墳時代後期以降の遺構は確認されたが、古墳そのものに関する遺構は確認できず、遺物でも円筒埴輪が1点あるのみで、古墳にかかわる状況は明らかとならなかった。

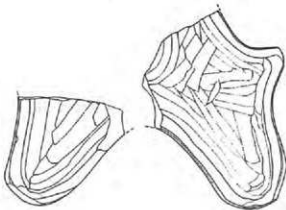
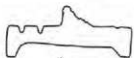
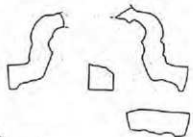
古墳時代後期から飛鳥時代以降については遺構・遺物のまとまりが見られ、SB01など掘立柱建物の確認された。また、出土遺物の上でも7世紀代のものが比較的多い傾向が見られ、その後の奈良-



98



99



100



图13 SX07·第1層出土瓦
SX07:98·99, 第1層:100

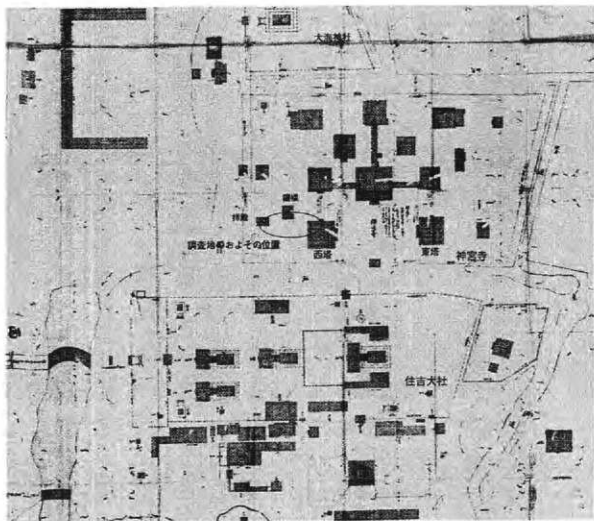


図14 調査地点と住吉大社および神宮寺の位置

(承応2(1653)年、京都府立総合資料館蔵 中井家文書「摂津国住吉社絵図」に加筆、堺市博物館1984より引用)

平安時代のものは量が少ない状況が確認された。758(天平宝字2)年に住吉大社に隣接して神宮寺が設けられたとの記録もあるが、本調査地での遺構・遺物では、古代にさかのぼり、寺院の存在を推測させる状況は確認できていない。

遺構・遺物が再び増加するのは、第5・4層やSX02で見られるように、平安時代末から鎌倉時代にかけてである。その後、時期は明確ではないが、中世のある時期にはSX03～06で確認されたように瓦が水成層で埋まっており、放置され埋積していった過程が推測された。住吉文庫館の建設時においては、中世と推測される瓦溜りと焼土層が認められている[堀田1979]。SX03～06の瓦出土状況から同じような遺構の状況を示すと考えられ、調査地一帯にそうした遺構が広がる可能性がある。調査地に見られる遺構では、確実に中世とみられる柱穴が数基あるが、寺院との直接の関連は明らかではない。また、瓦溜りを中心にまとまった量の瓦が出土している。そのことからその時期の伽藍の状況は不明だが、近辺に寺院にかかわる建造物が位置していた可能性が高く、特に住吉神宮寺の可能性をあげることができる。出土した瓦については検討が十分ではないが、中世のものが主体である。これは堀田氏による検討と同じ傾向を示している。加えて荘厳浄土寺境内遺跡出土のものと類似する文様

のものが含まれることが注意される。そのため、少なくとも鎌倉時代には寺院に係わる建造物が近辺に位置し、その後、調査地付近に瓦が廃棄されたという過程が推測される。

また、第2・3層とした、中世までの遺物を含む大規模な客土による盛土については、多くを重機で除去したこともあり、時期の下限が不明確である。ただし、こうした大規模な造成は中世に行われたとは考えにくく、近世以降が候補となると思われる。そこで神宮寺に関する史料を検討すると、豊臣秀頼による改修など、『住吉松葉大記』に近世に入ってからの造成に伴う記事が知られる[真弓常忠校訂1984]。検討は十分ではないが、そうした記事との対応関係も考慮に入れる必要があろう。また、神宮寺の伽藍との位置関係では、江戸時代の状況と照らし合わせた場合、今回の調査地には鐘樓等が位置していた可能性が高い(図14)。先述のとおり時期は明確ではないが、第2・3層の盛土層はそうした神宮寺に伴う建造物のための造成に対応する可能性がある。これらの上面では明確な遺構は認められていないが、平坦に造成されており、寺院のための整地地業がなされたことが推測される。住吉神宮寺は明治に入り、神仏分離に伴い取り壊され大半が失われた。その後、この付近は建造物等が建て込む土地としては利用されなかったようである。

ii) 周辺での調査成果および本調査地の特徴

調査成果からみた以上の過程について、周辺の調査の成果を併せて見るとどのような変遷がたどれるのだろうか。周辺の調査でも古墳時代後期あるいは飛鳥時代に遺構・遺物の量が多くなる傾向が認められ、その後再び繁栄したのは中世に入ってからと推測される。近接している荘厳浄土寺境内遺跡でも類似する過程が知られており[村元2004]、遺構・遺物の傾向としては本調査地においても共通するといえよう。

出土遺物について見ると、特徴としては搬入品とみられる遺物が含まれることがあげられる。中世の土師器に見られる糸切をもつものや、大和型瓦器碗などがある。また、土鏝や蜻蛉壺など、漁具の出土も注目される点である。同様な傾向は、住吉大社東方のSM94-4調査でも見られ[大阪市文化財協会1994]、当地域の特徴として指摘される。

今回の調査は大社境内での初めての調査ということで重要なものとなった。しかし面積は限られており、本調査地の状況が大社の状況をどれだけ反映しているのかなど、注意すべき点も多い。現状ではこの地点では古墳時代後期から飛鳥時代、そして平安時代末あるいは鎌倉時代に活況を迎え、近世にも活用されるという過程が推測される。文献史からは住吉津は難波津に先行して重要港となったと考えられており、近接する住吉大社もそれと対応して繁栄を迎えたと考えられている[新修大阪市史編纂委員会1988,ほか]。今回の調査はそれとはやや異なる変遷を示しているが、今後とも資料の検討を進め、その実態を明らかにしていくことが必要であろう。

以上、調査の知見をまとめ、周辺の調査での知見も加えて動向を整理した。一帯では小規模な調査が多いものの、少しずつではあるが考古学的な資料の蓄積が進んでいる。住吉大社および住吉津の発展の状況はその一端が垣間見られるようになったのみである。今後関連資料の検討と大社境内および一帯での資料の蓄積が期待される。

註)

- 1) 調査にかかわる作業の進行時には住吉大社より関連資料の提供をはじめ多くの御教示を得た。記して感謝の意を表したい。
- 2) 方位については現場で作成した平面図を大阪市遺跡現況図(1/500)と照らし合わせ、世界測地系へと変換して示している。
- 3) 遺物の年代・分類等については、以下をおもに参考にした。
古墳時代の須恵器[田辺昭三1981]、埴輪[川西宏幸1978]、古代の土器[古代の土器研究会1992、佐藤2000]、中世の土器類[中世土器研究会1995]、近世の土器・陶磁器類類[難波1992・積山1994]。

主要引用参考文献

- 上田宏範1989、「住吉の古墳」：『大阪市史』第1巻
- 大阪市文化財協会1983、『沢山邸建設工事に伴う住吉旧境内遺跡発掘調査(SM83-2)略報』
- 1988、『葦分邸新設工事に伴う住吉遺跡発掘調査(SM88-4)略報』
- 1989、『木下邸建設に伴う住吉遺跡発掘調査(SM89-2)略報』
- 1994、『福井正純氏による建設工事に伴う住吉大社境内遺跡発掘調査(SM94-4)略報』
- 1996、『岡本邸建築工事に伴う住吉大社境内遺跡発掘調査(SM96-5)略報』
- 1998、『南住吉遺跡発掘調査報告』I
- 2002、『南住吉遺跡発掘調査報告』II
- 2004a、『荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査報告』
- 2004b、『南住吉遺跡発掘調査報告』III
- 2005、『住吉大社旧境内遺跡発掘調査(SM04-1)報告書』
- 川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻2号
- 古代の土器研究会編1992、『都城の土器集成』
- 堺市博物館1984、『住吉大社—歌枕の世界—』
- 新修大阪市史編纂委員会編1988、『新修大阪市史』第1巻
- 住吉大社編2002、『住吉大社』 学生社
- 佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相と史的背景」：『難波宮址の研究』第11 大阪市文化財協会
- 積山洋1994、「近世陶磁器の諸様相」：『第6回関西近世考古学研究会大会発表要旨』
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店
- 中世土器研究会編1995、『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 難波洋三1992、「大坂出土の埴輪」：『難波宮址の研究』第9 大阪市文化財協会
- 藤沢一夫1998、『摂津国津守寺巧』：『大阪の歴史と文化財』創刊号
- 藤森榮一1967、『かもしかみち以後』 学生社
- 堀田啓一1979、「住吉大社周辺の考古学散歩(2)」：『すみのえ』153
- 真弓常忠校訂1984、『住吉松葉大記』 皇学館大学出版部
- 村元健一2004、「荘厳浄土寺の歴史と周辺遺跡の消長」：『荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査報告』 大阪市文化財協会

地山上面検出状況
(1区、東から)



地山上面検出状況細部
(1区、南東から)



地山上面検出状況
(2区、南西から)



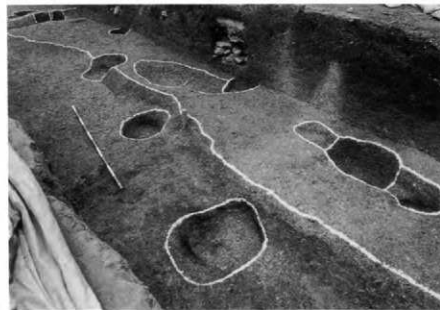
SB01・02完掘状況
(南東から)



SB03完掘状況
(南東から)



SB04完掘状況
(南西から)



SX02およびSB05完掘状況
(南から)



SX03瓦出土状況
(南東から)



SX07鬼瓦出土状況
(北から)



SX02出土遺物



SX05・06出土軒瓦



SX07・第1層出土鬼瓦



山之内遺跡発掘調査(YM05-2)報告書

調査箇所	大阪市住吉区杉本3丁目3-138
調査面積	約210㎡
調査期間	平成17年11月28日～平成17年12月13日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、市川創、小倉徹也

1)調査に至る経緯と経過

調査地は大阪市立大学構内に位置し、山之内遺跡の東地区に属する。周辺ではこれまで比較的多くの調査が行われている(図1)。これらの成果を概観すると、まず調査地北東のYM91-3・91-12・92-9・93-12・94-26次の各調査では、主として旧石器～縄文時代の遺物を検出した。次に東方を見ると、YM87-40・88-45次調査では古墳時代後期のほか、中世末に位置づけられる遺構が検出されており、南方のYM86-43・88-33次調査では弥生時代中期の方形周溝墓群が発見されている。また西方でも、YM84-46次調査において7世紀末を中心とする集落が検出されている[大阪市文化財協会1998]。そのほか、遊離資料がほとんどであるとはいえ、これらの調査で炉壁・スラグといった铸造関連の遺物が発見されていることも見逃すことができない。このように、調査地周辺では各時代の遺構・遺物が発見されており、時代によって特色ある土地利用がなされてきたことがわかる。

当地において建設工事が計画されたため、2005(平成17)年10月17日に試掘調査が実施された。その結果、古代の須臾器を含む包含層および遺構状の落込みが検出されたため、本調査を実施することとなった。

調査は2005(平成17)年11月28日より開始し、まず重機によって後述する第2層の層中まで掘削した。重機による掘削ののちは、すべての掘削作業を人力による。その過程で、通気、遺構の検出作業および記録作業を行った。以上の過程を経て、12月13日には機材類の撤収等を含め現地における作業をすべて完了した。

本報告の図面で使用した方位は座標北を示す。座標値については、現場で行った測量成果をもとに世界測地系に基づく座標値を求めた。

水準についてはTP値を使用する。

2)調査の結果

i)層序(図3)

本調査地の地層について、現代整地層(第0層)以下を第1層から第3層に区分した。

第1層: 灰褐色礫混り細粒砂からなる近～現代の作土層である。ほぼ調査区全域に分布しており、層厚は最大で20cmある。上面には畝間および畝と考えられる凹凸があり、畑の作土に伴うものであろう。

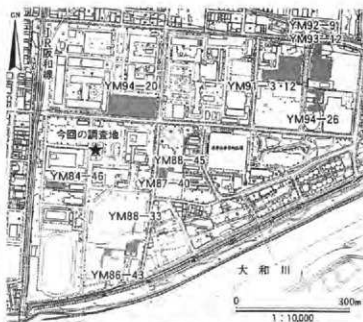


図1 調査地の位置



図2 調査区的位置

第2層：灰黄色を呈する礫混りの細粒砂からなる近世の作土層である。南西端を除く調査区全域に分布し、層厚は10cmである。本層には鉄分が顕著に沈着しており、畦畔など直接的な遺構を検出することはできなかったが、水田耕作が行われていた可能性が高い。本層の形成時期を示す遺物は出土しなかったが、後述するSX01を覆うことから19世紀以降のものである。

第3層：明黄褐色～オリーブ褐色礫・砂混りシルト～シルト質粘土からなる。本調査地のいわゆる地山層である。調査地北半では礫・砂を含み粗粒であり、南半に向かうにつれ細粒化する。最高所でのレベルはTP+11.2mであった。

ii) 遺構と遺物(図4)

遺構検出作業は第3層上面において行ったが、調査区北半と南半で著しく異なった状況を呈していた。すなわち、調査区北

半では比較的良好に第3層が残存していたのに対し、南半では近世の土取り跡SX01によってその上部が大きく削平されていた。このため、北半では古代に遡ると思われる遺構が散漫に分布する状況が認められたが、南半では上記のSX01のために先行するほとんどの遺構が失われたようである。

以下では、これら第3層上面で検出した遺構について、その種類ごとに説明を加える。

a. 柱穴

調査区の北半でSP01～04の4基、南半では辛うじて削平を免れたSP05～07の3基を検出した。明確に建物として復元できるものはないが、SP05・06については柱穴の大きさ・掘削深度・埋土の類似性などから、組合う可能性がある。柱穴の時期については、時期決定可能な出土遺物がなく不明であるが、埋土の層相の類似から、後述する土壌とあまり時期差がないものとする。

b. 土壌

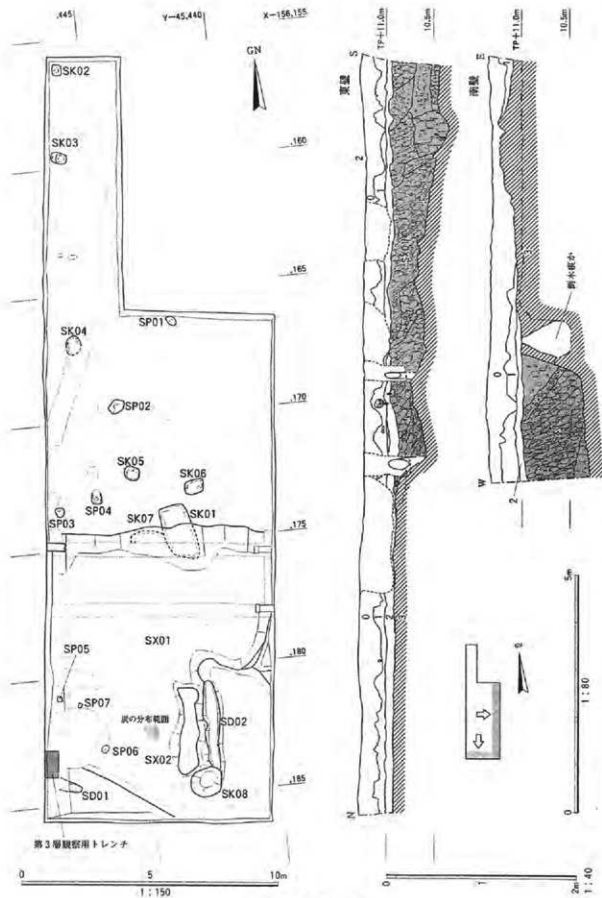


図3 調査区平・断面

調査区北半で7基、南半で1基の計8基を検出した。SK02～07からは時期を決定することのできる遺物は出土していないが、埋土の色調や粒径が類似することから、基本的にはSK01・08とあまり時期差がなく、いずれも古代に属するものと考えられる。

SK01(図3・4) 調査区中央部で検出したが、遺構南半はSX01および埋設管工事に伴って大きく

失われていた。南北2.1m、東西1.2mのややいびつな長方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.4mであった。埋土はいずれも細粒砂を主体とし、第3層に由来する偽礫を含むという点で共通するが、偽礫の大きさによって4層と1～3層を大別できる。また、最上層(1層)には炭が含まれていた。

出土した遺物はほとんどが細片であったが、土師器杯C1、高杯2、甕3、須恵器杯H身4、杯G蓋5、平瓶6を図示した。土師器杯Cは口縁端部がやや内側に屈曲する形態で、内面にはごく浅い暗文を施す。また、内面にはススが附着している。高杯の脚部2は内面にシボリの後にハケ調整を施している。杯部内面および脚部外面は二次的に被熱している。甕3は口縁部内面に横方向のハケ調整を行い、口縁端部を内側にやや肥厚させる。須

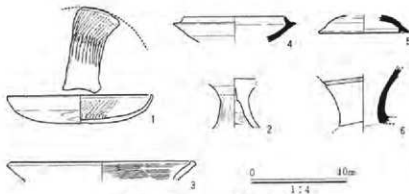
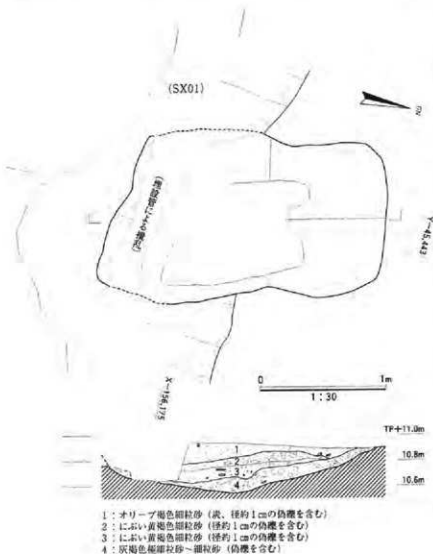


図4 SK01平・断面および出土遺物

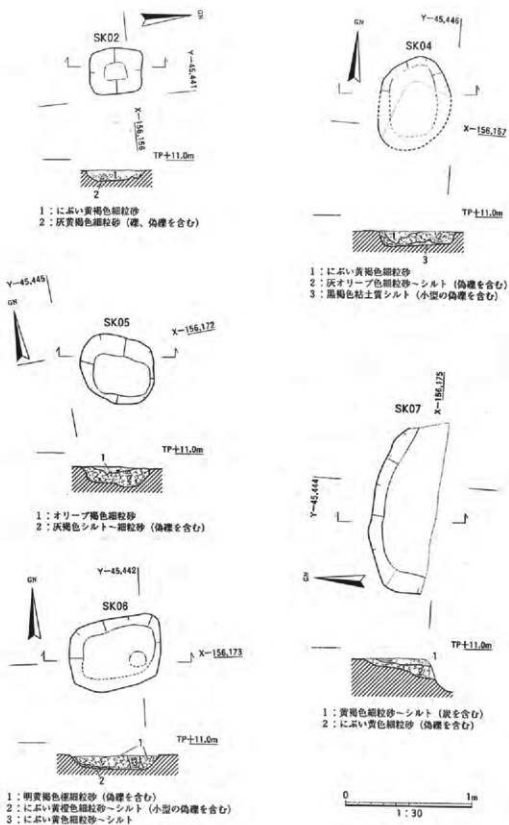


図5 土坑平・断面

須恵器杯H身4、杯G蓋5は、2点とも外面にヘラケズリが施されている。平瓶6は口頸部に1条の沈線が巡る。

これらSK01から出土した遺物は、やや古相を呈する須恵器杯H身4がある一方で、土師器杯Cは浅い形態をとり、新しい様相を示している。したがって、SK01の年代は7世紀後半～8世紀初頭に属すると考える。

SK02(図3・5) 調査区北西端で検出した。1辺0.4mを測る方形の土壌である。検出面からの深さは0.1mであった。

SK03(図3) 調査区北部で検出した。長辺0.5m、短辺0.3mの楕円形を呈する土壌である。検出面からの深さは0.1mであった。

SK04(図3・5) 調査区西部で検出した、直径0.6mのいびつな円形を呈する土壌である。検出面からの深さは0.1m強であった。埋土には最上層(1層)を除き偽礫が含まれる。また、底面はほぼ平らであった。

SK05(図3・5) 調査区中央部で検出した。直径0.6m、検出面からの深さは0.1m強である。埋土下部(2層)には偽礫が含まれていた。

SK06(図3・5) 調査区中央部で検出した。長辺0.7m、短辺0.6mの長方形を呈する土壌である。埋土には偽礫が含まれるほか、直径0.1mの円形を呈する土層が観察できた。大型かつ浅いため土壌としたが、あるいは柱穴である可能性もあろう。

SK07(図3・5) 調査区中央部で検出した。上部はSX01によって削平され、東端はSK01によって切られている。東西1.3m以上、南北0.5m以上の土壌である。検出面からの深さは0.1m強であった。埋土下半(2層)は加工時に生じた第3層由来の偽礫を含み、埋土上半(1層)は炭を含んでいる。

SK08・SD02・SX02(図3・6) SX01によって大きく削平された調査区南半にあって、SK08・SD02の部分のみが削平を免れ高く残っていた。また、SX02はこのSK08・SD02が掘削された際の揚土と思われ、SX01を構成する土層とは異なっている。これら3遺構については、関連性が高いと思われるため一括して記述することとする。

SK08は直径1.2mの円形を呈する土壌で、検出面からの深さは最大で0.2mあった。埋土は下部に第3層由来の偽礫を含む極細粒砂～シルト(2層)があり、上部はわずかに炭を含む細粒砂(1層)で埋る。出土した遺物はいずれも細片で、図示しうる個体はなかった。

SD02はSK08に接続する溝である。長さ3.6m以上、幅0.5m、検出面からの深さは最大で0.2mあった。埋土下部には加工時に生じた第3層由来の偽礫を含む細粒砂(2層)がある。埋土から須恵器杯Bの底部7が出土した。

SX02はSD02の西側に形成されている。長さ3.8m、幅1.4m、高さは最大で0.4mある。偽礫で構成される数単位の土層からなる。最下部には第3層に由来する偽礫で構成される土層(6層)があり、この上をSD02の埋土を主体とする偽礫で構成される層準(4層)が覆う。4層はいくつかの単位に区分できたが、いずれも西側が低くなる堆積状況を示していた。さらにその上部は、第2層に由来する偽礫を多く含む3層によって覆われている。SX02からは須恵器杯蓋8が出土した。

c. 溝

SD01(図3) 調査区南西端で検出した。側溝掘削時に破壊してしまったが、幅0.4mの溝である。長さは1.4m以上、検出面からの深さは0.1m以下であった。遺物が出土せず時期は不詳であるが、埋土は中～粗粒砂を主体とし、他の遺構とは層相を異にする。

d. 土取り跡

SX01(図3) 今回の調査では、調査区南半のほぼ全域にわたって、大規模な地下げが行われていた。この地下げの範囲およびこれを埋める堆積物をSX01と呼称する。

調査区東壁を観察すると(図3)、SX01は南方向へと下る偽礫によって充填されており、かつこの偽礫の堆積にはいくつかの単位が認められた。この状況はSX01全域にわたって同様であり、SX01が形成される際の地下げが北から南へと一度に行われたことが推定できる。また、偽礫は第2層およびかつて存在したであろう古土壌に由来すると思われるものを主体とし、地山層である第3層由来のものは、掘削された総量に対し相対的に少量である。SX01の底面は東壁付近を除きほぼ平らであった。そのほか、第3層の直上では炭が面的に分布する個所があった。

SX01には多時期にわたる遺物が多く含まれていた(図7)。そのうちの代表的なものについて時期を追ってみると、まず旧石器時代の遺物として、矩形剥片を素材とするサヌカイト製のナイフ形石器

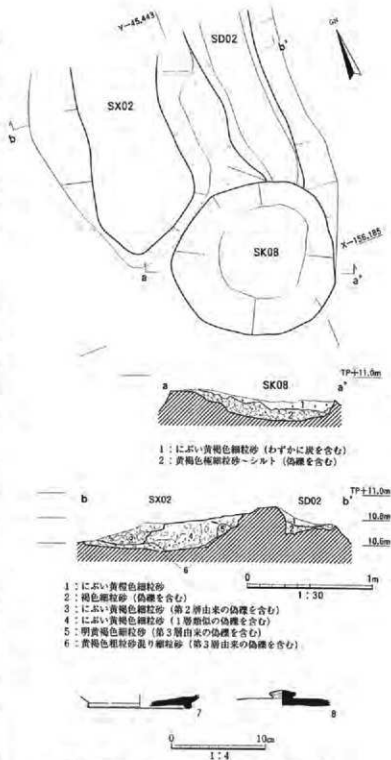


図6 SK08・SD02・SX02平・断面および出土遺物 SD02(7)、SX02(8)

21がある。この後は空隙があり、次に遺物が認められるのは古墳時代後期のもので、TK209型式に位置づけられる須恵器杯蓋16がある。その後はTK217型式に位置づけられる須恵器杯蓋17があり、それ以降、8世紀中葉頃までおおよそ継続して各時期の遺物が出土している(9-14、18)。また古代の遺物として、通常の土器類のほかに須恵器イダコ壺15、平瓦20が含まれている点は注目できる。この後の時代の遺物としては、明確に平安～室町時代に属するものはなく、再び認められるのは江戸時代に入ってからである。ここでは肥前陶器碗19を図示したが、瀬戸美濃産と思われる磁器片も出土しているため、SX01の年代は19世紀以降に下る。

このSX01の性格についてであるが、まず地山層である第3層の岩相についてふれておく。第3層は、先述のように調査区北半では砂礫を含む粗い堆積物であるが、南半ではシルト質粘土へと細粒化している。また、第3層の垂直方向での変化を見ると、地下げが行われていない調査区南西端で断制りを行って観察したところ、残存する最上部のTP+11.1mではシルト質粘土からなるが、下方へと

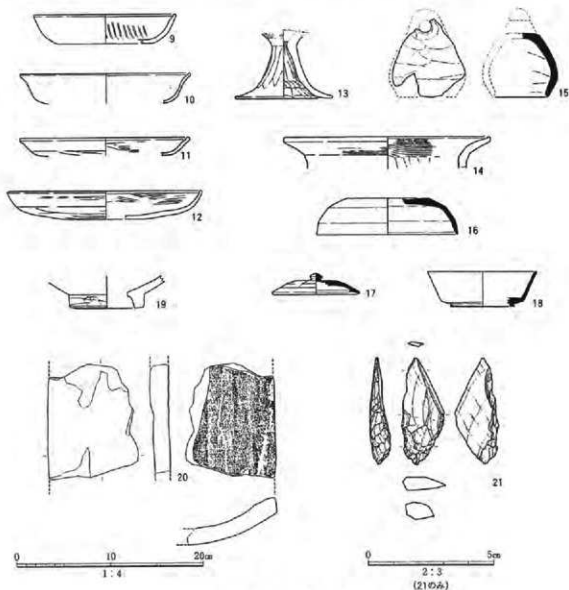


図7 SX01出土遺物

わずかに粗粒化し、SX01の底面レベルであるTP+10.4mでは極細～細粒砂であった。また、SX01埋土中にはこの第2層に類似した偽礫が含まれ、第2層が分布せず第3層が高く残る、すなわち耕地化されていない調査区南西部には地下げが及んでいない。

以上の知見を総合すると、SX01は第3層上部の細粒な堆積物を対象とした土取りによって形成されたものと考えることが妥当だろう。さらに、第2層の分布範囲とSX01の南限が一致することから、土取りは水田を対象として農閑期に行われた可能性が高いと考える。SK08・SD02が上部を掘削されながら遺存したことも、遺構埋土が土取りの対象とは異なる土質であったため、掘削されずに残された可能性がある。

3)まとめ

以上のように、今回の調査では、主として古代の遺構および近世の土取り跡を検出した。その成果の意義について、以下にまとめておく。

まず古墳時代から古代にいたる集落については、山之内遺跡の西地区を中心として展開することが指摘されている[平田洋司1999]、調査地東方のYM87-40次調査などでも遺構が検出されている。今回は明確な建物などを検出することはできなかったが、散村的な状況ながらも広域に展開するという該期の集落のありかたについて知見を加えたものと評価できよう。

また、19世紀以降の土取り跡SX01については、南北12m以上、東西9m以上の大規模なものである。大阪市内で検出される土取り穴は、一辺5m以内の方形土壕群として検出される場合が多く、今回検出した大規模な土取りを行った主体などについて、今後その解明が必要となる。

また、SX01に含まれる遺物には、瓦・スラグなど特色ある遺物が含まれていた。古代の瓦については当調査区よりも西で多く見つかっており、遠里小野遺跡から山之内遺跡の北西部に瓦葺きの施設があった可能性が指摘されている[平田1999]。今回出土した瓦との関係が注目されることである。またスラグについては、山之内遺跡一帯に铸造関連遺物の分布が広がっているほか、炉跡も検出されている[松本啓子1991・1992]。我孫子・荊田なども含めた住吉区一帯に铸造遺構・遺物が分布することについては、低位段丘構成層最上部の粘土が溶解炉・羽口・鋳型などの製作に適していることが主要な要因と考えられている[村元健一2004]。文献史料からも、江戸時代に操業した住友銅吹所における原料粘土が当地周辺に求められていたことが知られる[養賀七三男1998]。今回検出した大規模な土取り跡についても、当地がこういった良質の粘土の産地であったという脈絡の中で理解することができよう。

このように、今回の調査では断片的とはいえ各時代の成果が得られた。冒頭でもふれたように、当地では各時代について特色ある土地利用がなされており、今後調査が進展することによって、より一層の成果が期待される。

[引用・参考文献]

- 大阪市文化財協会1998、『山之内遺跡発掘調査報告』
- 業賀七三男1998、「分析およびその検討 7 土道具」：大阪市文化財協会編『住友銅吹所跡発掘調査報告』、pp.4
32-438
- 平田洋司1999、「山之内遺跡の古墳時代以降の集落」：大阪市文化財協会編『山之内遺跡発掘調査報告』II、pp.7
4-78
- 松本啓子1991、「宮口邸新築に伴う山之内遺跡発掘調査(YM90-27)」：『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.127-138
- 1992、「西田末吉氏による建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM91-8)」：『平成3年度大阪市内埋
蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.71-78
- 村元健一2004、「刈田の鋳物師と山之内遺跡の鋳造関連遺構」：大阪市文化財協会編『刈田4丁目所在遺跡発掘調
査報告』、pp.54-58

調査区全景
(南から)



東壁・南壁断面
(北北西から)



SK01検出状況
(東から)



VII 平 野 区

加美遺跡発掘調査(KM05-1)報告書

調査箇所	大阪市平野区加美南1丁目9 加美南部小学校
調査面積	約100㎡
調査期間	平成17年4月18日～平成17年4月28日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、杉本厚典

1)調査に至る経緯と経過

加美遺跡は大阪市平野区加美東、加美南、鞍作にかけて広がる主に弥生時代から奈良時代にかけての複合遺跡である。本調査地は加美遺跡の南西部に位置する。調査地周辺ではKM89-13次調査が行われ、TP+5.5mで16世紀前半の遺構・遺物が出土している[大阪市文化財協会1990]。

今回の調査地は加美南部小学校の校庭の北側に位置する。平成17年3月7日に試掘を行ったところ、現地表下1.15m以下に近世・近代以前の地層が良好に遺存しており、さらに1.3m付近で古代の地層が確認された。これらの地層の堆積状況と周辺におけるこれまでの調査成果から、調査地およびその周辺において古墳時代から中世にかけての遺構が分布することが想定され、本調査を実施した。

本調査は4月18日に調査区の仮囲い、障害物の撤去工事を行い、砂場の西と南側にそれぞれ26㎡、75㎡の調査区を設け、それぞれ西調査区、東調査区として調査を開始した。西調査区での調査を完了後、東調査区の調査を行い、4月28日に埋め戻しを含む現地での作業を終了した。

東調査区を調査の水準値にはTP値を、方位は磁北を使用した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4、図版)

現代の盛土層より下に第0～8層を確認した。

第0層：層厚16～28cmの黄褐色シルト層であり、調査区全体に分布していた。本層は近代の整地層である。



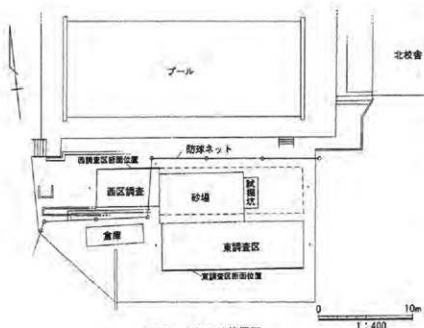


図2 トレンチ位置図

第1層：層厚20cmの灰オリリーブ色細粒砂で構成される作土層で、調査区全体に分布していた。本層中から土製の芥子面子1が出土した。

第2層：層厚30cmの灰黄褐色中～細粒砂層であり、調査区全体に分布していた。本層下面で多数の鋤溝を検出した。層中や鋤溝埋土内から伊万里焼碗や土師器皿などが出土しており、近世の作土層と判断される。

第3層：層厚18cmの灰色黄褐色中粒砂混り細粒砂で構成される作土層である。図示していないが、本層中から瓦器椀細片や瓦質釜脚部が出土しており、中世の地層と判断される。

第4層：層厚30cmの灰オリリーブ色シルトで構成される作土層である。東区では第4層上面に中粒砂で構成される水成層が堆積しており、上面で畦畔と踏込みを検出した。本層上部から土師器ミニチュア壺2、土師器甕6が出土した。これらの遺物や第3層の年代から第4層は8～12世紀頃の作土層と判断される。

第5層：層厚40cmの青灰色粗～細粒砂層である。東に向けて粗粒化しており、また層の上面も西側比べて15cmほど高くなっていた。本層下部はラミナが顕著な水成層であるが、上部は暗色化しており、固くしまっていた。第4層基底面で検出した遺構は、本来この古土壌の上面に設けられていたとみられる。第5層と第4層の層境で古代のものとみられる平瓦8が出土した。凸面に縄叩き痕、

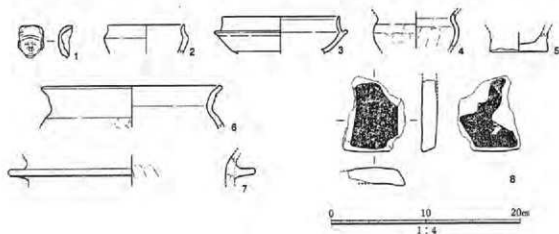


図3 各層出土遺物

東調査区1層(1)、西調査区4層(2・6)、東調査区5層(3・5・7・8)

東調査区南壁

西調査区北壁

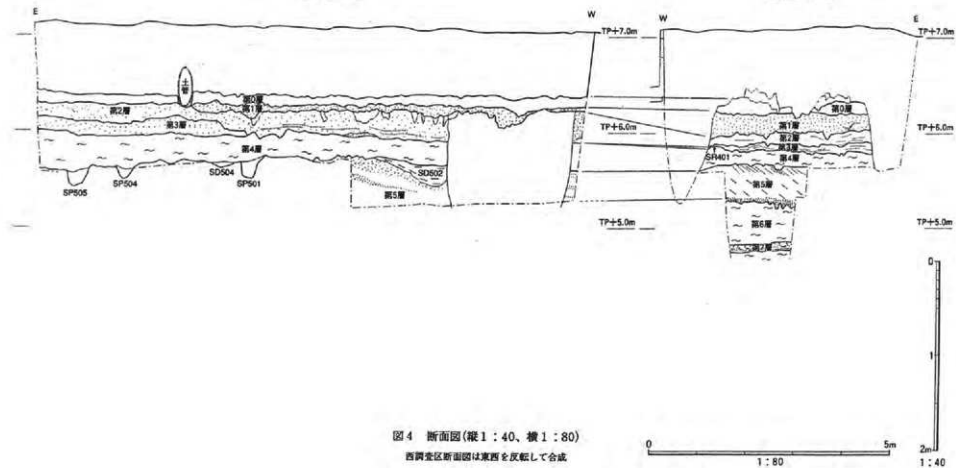


図4 断面図(縦1:40、横1:80)

西調査区断面図は東西を反転して合成

0 5m
1:40

凹面に布目痕が認められる。

本層中よりTK10型式とみられる須恵器杯身3、古墳時代前期の小型丸底壺4、弥生時代後期前葉の甕底部5、古墳時代後期から飛鳥時代の羽釜7が出土した。3・7は第5層上部から出土しており、河成堆積が終息し安定に向かった時期が6～7世紀であったことを示す。

第6層：西調査区で確認した層厚50cmのオリーブ黒色粘土層である。上面には跡込みが認められ、層中には炭酸鉄のノジュールが認められた。水はけの悪い湿地における堆積とみられる。

第7層：西調査区で確認した層厚8cmの黒色極細粒砂層である。本層上部には植物根の痕跡が顕著であり、その下に腐蝕物のラミナが9枚認められた。

第8層：西調査区TP+4.8m以下で確認した灰色粘土層である。

加美遺跡では遺跡中～北部の調査成果に基づいて基本層序が明らかにされており【小倉徹也・趙哲済2001】、上述した第1～4層がそれぞれ加美1～4層に、第5層が加美5A層、第6～8層が加美5B層に対比される。

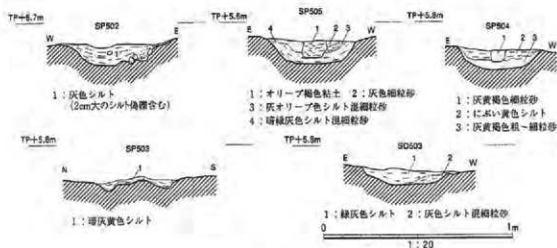
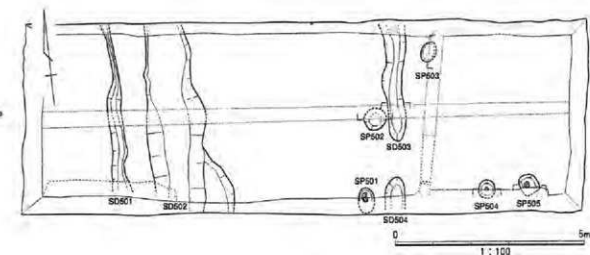


図5 第4層基底面検出遺構平・断面図

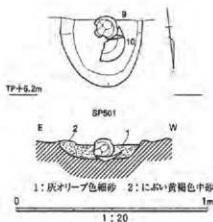


図6 第4層基底面検出遺構SP501平・断面図

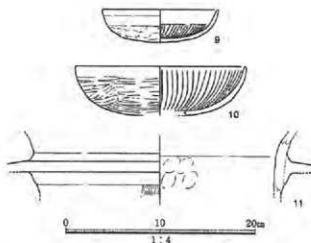


図7 第4層基底面検出遺構出土遺物(1':4)
SP501(9・10)、SD503(11)

ii) 遺構と遺物

a) 第4層基底面検出遺構(図5～7、図版)

東区で溝4条とピット5個を検出した。西区は遺構が認められなかったが、第5層と4層の層境から須恵器甕の破片が出土した。

SD501 幅0.35m、深さ0.10mの溝である。埋土は細砂混シルトであった。

SD502 幅1.60m、深さ0.20～0.30mの溝である。埋土は灰色細砂～シルトよりなる水成層で、上位に向って細粒化していた。溝斜面から底にかけて部分的に踏み込みが認められた。

SD503 幅0.46m、深さ0.10mの溝である。埋土上部から羽釜の破片(図7、11)が出土した。

SD504 幅0.50m、深さ0.10mの溝である。SD503の南に位置し、さらに南に続くとみられる。

SP501 SD503の西側に位置し、直径0.42m、深さ0.08mのピットである。穴の底に接して土師器杯が2個出土した(図7、9・10)。

9は直径12.4cm、器高3.4cmで底部外面にはエビオサエの痕跡が認められる。一方、10は9よりも一回り大きく直径18.0cm、器高5.2cmであり、外面に横方向のナデを施す。いずれも精良な胎土であり、内面に暗文が密に施されている。口縁端部の形状、口径が器高に比べて大きいことから、飛鳥Ⅱに属する。

SP502 SD503の西側に位置し、直径0.47m、深さ0.10mである。柱痕跡は認められず、第5層が母材の直径2cmの偽礫が含まれていた。

SP503 直径0.42m、深さ0.4mのピットである。埋土は暗灰黄色シルトで、柱痕跡は認められなかった。

SP504 直径0.44m、深さ0.10mのピットである。掘形のはほぼ中央に直径0.08mの灰黄褐色細粒砂よりなる柱痕跡が認められた。

SP505 直径0.46m、深さ0.12mのピットである。柱痕跡は直径0.12mでオリブ褐色粘土で構成されていた。



図8 第4層上面検出遺構

以上のように第4層基底面の遺構群はSD502の東側において、柱穴や土器埋納など古代の居住域であったことを示すものが分布する傾向がうかがえる。

b) 第4層上面検出遺構(図7、図版)

SR401・402 幅0.40~0.50m、高さ0.10mの畦畔である。ほぼ東西に延びており、畦畔の間には多数の偶蹄類の踏込みを検出した。

c) 第2層下面検出遺構(図9)

SD201~206 幅0.20~0.30m、深さ0.10~0.20mの鋤溝である。いずれもほぼ東西に延びており、溝底には加工痕が認められた。

3) まとめ

今回の調査では飛鳥時代の遺構群を検出することができた。飛鳥時代の生活面は古墳時代中期以前の河成堆積層の上に拡がっており、東調査区側に居住域が形成されていた。ピットの中には柱痕跡の見られるものもあった。調査面積が限られており柱筋や柱間寸法を復元することができなかったが、これらのピットから掘立柱建物が存在していた可能性が高い。また、土器器杯2個を埋納したピットは、居住域における祭祀のありかたをうかがうための貴重な資料といえる。

これまでの調査成果によれば、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての加美遺跡北部には作土層が拡

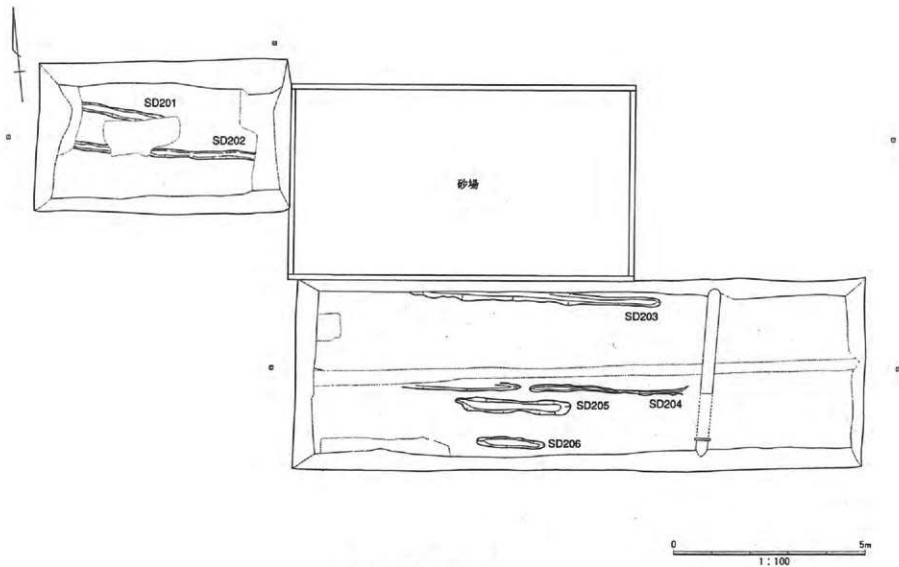


图9 第2層下面檢出遺構

がっており、広く生産域として土地利用されていたことが確認されている[大阪市文化財協会2003a・b]。また、当遺跡の東に隣接する久宝寺遺跡や亀井北遺跡でも、古墳時代後期から飛鳥時代の水田が広く分布していることが明らかにされている。しかし、古墳時代後期から飛鳥時代の居住域は、近畿自動車道建設工事に伴う久宝寺遺跡南A-D地区で井戸・小穴などが検出されているものの[大阪府教育委員会・大阪文化財センター1987a・b]、生産域の広さと比べて居住に係わる遺構は必ずしも多いとはいえない。今回の調査で、飛鳥時代の居住域が見つかったことにより、加美遺跡の古墳時代後期から飛鳥時代にかけての集落構成を復元するための手がかりが得られた。周辺調査地での綿密な調査によってさらに古墳時代から古代への集落変遷の実態が明らかになるとと思われる。

(参考文献)

大阪市文化財協会1990、『菅生邸新築工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM89-13)略報』

大阪市文化財協会2003a、『加美遺跡発掘調査報告』I

大阪市文化財協会2003b、『加美遺跡発掘調査報告』II

大阪府教育委員会・大阪文化財センター1987a、『久宝寺南(その1)』

大阪府教育委員会・大阪文化財センター1987b、『河内平野遺跡群の動態』I

小倉徹也・趙哲済2001、『大阪市加美遺跡の基本層序』；大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、pp.17-26



基本層序
(東調査区北西から)

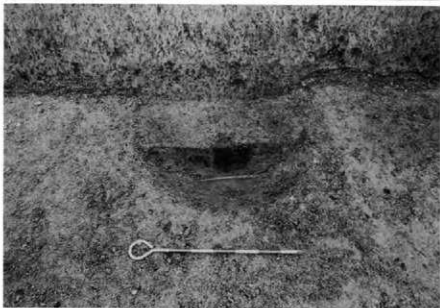


東調査区第4層基底面検出遺構(西から)

東調査区SP501
(北から)



東調査区SP505
(北から)



西調査区第4層上面
検出畦畔と踏込み
(北から)



長原遺跡発掘調査(NG05-1)報告書

調査箇所	大阪市平野区長吉長原東2丁目
調査面積	200㎡
調査期間	平成17年4月27日～平成17年6月15日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、松尾信裕、市川創

1) 調査の経緯と経過

調査地は長原遺跡の東地区に位置し、これまで調査地の西側および南側では多くの調査が実施されてきた(図1)。中でも調査区の西側は、近年行われた大規模な調査によって、弥生時代から古墳時代にかけて「出戸自然堤防」と呼称される微高地の存在が推測され[高橋工1999]、該期の遺構・遺物が密集して検出されている。

当地にて建設工事が計画されたため、2004年6月29日に試掘調査を行った。その結果、地表下1.5m以下に各時代の地層が良好に残存していることが確認されたため、面的な調査を実施することとなった。

調査区は敷地北部に設定し(図2)、2005年4月26日より現場の設営を、翌27日より重機による掘削を開始した。重機掘削は第0～4層および第7・8層に対して行い、その他の地層はすべて人力によって掘削した。途中、第5層以下の各面において適宜遺構検出作業および記録作業を行った。また重機によって第0層を掘削している際、調査区の南端で下水管を検出したため、安全確保のため当初240㎡を予定していた調査面積を200㎡に縮小した。その他、可能な限り考古学的・層位的な知見を得るため、調査の最終段階で調査区の南東端において深掘り調査を実施した。6月15日には現地における作業をすべて完了した。

なお、以下の報告で使用した指北記号は座標北を示し、座標は世界測地系に基づく。水準はTP値である。

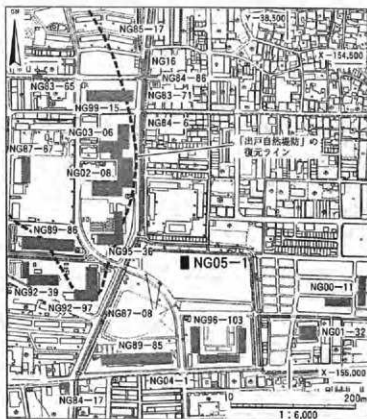


図1 調査地位置図

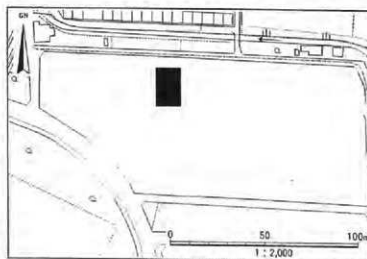


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・表1)

本調査地の地層について、現代整地層(第0層)の下部を第1層から第19層に区分した。

第1層：現代整地層の直下で確認した現代作土層である。層厚は15cmある。

第2層：粘土質シルトからなる作土層である。有機分を多く含みオリブ黒色を呈する上半を2a層、暗緑色を呈する下半を2b層とした。本層の下面には鉄分が顕著に沈着している。層厚は2a層が15～20cm、2b層が20～25cmである。江戸時代の陶磁器片が数点出土した。

第3層：暗オリブ灰色シルト質粘土からなる作土層である。上・下面ともに踏込みが顕著に観察できた。第2層との層界は明瞭であり、層厚は10cm以下である。本層から遺物は出土しなかった。

第4層：オリブ黒色粘土質シルトからなる作土層である。層厚は20cmある。本層の下半から13世紀後半以降に位置づけうる瓦器類(図4-4)が出土した。

第5層：灰オリブ色粘土質シルトからなる作土層である。層全体に鉄分が沈着し、上面には乾痕が確認できた。また、最上部には部分的に細粒砂が含まれる。上層の耕作によって擾乱を受け、畦畔など耕作に伴う遺構を検出することはできなかった。層厚は20～25cmある。本層からは時期不明の土師器細片が出土している。

第6層：暗灰黄色シルト質粘土からなる水成層である。層厚は10cmある。時期不明の土師器細片が出土した。

第7層：灰色粘土質シルトからなる水成層である。第6層と比較してやや暗色化している。層厚は

表1 NG05-1次調査の層序

調査層序	主な岩相	層厚(cm)	主な遺構と遺物	長層標準層序	時代
第0層	(盛土)	90		NG0	現代
第1層	オリブ黒色粘土質シルト(作土)	15		NG1	近・現代
第2層	a オリブ黒色粘土質シルト(作土)	15～20	近世陶磁器	NG2	近世
	b 暗緑色粘土質シルト(作土)	20～25			
第3層	暗オリブ灰色シルト質粘土(作土)	≦10		NG3か	平安～室町
第4層	オリブ黒色粘土質シルト(作土)	20	瓦器類	NG4B	
第5層	灰オリブ色粘土質シルト(作土)	20～25	土師器		奈良
第6層	暗灰黄色シルト質粘土(自然堆積)	10	土師器	NG5	
第7層	灰色粘土質シルト(自然堆積)	5～10		NG6	飛鳥
第8層	灰色粘土質シルト(自然堆積)	10～15		NG7Aii	
第9層	灰色粘土質シルト (擾乱、下面には炭酸第一鉄)	10～20		NG7B0	古墳後期
第10層	灰色シルト質粘土(自然堆積)	10～20	須恵器杯底	NG7Bii	
第11層	オリブ黒色粘土質シルト(自然堆積、 植物遺体多く含む、一部に炭を含む)	10		NG7Biii	古墳中期
第12層	灰色粘土質シルト(自然堆積)	10		NG7Biiii	
第13層	灰色粘土質シルト(作土)	5～10	↑畦畔 古式土師器	NG7Bii～	古墳前期～ 弥生後期
第14層	灰色細粒砂混り粘土質シルト(自然堆積)	5～20	弥生土器	NG8A	
第15層	灰色細粒砂混り粘土質シルト(古土壌)	18	↓土壌 弥生土器	NG8B	弥生中期～ 後期
第16層	暗緑灰色細粒砂混りシルト～ シルト質膠粒砂(自然堆積)	5～40		NG8C	
第17層	灰色粗粒砂(自然堆積)	90			
第18層	黒色粘土(植物遺体を多く含む)	30～40		NG9Aか	
第19層	オリブ灰色細～中粒砂(自然堆積)	≧20		NG9Bか	

「↑」：上面検出遺構、「↓」：下面検出遺構

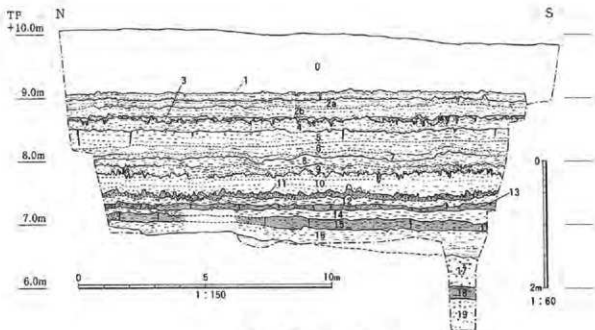


図3 調査区東断面図

5～10cmある。遺物は出土しなかった。

第8層：灰色粘土質シルトからなる水成層である。層厚は10～15cmある。

第9層：灰色粘土質シルトからなる。上・下面とも踏込み状に擾乱されており、特に下面ではそれが著しい。また、下面には炭酸第一鉄と考えられる白色粒が顕著に沈着していた。層厚は10～20cmある。本層からは時期不明の須恵器甕が出土した。

第10層：灰色シルト質粘土からなる水成層である。層厚は10～20cmある。本層の下面でTK209型式に位置づけられる須恵器杯蓋3が出土した。

第11層：オリブ黒色粘土質シルトからなり、植物遺体がラミナ状に堆積している。基本的には自然堆積層であるが、部分的に明灰白色シルト質粘土が小型の偽礫として含まれるほか、炭が含まれる部分もあった。上・下面とも擾乱されているようにみえるが、地層断面に変形構造は認められなかった。層厚は10cmある。TK216型式に位置づけられる須恵器高杯形器台2が出土した。

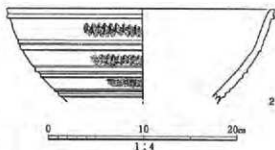
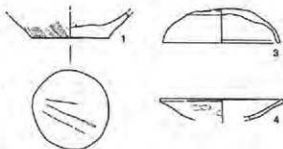


図4 各層の出土遺物

1：第15層 2：第11層 3：第10層 4：第4層

第12層：灰色粘土質シルトからなる水成層である。層厚は10cmある。

第13層：灰色粘土質シルトからなる。後述するように本層上面で水田畦畔を検出した。上面には乾痕が認められた。層厚は5～10cmである。古式土師器の細片が出土した。

第14層：灰色細粒砂混り粘土質シルトからなる。調査区の北端では第15層と取敢し分級が悪く、層厚は5cmほどであったが、南へ向うほど細粒化し、調査区南端での層厚は20cmを測る。弥生土器の体部片が出土した。

第15層：灰色細粒砂混り粘土質シルトからなる古土壌である。上面には乾痕が確認できた。調査区南側がやや低くなるとともに細粒化し、分級もよくなる。層厚は18cmである。本層の下面でSK1501を検出したほか、上面で弥生時代中期土器の底部1が出土した。

第16層：暗緑灰色を呈し、上部は細粒砂混りのシルトであるが、下部はやや粗粒化しシルト質の極細粒砂となる。やはり南へ向うほど層厚を増し、調査区の北端で5cm、南端では40cmとなる。なお、ミミズなどの環形動物によると考えられる生痕が認められたため、湿潤な環境ながら一時的にせよ離水期間があったことを推測させる。

第17層以下は調査区南東隅に設定した深掘りトレンチにおいて確認した。ただし第17層からの湧

水が激しく、岩相の十分な観察を行うことができなかった。また、このような状況であったため、水準値についても本層以下では精度が劣る。

第17層：灰色粗粒砂からなる水成層である。層厚は90cmある。

第18層：黒色粘土層である。植物遺体を多く含み、層厚は30～40cmほどである。

第19層：オリーブ灰色を呈する細～中粒砂である。層厚は20cm以上ある。

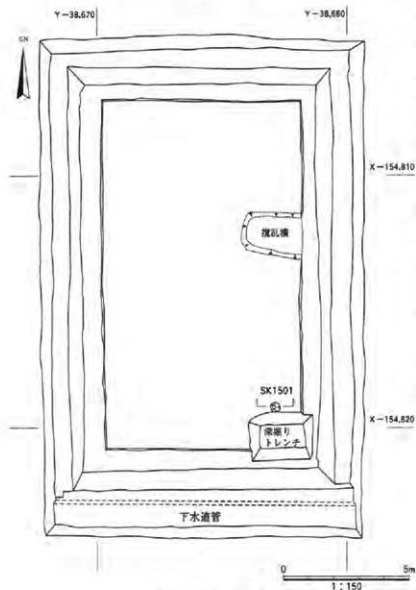


図5 第15層検出遺構



1：オリーブ黒色シルト質粘土

図6 SK1501断面図

ii) 遺構と遺物(図5~7)

第5層以下の各層で精査を行い、第13層上面および第15層の下面で遺構を検出した。

第15層検出遺構 調査区の南東端、深掘りトレンチの北側で土壌SK1501を検出した(図5)。15層の下面で検出したが、後述する埋土の状況から、本来は上面あるいは層中遺構であったと推測する。SK1501は直径0.2m、深さ0.1mを測る。埋土は第15層と類似したシルト質粘土であり、わずかに偽礫を含んでいる(図6)。遺物は出土しなかった。

第13層上面検出遺構 調査区の全体に水田が分布していた(図7)。作土層である第13層は第14層を耕起したもので、厚さは5~10cmほどである。作土の上面には

乾痕が検出されたが、酸化第二鉄の沈着などは認められなかった。また、水田面は高低差がほとんどなく水平であった。畦畔は幅50~60cmで、作土上面との高低差は最高所でも5cmと低い。調査区の北東部分では、第13層検出時にやや掘り下げすぎたため畦畔を検出することができなかった。

調査区が狭く、水田のプランや灌漑方法の詳細を把握するには至らなかったが、少なくとも大小2種の区画が存在することが指摘できる。調査区南半西側のものは一辺4.8m×5.5mあり、東側に水口が設けられている。これに対して、調査区の北西・南東の区画はその規模が明確ではないが、明らかにこの区画よりも規模が小さい。作土中からは古式土器と思われる薄手の土器が数点出土した。いずれも細片であるが、後述する周辺調査での状況から考えて、水田の経営時期を庄内期に比定できる可能性が高い。

3) まとめ

今回の調査は、比較的小面積なものではあったが、これまで調査が希薄であった「出戸自然堤防」東側の状況に新たな知見を加えたという意味で、重要な成果となった。

特に、第13層上面で検出された庄内~古墳時代前期に比定できる水田の検出は重要である。周辺における該期の遺構分布をみると、調査区北西のNG16・84-86・99-15・03-06次北区の各調査で、庄内期の集落に係わる遺構が検出されている[大阪市文化財協会1979・1985b・2002・2005]。また、NG84-6・02-08・03-06次南区では同じく庄内期の周溝墓・土壌墓が検出されている[大阪市文化財協会1985a・2005]。その一方で、古墳時代前期の遺構はNG16・84-6次調査でわずかに遺構

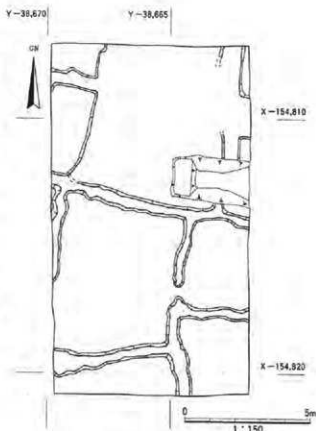


図7 第13層上面の検出遺構

が確認されているにすぎない。今回検出した水田は、出土遺物から帰属時期を明確にすることはできなかったが、周辺の調査で庄内期の遺構が多く検出されている一方、古墳時代前期の遺構が希薄である状況を考えれば、庄内期に属する可能性が高い。とすれば、微高地上およびその縁辺部には集落と墓域が近接して立地し、低湿な微高地の東側には水田域が展開するという集落景観が復元できる。

今回の調査地では、上記のように水田域を検出し、当地に展開した庄内期の集落構造について一定の知見を追加することができた。ただし、灌漑システムのあり方、水田域の範囲など、明らかにすべき問題点は多い。また、調査地西方で遺構が密集する弥生時代中期後葉～後期および古墳時代中期については、わずかな遺構・遺物を検出するにとどまり、集落中心地の様相と鮮明な対比を行うことができた。今後の調査においては、各時代の集落構造のあり方を念頭においた、より一層の知見の蓄積が期待される。

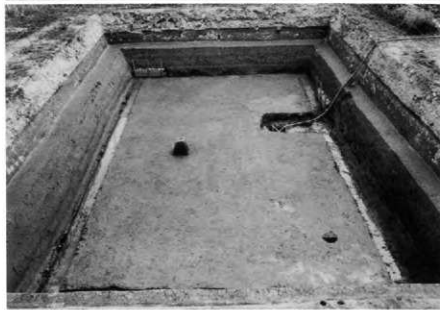
引用・参考文献

- 大阪市文化財協会1979、【大阪市下水道発進口建設事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書】
1985a、【長原出戸下水道管編築造事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-6)略報】
1985b、【関西電力管路親切工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)】略報
2002、【長原遺跡発掘調査報告】Ⅲ
2005、【長原遺跡発掘調査報告】ⅩⅡ
- 高橋工1999、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期から飛鳥時代の地形環境の変遷と集落の動態」：
大阪市文化財協会編「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅱ、pp.79-122

調査区北壁地層断面
(南から)



第15層上面検出状況
(南から)



第13層上面検出状況
(南から)



長原遺跡発掘調査(NG05-2)報告書

調査箇所	大阪市平野区長吉六反1丁目
調査面積	180㎡
調査期間	平成17年8月9日～平成17年11月29日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、松尾信裕

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は長原遺跡東北地区に位置し(図1)、東西方向の都市計画道路である長吉2号線予定地内に当る(図2)。これまでの調査により、この周辺は長原遺跡でも低位段丘が地下深く埋没し、その上位に厚い沖積層が堆積している地域である。本調査の西側で行ったNG02-5次調査でも、地表下2mより下位には水成層が厚く堆積し、地表下8mまで沖積層が堆積していた[大阪市文化財協会2005]。

本調査区は都市計画道路長吉2号線の東端に位置し、予定地内に東西30m、南北5.8mの東西に長い調査区を設定した(図3)。なお本調査区の北と東には木造の市営住宅が並ぶが、南では高層の市営住宅が建設されており、建替えに伴ってNG02-9次調査を行っている。

なお、調査で用いた水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP±〇mと記した。図に用いた座標値は大阪市道路現況図(1:500)を基に導いた世界測地系によるものである。

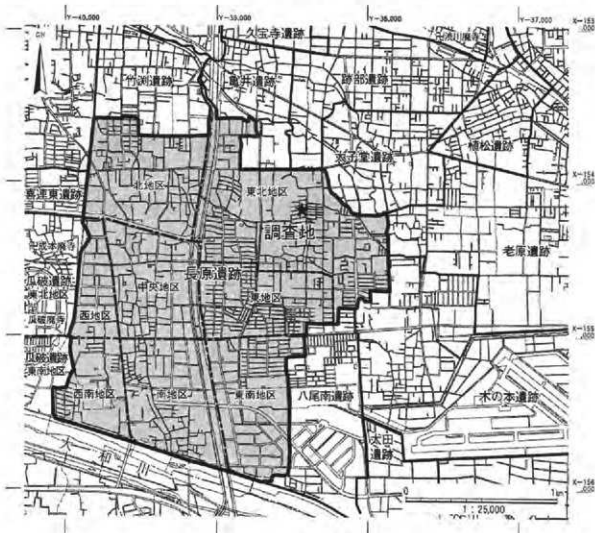
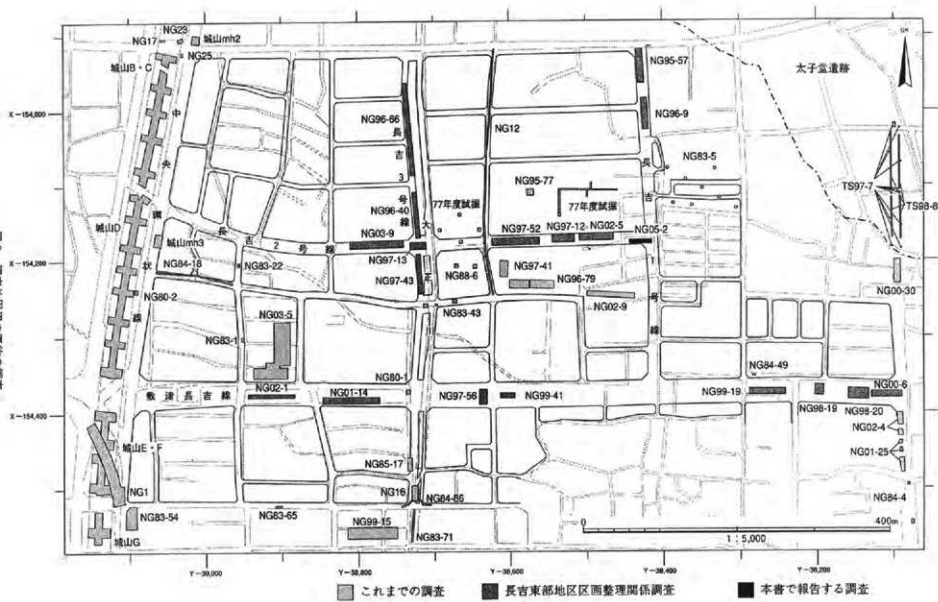


図1 遺跡の位置

図2 調査地周辺の既往の調査



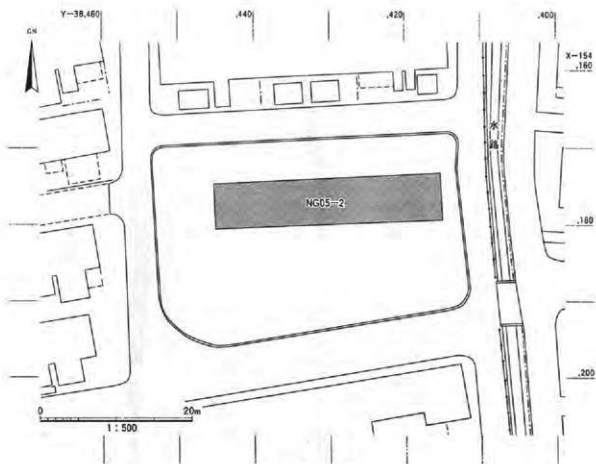


図3 調査区的位置

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図4・6・7)

調査は土留め矢板の強度の関係から、地表下5mまでしか行えなかったが、現代盛土の下位に13層に区分できる沖積層を確認した。

第0層：層厚70～90cmの盛土層である。下層の旧作土層である第1層を覆う。

第1層：近現代の作土層である。

第2層：灰オリーブ色を呈する細礫混り砂質シルト層で、作土である。層厚15～20cmを測る。下面に南北方向の溝がある。17世紀後半の肥前磁器碗2や、18世紀代の関西系陶器碗3が出土した。

第3層：暗オリーブ色を呈する細礫混り砂質シルト層で、作土である。層厚10～15cmを測る。

第4層：灰オリーブ色を呈する細礫混り砂質シルト～シルト質細粒砂層で、本層も作土と考える。層厚10～20cmを測る。

第5層：灰オリーブ色の水成砂層で、西部では3層に分かれる。上部が細礫混り粗粒砂、中部が極細～粗粒砂、下部が細粒砂混り粗粒砂である。中央付近は上層によって削平されているため、分布していないが、東部では2層に分かれ、上部が細礫混り粗粒砂、下部が極細～粗粒砂である。

第6層：灰～灰オリーブ色シルト質細粒砂で、東部では3層に分かれる。作土で上面に畦畔が作ら

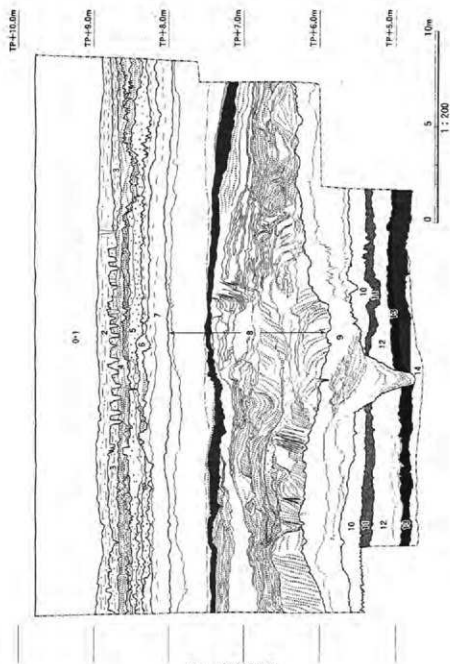


図4 南壁土層図

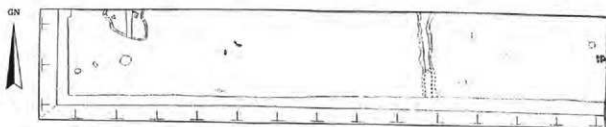
れている。上部が灰色シルト質細粒砂、中部が暗灰黄色シルト質細粒砂、下部が暗灰黄色～灰オリブ色シルト質細粒砂である。中部層と下部層の間に粗粒砂が分布している。西部では東部の中部層が堆積している。

第7層：黄褐～暗灰黄色を呈する極細粒砂混り粘土質シルトで、上下2層に分かれる。上部はマンガが沈着する。本層も作土で、上面には畦畔が作られている。本層から土器器碗5や11世紀代に属する瓦器碗6のほか、黒色土器7・須恵器杯8など、平安時代の土器が出土した。

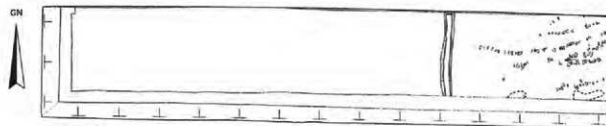
第8層：暗オリブ灰色を呈する水成の粘土～粗粒砂層で、上部には粘土～極細粒砂が卓越し、下部は極細～粗粒砂が主体である。層厚170～220cmを測る。下部には粗粒砂が厚く堆積しており、河

成堆積と考えられる。上半部には暗色帯があり、滞水状態となったものとする。本調査地の西側で行なったNG02-5次調査でも同様の河成堆積層を確認している[大阪市文化財協会2005]。NG7A・B層に対応する。本層以下は全て水成層であった。本層からは土師器碗9、土師器高杯10・11、土師器甕12~14、須恵器杯蓋15・杯16など、古墳時代後期から飛鳥時代の土器が出土した。また、用途不明の木器17が出土した。木製品は長さ56cm、幅11cm、厚さ4cmの長方形の板の両端付近に2孔1対の長方形のホゾ孔を穿っている。

第9層：オリブ黒色を呈する水成の粘土で、上下2層に分かれる。下部層の上面には下位層を削り込むシルト~中粒砂を主体とする流路がある。また、平坦部には炭化物が拡がっている。上部層に



第7層上面



第5層上面

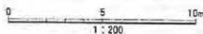


図5 遺構配置図

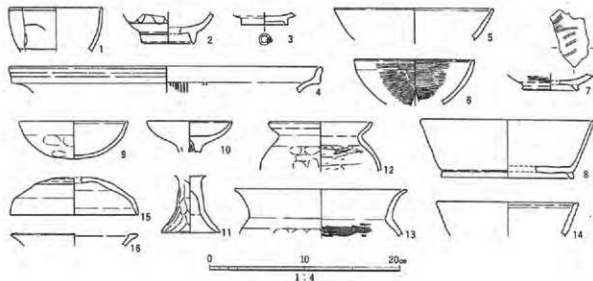
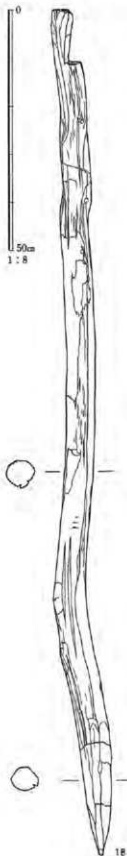


図6 出土遺物(1)

は植物遺体が含まれる。NG8B層に対応する。本層から長さ178cm、直径6cmの杭18がほぼ完形で出土した。



第10層：暗オリーブ灰色を呈する水成のシルト質粘土で、層厚20～35cmである。NG8C層に対応する。

第11層：黒灰色を呈する粘土～シルト質粘土で、層厚10～15cmである。NG9A層に対応する。

第12層：緑灰色～黒灰色を呈する粘土～シルト質粘土で、層厚は40cmである。NG9B層に対応する。

第13層：黒灰色を呈する粘土～シルト質粘土で、層厚は20cmである。NG9C層に対応する。

第14層：灰色を呈する粘土で、本層の途中まで調査を行った。

ii) 遺構と遺物(図5・6)

本調査では第2・5・7層の上面で耕作に係わる鋤溝や畦畔を検出した(図5)。

第7層上面では第5層上面の畦畔より西へ約1mの位置に畦畔を検出した(図5上段)。畦畔は下底幅約0.7m、上端幅0.3m、高さ0.1mである。また、西側では不定形の落込みを検出した。東西は2.1m、深さは0.1mである。

第5層上面では東部で1条の畦畔を検出した(図5中段)。畦畔は下底幅約0.5m、上端幅0.3m、高さ0.1mである。畦畔の東側では半月状の耕作具の痕跡が拓がっていた。

第2層上面では南北方向の鋤溝を検出した。これらから17世紀代の肥前磁器碗1と、丹波焼播鉢4が出土した。

3) まとめ

今回の調査では第7層より上位で耕作に係わる遺構面を検出した。それより下位では水成層が厚く堆積しており、この地域が集落の周縁部に当る河川や低湿地状の環境であったことが確認できた。

下部の第9層以下は滞水状態の環境の湿地であったと考えられる

図7 出土遺物(2)

が、その中にも暗色帯が2枚確認できた。人工的な遺物などは見つからなかったが、層相の観察からは縄文時代から弥生時代の堆積層に相当し、当該期のこの地点の環境が湿地状であったことがわかる。

中位の第8層は氾濫性の河川堆積層であり、細礫から粗粒砂を主体とする砂礫層や、細粒砂を主体とする地層が重なりあっており、自然流路の中を調査している可能性が高い。

この河川が埋没した後、やっとこの地域が生活可能な地域となったようで、その上面に耕作地が形成されている。その時期は平安時代以降であり、これ以降はこの地域は耕作地として現代まで利用された地域であった。

こうした地形の変遷は西側で行ったNG02-5次調査でも同様の変遷を示しており、先の調査地を含む一帯の古代以前は湿地や自然流路が形成される集落の周辺部であり、古代になっても集落の外側に広がる耕作地として利用される地域であったのであろう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2005、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅷ

第5層上面検出状況
(東から)



第7層上面検出遺構
(東から)



調査地の堆積状況
(北西から)



調査地の堆積状況
(北東から)



第9層杭出土状況
(北西から)



第8層不明木製品
出土状況
(北から)



長原遺跡発掘調査(NG05-4)報告書

調査箇所	大阪市平野区長吉長原東3丁目
調査面積	80㎡
調査期間	平成18年3月6日～平成18年3月17日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、小倉徹也、宮本康治

1) 調査に至る経緯と経過

長原遺跡は大阪市平野区長吉長原・出戸・川辺・六反に所在する旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、南から延びる河内台地の先端に当る瓜破台地の東半部と、その北東に拉がる沖積平野にまたがって立地する。調査地は長原遺跡の東南部に所在し、沖積平野側に位置する。

調査地周辺では、西側のNG84-17次調査で古墳時代後期ごろの水田跡が検出されている[大阪市文化財協会1984]。南西側のNG87-27次調査やNG87-69次調査では5世紀後半と推定されている古墳の一部分と飛鳥時代の水田跡、平安時代の溝[大阪市文化財協会1994]、NG94-4次調査では縄文時代の石炭や弥生時代後期に属する溝、飛鳥時代の水田跡、平安時代の掘立柱建物や井戸、土器埋納遺構、鎌倉時代の耕作に伴う小溝群など[大阪市文化財協会1999]が検出されている。本調査地の北側では、NG87-8次調査で弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土しており、NG89-85次調査では低位段丘を下刻して流れる古川辺川や縄文時代後期から古墳時代前期にかけての複数の河道、飛鳥時代の水田跡など[大阪市文化財協会1990]、NG04-1次調査では調査地全体が古川辺川の流路内にあったことが確認されている[大阪市文化財協会2006]。北東側では、NG96-103次調査で縄文時代の石器密集部や飛鳥時代の水田跡が検出されている[大阪市文化財協会1998]。

大阪市教育委員会が平成17年12月12日に試掘調査を行った結果、近世以前の地層が良好に残されていることが確認された。この結果を受け、平成18年3月6日から発掘調査を実施することになった。

調査区は敷地内の中央北寄りに設定された(図2)。調査では現代盛土から中世までの地層を重視によって掘削し、以下を人力によって掘下げた。3月15日に調査を終了し、3月17日に埋戻し作業お



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

よび器材類の撤収を含めた現地におけるすべての作業を完了した。

なお、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、挿図中では「TP+〇m」とした。指北記号は座標北である。

2) 調査の結果

i) 層序(表1、図3~4)

調査地の現地表面は標高約10mで、ほぼ平坦であった。部分的な坪掘りを含めて現地表面下約4.6m(TP+5.8m)までの地層を観察し、その結果に基づいて本調査地の層序を組み立てた。堆積層は沖積層(難波累層)および低位段丘構成層に相当し、人為によって形成された地層である第5a層以上と、主として自然の営力による第5b層以下に大別される。以下に層序の概略を記し、各層の岩相や特徴を表1に、地層断面を図3・4に示す。なお、長原遺跡の標準層序との対比は、暗色帯を鍵にして北隣のNG04-1次、NG89-85次調査地の層序によって行った。長原遺跡の標準層序の地層名については、地層番号の前に「長原」を付して「長原〇層」とし、図表等では長原遺跡の調査略号である「NG」を付して「NG〇」とした。また、地層の構成物質の記載については、構成物質の主体を占める砕屑物粒子と、その運搬・堆積(沈着)条件を決定する営力の大きさととの運動関係がもっともよく反映されている砕屑物の粒径区分(ウェットワース・ベディジョン式)を用いて記載した。

第0層：現代の盛土層で、層厚は20~130cmである。長原0層に対比される。

第1層：現代の作土層で、層厚は10~30cmである。長原1層に対比される。

第2層：近世の作土層で、第2a層と第2b層とに細分される。第2a層は灰色ないし緑灰色の極細~細粒砂混りシルトからなり、層厚は10~15cmである。第2b層は極細~細粒砂を含む、暗緑灰色のシルトからなり、層厚は20~25cmである。ともに長原2層に対比される。

第3層：灰色の極細~細粒砂混りシルトから粘土質シルトよりなる作土層である。層厚は10~25cmで、長原3層に対比される。

第4層：灰色の細粒砂混り粘土質シルトからなる作土層で、植物の根の痕跡が顕著であった。層厚は20~30cmである。長原4A層に対比される。

第5層：第5a層と第5b層に細分される。第5a層は灰色の粘土質シルトからなり、層厚は10~20cmである。植物の根による擾乱が顕著で、堆積構造の観察が困難であったが、作土層と考えた。第5b層は(やや暗い)灰色の粘土質シルト~シルト質粘土からなる暗色帯構成層で、層厚は20~30cmである。上位の第5a層の耕作による、上下に液打つような顕著な地層の変形が観察された。ともに長原4B~4C層に対比される。

第6層：第6a層と第6b層に細分される。第6a層はオリブ灰色の粘土質シルト~シルト質粘土からなり、層厚は20~30cmである。上位層と同様の顕著な地層の変形が観察された。長原5層に対比される。第6b層は

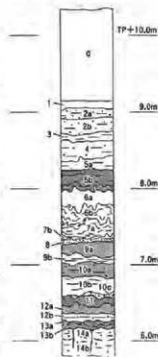


図3 模式柱状図

表1 調査地の層序

NG05-4層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	沼部から測定さ れる層厚誤差	遺構・遺物	長原7B層序 との対比	時代		
上部 沖積層 (細成層)	第0層	現代盛土	20~130	沼部から測定さ れる層厚誤差		—	NG0	現代	
	第1層	現代作土	10~30			—	NG1	近代	
	第2層	a	灰-緑灰色 極細~細粒砂混りシルト	10~15			—	NG2	近世
		b	含極細~細粒砂 暗緑灰色 シルト	20~25			—	NG2	
	第3層	灰色 極細~細粒砂混りシルト~粘土質シルト	10~25		水田	—	NG3	平安	
	第4層	灰色 細粒砂混り粘土質シルト	20~30	根による層乱顯著		—	NG4A		
	第5層	a	灰色 粘土質シルト	10~20	根による層乱顯著		—		NG4B~4C
		b	(やや暗い) 灰色 粘土質シルト~シルト質粘土	20~30	変形顯著		—		
	第6層	a	オリーブ灰色 粘土質シルト~シルト質粘土	20~30	変形顯著			NG5	奈良
		b	灰色 粘土質シルト~シルト質粘土	10~30	変形顯著			NG6~7Bi	奈良 古墳後期
	第7層	a	各種粒砂~細礫 植物遺体 オリーブ黒色 粘土質シルト~シルト質粘土	15~20	変形顯著		土師器		古墳中期
		b	オリーブ黒色 粘土質シルト	2~5	変形顯著	鎌倉遺地 沼沢地	土師器	NG7Bi	
	第8層	灰色 極細~極細粒砂~シルト混り極粗~中粒砂	5~10	根でシルトに塊状変成、 層上部に植物粒砂					古墳前期 弥生後期
	第9層	a	やや暗い灰色 粘土質シルト~シルト質粘土	10~20	下層不明瞭			NG7Bii	
上部 沖積層 (中成層)	第9層	b	緑灰色 粘土質シルト~シルト質粘土	5~15				NG8A	
		a	緑灰色 粘土質シルト~シルト質粘土	5~15				NG8B	
	第10層	b	灰-緑灰色 粘土質シルト~シルト質粘土	20~25				NG8C	
		c	灰色 シルト~細粒砂混り細礫~中粒砂	≦10					
第11層	暗灰~黒色 粘土質シルト~シルト質粘土	5~15					NG9A~C	弥生前期 縄文後期	
第12層	a	緑灰色 シルト~細粒砂	10~15	下層不明瞭				NG10~11	
	b	緑灰色 シルト~細粒砂	10~15						
第13層	a	やや暗い緑灰色 極細粒砂~シルト	5~10					NG12A~B SG12C~15	
	b	緑灰色 極細粒砂~シルト	5~10	下部不明瞭					
低位 段丘 構成層	第14層	a	緑灰色 極細粒砂質シルト~極細粒砂	10~15	風化により軟質	後背沼地 河川			NG13以下
		b	緑灰色 極細粒砂質シルト~極細粒砂	25≦	硬質				

灰色の粘土質シルト~シルト質粘土からなり、層厚は10~30cmである。第5b層と同様な顕著な地層の変形が観察された。長原6~7Bi層に対比される。

第7層以下は調査区西端で行った坪掘りによって確認した。

第7層：第7a層と第7b層に細分される。第7a層はオリーブ黒色の粘土質シルト~シルト質粘土からなり、層厚は15~20cmである。粗粒砂~細礫と植物遺体を含み、植物遺体のラミナを扶む。第7b層はオリーブ黒色の粘土質シルトからなり、層厚は2~5cmである。ともに第5b層と同様な地層の変形が観察され、長原7Bii層に対比される。

第8層：灰色の細礫~極細粒砂~シルト混り極粗~中粒砂からなり、層厚は5~10cmである。調査区西側でシルトに側方変化し、最上部に極細粒砂を含む。長原7Bii層に対比される。

第9層：第9a層と第9b層に細分される。第9a層はやや暗い灰色の粘土質シルト~シルト質粘土か

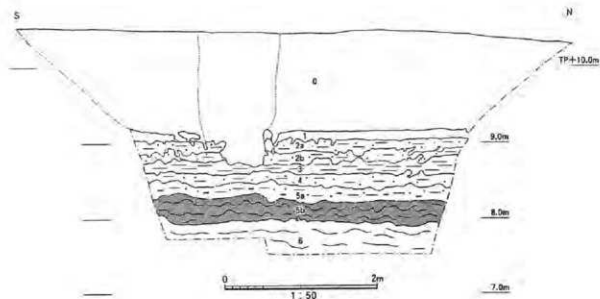


図4 西壁地層断面図

らなる暗色帯構成層である。層厚は10~20cmで、長原7Biii層に対比される。第9b層は緑灰色の粘土質シルト~シルト質粘土からなり、層厚は5~15cmである。長原8A層に対比できる。

第10層：第10a層・第10b層・第10c層に細分される。第10a層は褐色ないし灰白色の極細粒砂~シルトからなる暗色帯構成層で、層厚は平均20cmである。第10b層は灰色ないし緑灰色の粘土質シルト~シルト質粘土からなり、層厚は20~25cmである。第10c層は灰色のシルト~細粒砂混り細礫~中粒砂からなり、層厚は10cm以下である。第10a層は長原8B層、第10b層と第10c層は長原8C層に対比される。

第11層：暗灰色ないし黒色の粘土質シルト~シルト質粘土からなる暗色帯構成層で、層厚は5~15cmである。長原9A~9C層に対比される。

第12層：第12a層と第12b層に細分される。第12a層は褐色のシルト~細粒砂からなり、層厚は10~15cmである。下位層との境界に層理面はなく、漸移的であった。第12b層は緑灰色のシルト~細粒砂からなり、層厚は10~15cmである。ともに長原10・11層に対比される。

第13層：暗色帯構成層で、第13a層と第13b層に細分される。第13a層はやや暗い褐色の極細粒砂~シルトからなり、層厚は5~10cmである。長原12A・B層に対比すると考えられる。第13b層は褐色の極細粒砂~シルトからなり、層厚は5~10cmである。下位層との境界に層理面はなく、漸移的であった。長原12C層~長原13層に対比できる。

第14層：第14a層と第14b層に細分される。第14a層は緑灰色の極細粒砂質シルト~極細粒砂からなり、層厚は5~15cmである。乾痕が発達し、やや軟質であった。第14b層は緑灰色の極細粒砂質シルト~極細粒砂からなり、層厚は25cm以上である。締まりがよく、硬質であった。長原15層に対比できる。

ii) 遺構と遺物(図5)

第5層上面および第6層上面において検出作業を行った。しかし、遺構・遺物ともに検出すること

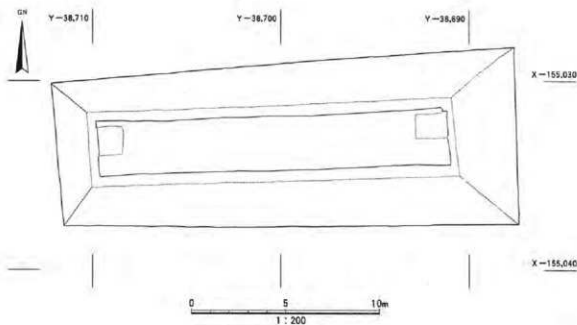


図5 第5層上面検出平面図

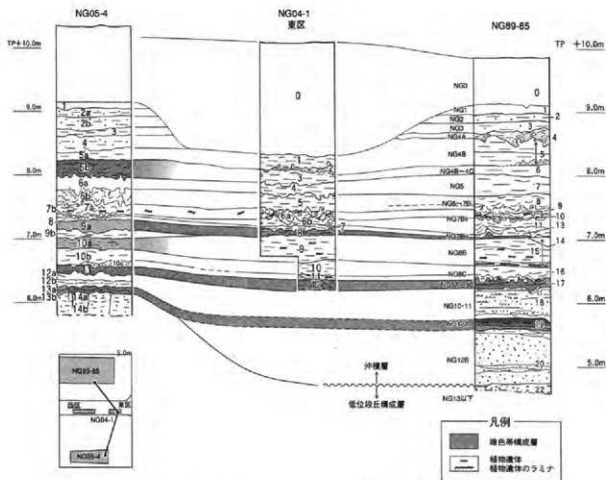


図6 NG05-4次と04-1次・89-85次調査地の柱状対比図

はできなかった。なお、調査区東側で行った坪掘りトレンチにおいて、第7層および第8層から細片ではあるが、土師器が出土した。

3)まとめ

今回の調査では、調査区西側の坪掘り確認した堆積層の観察から、調査地の層序がNG04-1次および89-85次調査地東側と同様であること(図6)が明らかとなった。これにより、出土した遺物はわずかに土師器の細片のみであったが、第5a層より上位で確認した水田と考えられる作土層が平安時代以降のものであり、調査地が平安時代以降、耕作地として利用されてきたことが明らかとなった。また、調査地が低位段丘構成層を下刻した古川辺川の流路内に位置していたこと、低位段丘層の分布高度から東側肩部に当る可能性があることが判った。その後、第13層の堆積以降、第5b層の堆積期までは、河川の氾濫が及ぶ後背湿地・沼沢地であったことが堆積層の観察から確認された。今後の長原遺跡の古環境を考える上で、貴重な資料を得ることができた。

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会1984、「吉内仁平氏による店舗付住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-17)略報」
- 1990、「長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89-85)略報」
- 1994、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅷ
- 1998、「大阪市都市整備局による長吉長原東第2住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-103)略報」
- 1999、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」ⅩⅣ
- 2006、「長原遺跡発掘調査報告」ⅩⅢ
- 趙哲漢2003、「大阪平野のおいたちと人類遺跡」:「日本第四紀学会「大阪100万の自然と人のくらし」普及講演会資料集」pp.1-16

調査地全景
(西から)



西壁地層断面
(東から)



第5層上面検出状況
(西から)



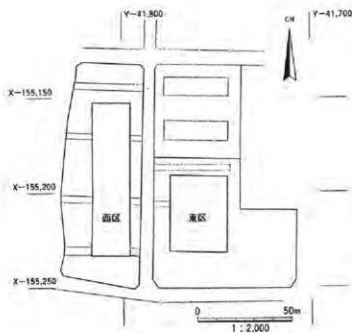


図2 調査区の配置

検出を進め、実測・写真撮影などの記録作成作業を行った。10月26日に西区での掘削も開始し、東区での埋戻しを行いながら作業を進めた。12月28日には西区での調査も終え、2006年1月13日には復旧も含めて現場での作業を終了した。

現場調査では、東・西両区で各1回ずつクレーンを用いての空中写真測量、および基準点の設置作業を行っており、作業は株式会社かんこうに委託した。

なお、図中で用いている標高はTP値(東京湾平均海水面値)、座標は世界測地系である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

現地表面はごくわずかに南から北へと下っており、標高は周囲の道路面で南端では7.3m、北端で6.9m程度である。調査地では市営住宅の基礎等で部分的に破壊されていたものの、各時期の地層が良好に遺存していた。坪掘りによる部分的な確認を含めて現地表下約5mまでの地層を確認している。以下、おもに東区での観察結果をもとにして層序の概略を示す(図3)。なお、長原遺跡の標準層序との対比は現状での暫定的なものであり、今後さらに検討する必要がある。

第0層：現代盛土および攪乱層である。層厚は80~90cmである。長原0層に相当する。

第1層：暗灰黄色シルト質細~中粒砂層で、層厚は10~20cmである。近代の作土である。近世陶磁器や近代に属する陶磁器やガラスを少量含んでいた。長原1層に相当する。

第2層：黄褐~にぶい黄褐色砂質シルト層からなる作土である。細分が可能である。層厚は10~30cm程度で、長原2層に相当する。18~19世紀に下る時期の近世陶磁器が少量出土している。

第3層：灰色粘土質シルト~粘土層で、水成堆積であるが攪拌されて作土化された部分もある。17世紀代の近世陶磁器を含み、長原2層に相当する。北へ落込遺構であるSX301の北側に分布する。層厚は20~30cm程度である。

第4層：灰~黄褐色粘土質シルト~シルト質細粒砂からなる作土層で、細分することが可能である。層厚は30~40cmである。古代の土師器や須恵器、中世の瓦器などが少量出土しており、長原4~6層に相当する可能性がある。

第5層：大きく第5a層および第5b層の2層に細分される。第5a層は黄褐~にぶい黄褐色細粒砂質シルト~シルト質細粒砂層で、層厚は10~20cmである。土師器や須恵器が少量出土した。本層は古

墳時代とみられる堆積層で、作土の可能性がある。
長原7層に相当するとみられる。

第5b層は灰色細～粗粒砂からなる水成層で、西区では安定して認められたが、東区では遺構の埋土等として部分的に見られた。長原7層に相当する可能性がある。

第6層：褐～暗褐色粘土質シルト層で、層厚は10～20cmである。上面で水田畦畔や水路とみられる溝が確認された。弥生時代に属する可能性があり、長原7B層ないし8B層に相当する作土層とみられる。

第7層：黄褐色細粒砂混り粘土質シルト層で、層厚は10～20cmである。長原8～9層に相当する水成層で、弥生時代の可能性がある。

第8層：にぶい黄褐色シルト質細粒砂層で、層厚は10cm以下である。本層は弥生時代以前とみられる暗色帯で、長原9A層に相当する可能性がある。

第9層：暗オリーブ色細粒砂層で、層厚は20～30cmである。長原9B層に相当する可能性がある。

第10層：暗オリーブ色粘土質シルト～細粒砂層で、層厚は10cm前後である。長原9B層に相当する可能性がある。

第11層：黒褐～オリーブ褐色粘土質シルト層で、層厚は30cm程度の暗色帯である。長原9C層に相当する可能性がある。

第12層：灰色細粒砂の水成堆積層で、層厚は20～30cm程度である。

第13層：灰オリーブ色細粒砂質シルト～粘土質シルトからなる水成層で、層厚は30cm前後である。

第14層：黄褐～灰色粘土質シルト層で、層厚は30～40cm程度の暗色帯である。長原12層以下に相当する可能性がある。

第15層：灰色～オリーブ灰色細粒砂～粘土質シルトからなる水成層で、いくつかに細分が可能である。長原12層以下に相当する可能性がある。

第16層：オリーブ灰色粗～極粗粒砂が主体の水成層で、層厚は30～40cm程度である。

第17層：灰～オリーブ灰色粗粒砂～礫からなる水成層で、層厚は100cm以上である。途中にオリーブ黒色の泥炭質の粘土が礫として含まれていた。長原16層に相当する可能性がある。

ii) 遺構(図2)

遺構の概要について下層より記す。

a. 第14～12層の状況

東区では、中央で深掘りをした個所において、第14層の上面で流路NR1401が確認された。方向は南東から北西向きで、流路の東側の肩を確認している。西区においても、南部で深掘りをした地点に

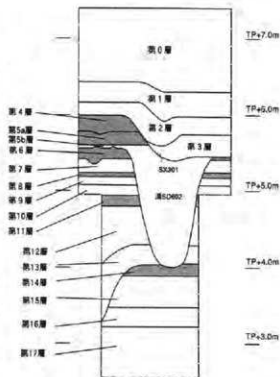


図3 層序模式図

(東区の状況を中心に、西区を一部合成して作成)

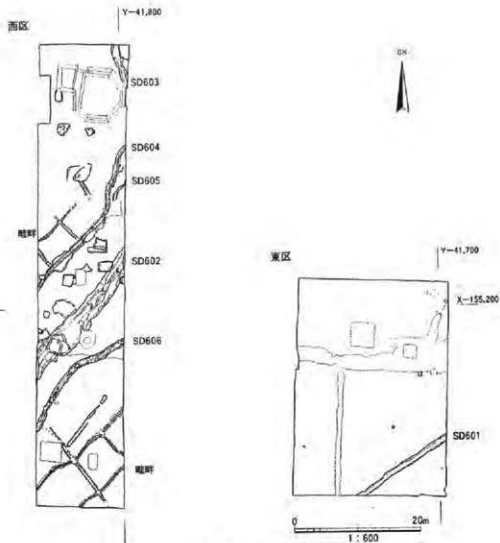


図4 第6層上面での遺構検出状況

において第12層あるいは第13層の段階の流路が認められている。流れの方向は明らかにできなかったが、流路の軸は南西-北東である。

b. 第8層下面の状況

西区で浅い落込みSX801が確認され、焼土とみられるものが出土している。

c. 第6層上・下面の状況

第6層については上面で水田畦畔や水路とみられる溝が確認されており(図4)、耕作されていたと考えられる地層である。

下面では東・西両区とも溝やピットが検出されている。また、西区では本層の下面で倒木痕らしき不定形な落込みが数基見つかっている。

東区では上面で溝SD601が検出され、溝内は水成堆積層で埋まっていた。方位は南西から北東方向である。西区では水田面が確認された。第5b層とした水成層で覆われていたため畦畔が遺存しており、調査区の南から中央付近で検出された。加えて溝が数基認められ、中には水路とみられるものがある。溝の方向は南西から北東で、水田の畦畔もそれに沿った方位をとっている。

溝の中でも、調査区中央付近で検出されたSD602は大型で、幅2.5～3.0m、深さ1.0m前後、検出された部分で長さ22mあまりの規模である。溝は南西よりで幅が広く深くっており、幅4.0m、深さが1.9～2.0mである。水溜等の機能をもっていたとみられる。ただし、関連するような施設は検出されなかった。埋土はいずれも水成層で、幅の広がっている部分では粘土～シルトの細かい堆積物が認められ、流木や木葉などが含まれていた。その上位に粗～極粗粒砂を主体とする水成堆積が見られる。幅が広く深くになっている箇所を除く浅いところでは、主として粗粒なものが埋積していた。この粗粒な堆積物は単一ではなく、いくつかの単位に細分することができる。埋土から少量の土器や木製品、サヌカイト剥片等が出土している。土器には弥生時代後期のものが少量含まれており、完全に埋積するのはその時期に下る可能性がある。

d. 第5・4層の状況

本層の段階では基本的に耕作されている状況が確認された。各層からは土師器・須恵器等が少量出土している。

e. 第3層段階の状況

この段階では東西方向に延びる段状の地形SX301が形成されていた。南側が一段高く、北側が低くなっている。北側では第4層以下を削っているようである。この段状の地形は東・西両区とも共通している。その低くなった北側に第3層とした水成の堆積層が分布する。一部で攪拌された状態が見られることから、耕作されたようである。SX301の南側は第2層段階の耕作によって詳細は不明である。東区では西寄りには南北方向の溝SD302が検出された。本溝は北でSX301に接続していた。

f. 第2層および第1層の状況

第2層では上・下面で耕作に伴う溝群が確認され、第1層でも同様の溝群が認められている。この段階でも、第3層段階で形成されていた北側が低くなる段状の地形が同様に見られた。また、東・西両区で1基ずつ井戸が検出されている。

iii) 出土遺物の概要

出土遺物については現在整理作業を進めているところであり、ここでは各時代ごとの出土遺物の概況を記す。

縄文時代についてはサヌカイト剥片や土器の細片が少量出土している。

弥生時代については第6層より土器やサヌカイト剥片が、水路とみられる溝SD602等から土器やサヌカイト剥片および木製品が出土している。

古墳時代および古代から中世については第5層および第4層から土師器・須恵器・瓦器等が出土している。

近世については第3あるいは第2層から近世陶磁器・土器類、そして木製品が出土している。

3) まとめ

今回の調査では、現地表下に各時代の地層が良好に遺存しており、主として各時期の耕作に伴う遺構が検出された。中でも、弥生時代に当たるとされる第6層上面で検出された水田と水路とみられる

溝の発見が重要であろう。これまで瓜破遺跡では、本調査地の東側において弥生時代の各時期の集落域や墓域が確認されてきている。これまで不明であった弥生時代の水田や関連施設が確認されたことは大きな成果である。これらをもとに瓜破遺跡の集落の状況をより具体的に検討していくことができるであろう。

その前後の時代では、縄文時代および旧石器時代については地層が良好に遺存していた。遺物は少量ではあるが、流路NR1401などが確認され、地形の変遷に係わる基礎的な資料が得られた。また、古墳時代以降については各時期の耕作に伴う状況が確認された。第6層の段階では溝や畦畔が南西―北東方向をとっているが、正方位をとるものへと変化する状況が認められた。少なくとも江戸時代にはそうした方位をとるようになり、それが現代まで引き継がれていることが見て取れる。

今回の調査では下位までの地層が良好に遺存していたため、各時代の地層から土壌サンプルを採取しており、古環境の復元や地層の対比等の検討をさらに進めることが可能である。

以上のように、今回の調査では調査地の歴史の変遷について基礎的な資料が得られた。周辺で蓄積されている資料と併せて検討を進め、瓜破遺跡の実態をより明らかにすることが必要である。

〔主要引用参考文献〕

今里幾次1942、「畿内遠賀川式土器の細別について―河内西瓜破遺跡水門西地点調査概報―」：『古代文化』

第13巻第8号

大阪市文化財協会1983、『瓜破遺跡』

1999a、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―1996年度―』

1999b、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―1997年度―』

2000、『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』

2002、『瓜破遺跡発掘調査報告』II

2003、『瓜破遺跡発掘調査報告』III

杉原壮介・神沢勇一1961、『瓜破遺跡』：『日本農耕文化の形成』

山本 博1940、『河内国大和川川床出土の弥生式遺物に就いて(一)』：『考古学雑誌』第30巻第11号

1941a、『河内国大和川川床出土の弥生式遺物に就いて(二)』：『考古学雑誌』第31巻第2号

1941b、『統河内国大和川川床出土の弥生式遺物に就いて』：『考古学雑誌』第31巻第7号

調査地全景
(北から、左側：東区
右側：西区)



層序の概要
(東区東壁、西から)



第6層下面検出状況
(東区、北西から)



第6層上面検出状況
(西区、南から)



第6層上面
畦畔検出状況
(西区、南東から)



SD602完掘状況
(西区、南西から)



瓜破遺跡発掘調査(UR05-2)報告書

調査箇所	大阪市平野区瓜破東2丁目696-3・697-1～5・699
調査面積	約100m ²
調査期間	平成17年11月1日～平成17年11月15日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、松尾信裕、市川創

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は瓜破遺跡の北東端に位置し、長居公園通を挟んで北側には喜連東遺跡、旧阪和貨物線を挟んで東側には長原遺跡が存在する(図1)。瓜破遺跡の範囲内では、周辺における調査密度はそれほど高くはないが、喜連東遺跡・長原遺跡を加えると、周辺の調査例が豊富な地域といえる。これら周辺調査の知見を概観すると、喜連東遺跡では縄文時代以降の遺構が検出されており、特に、発見例の少ない弥生時代後期の方形周溝墓や、「願堂」を始めとする中世の成果、そして奈良時代の大型建物が注目される。東方の長原遺跡でも、古墳時代の成果をはじめとして、各期の遺構が展開している。また、当調査地の南西には古代寺院である成本廂寺の存在が想定されている。このように当調査地周辺では各時代にわたって重要な知見が得られており、地域史を復元する上で非常に重要な地点ということが

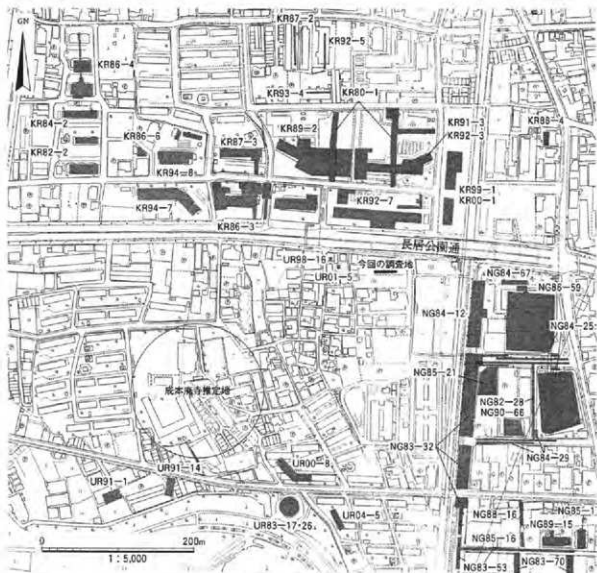


図1 調査地周辺図

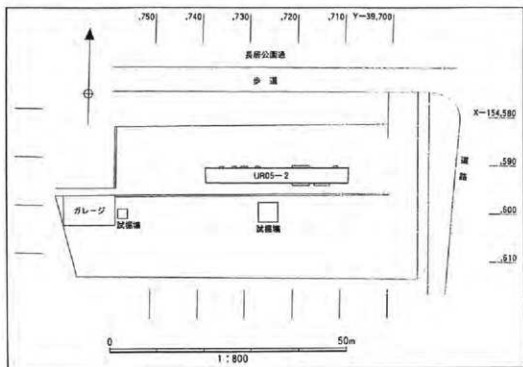


図2 調査区配置図

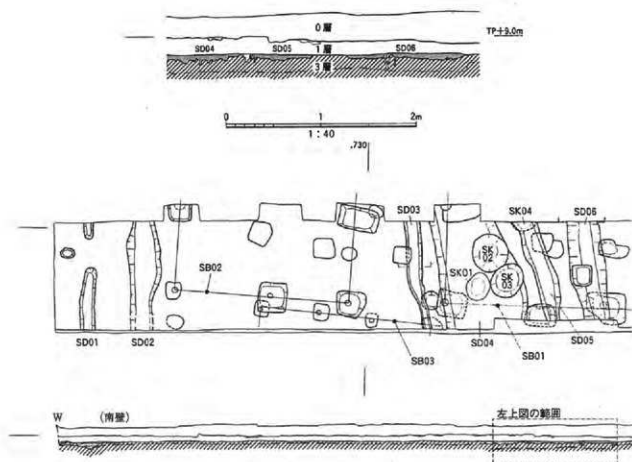


図3 調査区断面図および遺構平面図

できる。

当地にて建設工事が計画されたため、2005(平成17)年9月21日に試掘調査が実施された。その結果、地表下0.65m以下には良好な状態で地山が残存し、かつ地山上面には土壌と考えられる遺構が検出されたため、本調査を実施することとなった。

調査区は敷地中央部に設定し(図2)、2005(平成17)年11月1日より測量等を開始、翌2日には重機による掘削を開始した。重機による掘削は、後述する第0～2層に対して行った。掘削が進むにつれ、大型の柱穴が多数存在することが明らかとなったため、これら柱穴の建物としてのプランを復元するため、必要な部分について最低限の範囲で調査区を拡張した。重機による掘削ののちは、すべての掘削作業を人力によった。その過程で、適宜、遺構検出作業および記録作業を行った。以上の過程を経て、11月15日には機材類の撤収等を含め現地における作業をすべて完了した。

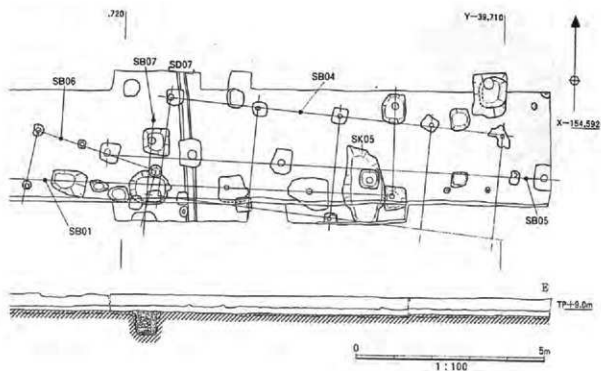
本報告に使用する図面で使用した方位は真北を示す。座標値については、現場で行った測量成果をもとに日本測地系に基づく座標値を求めた。周辺成果との整合性を保つため、世界測地系への変換は行っていない。水準についてはTP値を使用する。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

本調査地の地層について、現代整地層(第0層)以下を第1層から第3層に区分した。

第1層：灰オリーブ色を呈する中粒砂混りシルト質細粒砂からなる。近～現代の作土層である。層厚は最大で20cmある。



第2層：灰色を呈する中粒砂泥り粘土質シルトからなる。調査地西半において、偶跡目の踏込み内等でわずかに残存した。層厚は最大で5cmである。遺物は出土しなかった。

第3層：灰白色粘土からなる地山である。上面の標高は平均でTP+8.8mであった。また各遺構壁面の観察から、調査地東端ではTP+8.2mまで粘土～シルトからなる細粒な堆積物が連続する一方、調査地西半ではおよそTP+8.5m以下で粗粒砂を含み粗粒化していた。

ii) 遺構と遺物(図3～11・13、写真1)

今回の調査では、第3層上面において、掘立柱建物・土塼・溝など多数の遺構を検出した。これらの遺構の時期は奈良時代を中心としつつ複数の時期にまたがるが、時期を確定できないものもあるため、記述の便宜上、遺構の種類ごとに報告することとする。

[掘立柱建物]

調査区の全域にわたって、約60基の柱穴を検出し、これらから計7棟の掘立柱建物を復元できた(註1)。方位はいずれも北で東に振るが、その振れ幅はさまざまである。各掘立柱建物のプラン・規模・方位などについて、表1にまとめた。

SB01 桁行7間、梁行2間以上の大型の掘立柱建物である(図3・4)。柱筋はほぼ正方位である。SB01を構成する柱穴のうち西半のものは、後述するSD04～06の埋土を除去した段階で検出した。また、中央部・東半ではSB04・06を構成する柱穴によって確実に切られている。SB01を構成する柱穴の多くが一辺0.6～0.7mの隅丸方形を呈しているが、柱は抜取られているものがあり、掘形本来の規模は正確には知りたいものも多い。検出面からの深さは、0.4～0.7mとそれぞれの掘形でやや差異があった。また、柱抜取穴の埋土にはいずれも炭が含まれており、SB01は火災によって廃絶した可能性

がある。柱痕跡の直径はいずれも0.15mである。芯々間の距離は、確認できた部分で東西方向が2.2m、南北方向が2.4mであった。なお、西に近接するSB02とは南辺の柱筋がほぼ揃うが、掘形の掘削深度や埋土の層相に差異があり、一体の建物として復元できる可能性は低いと考える。

SB01を構成する柱穴からは、土師器・須恵器・製塩土器・瓦が出土した(図13)。また、用途不明の粗粒砂岩製石材も出土している。1～3は土師器皿Aである。このうち1・2は底部調整が省略されているが、3ではヘラケズリが施される。また、3は口



写真1 SB01出土墨書土器

表1 掘立柱建物一覧

遺構名	形式	柱間数		全長(m)	方位の振れ*
		東西×南北	東西×南北		
SB01	側柱建物	7間×2間以上	15.00×2.64以上	0° 42'	
SB02	側柱建物	2間×2間以上	4.62×2.54以上	3° 6'	
SB03	側柱建物	3間以上×-	5.10以上×-	4° 54'	
SB04	総柱建物	4間以上×1間以上	8.87以上×2.73以上	4° 30'	
SB05	側柱建物	5間以上×-	11.90以上×-	1° 12'	
SB06	側柱建物	2間×2間以上	3.28×1.57以上	17° 6'	
SB07	側柱建物	-×2間以上	-×2.43以上	4° 6'	

* 掘立柱建物の方位はいずれも北で東に振る。

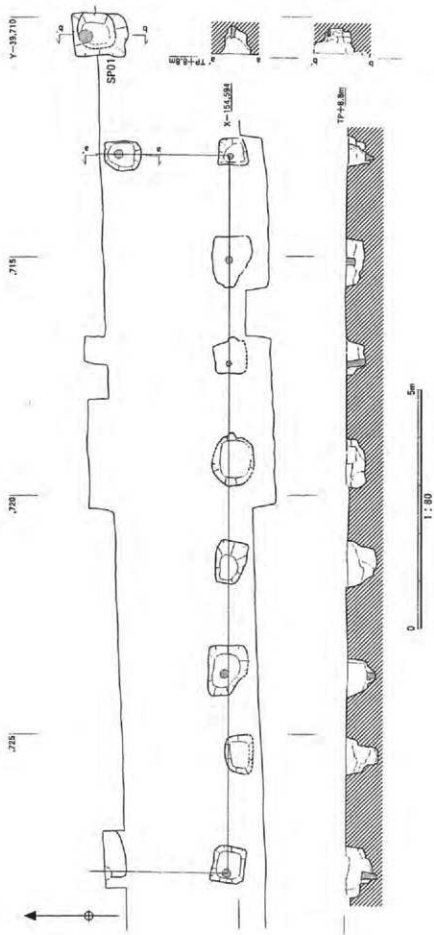


圖 4 SB01平・断面圖

縁部の立上りに明瞭な稜をもつ特徴的な形態である。高杯の杯部4は外面にヘラケズリを、内面には放射状暗文およびラセン状暗文を施す。須恵器杯B5は、底部外面に墨書で「中□」と記されている(写真1)。壺A蓋6は口縁端部が内端接地する。製塩土器7は直径3mm程度の石英・長石を多く含み、外面には粘土紐の接合痕を顕著に残す。また、口縁部が先細りし、端部はやや肥厚する。これらの特徴から[積山洋1993]による1b類に比定でき、したがって淡路島産のものである可能性が高い。製塩土器は7以外にも数個体出土しており、他の型式に属すると思われる個体も含まれるが、いずれも細片であり詳細に判別しがたい。8は丸瓦である。内面には布目瓦痕を残す。

これらの遺物群の年代観は、おおよそ奈良時代後半に位置づけられるものと考ええる。

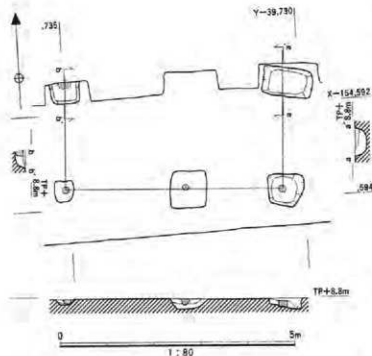


図5 SB02平・断面図

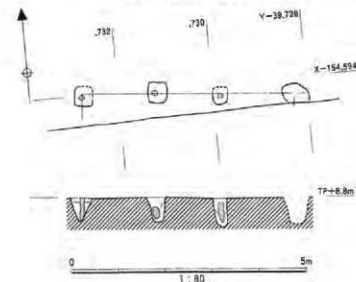


図6 SB03平・断面図

なお、SB01の東にSP01がある。

上部は柱抜取穴によって拡張されているが、下部は一辺0.8m程度の隅丸方形であった。検出面からの深さは0.6mであった。掘形の規模、また埋土の層相もSB01を構成する掘形と類似する。なお、最下部には柱材と思われる木材が残存した。

SP01からは土師器・須恵器・瓦が出土しており、このうち須恵器杯B9、片口鉢10、丸瓦11、土師器甕12を図化した(図13)。丸瓦11は先端部に向かって肥厚しており、軒丸瓦の一部である可能性がある。

SB02 東西2間、南北2間以上の掘立柱建物である(図3・5)。SB03を構成する柱穴を切っている。掘形の形状は一辺0.4~0.7mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.1~0.3mであった。柱痕跡は直径0.15mである。

SB03 東西に3間以上柱穴が並ぶ(図3・6)。確実に建物として復元できるものではなく、柵等の可能性も考えられる。掘形の形状は一辺0.3~0.4mのやや不定形な隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約0.2m

であった。また、柱痕跡は直径0.1mほどである。いずれの掘形の埋土も第3層の偽礎を主体とし、検出が困難であった。掘形の切合い関係からSB02よりも古いことは確実であるが、遺物は出土せず、具体的な時期については不明である。

SB04 調査区の東半で検出した。東西4間以上、南北1間以上の総柱建物である(図3・7)。掘形の形状は、おおむね一辺0.3~0.4mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.2m程度であった。柱痕跡は直径0.1mほどである。

掘形からは土師器・須恵器・黒色土器のほか、土錘や緑色片岩製の切石が出土した。15は土師器碗であり、内面は被熱している。17は管状土錘で、完形で出土した(図13)。土師器碗15の年代観から〔佐藤隆1992〕、SB04は平安時代に下るものである。

SB05 東西に5間以上柱穴が並ぶ(図3・8)。SB03同様、確実に建物として復元できるものではない。掘形の形状は、おおむね一辺0.4~0.7mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.2~0.4m、柱痕跡は直径0.2mであった。各掘形の大きさはやや不ぞろいで、また柱筋の通りもよくない。

掘形からは土師器・須恵器・土錘・製塩土器が出土している(図13)。土師器皿16、管状土錘18とも明確に時期を示す遺物ではないが、固化できなかった須恵器細片の形態なども加味し、おおむね奈良時代後半期のものとする。

SB06 調査区の東半で検出した。東西2間、南北2間以上の掘立柱建物である(図3・9)。掘形の形状は、おおむね直径0.2mの円形を呈する。検出面からの深さは0.05~0.20mと浅い。また、柱痕跡は直径0.10mほどであった。柱穴からは土師器が出土しているが、いずれも細片であり時期は不明

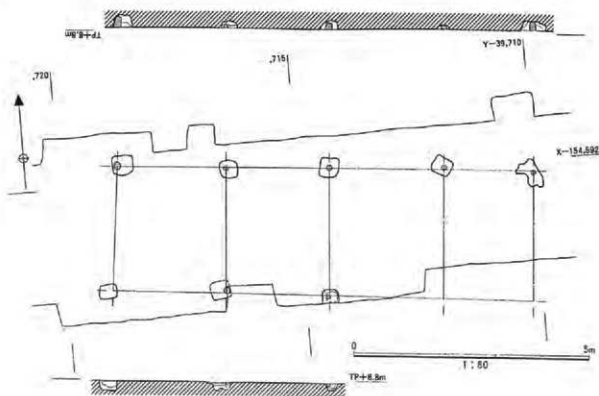


図7 SB04平・断面図

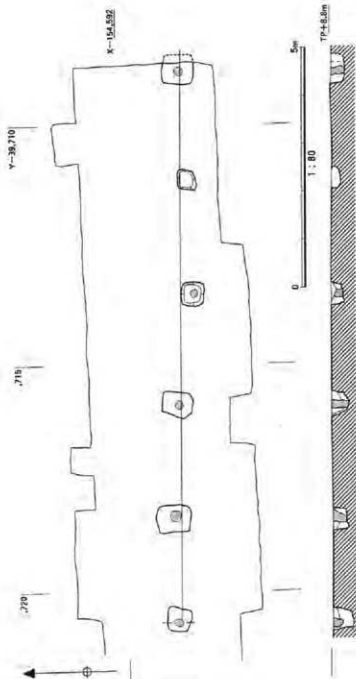


図8 SB05平・断面図

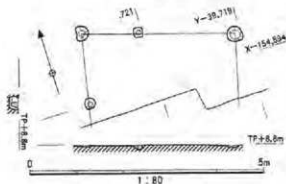


図9 SB06平・断面図

である。

SB07 調査区の東半で検出した。南北に並ぶ柱穴を埋土の類似性などから組合うものとして復元したが、詳細は不明である(図3)。掘形の埋土から、底部内面に二重にラセン状暗文を施す土師器14が出土している(図13)。

〔土城〕

調査区中央部で4基、東半で1基の計5基を検出した(図3・10)。各遺構の切合い関係から、SK01→SD04→SK02→SK03、またSK04→SD05という先後関係が把握できる。

SK01 長辺0.75m、短辺0.60mの楕円形を呈する土城である。検出面からの深さは0.12mある。遺物は出土せず時期を決定する要素に乏しいが、埋土の層相は後述するSK05と類似する。

SK02・03 直径0.9mほどの円形を呈する土城である。SK02を切ってSK03が掘削される。検出面からの深さは、ともに0.3m程度である。いずれも埋土には偽装を含み、人為的に埋戻されたことがわかる。

SK02からは須恵器蓋22、SK03からは土師器杯A19などが出土している(図13)。これらの奈良時代の遺物のほか

に、古墳時代に属する須恵器の細片が出土した。

SK05 調査区東部で検出した不定形の土城である。南北2.0m以上、東西1.1m、検出面からの深さは0.2mある。出土遺物には時期不明の土師器片のほか、古墳時代に属する須恵器がある。このうち、須恵器把手付碗23を図化した(図10)。外面の波状文帯以下にはヘラケズリを施す。おおよそI期中頃に位置づけられよう[田辺昭三1981]。

【溝】

調査区の中～西部において、南北方向の溝を計7条検出した(図3・11)。いずれも調査区を越えて延びており、長さは2.8m以上ある。また、建物群とは異なり、方位は北でやや西に振るものが多い。

SD01 幅0.2m、検出面からの深さは0.05mであった。遺物は出土せず、時期は不詳である。

SD02・03・05・06 幅は最大で0.8m、検出面からの深さは0.1mほどであった。SD03からは、土師器皿A21が出土している(図13)。

SD04 最大幅2.2m、検出面からの深さは0.1mほどである。土師器杯A20のほか、須恵器細片等が

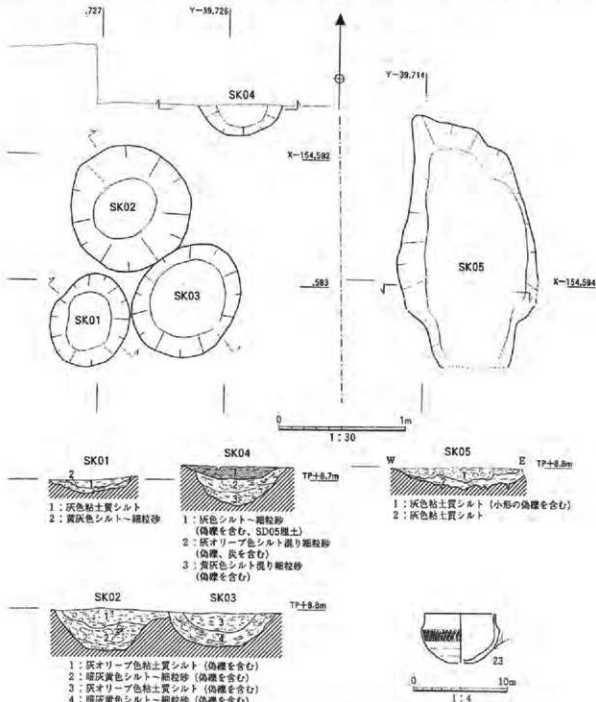


図10 SK01～05平面図と出土遺物



図11 SD03・06・07断面図

出土した(図13)。

SD07 調査区の東半で検出した。幅は0.3m、検出面からの深さは0.2mある。遺物は出土しておらず時期は不詳であるが、埋土の層相は前述のSK05に似る。

3) まとめ

以下に、今回検出した遺構群の変遷についてまとめておく。出土遺物、切合い関係などから、4期に大別することが可能である(図12)。

第1期:SK05が該当する。古墳時代中期の遺物が出土しており、実年代としては5世紀代に位置づけられる。埋土の類似性から、SK01・SD07についても該期の遺構である可能性があ

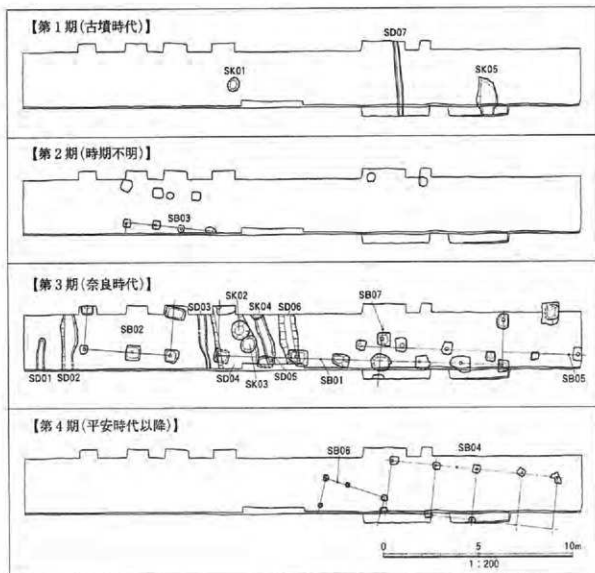


図12 遺構の変遷

う。

第2期：SB03が該当する。遺物は出土していないが、SB02を構成する柱穴がSB03のそれを切ること、また掘形の形状や地山の偽禿を主体とする埋土の特徴から、第3期に展開する遺構群に先行するものと判断した。建物として復元することはできなかったが、掘形の大きさや埋土の類似性から、他にもこの時期に属すると思われる掘形が何基か存在する。年代観については確定するための情報に欠ける。周辺の調査地において建物が検出される時期が古代に下ることから、1期よりも新しい時期の遺構群と考えたが、先後関係について厳密には論及できない。

第3期：SB01をはじめ、今回検出した大部分の遺構がこの段階に属する。いずれの遺構もおおよ

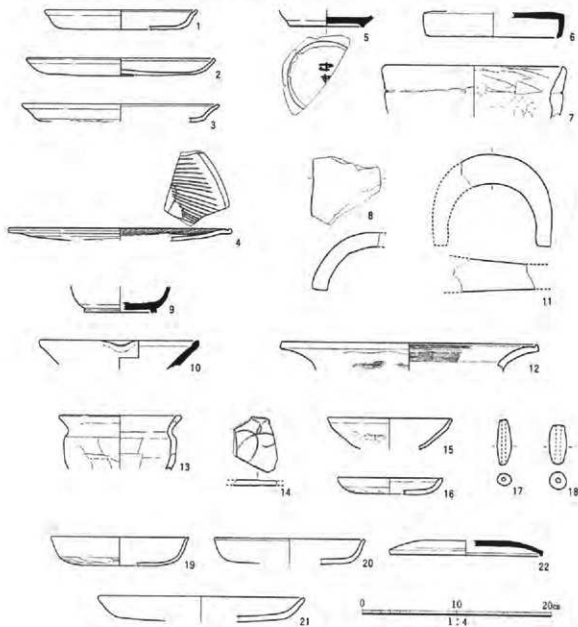


図13 各遺構出土遺物

SB01：1～8、SP01：9～12、SB02：13、SB07：14、SB04：15・17、
SB05：16・18、SK02：22、SK03：19、SD03：21、SD04：20

そ奈良時代後半に位置づけられ、遺構の分布がもっとも濃密な時期である。SB01、SD04～06、SK02・03に切合い関係があり、またSB01とSB05もその位置関係から併存し得ない。当該期において、少なくとも3時期以上の遺構変遷があったことが確実であるが、その具体的な様相について今回の調査では明らかにすることができなかった。

第4期：SB04・06が該当する。このうち前者は平安時代に位置づけられるが、後者の年代的位置づけは不明である。

次に、各期の意義について述べていきたい。まず、第1期の成果についてである。調査地東側に展開する長原遺跡西地区では、古墳群や集落が検出されており、また北部の喜連東遺跡でも方墳や土墳が検出されている。瓜破遺跡においても、花塚山古墳のほか、南方に位置するUR00-8次・04-5次調査などで該期の遺物が出土しており、粗密はあるものの、周辺一帯に古墳時代における人間活動の痕跡が広がっていることが知られる。

第2・3期の成果については、喜連東遺跡(KR89-2次・91-3次・92-3次・92-7次)で検出されている遺構群と併せて考える必要がある[大阪市文化財協会1990・1993a・1993b](図14)。遺構の分布から考えると、これら4次の調査で検出した遺構はKR89-2次で発見された東西10間の

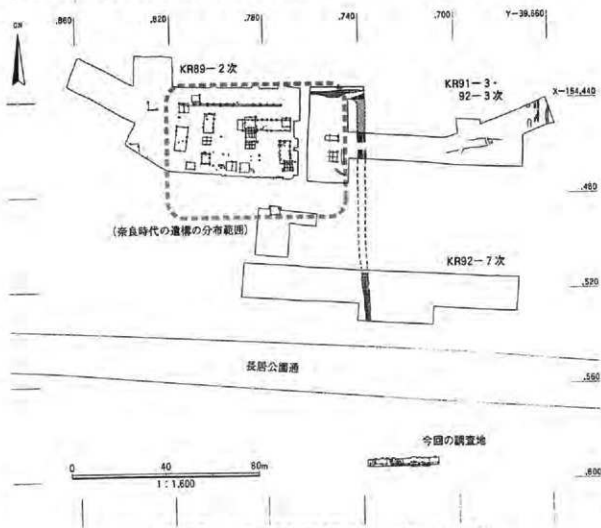


図14 調査地周辺における奈良時代の遺構(網掛部分は鎌倉時代の遺構)

大型掘立柱建物を中心として1単位をなすものと思われ、今回見つかった建物群との関係が注目される。喜連東遺跡の建物については奈良時代前半代の年代観が与えられており、今回検出した建物群よりも若干先行する可能性がある。とはいえ、該期の土器器編年はいまだ正確なものではなく、柱穴から出土したわずかな須恵器を判断根拠としているため、将来的には再検討が必要となろう。

喜連東遺跡(KR89-2次)検出の建物群については、瓜破遺跡東南地区で検出された飛鳥時代の建物[大阪市文化財協会2000]に後続するもので、周辺一帯の水田経営の拠点であったとの評価がなされている[京嶋寛・西畑佳恵・上野裕子1990]。今回検出した建物群についても、SB01の規模もさることながら、墨書土器や製塩土器、瓦など一般集落ではあまり出土しない遺物が見られる。また立地についても、瓜破台地先端部の高所に位置し、かつ実態はいまだ不明であるが、「磯津津道」に比定する説のある長居公園通に面している。積極的に論じうるだけの根拠とはならないが、拠点的な施設、あるいは有力者の居宅などである可能性を提示することはできよう。

第4期については、時期をおさえることができた遺構はSB04のみであった。しかしながら、周辺ではやはり平安時代の遺構が検出されており、集落分布を把握する上で一定の成果を得た。また、今回の調査地の北に位置するKR92-3・7・93-7次調査で検出され、5,000㎡以上を区画する鎌倉時代の溝(図14)は今回の調査地までは延びないことが明らかとなった。

以上のように、今回の調査では各時代において重要な成果を得たが、とりわけ奈良時代の建物群は周辺の古代史を復元する上で重要な意味をもつ。調査地が位置する瓜破遺跡北東部は、これまであまり調査が行われていない。しかし、周辺の現地形が西側に向かって下がることは、かつての地形が良好に残存していることを示唆するのであって、既往の本調査・試掘成果もこのことを裏付けている。今後調査が進展することによって、さらなる成果が期待できよう。

註)

(1)掘立柱建物として確実に復元できないものも、便宜上ここに含めて報告する。

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会1990、『東喜連住宅第3期建設工事に伴う喜連東遺跡発掘調査(KR89-2)略報』
大阪市文化財協会1993a、『大阪市都市整備局による東喜連市営住宅建設に伴う喜連東遺跡発掘調査その2(KR92-3)略報』
大阪市文化財協会1993b、『大阪市都市整備局による東喜連市営住宅建設工事(第5期)に伴う喜連東遺跡発掘調査(KR92-7)略報』
大阪市文化財協会2000、『UR85-39、86-11次調査』：『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.87-126
京嶋寛・西畑佳恵・上野裕子1990、『平野区喜連東遺跡の奈良時代建物群』：大阪市文化財協会編『華火』59号
佐藤隆1992、『平安時代における長原遺跡の動向』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.102-114
横山洋1993、『律令制期の製塩土器と塩の流通—摂河泉出土資料を中心に—』：『ヒストリア』第141号、大阪歴史学会、pp.69-92
田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店

調査区遠景
(南から)



南壁断面
(北から)



遺構検出状況
(東から)



瓜破遺跡発掘調査(UR05-3)報告書

調査箇所	大阪市平野区瓜破3丁目53-1の一部
調査面積	50m ²
調査期間	平成17年12月5日～平成17年12月8日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 田中清美、松尾信裕

1)調査地の位置

調査地は平野区瓜破3丁目に所在し、瓜破遺跡の西地区北端部に位置している(図1・2)。

調査地が立地する瓜破台地は、河内台地と呼ばれる大阪府南部から北へ延びる洪積台地の一つで、その北端部に瓜破遺跡は所在する。調査地の西側には西除川によって形成された沖積地が広がっている。

本調査地の周辺では1987(昭和62)年1月から2月にかけて、UR86-28次調査を行っている。調査地の北西に広がる瓜破北遺跡では1976(昭和51)年以降、断続的に調査を行っており、弥生時代後期から古墳時代初頭の集落が広がっていたことが明らかになっている。

また、南方の瓜破5丁目に所在する瓜破小学校では1992(平成4)年にUR92-28次調査が行われ、後期旧石器時代の石器、縄文時代中期末から後期中頃の北白川C式土器や北白川上層Ⅱ・Ⅲ式土器、縄文時代晩期末の船橋式土器や長原式土器、弥生時代前期や後期の土器が出土している(図3)。

このように、本調査地周辺は後期旧石器時代から営々と人々の生活空間として利用されている地域である。



図1 遺跡の位置

2)調査の経緯と経過

2005(平成17)年11月17日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、その結果、地表から1m以深に弥生時代から古墳時代の遺物を包含する地層が確認されたため、本調査を行うこととなった。

本調査は敷地内の新築建物が建設される範囲の南端で、南北2.5m、東西20.0mの東西に長いトレンチを設定して行うことになった(図4)。

調査は2005年12月5日から開始した。まず、地表から約1mまでを重機で掘削し、その後、人力掘削を行って遺構の検出に努め、調査地中央部で弥生時代後期の土器を含む東西径が約2mの楕円形の土壌を検出した。

その後、調査地西半に広がる地層が洪積層ではないことが判明し掘削したが、地表から2m以上にもなる深い落込みであることがわかった。

調査トレンチが幅2.5mと狭く、深く掘ることで壁面の崩落の危険があり、また、建設工事へ影響を及ぼすことが懸念されたため、地表から2mの深さで調査を終えた。

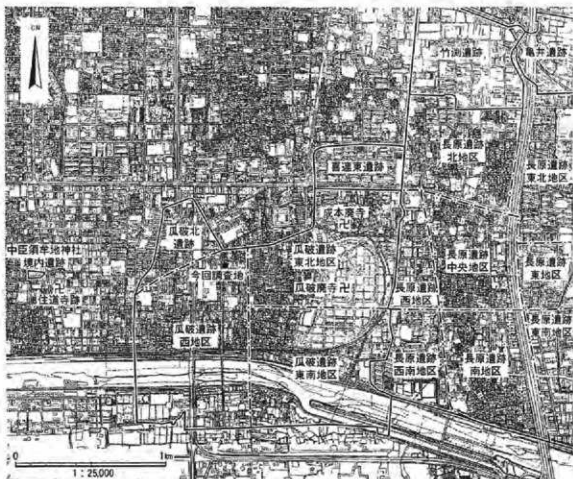


図2 瓜破遺跡と周辺の遺跡



図3 調査地の位置

12月8日に埋戻しおよび器材を撤収して調査を終了させた。

なお、調査で用いた水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP±Omと記した。図4・5に用いた座標値は大阪市道路現況図(1:500)を基に導いた世界測地系によるものである。

3) 調査の結果

i) 層序(図5左)

洪積層は、東側では地表から約1mで検出されるが、西側では地表から約2m掘下けても検出できなかった。この間に現代表土から弥生時代までの地層が堆積していた。

第0層：層厚70~90cmの盛土層である。下層の旧作土層である第1層を覆う。この一帯の都市化によって地盤を嵩上げた際の盛土である。

第1層：灰オリーブシ
ルト質細粒砂層で、層厚10
～30cmの近代から現代まで
の作土層である。上面には
調査地の中央に現代まで使
われていた幅約2mの南北
溝があり、それを境に第1
層から以下の地層は東側が
高く、西側が低くなってい
る。坪境の溝であろう。

第2層：灰色を呈する細
礫混りシルト質細粒砂から
なる作土である。層厚は10
～20cmである。上面に耕作
に伴うと考えられる溝があ
る。

第3層：暗オリーブ灰色
を呈する細礫混り粘土質シ
ルトからなる作土で、トレ
ンチの東端から4m付近ま
では削平されたため堆積し

ておらず、それより西に厚くなりながら堆積する。西部の洪積層の地山が低くなったところでは上部に酸化鉄が沈着する。層厚は厚いところで30cmである。

第4層：褐灰色を呈する細礫混り粘土質シルトで、作土と考える。東部では削平されており東端までは分布しない。西側では上面は凹凸が著しい。層厚は15cmである。

第5層：黒褐色を呈する細礫～中粒砂混り粘土質シルト層で、分布範囲は上層の第4層と同じく、東端までは分布しない。本層の東端は下位の土壌SK01の窪みにたまっている。層厚は20cmである。

第6層：敷地のほぼ中央から西に分布する水成の黄灰色粗粒砂層と粘土層の互層である。上町台地上の洪積層を刻む谷を埋めている。本調査地の北西にあるUR86-28次調査地でも同様の堆積を確認している【大阪市文化財協会2000】。

第7層：洪積層の地山で、黄灰色細礫混り粘土質シルト層である。調査地の東部に拉がっている。

ii) 遺構と遺物(図5右・6)

今回の調査では調査地東部の第7層上面で土壇を1基確認した。また、西部では洪積層を刻む谷地形を確認したが、調査範囲が狭小であったため、その規模や深さは不明である。

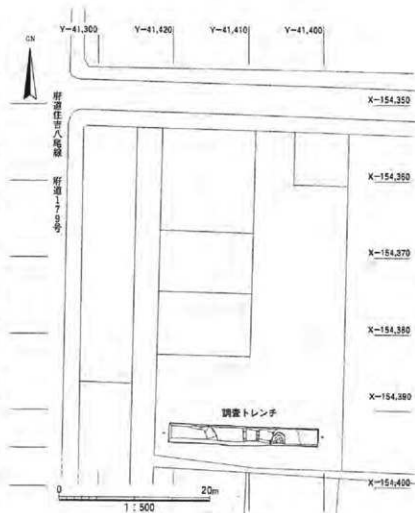


図4 トレンチの位置

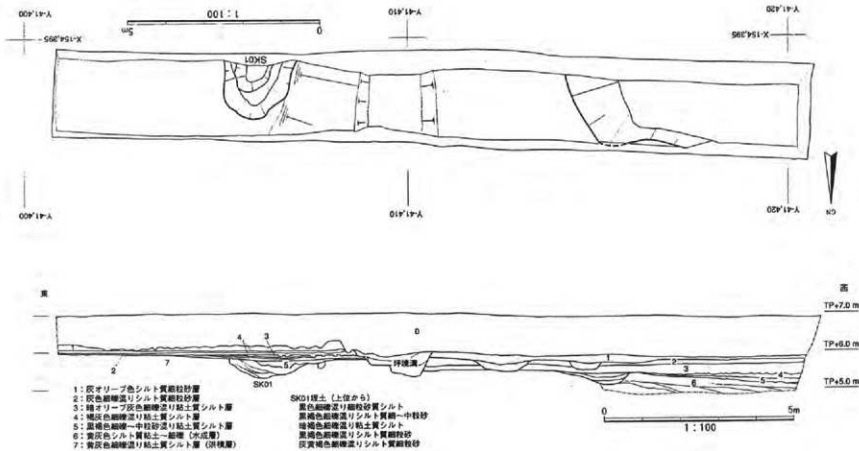


図15 調査地層断面および地層配置

SK01：東西1.9m、南北1.6m以上の楕円形で、深さ0.5mの土壌である。埋土は5層に分かれ、上位から黒色細礫混り粘土質シルト、黒褐色細礫混りシルト質細～中粒砂、暗褐色細礫混り粘土質シルト、黒褐色細礫混りシルト質細粒砂、灰黄褐色細礫混りシルト質細粒砂となっている。下部はわずかにラミナが観察できることから、水によって流れ込んだものと考えられる。この底面から弥生土器が1点出土した(図6)。

弥生土器は外面に粗いタタキメを施す壺で、口縁端部を上方におさめている。弥生時代後期後葉に属するものと思われる。傷みが著しく、口縁部から体部上半と体部下半しか図化できず、図上で復元した。口径16.6cmで、胴部最大径22.8cmほどになろう。底部がなく器高は21.6cm以上としかいえない。

この土器が出土することから、SK01は弥生時代後期の遺構と考えられる。

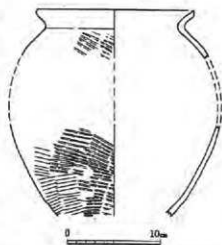


図6 SK01出土弥生土器

3)まとめ

今回の調査では弥生時代後期の土器を含む土壌を1基検出し、当該期の遺構がこの地域まで広がっていることが明らかになった。

これまで弥生時代後期の遺構は西側の阪神高速道路付近に広がる瓜破北遺跡を中心に濃密に確認されていた。北西のUR86-28次調査地でも弥生時代後期の土器が出土していたが、今回の調査でその分布範囲がさらに東に広がった。南部のUR92-28次調査地でも少量の弥生時代後期の土器が出土しており、本調査地を含む3個所の調査地を結んだ南北ライン上が弥生時代後期の集落の東限に位置しているものと考えられる。

また、本調査地の西半で検出した谷は北西のUR86-28次調査地でも確認しており、この二つの調査地帯には瓜破台地を刻む谷が埋没していることが判明した。

小規模な調査ではあったが、瓜破台地帯の古地形の一端を明らかにすることができたほか、弥生時代の遺跡の拡がりも確認できたことは大きな成果であった。

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会2000、「UR86-28次調査」：「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告」、pp.43-46
 「UR92-28次調査」：「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告」、pp.25-42

調査地全景
(東から)



調査地全景
(西から)



SK01
(北西から)



大 阪 市 内 埋 蔵 文 化 財
包 蔵 地 発 掘 調 査 報 告 書

発行日 平成18年12月28日

発 行 大 阪 市 教 育 委 員 会
財 大 阪 市 文 化 財 協 会

編 集 大 阪 市 教 育 委 員 会 文 化 財 保 護 課
(大 阪 市 北 区 中 之 島 1 - 3 - 20)

印 刷 和 泉 出 版 印 刷 株 式 会 社
